明治三十八年十二月五日發行（毎月二回五日廿日發行）
明治二十五年三月十二日第三種郵便物認可

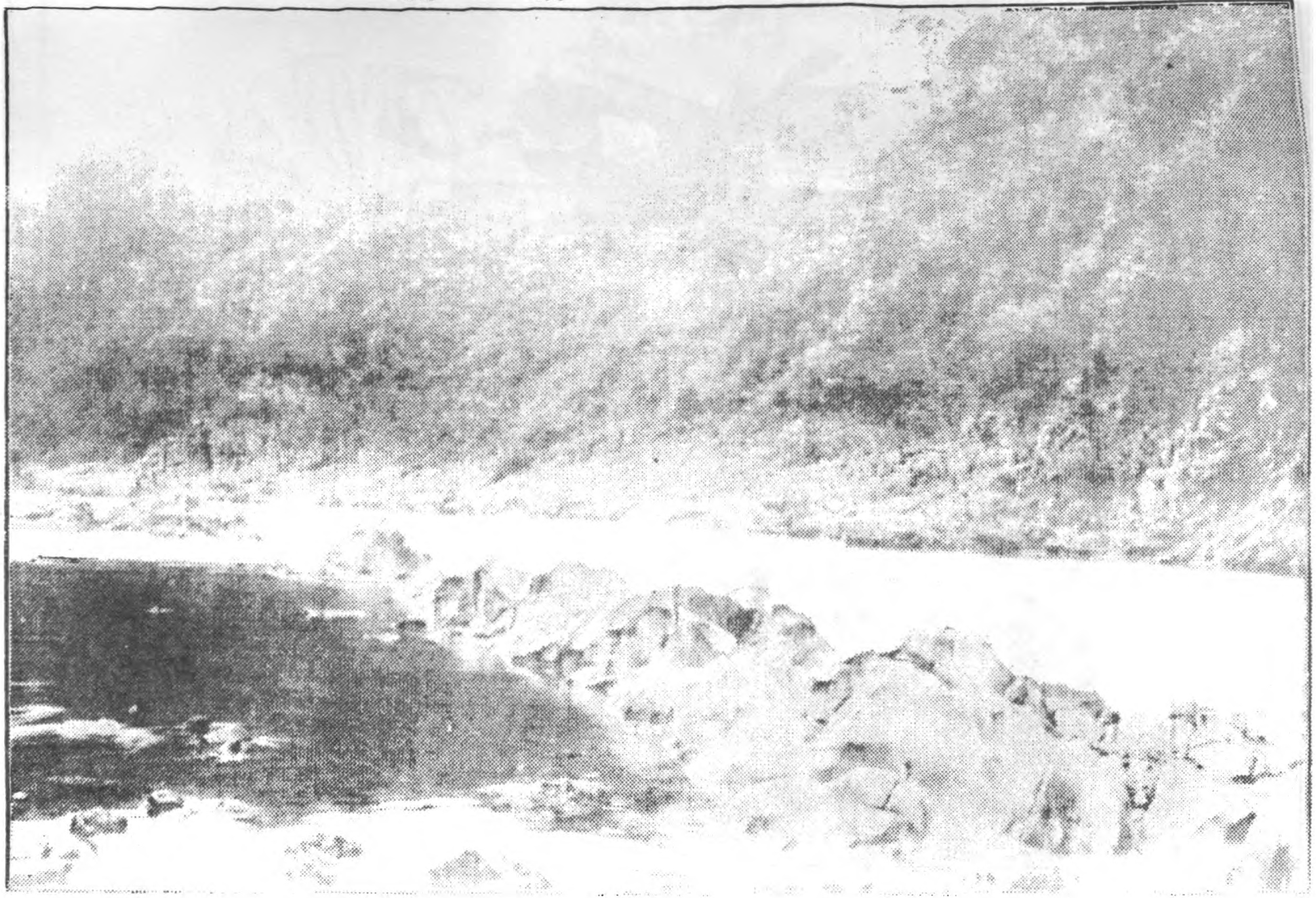
女鑑

第拾五年
第拾貳號



女鑑 第十五年第十二號 目次

嵐峡の清流



貴族の姉妹



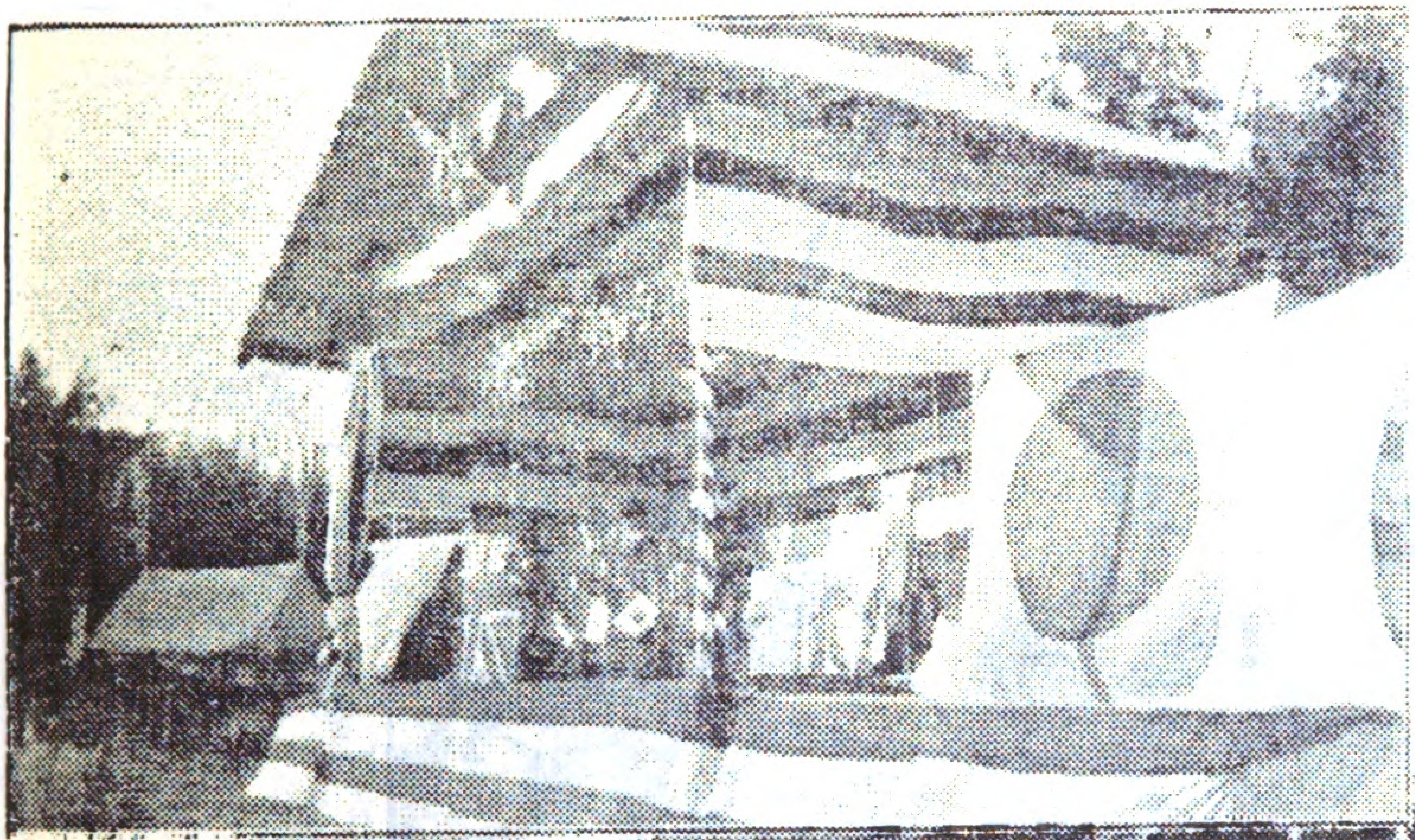
德川男爵夫人里子
毛利男爵夫人正子

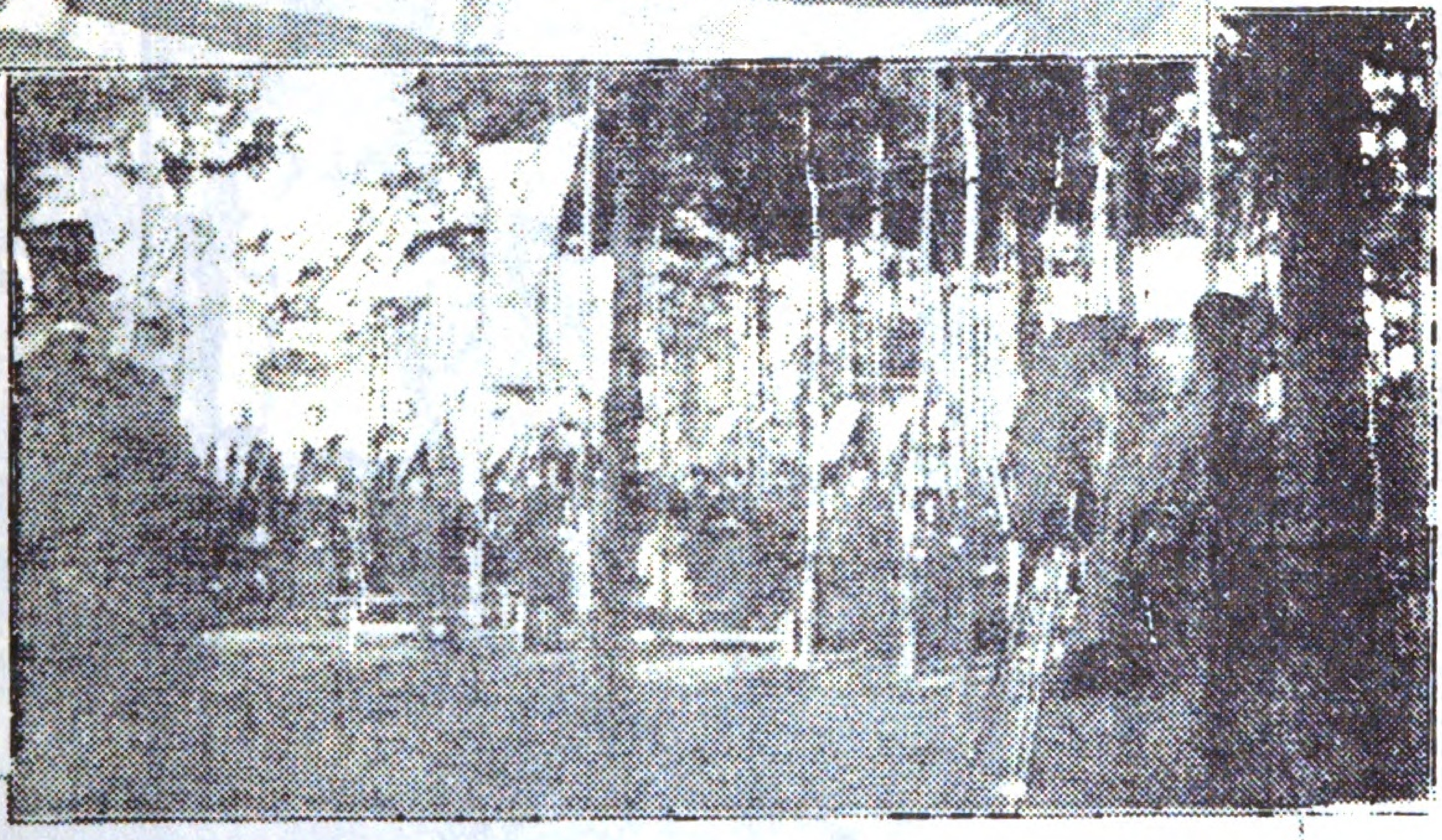
三條公爵夫人千代子
松平侯爵夫人節子

徳川男爵の家庭



東京慈惠病院看護婦慰勞會







（男爵 德川厚君撮影）

各國皇室及ビ王家御用

ミルクフウド



歐洲諸國及本邦名醫ノ讚辭ヲ辱フセル者ナリ。小兒、病者又平素不消化ニ苦ム者ニ適當ナル最良滋養食物ナリ。

最モ盛カンニ藥舗洋酒食料品店ニ於テ販賣ス

未若庵嬌菓著

挿畫十數葉入

実驗 和洋菓子製造法

（第四版）

洋裝美麗全一冊

正價金六十五錢

郵稅金六錢

本書は著者が祖先以來多年間實驗を得たる製菓法中特に洋菓子百餘種和菓子二百三拾餘種の製法を選み之に挿畫を加へ懇切丁寧に説明をしたる者なれば一讀のもとに家庭に於て夫人、令孃方が容易に美菓を手輕に調製し得らるゝ良書にして又割烹家及び同業者の良參考書なり

赤堀峯翁 赤堀峯吉 同菊子共著

即席惣菜料理（第四版）

洋裝美麗全一冊 正價金三十五錢 郵稅金四錢

關根正直著 坂正臣書並

筆の遊きかひ

和裝美麗全二冊 一冊正價金四拾錢 郵稅一冊金四錢

赤堀峯翁 赤堀峯吉 同菊子共著

家庭十二ヶ月料理法

和裝美麗全二冊 一冊正價金五十錢 郵稅一冊金八錢

小野鵞堂書

女子手紙文

和裝美麗全一冊 正價金四十錢 郵稅金四錢

小杉榲邨校閲 齋藤園子編

女子敎科包結之栞

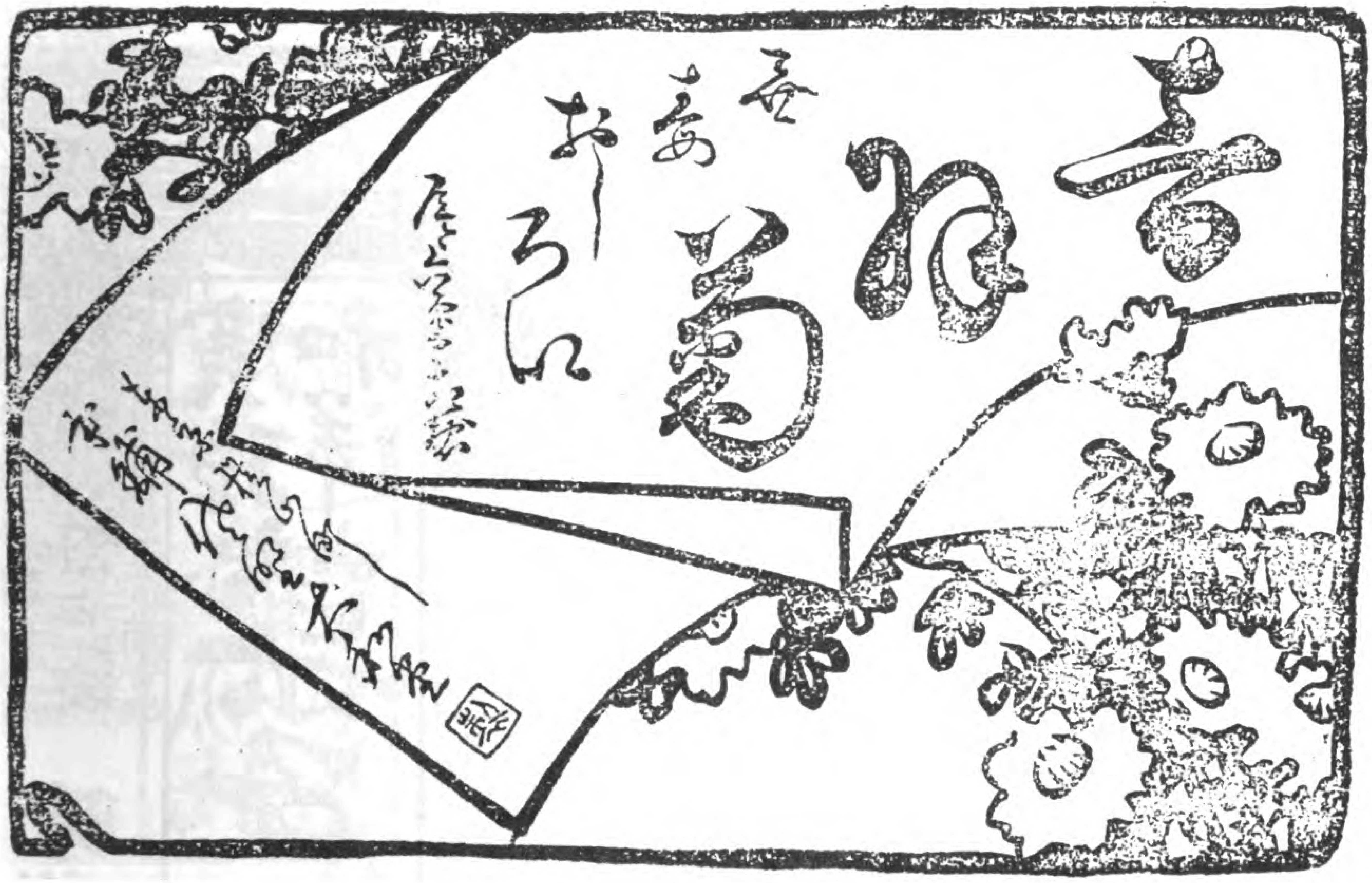
和裝美麗全二冊 正價金九十五錢 郵稅金八錢

三宅克己筆

東京名所水彩畫

第壹輯全六葉 正價金六十錢 郵稅金六錢

發行所 東京日本橋區通一 大倉書店 電本四一四一



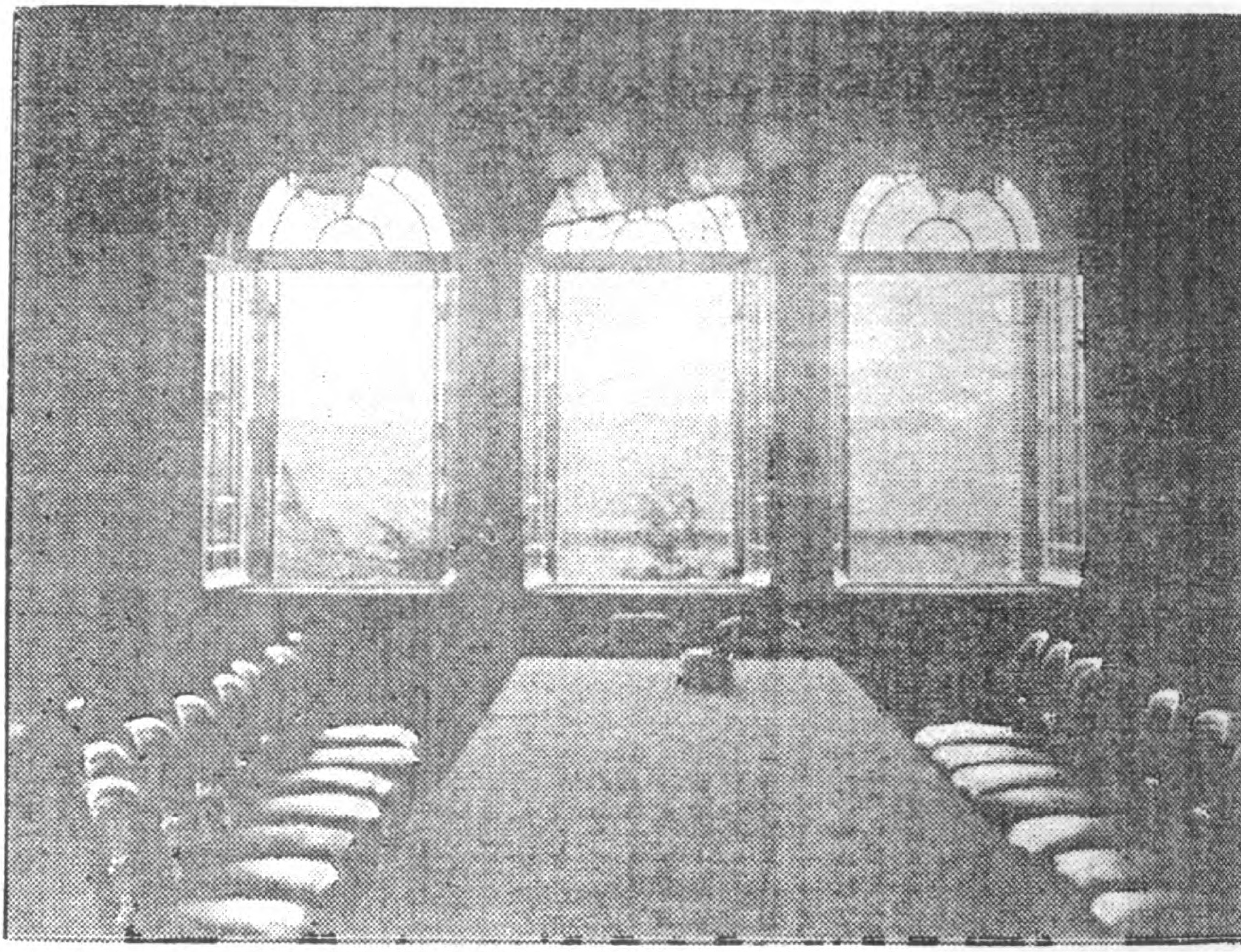


定價・金五十錢・金廿五錢・金十五錢・金二十錢

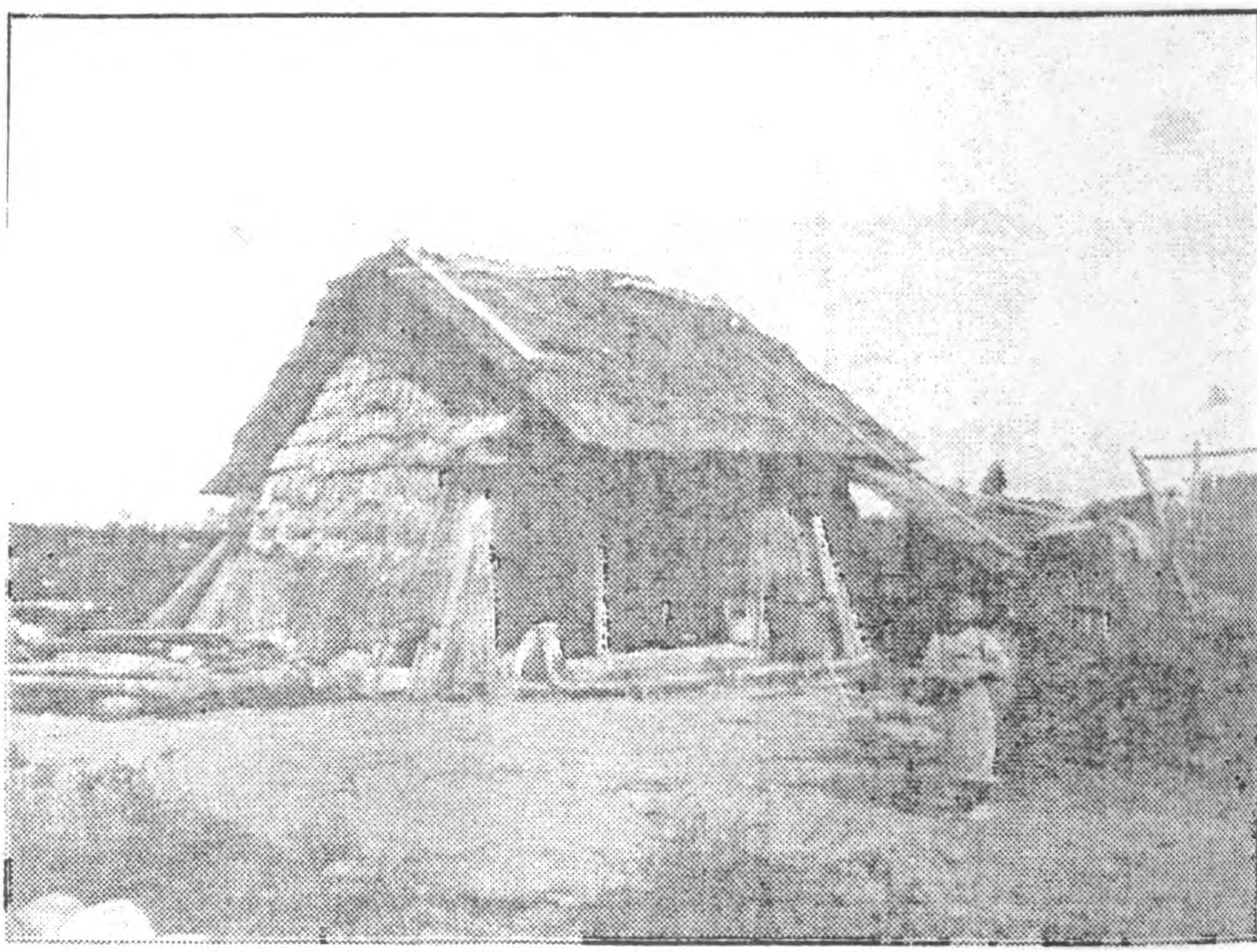
東京裁縫女學校卒業生



裏おもて



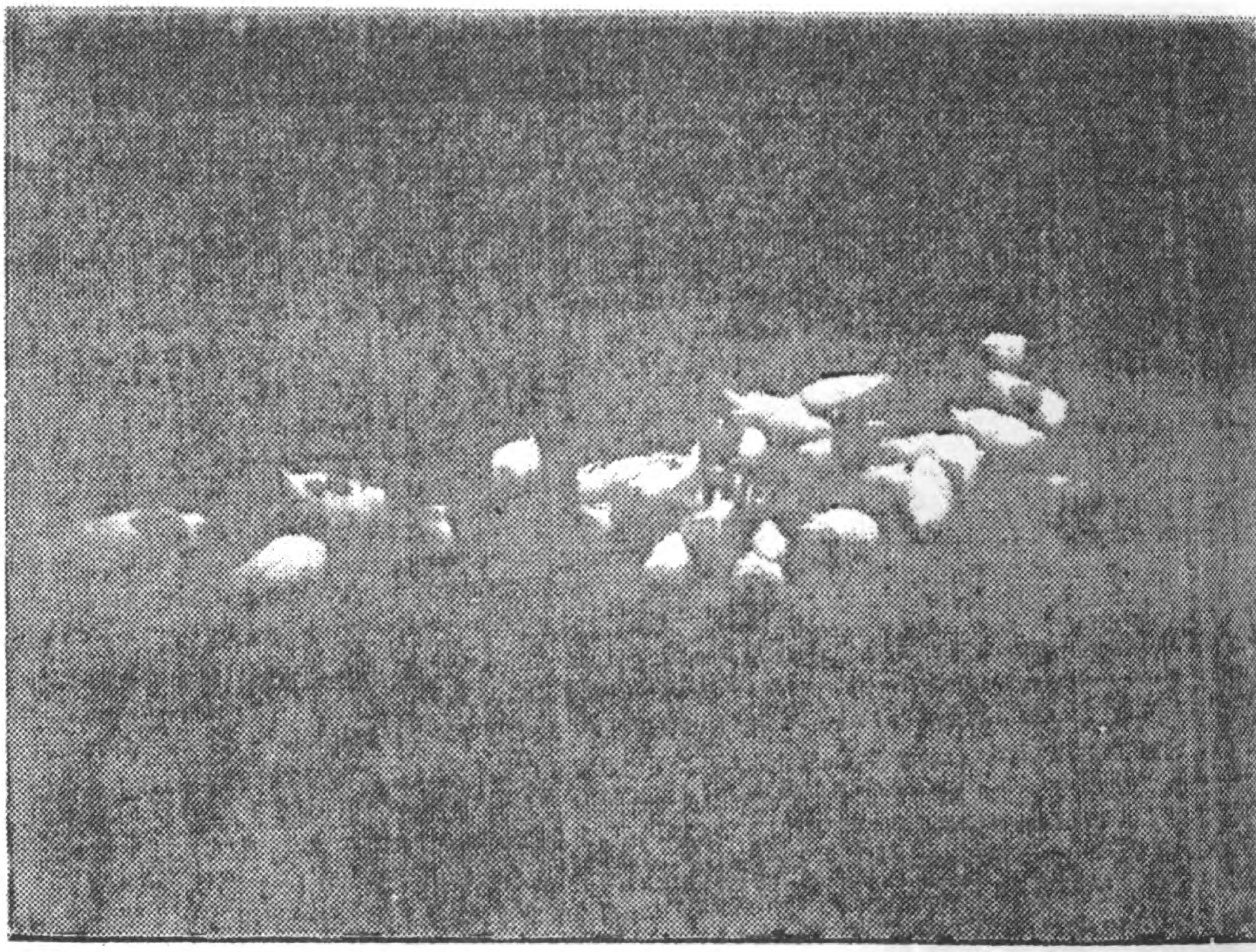
某富家の應接所

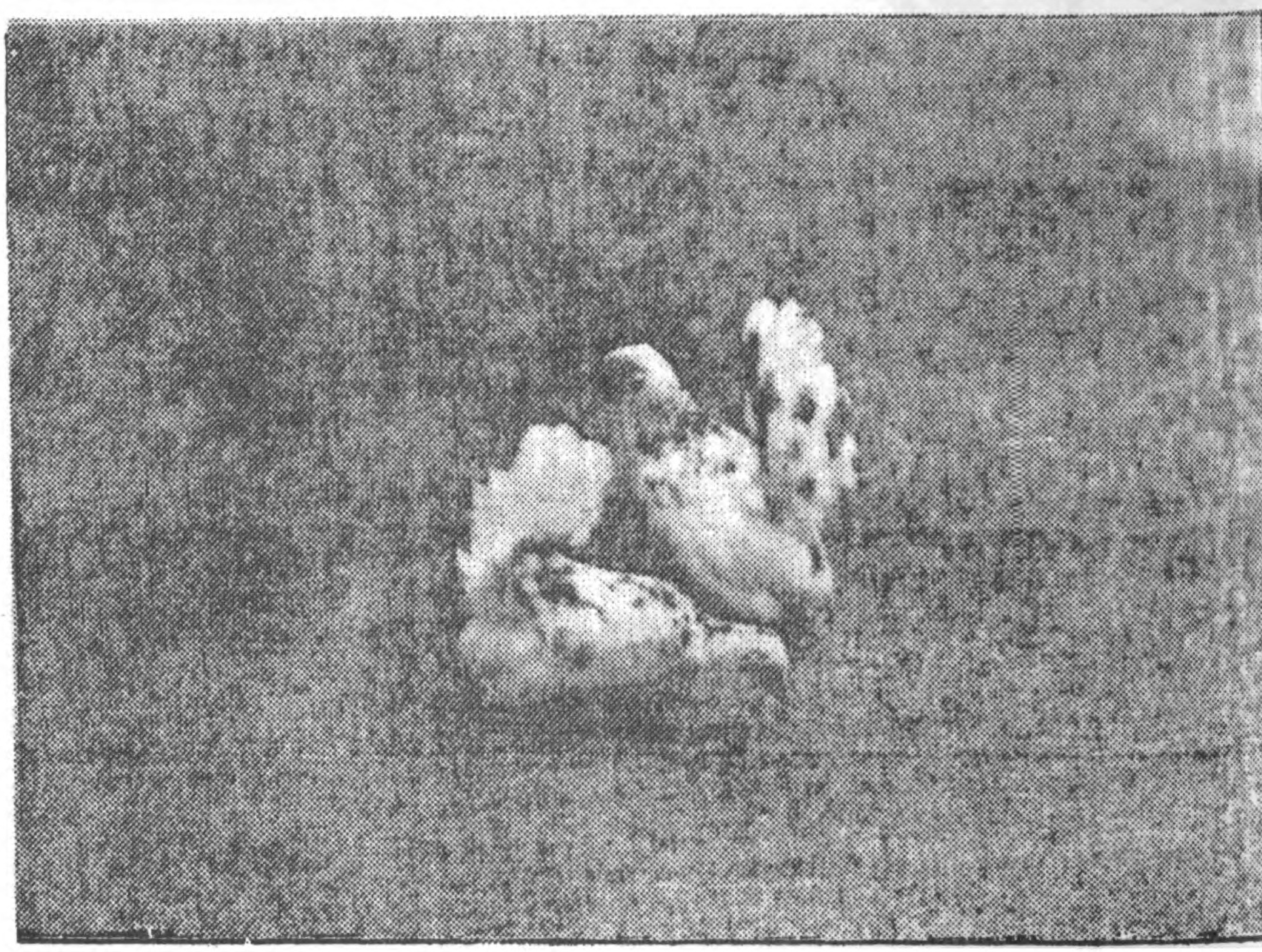


某貧家の屋外

（男爵 徳川以君撮影）

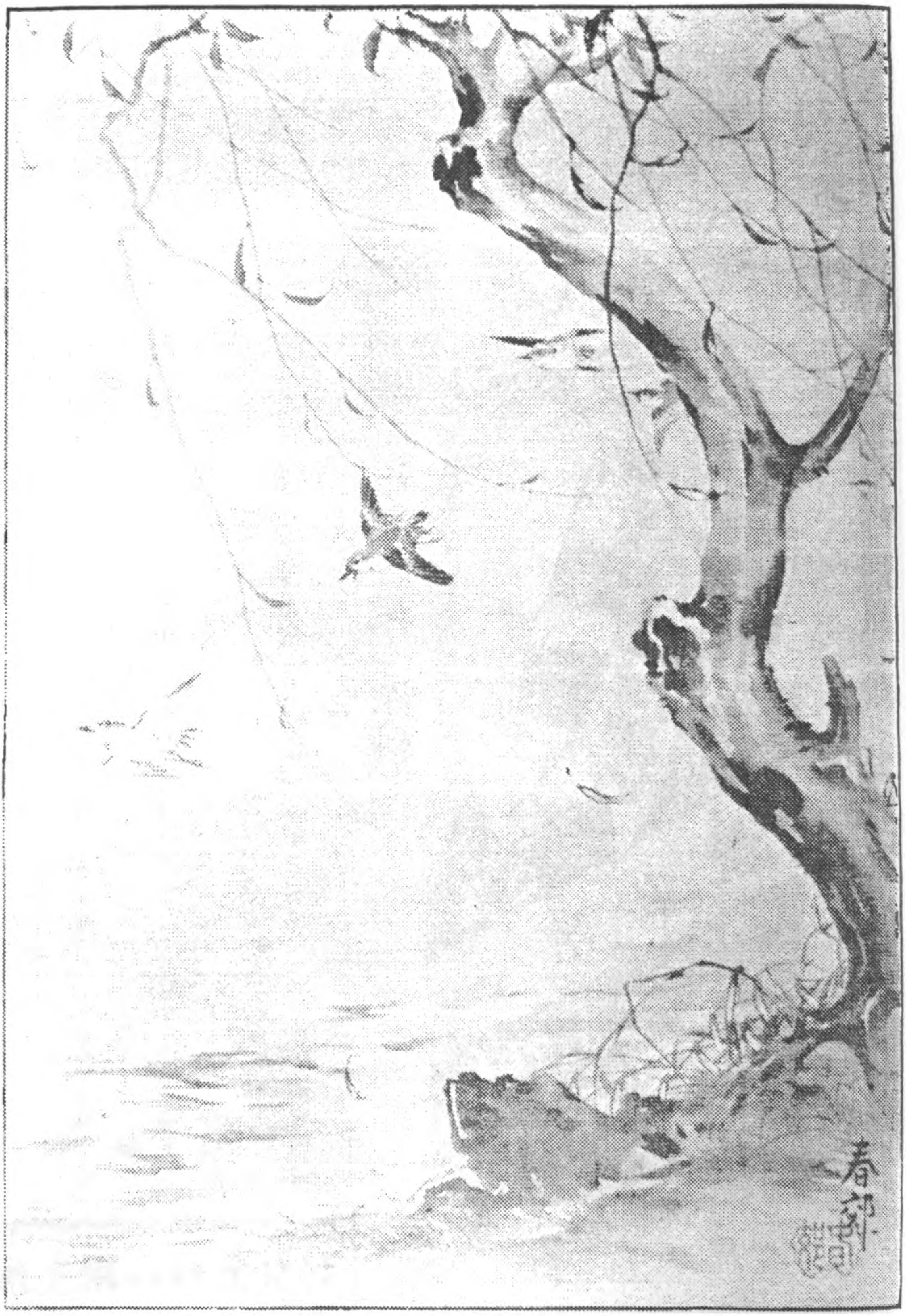
鳩と鶏





（男爵　徳川厚君撮影）

冬の水



棚橋絢子刀自著

再版

女道叢話

菊判和装美本
定價金三十錢
郵税金六錢

著者棚橋絢子女史の現今女子教育界に於ける位地、名望及學識の如何は世の熟知せらるゝところなり、本書は女史が女子道に對する抱懷を記されたるものにして、女學生は勿論兒女を有する父母の必ず一讀せざるべからざる良書たるはまた多言を要せざるべし。

弊社は三輪田眞佐子刀自の『女子の本分』及び『女子處世論』と共に本書を出版して女性諸子に紹介するを以て大なる光榮と信ずるものなり。

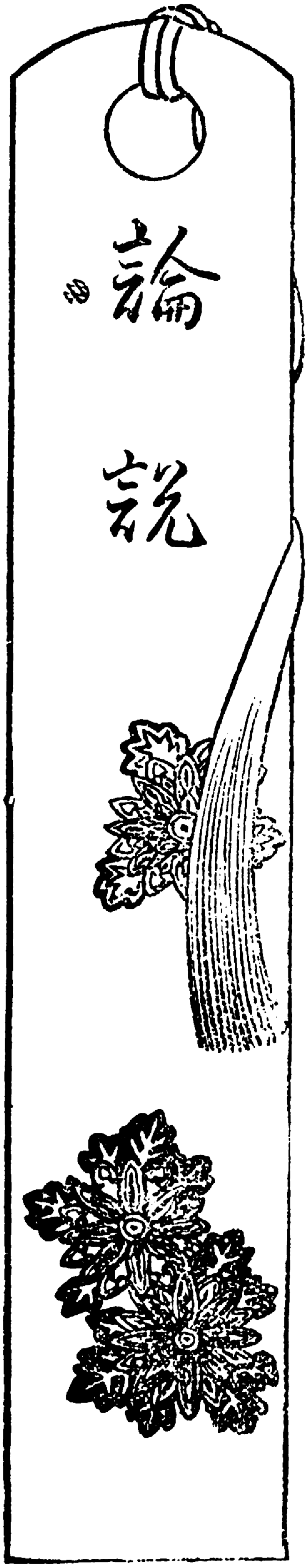
發兌元　東京築地　株式會社　國光社



第十五年 女鑑 第十二號

歳末の辭

世路は苦より始まりて、樂に終るものならざるべからず、然るに事實は十中の八九その顚倒にて、樂より、苦に進むが多きやうなり、かりに一年より打算するも、苦よりは始まらず、まづ一月は遊ぶ爲に作られたるもの〻如く、日の限り夜の限りを遊び暮し遊び明し、さてこれより樂の春を閉づると思へば、やがて花は咲く、鳥は歌ふ、樂の春はなか〱長し、夏來れば暑さを山青く水清き處に避けんことを望み、秋は夜の長きを月見ぬ人の心と笑はれんことを厭ひ、人目も草も枯果てし冬ともなりて越し方を顧れば、さて花に紅葉に浮立し心も夢のやうに思はれて、其年の句頭は苦みに終り、歲末の歎など今更のやうに起り、斯て一生を終るが、一般を通じての例あるが如し、されどその順逆或は人生に於て最も趣味の存する所ならんも知れず樂しきものとせる一月平凡ならざるなきか、苦しきものとせる十二月快感を與ふるなきか、兎にも角にも人の好まざる年の暮となれり、諸君は如何にしてこの年を送り、如何にして新しき年を迎へ給ふべきか



戰後の女子

文學博士　井上圓了

前代未聞の日露戰爭も漸くその局を結び、平和の克復を見るに至れり、されば各方面に於て、戰後の經營如何を考へざるべからず、或は敎育の方面に、或は實業に或は宗敎に。然り而して、これらの方面には已に色々の議論ある如くなれども、

戰後に於ける女子の方針

に就きては、多く論ずる人なきを覺ゆ、然るに女子は、一國人口の半を占め、一家を治むるに於ては、男子よりも、女子の方に關係の多きは、言を俟たず、一國の盛衰は、一家の興敗に係ると見んには、

將來の日本の爲には

今より女子の心得如何を、考ふる必要ありと思惟す。因て玆に、戰後の女子に就いて希望を述べんと欲す。

從來女子の事に關して、論ずる人の多くは、女子の教育に就きて說き、或は職業に就きて述べ、戰後に於ても、女子教育及び職業は、益々進めざるべからずとやうに論述す。そはさることながら、斯の教育と職業との外に、女子の負擔すべき事尙多し。多きに不係、他方面の議論に至つては、耳にすることの甚だ少きを怪しむ。

已に今日に於ても

女子教育は非常に、發達し來り、女學校の增加、實に驚くべきものあり、また職業に就て觀るも、近年男子の爲すべき職業を女子をして之に代らしめ、鐵道局、銀行等に於て、女子を使用するに至り、その他工場、商店等に於ても、女子を多く使用し、爲に案外にも、女子の拂底を見るに至りぬ。この方針傾向にて進みたらむには、職業と教育の二方面に於ては、ます〳〵盛に成るはこれ必然の勢。而してこの教育職業の外に

女子の當に負擔すべき一大事

あり。其は社界の交際なり。社界の交際に關しては、論ずる人少なく、また些の發達を見ざる如し。今予の戰後の女子と題して、論せむとおもふは、この一條なり。

元來日本にては

社界の交際は、男子ひとり之を把持し、女子は一向一家を守る外には、他にその用無きもの丶如く、一般の交際等には更に關係せざる有樣、然るに西洋諸國に在りての交際は

男子よりも女子が中心

となりて、自ら進んでその任に當る狀態也。依て我國も、今後社界の交際は、女子をしてこれに當らしむ

るやうなしたきものなり。その理由は種々なれども先づ

第一に男子は日一日と、多忙になりゆき、毎日朝より暮に及ぶまで、他に在つて勞働せざるべからず、たまたま得たる休日も、平日の勞働を憩ふ爲めに消し、また他の事に、力を致し能はざるに至らむ。かくの如く男子多忙にして、寸暇を得難しとすれば交際上のことは女子に任するより外に、よき方法はあらざらむ、結局かくすれば、男子の勞を省くの益多きはまた疑を容れず。

第二には女子の經驗範圍を廣むるの利あり、從來の女子は、一家に潜み、家外の事は殆ど闊知せざるが如し。隨つてその經驗は狭少となり、智識も進歩せざるや論無し。もしこれに反して社界の交際を司り時々外に出で、多數の人に接し、種々雜多の物事を見聞する時は、自らその智識經驗の廣まることは、明かなり。これまた女子をして交際を掌らしむる利益の一ならむと思ふ。

第三に女子の度量を大ならしめ、一家の和合を、助け致すの益ありと信ず。兎角女子は、その境遇狭

女子教育と教員

我輩の主義からすると、女子に授ける一事一項凡て『賢母良妻』の本分を務むる心の鍛錬とならねば好けない、若し其れが心の鍛錬とならないで單に學問したといふに止まるやうな教育であつたら何にもならぬ、然るに何教育に限らず茲迄能く其の從事して居る教育の目的を稽へて遣つて呉れる教員は果して幾干あるだらうか、地理專攻の教員は地理を強ひ、歴史專攻の教員は歴史を強ふる等、各科受持の教員各々其の專攻する處を强ふるとせば、生徒の頭腦は果して能く此等の要求に堪ふ可きや否や、特に此の種の弊害の外に立つて各科の効力をして專ら賢母良妻の本分に著しからしむるには教員本人が識見兼備はる立

く、殆ど毎日、一家の内に潛み居る有様なれば、度量はいよいよ狹くなり、考はますます窮窟になり一家中の嫁姑の間に於て猶些細なることより、風波を起すに至る。これ全くその量の、狹小にして、相容ることをなし能はざるに因る。然るに女子をして、交際を廣からしむれば、自然に量は大きくなり、觀るところも、廣まり互に相寛容し、その結果、一家のうつくしき和合を見るに至るや必せり。

派な人物でないと好けない、全然で妻たり母たる經驗のない婦人は、果して女子の教育に適切するだらうか、又一旦嫁して妻たり母たる婦人には、姙娠出產等の煩ひもあり、其他家事、養育と、それぞれ心を勞め力を用ふる場合が多いから自然本職の方面は届かない點を生じはしまいか、併し此等は我輩限りの疑問であつて、適否は勿論斷言は出來ぬ、但し同じ婦人でも妻たり母たるの經驗と女子半世のあらゆる艱苦を嘗め盡された學問識見ある品性の高い未亡人であつたなら、必ず女子教育者に適するに相違ないが、そんな人は求めたからつて容易に得らるゝものではない

（菊地男爵談）

第四に女子の精神を高尙に進ましむ。兎角内にのみ潛みて、窮窟の思ひをなす時には、多少不愉快を增すは、まぬがれぬ處、かゝれば色々の不平が、憤怨嫉妬等の考を助け起して、その人の品位も下落するに相違無し、然るに交際を廣くし、多くの人に接する時は、自ら精神愉快の度を進め、あはせて品位を高尙になすことを得べし。

第五には交際をして親密ならしむるの益あり、人と人との間の交際は、男子と男子との間よりも、女子と女子との間に於て結

ぶ方一層の親密を、來すものなり。男子間の交際にて、長き親友ならば、格別なれども、然らざる普通の交際にては、得て儀式一偏に流れ、家と家との間の親密を、篤うすること難し。然れども女子と女子との交際を以てしたらむには、一家全體の間に於て、相親むに至り又その外に慈善事業の發達の如きも、男子の交際よりは、女子のそれを廣むるによりて、大に進歩するものなり。西洋の慈善事業の發達は、殆んど悉皆女子の力である。換言すれば女子の交際上より、慈善事業の成功を見るなり。我國にても、慈善事業の如きは、女子の負擔とし、その交際によりて進めたきもの也。また商業の信用の如きも女子の交際によりて進め能ふ。曾て私が英國の田舍に於て、感じたる事あり、そは田舍の商店に於て粗製の品或は腐敗の物品を、賣出したる場合に、婦人の交際廣きが爲め、一の婦人より二の婦人に傳へ、五人十人と相傳へて、終に一村中に傳はり、その商店の信用が一村中より失はるゝに至り、商業には正直を本とするにあらざれば、不可なりと、各をして感得せしむるに至りぬ。この事は我が現に、その地方に在つて、親しく

嫁期と良人撰擇

高等女學校以上の高等教育を受けるとすると、如何な利發なものでも二十二三か、二十五六迄學校生活をせさぬといけない、精神的とか何とか云爲するが、これでは婚期が過ぎて仕舞ふのだ、孔子は慥か男三十、女二十を婚期としたと思ふたが、これ位は世界萬國を通じて丁度好い加減の婚期として善からう、諺にも鬼も十八、番茶も出花と云ふが、實際容姿艶麗とも稱すべき女の盛りは、十七八九であつてこれが即ち婚期である、理屈で何と云つても、容貌は結婚の重な一條件となることは人情に通じて動かし難い事實であらう、然るに二十を越して三十近くなると、婦人の容貌はやゝ老境に入りかゝつて來るから、普

目擊したることとなり。顧るにわが國に於ては、未だ女子交際の道進まざるを以て商店にて時に、粗惡なる物品を買附けらるゝことあるも、たゞその家のみにて、不平を鳴らすに止まり、その町村内に於ては、また與り知るものなし。わが日本女子の交際をして、西洋の如くならしめなば則ち一軒の信用を失ふは、やがて町村全體の不信を招く事となり。女子の交際より して、商業には必ず信用を基とすべしといふに至る、かゝらんには、商業の信用に迄影響して利益することゝ思ふ。

> 通の人情からすると、男子の愛情を引付け難くなるのだ、それから其人の撰擇であるが、これも老生などは保護主義を執つて居る、十九や二十ではまだ完全の思慮が定まらぬから、矢張親が周旋して適當の其人を探し出すのさ、さりとて強制的に壓しつけてはいけない、親の眼で相當な候補者と見たら、先づ親から其人に交際を求め、斯くて往つたり來たりする間に、自然兩方の爲人が分つて來るだらうから、其上に可否を決定するのさ、さればとて自由結婚的交際は勉めて避くべきである、後には何となるか分らぬが、日本今日の狀態では、青年男女の自由交際は實以て危險千萬である、事實危險であるのを認めて居ながら、西洋式に無理に慫慂するにも當らんではないか（前島男爵談）

かくして交際を廣くし、親密を計るに至らば、町村全體の間に於て、何事も平穩圓活に、運ぶに至らむ。たゞこゝに、我國に於て、女子の交際を廣むるに、困難なる事情は、固より二三にして止まらずと雖もその一は

往來の不便

是なり。即ち道路の惡しきこと、交通の不便なること、且女子の服が、歩行に便ならざること、これらは交際を廣むる上に、一大妨害たるや論無し。由つて今後はこれに就て、然るべき方法を講ずるの要あり。第二に從來の習慣によれば

不便是なり先づ**訪問待遇の簡便ならざる**訪問するには、必ず進物を要し、また訪問せられたる場合には、必ず飲食品を出す。然しこれらは、從來の弊習なれば、更に女子交際の如何に關せず、速に改良するの必要あり。第三には**家事經營の簡便**ならざること、これまた交際不便の一たるを失はず、家事の内にて最も時間と、人手を煩すものは食事に如くなし、我國の食事は、大に手數を要す。**今後は今少し簡便に**なす方法を取るべし、これを西洋に比すれば、彼等は自宅にて、肉をのみ煮るときは、その他の食品麵包の如きものは、他より買ひ求め來り、之を自宅にて製するに及ばず。さるを我國にては、西洋の**麵包に相當すべき飯を焚くに**多大の手數と時間を費し、加之その他の一家の食物を、悉く自宅にて造る故、口にすべきものゝみを調理するに、貴重なる時間を、割くこと甚だ多し、その上に、我國は**食事の時間を一定せず**たゞ一回の食事に就て、看るも、早く食を終るものと、遲く食に着くものとありて、實に長き時間を費す既にさる風習なるを、その他不時に、來客ありとせんか、臨時に食事を用意せざるべからざる故、右往左往、その混雜名狀すべからず、隨つて**その客と面談する**時間すくなく、人に訪はるゝも、たゞ疲勞を來すのみにて、心の鬱々を散じ、思ふ處を發表し、他の意見

を聽き、をかしき世談りに興ずるなどのこと殆んど無し。この從來の風習に拘泥まむには不規律に流るゝや必せり

不規律なるが爲め、愚にも、氣の毒にも、さまで要用ならざることに、時間を費し、要用なる事をなすべき時間を失ふ。それ故、時に身悶えして用事の手に餘るを嘆つことあり、かく食物調理に簡便を缺ぐを以て他の家事に澁滯を生じ、常に遑々然として、家中に齷齪して在らんには、また戶外に出でゝ、廣く交際するの時間無きは、勢止むを得ざる理なれば、何よりも先づ家事を簡略にする方法を講せざるべからず、而してこれらの不便は、單に女子交際の如何にのみ不拘、今より是非とも、改良を要することなれば、互にその實行を計らむと力めこれと同時に女子の交際を廣からしめ男子を助けしむるは、戰後に於ける改良方針の、一端なるべしと思ふ、これ予が戰後經營の一として、女子に對しての希望なり。

女子教育偶感

子爵　加納久宜

近時女子の教育が熾んになつて、誠に結構なことであるが、兎角融通の利かぬ教育が多く、嫁入つて後も

あれは學校出であるから行かん、など、云はれるやうな事がある、學校出でなければならぬものが、學校出て不評判など云ふのは、先づ女子は何う云ふ事をするものであるかといふことを無視し、口が動いて手が動かぬ教育、即ち形式の事ばかりにむつかしい敎育であるからである、たとへば學校に料理の科目があつても日常の膳の前には何等の効をも奏しないといふ敎へ方である、

私が新潟縣の師範學校に校長をして居つた時である、同校に女子部があつて、これに日常の事を敎へるに髮を結ふこと、飯を炊くこと、菜を煮ること、にしても、直に役に立つやうにと面倒を見たことであつたが、それは髮を結ふことから云へば、髮結女に結はされる身分の人であつても、場合によつては、自分のばかりでもなく、他人のも結うてやらねばならぬ、それで初めは生徒同士に互ひに結はせて居つたが、生徒同士では、蝶々髷とか、銀杏返しとか、まさかに丸髷にも結はれぬから、後に鬘を取よせて、それで種々な髮に結はせ、櫛取、簪のさしやう、顔に似合不似合等を稽古させた、今では大分髮の結ひやうが一定して來たやうであるが、さうでない時分にはかう云ふ風にせねばならぬ、これは髮ばかりでもない、米を炊くにしても、米一升に水一升、新米ならば水一升五合を入れて仕掛る、それで出來鹽梅を見ると、大抵水加減の原則がわかる、あとは熟練である、又味噌汁をつくるにも、擂鉢に味噌を入れる、其目方が何匁ある、それに水を入れる、まづ量つて分量を見る、さて出來上つたのが、幾人分何杯のお代りがあつたといふことを試して、それでまづ分量の原則がわかつて、あとは多少の加減に止まることで、之に味をつける砂糖も鰹節も同じことである、料理も上中下に分て硯蓋物であるとか、口取物であるとかは後廻しにして敎へた、何でもすぐ役に立つやうにせねばならぬ、道具ばかり揃へて手際のよろしからぬのやら、又ちよつとした小料理に鰹節一本臺なしにする如き不經濟なのなどは甚だ感服せぬ、

それに就て大に感じたのは、上田の蠶業學校を見た時であつた、校長の考へが面白い、一年二年の間は飼蠶を敎へるに道具づくの理屈づくめで、なか〳〵むづかしく寒暖の度合から、分秒の事まで面倒であるから、これでは卒業して、いざ蠶を飼はうとなると、家から道具から、其他の設備が容易なことでないと思ふと、この一二年級が、いはゞ原則時代で、道具づくめの理屈づくめであるが、三年と過ぎ、もはや卒業する時には、ザル一枚でも蠶が飼へるやうに平易に其手際を見る事が出來るやうな敎授の仕組になつて居る流石に實業學校として感ずべき仕方である、

これは先年薩摩に居つた時の話であるが、殖產といふ事に多少の意を用ひて、官舍の庭は鷄で目を突くやうに鷄を飼ひ、片つ端から郡役所へ廻はし大にその繁殖を奬勵したことがあつて、鷄とは大分交際をしたが近頃宅の小供等が、何でも鷄を飼うて見たいと云ひ出したので、至極宜からう、といふ譯で贊成した所が六人の子供であるから、一組宛あてがつても六組揃はねばならぬ、それも同じやうなのでなければならぬから、すぐに揃はぬ、そこで雛を買つて其飼育方を委托した、箱も別々にしてそれ〳〵責任を負ひ、生んだ卵は飼育者の所得にする、段々面白くなつて人工孵卵器で、まづ鷄の數を多くしやうといふ風になつて來た、まだ貧乏をして居るといふても、子供に鷄卵の金を當にさせるにも及ばぬ事であるが、金錢の容易に得られぬといふことを、自然に敎へるのと、數理の天窓も養はれる、だん〳〵かういふ風に注意して行けば、娘を他へ嫁けて、彼は所帶持がわるいからなど云はれて、返されることだけは助かるであらうと思ふ、なんでも敎育は臺所の隅へまで行屆くやうにしたいものである(文責在記者)

女子の美育

華族女學校學監　下田歌子

抑も教育は、先づ、始めに、智徳體の三育と大別せしが、近時に至りて尚ほ美育なる一を加へ、今現に、智、徳、體、美と唱ふるに至れり、而して美と云ふ文字の深奥を温ぬれば、實に、高尚優雅なる、徳の精華を意味するが故に、男女の教育を通じて、甚だ大切なるに相違なしと雖も、就中女子に於ては、最も其然るを覺ゆ、西語に曰く『女子は美の神なり』と、げに、彼れが温順優雅の性、仁恕慈惠の情、これを形に顯せば、天女となり、慈愛の神となり、これを行に示せば、博愛となり、淑徳となる。彼れ慈愛の神が恩惠の手には惡漢の曲心をも撓むるを得べく、彼れ天女が微妙の聲には、邪神の暴慢をも消するに足るべしされば心の美、其形にあらはるれば、貞淑となり、慈愛となり、遜順となる。これを例すれば、畏こけれども、わが一條帝の后、上東門院が、先后の遺兒を撫して、愛育至らざる所無く、其の御父子が親密なる對話の席を避けて陰に其情誼を厚うせしめんと勉められたる。珠崖の繼母が、其義子の罪なはれんことを恐れて、珠を藏し丶ものは我なりと訴へ、泣きて其女が刑罰に代らんと欲したるが如き、又佛

婦人問題

近來年を追ひて、婦人問題は其勢焔を揚げ來り、而も漸く其地歩を占め來らんとす、之れ喜ぶべきことか、はた悲しむべきことか、

其主張とする所に曰く、婦人が男子の背後にあるは舊時代の思想のみ現今の進歩は婦人をして男子に劣らず、其と雁行して活動し得べきの眞理なるを譏へたるにあらずやと、

然れどもこれを各國の實際に見るに、婦人は家内を整理し子女を保育するを以て其常經とし、男子と雁行して勞作する如きは、或る事情の下に於ける變例なるを知る、乃ち婦人運動の主張とする所は、進歩の要求ならずとすべし、

且つ之を科學に見よ、婦人は男子と其異れる心狀躯幹を以て作られ居

帝那翁の后、ジョセフヒンが無情なる離別の宣告を受くるに當り、蒼白に變じたる双頬につたふ涙痕を藏し首を垂れ、手を拱き、無限の間に哀別の情を呈し、徐歩して其席を退くの時、進退周旋、猶能く、皇后たるの態度を失はざりしが如き況んや、彼のナイチンゲール孃が嫺々たる纎手に、能くクリミヤの修羅場に瀕死の將卒を濟うて、不振の士氣を皷舞し、『白衣の天使』なる謳歌を、狂喚せる、感謝の聲と共に浴びて、尚一點の得色あるなく、惴々焉として、其令名の嘖々たるを恐れ、深く隱れて、市民が歡迎を避けたるが如き、いかに其心の優美高尚なりしかを追想すれば、今猶見ぬ世の人の面影をさへ腦裡に畫き出されて、其容貌は斯くやありけん、其風姿は爾ぞありけんと推量せられて、いと懷しくも、尊くも覺ゆかし。然らば則ち、女子が美育は、先づ心の美より養ふべし。決して、形の美より養ふ可からず、見よ彼の精巧なる人形の、黄髮雲の如く、双眉月の如く、星に似たる眼、花に似たる唇、雪膚、夏猶寒く、玉指凝つて脂よりも艶やかに、一度び笑まば、城國をも傾け、一たび顰まば、君主をも泣かしむべく、世のあらゆる美の粋を集めて、意の如く造りなしたる名工の巧みも、彼は只、形の美のみを備へて、心の美を備ふること能はざるが故に、始めこれを手にするもの、其美を稱し、其秀を歎ずれども、そは單に床上の

ろに非ずや、而も一朝にして男子と同一の權利を要求し、其自然の法則に背反せるは暫くも云はず、自ら婦人たることを否みて、人間の外に出んでとするもの、但し其運動てふ者は、或神經質なる婦人の作爲に出で、詮じ來れば男子に對する自個の地位を守持せんとするに外ならず又一方より見るに、農民又は商賈の婦人は其夫とゝもに勞働し、又事務の助手となることあり、此の如きは特に運動せざるも盡く其地位の有要なるを感得せしむるにあらずや吾人は寄語せんとす、婦人運動は飽く迄臺所の婦人運動たるべし、家を治め子女を保育することは婦人の天職にして、同時に其恩寵なり、妄りに男子と比肩して、政治又は社會の運動に携はらんとするは自ら害するものなりと(ブチジユールナル)

置物、座側の飾物たるに過ぎず。若し一たび其の色を變じ、其形を損ずるあれば誰か復これを顧るべき。

然るに今の美育を説き、且つ之を修めんとするもの、やゝもすれば、其心の美育を後にして、其形の美育を前にするが如きもののあるを見て、余は竊かに之を疑ひ、又其結果を危ぶめり。彼等は曰く『女は女らしかるべし。女らしからんと欲するには、必ず先づ美育を施さゞる可からず』と、故に其修めしむる所のものは、彈琴なり、詠歌なり、茶事なり、挿花なり、なほ進みては、舞も習はしめ、香道も敎しへしむ。げに彈琴、詠歌、茶事、挿花、もとより美育の範圍に算ふべきものならん。年少の女子が學ぶに、適當の技藝ならん。然れども絃を彈して梁の塵を落し、歌を詠じて鬼神を泣かしめ、一碗の茶に禪味を貯へ、一株の花に、天地の美を集むるが如き、玄妙は、決して心の美を學び得たるものにあらずして、誰か善く之を解せん。否斯の如き玄妙に達し、奥義をきはむる迄を望むべきものにあらずと云はゞ、余は尚云はん。若し心の美なくして、形の美のみあらんは、可憐なる彼等年少の女子をして、節を蔑し、操を捨て、浮華に陷り、艶妖を喜ぶ、所謂世の不貞不義の人たらしむるに導くものなりと。試みに惟へ。彼の美人薄命なる語は、則ち何ぞ。美人形の美のみありて、心の美無き時は、世間、幾多の艶冶郎が、心を動かし、情を惹くの機械となりて、知らず〱も、幾その罪を造り、許多の恨を買ひ、遂に其徳を二三にして、其身も亦救ふ可からざるの迷津に溺死するを憐めるなるべし。況んや、技藝を飾りて、其形の美を麗しからしめんと欲するのみならず。其衣服を美にし、其裝飾を盛んにし、以て我が女美なりと誇るが如き、頑迷無智の輩に於けるは、余亦何をか云はん。たゞ惜む。最愛の兒を教育して『女らしからしめん』と希ふ人の、やゝもすれば、其主義目的を定むるに迷ひて、形の美育のみに走り、心の美育を疎かにするが故に、其技藝

學問を修め得たる女子の、やゝもすれば、浮華輕佻の徒となりて、遂に桃夭の美德を稱せらるゝものなく却りて、漢廣の詩意に背くの悲境に陷ることを、希くば、世の女子が美育に留意せらるゝ人、余が蕪言を捨てられずば幸ひ甚しからん。

女子の職業

東京高等工業學校長
女子共立職業學校長　手島精一

女子の職業に就ては、多少の理想を有つて居る、兎角實行は理想通りには行かぬものであるが、これは廣く諸君とも相談をして、婦人として、諸君の立場としても、大に考へて貰はねばならぬ、と同時に私どもの理想も實現せらるゝやうにして貰ひたいものである、

外國では年々女子の職業が增加して來る、即ち多くの勞力を要せぬ、緻密な仕事は、女子の職業として多く與へられて居り、又男女交際上に於ける弊害も極めて薄い所から、男女同じ場所に同じ仕事をしても、男は女を輕蔑し、女は男を度外視するといふやうなことはなく、それ〳〵その職業に勵んで居るから、自然女子の職業は廣く多く且つ發達して行く譯である、

然るに我國の現時の有樣では、男女同じ場所に立交つて仕事をするといふことは、相互の關係上に取締を要するのみならず、男女の智識に懸隔がある所から、日常談話の材料も異つて居つて、兎ても外國流には社會の事情が許さぬのである、

よつて女子には女子專務の職業を與へねばならぬ、女子も相當の職業に從事すべきものたることを心掛ねばならぬ、女子に相當の職業に乏しいことゝ、この職業に從事する覺悟に缺ぐる所があつて、即ち獨立自

營の道がないから、止なく心に趁づべき魔窟の人となるのも決して少くはない、

差當つて女子の職業としては、第一に裁縫、次に造花、刺繍、編物、意匠圖案といふ所で、これに依つて一家を立てるといふことは困難であるが、辛うじて一身を立てることは出來る、これを大に發達させると同時に更に女子適當の仕事を見付け、女子の職業を多く且つ盛んにしたいものである、

衣服の模樣、燒物の畫畫、一般の蒔繪等は、最も緻密な仕事で女子に適當して居るが、それすら現時多くは男子の仕事となつて、裁縫刺繍の如きも、職業としての大部分は男子が占領して多くの賃錢はこれ等の職業からも、女子には與へられぬことになつて居る、女子は大に奮勵して、この領分を取返さねばならぬ、

事務員としての女子、これも次第に用ひられるやうになるらしい、首腦となつて事に當るには不適當であるが、會計の助手、物品の出納、その他物を整理する等の事には、尤も適任であつて、これはなか〳〵成績がよいやうであるから此方面に向つての餘地はまだ〳〵盛んになることゝ思ふ、

又タイプライトルなざは、女子に適當の

日本婦人の位置

閑題を掲げて餘事を談ずるものと爲す勿れ、婦人問題は近き將來に於て、識者の頭を惱殺すべき一大難問たるを疑はず、吾人は今此問題を捉へて、速斷を敢てせんとは企てず、然れど兎角日本婦人の位置が外國の勢力に依りて漸く變化を來しつゝあるは事實なり、家庭の良妻賢母が、社交界の女王たらんとするの傾向を萌芽し居るは事實なり、之を助長すべきか抑制すべきかは、深く識者の攻究に値す、

戰爭が婦人に及ぼしたる感化の中、乃至戰爭に依りて、發揮されたる日本婦人の美德の中に就て吾人の滿足を表する點多し、彼等が其天性の溫かき慈愛心を以て、犒軍に、慰藉に、寡婦孤兒の救助に、其力を注ぎたるの効果に至りては、眞に測り知るべからざるものあり、

戰時に於ける日本婦人の活動、盛なりしと共に、婦人の勢力漸次社交界に重きを爲し、所謂社交的婦人得意の時代來らんとす、之を馴致す

仕事で、亞米利加などでは殆んど女子專有の業となつて一ケ年タイプライトルによつて享くる女子の所得は一千五百萬ドルの多きに達するとの事である、日本でも橫濱はぼつ〳〵タイプライトルが行はれて、英語さへ出來れば左までむつかしい仕事でも無いので、月俸五十圓位は得られるものもあるとのことである、

それから女子の職業として化學分析なども適當の仕事と思ふ、鑛山、又は鑛業試驗所などで是非この分析のことは、女子に分與して貰ひたいものである一定の原則によつて手を下すべき緻密な仕事は、女子に最も適當の事であるから、されど今の所それにはその設備も入るので、急に實行はむつかしいかもしれぬ、序に言うて置きたいのは、女子の教育である、これは男子とても同じことであるが、一般の教育を見るに、授けた教育が動もすれば活用せずに終つて、殊に女子の教育は半分朽ちて用を爲して居らぬやうに見受けられる、智識が技術の活用化し、才幹を發達して行くやうにせねば、實用としての教育は、其効果の擧らぬものと見て差支ない、其智識活用の差等が、女子の男子に輕蔑される第一歩となつて居るのである、右の如くにして常識

べき乎、將た然すべからざる乎、是れ閑問題にあらず、殊に婦人に取りての大問題なり、

米國の男兒等は、婦人の鼻息に辟易し始めたり、米國大統領ルーズベルト氏が、母の會に於て爲せる賢妻良母説は、米國人の一齊に喝采して迎へたる所なり、曰く婦人の天職は賢母たるにあり、婦人は家庭の女王なり、此外に逸するの婦人は、其の天職を瀆うするものなりと、獨り米國に止まらず、歐洲に於ても婦人問題は、非常の熱心を以て論議されつゝあり、淑德を以て名高きルーマニア皇后の言行は屢々引照せられ、日本婦人の淑德は殆ど立論の基礎たるの觀あり、

婦人に對する理想は、歐米に於て急激に變化しつゝあり、彼等は漸く社交的婦人の弊を自覺して、賢妻良母を憶ふに至れり、而して其範を日本婦人に採らんとす、

時代の潮流は凡てのものを支配す、婦人のみ之に逆航するは難い哉、只此間に處して日本婦人を如何に導くべきかは、識者の攻究に俟たざるべからず、日本婦人の自醒に俟たざるべからす(神戸新聞)

の乏しいのは女子の缺點となつて居るのであるから、その短所は飽くまでも補ふやうにせねばならぬ、日本の今日の文明も、今回の戰爭の勝利も、教育與つて力ありといふので、教育萬能主義で、何でも教育さへすればよいと思うて、動もすれば教育の中毒に罹るものもあるに至つた、殊に専門の教育に至つてはその人々の天才をも考へねばならぬ、譬へば繪畫を専門に教授するとしても、よい學科だからと云うて、直に繪畫に於ける天才に乏しい『所謂畫ごゝろ』のないものに、繪畫を學ばせたならば如何であらう、教育をするものゝ困難も云ふばかりでなく、本人の困難も一通りでない而もそれが徒勞に終ることになる、少し語弊があるかもしれぬが、學問を虚學實學の二つに分てば法律政治の如き虚學に適當な人もあれば、醫學工學の如き實學に適當な人もある、それを虚學に適する天才を有てる人に實學を修めさせ、實學に適する天才を有てる人に虚學を修めさせるといふ風にすれば、十中の八九は徒勞に歸して終うのである、よつて女子が専門の學問をし、職業を撰ぶにしても、所謂得手に帆をかけて、不得手な事に無駄骨を折らぬやうにせねばならぬ、中途で自分の天才に氣付いた時は既に遲いのであるから、くれ〴〵も適才を適所に置くといふことに注意をして貰ひたい、

共立女子職業學校は、女子の職業を教へ、供給と需用の道を開いて、大に發達させる考で、當初は貧困の女子を入れ、それを他日職業に就かせる目的であつたから、手藝學校とか、美術學校とか云ふやうな名にせずして職業學校といふ如き極めて露骨な名稱を付した次第であるが、さて學校を始めて見ると、時勢の然らしむる所でゞもあらうか、貧困の女子は一向に入學せずして、高等女學校の出身者であるとか、相當に教育を受けられるものばかりが入學するやうになる、隨つて二千人からの出身者があるが、多數は主婦となつて、學んだ藝術が職業となつたのは少數である、今回の展覽會に於ける生徒の製品も二千圓以上の

收入ある見込であるから、追々當初の目的に副うて、女子に職業を與へるものにしたく、猶現今の外によい職業となるべきものがあればそれをも加へたいと思うて居る(文責在記者)

柔剛兩性の調和

衆議院議員　奥野市次郎

柔能く剛を制すると謂ふを以て、直ちに女性の柔順能く男性の剛强を制せんとするは、餘りに兩性を極端に見るの嫌なきにあらずと雖も、貞婉柔順の淑徳に富める女性を有する家庭は、如何なる豪放疎漫なる男性なりとて、之を融和せんこと決して難きに非ず、故に之を制すと謂ふ、或は語弊あらんも、剛柔兩性の調和を圖りて、能く一家の和平圓滿を努むるは、洵に女子の本分と謂ふべし、

吾人は女子問題の漸く世に喧しからんとする今日に於て、敢て多くを語るを欲せず、唯如何にして淑女となり、良妻となり、賢母となるかを解釋せば即ち可ならんのみ、而して貞婉柔順の淑徳を涵養するは、必ずしも深奥の科學に待つに非ず、該博なる智識に待つに非ず、要は實踐躬行に存す、之を言ふは易く、之を行ふは難し、吾人何ぞ獨り之を女子問題に於て責めんや、然れども女子問題は、他の政治問題、社會問題の如く、幾多の關係を他に及ぼすべきものにあらずして、一身一家の裡に於て、優に之を行ふの餘地あり、詩人が琴瑟の和諧を以て、治國家の本位となせしもの、洵に旨ありと謂ふべし、よつて世の淑女、良妻、賢母とならんと欲する人は、之を言にのみせずして、望むらくは之を實踐躬行するに力めんことを、砂上に築ける家屋は堅牢ならざる如く健全平和なる家庭の上に形成せられたる國家に非ずんば、決して眞善眞美なる國家と謂ふを得ざるなり



家庭教育に就て

フェネロン氏が、某息女の教育に關して、其母夫人に與へたる書（別項參看）

淺岡一譯

御身の望みにまかせ、令孃の教育に就きて、左に老衲の意見を述べ申すべく候

夫人よ、御身は御身が兼ての希望にも超えて營業の頻繁を極むるに至り給ひたれば、數多の女子を持たせ給はんには、到底御身の力のみにて、教育の勞を執り給はんこと能ふまじければ、寧ろ注意周到なる尼院に托せられんこと當然とも申上度、然るに御身は、一人の女子の外持たせ給はねば、恐らくは神の御心もて、御身に適當なる教養をなさしめんと圖らせ給ひしにぞあらんと覺え申候、されば老衲は、御身が此一人の女子を教育することは、尼院を擇みてこれに托せられんよりも、一層善良なる方法もてせらるゝならんと推し測り申候、賢良にして溫和、溫和にして且つ信仰深き母親の眼は、其子の教育のために、他人の發見し難きことを發見するものと確信いたし候、されども此の如き良母は、世間稀有のものに候故、尼院に托するを最上の手段と心得居るもの多く有之候、普通の母親は、とても女子を教育する智識を有せざれば、斯る尼院に托する風を生じ候ものと被存候、若し女子を教育すべき智識なくして

敎育の任に當り候はゞ、無理なる强制法を以て、子女を壓するの已むを得ざるに出づるなるべく、無理なる壓制一度行はるゝに於ては、到底高尚なる行爲信仰者の擧動を以て、自ら模範となり、知らず識らずの間に其子女の行爲擧動を化することは出來べき理由無之と存候、且つ一時强制して其子女を母親の心の儘にするも、常に親しく母の行爲擧動を見つゝある子女は、其擧動以上に善良なること能はざるものなるべしと被存候、併し御身は世の普通の母とは違ひ、賢良の母儀に在しまし候ふ事と、老衲に於ては平素信用いたし居り候、御身は能く神を信じて之に事へ、且つ宗敎は平素御身の第一に注意し玉ふ所なれば、御身は身を以て令孃の手本となり給ふに於いて、實に適當の師表と信じ申候、御身は實際に於いて、令孃が御身の上を目擊し玉ふ事柄に就きて、令孃を導き玉ふべく候、老衲は決して御身に對して世間普通の子育規則に據らせ玉へとは御勸め申さず候、しかのみならず、老衲の眼より見れば、世の總ての寺院よりも、御身の行爲擧動を以て、令孃を敎育し玉ふことを勝れりと信ずる程に御身を信じ申候特に御膝下に令孃を置きて敎へさせ玉ふことは、敎育其ものゝ上に、大いなる利益あるを認め申候、寺院の敎育は假令規則を以て女子を束縛する弊風なきも、名譽を衒ふごとき惡風に染むやう感ぜられ候、女子をして名譽を衒はしむるやうのことは、女子の爲には劇毒とも申すべき弊風と存候、女子の尼院に入るものは、人間社會を以つて一種の詐僞者の團體のごとく評するを聞き、現時虛飾の弊の最も甚しきことより外に、何事をも耳にいたさず候、然れども此の虛飾は、識者のこれを嘆息するのみにて、一般の人は之を羨み、不平の語もなく、非難の聲もなく其の虛飾者を歡迎するやうに思はれ候、元來人の行爲は、極めて接近してこれを見るか、若しくは見る人にして、深く注意するに非ざれば、欺かれ易きものに候、且つ尼院の中にも、世俗に化せられ猶は世俗よりも甚しき此の弊を帶び居る向も有之候、さ

れば老衲は一般の社會を見るよりも、此の種の尼院を恐れ居り申候、然しまた尼院の中にも、熱心にして且つ尼院規則を固守して質朴を旨とするものも有之候、此の如き尼院にて成長する女子は、現時の世間に對して、實に無識者と相成申候、尤も終世尼院に居るものとせば、幸福なる無識者とも可申候へども、妙齢にして生家に歸り、世間に混入すべきものとすれば、其歸家の際には、事々物々皆此少女を驚かすなるべしと存ぜられ候偖無識と申ことの爲に甘んじて、世間より別離され居り、且つ腦裡に未だ決して深く道德の基礎を据ゆる程にも至らざる少女が一旦其生家に歸りたらん後は、自分の周圍の人々は今まで自分に對し、世間の面白き事物を隱蔽して、見聞せしめざりしよなどの疑念を起こし、昨日まで住馴れし尼院をば、暗黒なる地中の洞穴に幽居せし如く思ひ、また生家に歸りては、靑天白日の身となりし心地することも可有之と存ぜられ候、扨其家に歸りたる場合に、其母親たるものの賢良ならんには、其女子は其母の慈愛と、其端正なる行爲とに依りて追々に世間の交際に馴るゝを喜ぶなるべく其の母また其女子の見聞すべからざることは、遮りて見聞せしめず、また機會によりて其女子の誤謬を發見してこれを正す等の事もあるべく、また必要に應じては自ら模範となりて敎誨するなるべしと存ぜられ候、老衲は弊害なき尼院ならんには、固よりこれを善き敎育所と稱すべきなれども、それよりも猶喜ばしき敎育所は、麗はしき家庭にして、其女子が自由に言行をなす場合に、善良なる母これを監督し、慈愛心を以てこれを敎誨するの最宜しきしかと存居申候、老衲の意見は斯の如くに御座候、御身の令嬢が撰擇する最善良の尼院に托せられんよりも、寧ろ御身自ら敎育せられんことを切望するものに御座候、併世には老衲が御身に對して助言する如き助言を與へんとする人の乏しきを歎じ居候、夫人よ老衲は御身自ら御身の令嬢を敎育せんことを望むものなれども、御身の令嬢の爲に、召使ひ玉ふ婦女を撰ぶに當

り、最精密なる注意を以てせられざらんにおいては令嬢の教育上大困難を醸すべくと被存候、想ふに御身の家事整理の行務及御身の來賓との交際は、晝夜御身の耳目を令嬢の身邊にのみ傾注するを得ざるべく、必耳目の外に令嬢を置くの已むを得ざる時も可有之候、令嬢を家に留めて御身の他出せらるゝ場合もあらん、故に虚妄なる言行を意とせざるが如き召使を以て、令嬢にかしづかしめ玉はんには、幾年月を費して善良に導きたる者を、僅かに一週日を出でずして惡習慣に染ましむる如き虞無之とは申難く候、例へば嘗て不良の教育のみを以て成長せし婦人に、少女を托する時は、少女は自然其婦人の如き言行をまねび爲すに至らんことは、當然の理にて候へば、虚妄の言行を爲す所の召使にかしづかしめたらんには、令嬢も亦其惡に染まざること能はざるに至るべしと被存候、

老祢はまた御身の令嬢の爲に懸念致し候、そは世間の婦人が惡意より出づるには非らざるも、婦人に似げなき無作法、不規則なる、いはゆる書生風の行動を見聞して、動もすれば、之に同化せんとせらるゝ如きことに候、御身は善くこれを防遏し玉ふべきことゝは信じつゝも、斯く申さんは如何ながら、母の權利は斯様の弊を防ぐには、存外に強大ならざるものに有之、且つ最も有用なる教誨は少婦の嗜好に適するものにこれ無き様被存候故、御身の朋友中に名高き、婦人を撰み、令嬢の目前に於て、御身と談話するを聞かしめられたく候、其談話の内容は、令嬢の身に關するものにあらずして、世の博學を衒ひ、虚飾を喜び、又は、宗教改革などを喋々する婦人を非難し、是等のことは、女子の本分に非ずとて右様の婦人のために、憂慮する旨意に出でたる事柄を撰まれたく候、個様の方法を以てしたる間接の教育は御身が令嬢に對して、直接に施し給はん教誨よりも寧ろ有効のものと存せられ候、また衣裝の装飾、成るべく相當なるものを好む様仕向けられ度候、世間には、中正抔申す事を好まざる變りものもこれあり

右様の婦人に限り、中正とは、無味なることの如く思了し、甚だしきは、寧ろ却りて忌むべきことの如く心得、好んで非常なる美服、又は非常なる粗服を着るものも有之候。老衲の考にては餘り華美なるもよろしからず、また餘りに粗惡なるもよろしからず禮儀に缺げず極端に走らず、身分相當の裝飾をなすは、賢婦の取るべき方針と存上候。要するに、眞誠の賢婦は家具、調度、衣服とも、善惡共に人の批評に登らぬものかと心付き居申候。されば、御身は、令嬢に對して斯くの如く申され度候。人の批評に懸らぬ程の賢婦たれ、家具、調度、衣服の美を以てせんよりも道理と、徳義とを以て、御身の裝飾とせよ御身日常の用は、御身自ら辨ぜよ。婢僕をな勞せそと、夫人よ、御身の令嬢に注意せしむることは、是等のことに止まらせず、尚また左の如きことも亦必要と存じ候。低き賤しき身分を、高く貴き身分の如く、他人に誤解せしむる衣服、髮飾り等は、總て身分不相當の贅澤なること。及び此贅澤は、人を窮乏にし、卑劣にし、貧婪にし、また風俗を腐敗せしめ終には、富國强兵の根底を破壞するものたること等は、是非とも深く注意せしめられ度候、此外女子たるものは、如何に善良の行爲ありとも若し贅澤てふものを室内に容るゝことあれば、とても、其善事を以て、其害を償ふ能はざるものなるよしをも、悟らしめられ度候。また他方に於ては、世の正直にして哀れなる困窮人の身上を精細に考察せしめ、自己の勝手の爲には、如何なる財貨をも吝まず、他人の爲には毫厘の出費をも、避るを常として、今日を送るものと比較し、何れか、世の爲、人の爲に、善き行爲なるかを熟慮せしむること抔も大切の事と被存候また、御身の令嬢をば、年齡、身分に對し、相當の範圍内に於て幾分か目立ぬ衣服、髮飾りを爲さしめられ度御考へも有らせられ候はゞ、先づ、御身、其手本となりて、同一階級の婦人方より、幾分か控目の身形を以て、世に立れ度と被存候、斯く成され候はゞ、令嬢は、決して華麗なる、立派なる身形を成

さんと望まざるべく、其上、母儀の正當なるに服し御身の命令無きも、甘んじて質素の身形を常とするに至るべくと存せられ候。然らんには、御身の令孃は道理に悟き少婦よ、尊敬すべき少婦よと、評せらるべき、正しき地位に於いて、身を保持せらるべくと被存候。斯くあらんには、令孃の身持は、御身が望ませ玉ふごとく、正格なりと云ふを得べく、隨つて、經濟上、不都合のことも有らざるべく、又隨つて、御身が令孃を鍾愛する心をも增加せらるべく、それのみならず、御身の令孃は決して、世の飽くことを知らざる程贅澤を事とする婦人と化し去ることなきを他人に對して保證し得べくと被存候。これぞ母儀として、正當のことにこれ有るべく、信仰家として、斯く有らざるべからざる儀と被存候。また宗敎家の眼よりすれば、斯ることを以て、宗敎を助け宗敎を保護し自家の名譽をも、利益をも收められんこと、御身のためにも必要と被存候。婦人よ、こは別事なれども年若き女子にして、萬一贅澤にして、取締りなく、輕率にして、堅固ならず、不規律にして正しからぬ人に、配せられたらんには、其終身の平和は、これが爲に、破壞せられざるを得ず、さるからに、少婦の良人を撰ぶには、才智もあり、行動も正しく、且つ堅固なる精神を持し、事に當りて終りを全くせん者を求むること、最大必要の事と被存候。其撰擇の誤りを避けん爲には、氣輕に見ゆる人佞辨なる人杯をば、令孃に近けぬこと、最も、大切の事に候。

淺岡先生の譯されしヘエ子ロン氏の齊輪

ヘエ子ロン氏は、二百年前世に知られたる佛國の敎育家にして始めて女子敎育論を著はしたる有名なる人なり、故に佛人は歐洲今日の女子敎育の源泉は此より起れりと稱せり、故にこの齊輪の如きも。今日より見ればさまで珍らしきものにはあらざれども、その當時に在りては大に珍重せられしものなるべく、而も古人の言、今なほ其敎に待つもの多し、氏の女子敎育論は、男子のみ敎育して、女子は文明開化の仲間へを許さゞるか、世間一般に提出せる三要件を女子の職分とするも、家事を整理するに學識を要せざるか、子を養育するに學識を要せざるか、良人終世の友たるに學識を要せざるか、予は此職分を盡すに學識の必要を認むるといふことより諄々說去り說來つて、一部の敎育論となりたるなり、

徳川伯の家庭

中川愛氷

貴族中の名門で、行狀の正しい、品格の高い、何處までも篤實で、而も學識に富んで、自ら貴族の標本となり、極めて質素で、極めて同情の深い、更に尊大ぶらぬ、あらゆる美德を備へて居らるゝは、記者はその一人を德川達孝伯であらうと思ふ、

邸は芝三田綱町にあり、記者はしば〳〵伯の邸に出入するの榮を得、或時の如き、將に他出せられんとして、車伯の前に橫はれる時、『ちようど宜かつた、今少時でお目に掛れぬ所であつた』といふやうな調子で、五分なり十分なりの時間にても割愛せられ、その高風に接するを得たこともあつた、伯が愛他心の深きことは、この一事より起つて、記述すべきことも、決して少くはないのであるが、こゝにたゞ欽羨すべき伯の家庭の一節とも見るべき、伯の高話を潤色せずして記さう、

『衣』　衣服は、その美、その粗、程度問題で、粗服でよいと云うても、あまり身分に懸隔れては態とらしくて却つてよくない、成るべく質素にして、その美も、その粗も、他の目につかぬほどのものにしたいと思ふ、それでどちらかといへば、私の娘どもは、邸に居るのはいづれも學校へ通うて居るから、質素過ぎる位なものを着せて居る（伯の姫君は四人在して、長は十八、次は十六、十五、十四に成らせられ十六の姫君の他に嫁せられたる外は、皆華族女學校に通學せられ、令嗣は七にて、今學習院に入學せられたるばかり）

『食』　食事には一定の場所を拵へてあるから、家族團欒して膳に向ひたいが、子供はそれ〳〵の時間で學校に行く、私は公私の用で、夜に入つて歸ることも折々あるから、食事時間に都合よく顏が揃はぬそれでやう〳〵日曜日位に、一時に食事が出來るやうになつて居る、これはどうにか一定したいと思う

て居るが、兎角思ふやうに行かぬ、食品もその時次第で、これもあまり面倒を云はぬことにして居る、

【住】　八十四になる老母に、私、妻に男の子、女の子三人、まづ四組に部屋が分つて、その他は別に云ふまでもない、女の子三人は同じ部屋に机を並べて居る、

【教育】　子供は前に云ふ通り、女はいづれも華族女學校へ通はせ、古風にもかたよらず、當世にもなづまず、中庸を得たいと思うて居る、さて娘を學校へやる、途中には電車といふ重寶なものがある、これへ乘せて通はしたいと思うて世間を見ると、この電車の中が必ずしも安全なものではない、近時電車の中から學生の惡風聞が大分洩れるやうである、そこで毎日の學校に腕車に乘せて送迎をさせる、車夫は充分吟味をして傭うて居るが、これにも信頼することは出來ぬ、それに附添を加へる、三人の娘の學校通ひに、三人の車夫と一人の召仕を要する、就中贅澤なと笑ふ人もあらうと思はれるが、本人の品行は確かであつても、電車の同乘者と誤解され、車夫との談話を誤解されても、評判となれば火のなき所には煙はたゝぬとなる、まア〳〵少位笑はれても、君子危きに近よらずの方がよいと思ふ、これは社會がわるいので、娘一人を犧牲に供して、風紀に何等の改新が出來るでもないから、戸外に起つた事でとすましても居られねば、結局は親の不取締即ち家庭敎育の不完全となる、不取締と笑はれて家に疵をつけ、當人に一生の不幸を與ふる豫防策としては、今の所腕車通ひも止むを得ぬことゝ思ふ、それにつけても、一刻も早く學生の風紀を洗掃するは勿論、社會及び家庭敎育の完全になることを希望するのである、腕車で通學するのが驕奢の意でないことは、この腕車に乘るものゝ衣服を見れば直ちに了解し得らるゝことゝ信ずる、さて學校より歸れば、近所のある正しき女敎師の許で復習させ、夜は何くれと談じ且つ興じ、それで一日は暮れる、成るべく品行を愼んで物を覺える、それで學校時代の敎育はよいと信

じ、それ以上家庭敎育に就て、いろ〳〵考へて居る、そこで天氣のよさ、顔の揃うた氣の揃うた時、その時思ひ付いた所に揃うて花なり、紅葉なりを見に行く、それで豫め、遊ぶ所と日を定めて置くといふことはしない、樂む半分に厭なお附合をせねばならぬ事も出來てくるから、

以上記する所の伯の高話によつて伯の家庭の純潔な事が證明し得らるゝであらう、名門伯の如き家にあつては、表に極めて美しく見ゆると同時に、裏に甚だ美しからぬ事件の存在するものであるは、殆ど必然の如くなれる中に、行狀に重きを措ける伯の家庭は、内に入つてます〳〵其美を見るを得るのである令夫人令孃の行狀に於ても、世の模範となるべきもの少からぬのであるが、それは他日更めて記する事にせう、

今更ならぬ訓言

長いきは朝とく起きて身をつかい慾もすくなく食もすくなく
世のなかに苦はなき物を我とわが樂をもとめて苦しみぞする
鳴子をばおのが羽かぜにまかせつゝ心とさわぐ村すゞめかな
草の葉のほど〳〵におけ露のたまおもきはおつる人の世の中

家庭の趣味

小森松風

世の中に氣の合はぬ夫婦ほど、不釣合な、そして見苦しい家庭はありません、私は家庭を組織する上に於て、夫婦共に同趣味を持つと云ふ事が、最も必要であると思ひます、然らば趣味とは何ぞ、と云ふ問が起りませうが、趣味の定義は、獨逸では、是を『自己の利益』だと申して居ります、又或る論者は『美の觀念』だと云ひます、『私は眞善美を兼ねたる秩序の整頓なり』と申したいのであります、兎に角一言以て答へる事の出來ない、一種云ふべからざる妙味に依つて、精神を慰籍するのであります、そこで、夫の方には趣味があつても、妻に無いとか、妻の方には趣味があつても、夫に無いとか、云ふ所から、夫婦仲がわるくなり、舅姑との折合も面白からず、果は一家族が、日々鬱悒に暮す、と云ふが如き家庭

が往々あります、これを私は物あはれなる、心細い秋に譬へやうと思ふのでございます、

之に反して、一家圓滿に治まり、夫婦共に趣味を同じくして、常に和氣藹々たる家庭に暮すものは、人生無上の幸福であつて之を譬ふれば、恰も花咲き鳥歌ふ、樂しき春であらうと思ひます、斯う云ふ家庭はどこから見ても、實に品の善いもので、何となく奥ゆかしい心地が致します、かく趣味ある家庭を作る上に於て、他日一家の主婦たらんとする孃樣方に向つて趣味の修養をお勸め申したいのであります、今日の婦人方に、全く趣味が無いとは申しませぬ。けれども未だ男子と(よし同等に行かなくても)共に趣味ある家庭に生活して、眞に和樂を旨とするまでに、至らぬやうに考へます、私は此の趣味と云ふことが技藝や、學問を修養するにも、是非、婦人の本分として必要でもあり、又他日、夫に對する慰藉としては、寧ろ此の趣味に俟つ所が多からうと思ひます、その品性を高め家庭をして優美ならしむる上に於ても、趣味の一事は、殊に具有すべきであると信じます、今日孃樣方が學校に於て技藝を習ひ、學問を修めらるゝのも、皆他日、之を夫の家に應用して趣味ある家庭を作り愉快なる生活を求められん爲で御座いませう、女子三從の教は、云はずもがな、何時かは良縁を求め家庭の舟に乘つて社會と云ふ海に漕ぎ出さねばなりませぬ、

然るに社會の海は、波風荒く、折々家庭の舟を覆されんとしつゝ、幸にも坐礁の難を免れて、漸く漕ぎ着けるのが、斷巖兀突たる、世路難島と云ふのであります、家庭を組織した以上は、誰しも此の島に攀ぢ上らねばなりませぬ、所がこの島は、絶えず怒濤が打寄せて、頂上に至るまでには、幾多の嶮崖を越えねばなりませぬので、その間に或は雲霧の理想の天を覆ふ時もありませうし、或は風雪、肌を劈く時も御座いませうが、夫婦相提携して、堅忍不抜の精神を持ち、趣味と云ふ慰籍劑を服用しつゝ、行く手に迎ふる花の笑み、梢に歌ふ鳥の聲、蒼海照す月の

影などに、夫婦歌を思ふなどは、實に苦界中の樂でありまして、取りも直さず、之が家庭の趣味に外ならぬのであります、故に人生の目的は、全く此の世路難島の嶮峻を犯し進んで、始めて得らるゝのであります、今假に夫婦間より趣味を除き去つたなれば家庭は實に無味乾燥なるものに成り了ると同時に、社會も亦萎靡として、振はなく成るであらうと思ひます

趣味には種々あります、文學趣味、美術趣味、音樂趣味、それ〳〵人に依つて、其趣味を異にして居ります、彼の月や花を見て歌を思ふは、文學趣味であります、月夜に琴やオルガンを奏して樂しむのは、音樂趣味であります、その他、新聞雜誌を愛讀するのも趣味、盆栽に目を喜ばしむるのも趣味、すべて人として山川草木禽獸虫魚に對して、多少の趣味を持たないものは殆んどありませぬ、從つて家庭の趣味を得ると云ふ事は、六ケ敷い樣で、少し心掛があれば容易いことだと思ひます、

茲に至つて、家庭の趣味を極論すれば、夫婦間に於ける精神上の慰籍とでも申しませうか、之が妻の夫に對する、大なる慰籍であらうと思ひます、此の趣味の修養は、各個人の心掛に依るのみでありまして多少讀書を解し、文章を解する婦人ならば、多方面に如何なる趣味でも解し得られぬと云ふことは無いと思ひます、

一體女子の讀書、或は文學を以て心を優美にし、品性を高むるの必要は、他日人の妻となつた曉に、終日業務に疲れたる夫が、家庭に歸つた時などに、優しく、美はしき心と、笑顏とを以て、之を迎へ、且つ慰籍を與へて、滿足させるのにあるので御座います、然るにこの趣味を更に解せない妻は男子に取りて、不幸此の上なく、悒々煩悶に月日を送らせる者と、云はなければなりませぬ、斯る妻が、果して能く內助の功を全うする事が出來ませうか、實に玉の盃に底なき心地がせらるゝのであります、どんなに技藝が上手に出來たにしても、どんなに口が達者

であつても、其の言ふ事が無趣味で、學理に合は無かつたなれば、お氣の毒ながら、立派に技術の腕前は持ち乍ら將來は無趣味なる家庭生活を以て、鬱悒に日月を送るが如き、悲境を來たすのは火を見るよりも明らかであります、故に將來良妻賢母たらんとせらるゝ孃樣方は、宜しく世路難島の慰籍劑を咀嚼して、深く此の點に留意せられん事を、希望する次第であります、

東郷大將の家庭

中川析柴

半年餘の大仕度をして、日本微塵になれと勢込んだるバルチック艦隊を、其影を見せるや否や、池の木の葉をなぶる夕立の如く、物の見事に全滅したる手際は、神ならではと、さしもの露國をして呆れるばかり恐れしめ、今や凱歌湧くが如きなかに、一代の景仰を一身に集め、擧世膽望の中樞となれる、東郷大將の家庭を紹介するの榮を得たきものと、令夫人を麹町區上六番町の邸に訪問したは、ことし十一月七日の午後である、

引きも切らぬ客の來訪に、この供待處も出來たのであらう、向合せ六脚の腰掛にチントを張りたる、これを見てもその質素の程は知られ、玄關は直に應接處、更に装飾のなき所、また大將邸の玄關たるを免れぬのである、そこに待つ程もなく居間に案内せられたが、こゝには令夫人の挿されたのであらう、菊の花の床に振よく匂ふもあり、額、掛物、置物、配置よく飾られ、庭は松と紅葉の色を交へて、美しき苔の上には塵一つとゞめず、時といひ、所といひ、心の底まで晴れゆくやうに眺められたのであつた。

茶は令嬢によつて運ばれ、令夫人と對座したのであつたが、この日ごろ、かしこの會、こゝの催、寸暇もなきなかを割愛せられたるなれば、何くれと問ひまゐらせんも心なき術と今更氣つきて、唯今回のよ

美はしき人
美はしき行

記者は讀者諸君にこの美しき事實を報道するを喜ぶもの也

名譽ある御養育掛

皇孫迪宮殿下の御養育掛として、東宮職へ御採用になりたる清水しげ子(二十六)女史に就て少く其經歷を記さんに女史は茨城縣水戸藩士榮愛(五十九)の女にして、母を榮子(六十三)といふ、姉は愛子(二十九)弟は督重(二十三)一は嫁し一は臺灣協會學校の寄宿生なり、女史初め麹町區富士見町の私立富華小學校を卒業し府立高等女學校に入れり、去三十二年四月三日同校を卒業し同年四月女子高等師範學校に入る三十六年三月文科を卒業して、府立第一高等女學校の教師を奉職し、月俸三十餘圓を得、而して其教鞭を取るや懇切溫和、薫陶の誠實人を動かすものあり、女史體質健康、腦力明晰、運動家として女教師中に賞贊され居たるのみならず、文事に關しても亦俊才あり今回の御用召は女子の身に取りて、夢にも思ひかけざりし處なりしが、東宮職より文部省への御内命に依つて、其結果選定は府立第一高等女學校教員中に下り、遂に此榮任は女子の頭上に寶冠の如く輝くに至れり

名譽ある二婦の德行

君が惠みの露に霑ひつ、民草のいろ茂れとや目出度き天長の佳節に臨みて、去る三日熊本縣下德行者の賞表式を縣廳内に於て執行されたり受賞者は飽託郡中緑村大字中無田坂本てつ女(八十二)鹿本郡千田村富田梅次の二人にて、てつ女は其三十六歲の時、同郡船津村醫師光行齋卓の長男彪の乳母として同家に奉公せし以來四十餘年、殆んど一身を犠牲に供して、彪の補翼に力め、主家と勞苦を共にす不幸にして主家離散の悲境に陷るや、齡八旬に達する老體を以て、尚ほ其再興を念とし、焦慮斡旋して息まざるの忠實篤行を以て、其撰に入り、梅次は資性溫順父母に事へて孝を極め、偶々家計貧困の故を以て他に雇傭せらるゝや到る處に精勤を盡し、此間實に十六年、然るに不幸にも不治の疾病は彼を襲ひて、遂に主家を辭するの止むを得ざるに至らしめしが、傾きかけし家計は、爾後益々窮境に陷るを以て、彼は病苦を忍び、心勞を押へ、父母の業を扶け、父母を慰め、一家糊口の資を供すること四十年、其志操堅確其行爲奇特の故を以て、此恩惠に撰まれたるにて、江木知事より賞狀及び賞品を授與されたるなりと

名譽なる姉妹の教員

芝區愛宕下町三の一に岡田といふ見すぼらしき洋燈屋あり、こゝより毎朝時を定めて何處へか赴く、二人の海老茶式部あり、非常の美人とはいふには非ざれど氣品高くして服裝も卑しからず、此洋燈屋には相應しからぬ風采なるに、この二人はともに同家の娘にして、姉なるは光子(三十一)といひ、次を文子(二十八)といふ、前者は女子高等

師範學校奏任教授、後者は第二高等女學校兼東京府女子師範學校の教諭なり

洋燈屋と海老茶袴、すでに好個の對照なるにしかも男恥かしき教授教諭とありては、いよいよ對照の妙を極むる事なるが、それよりも仰ぐべきは姉なる光子が、文部省の命により米國に留學する事數年、近ごろ期滿ちて歸朝せしといふ光榮ある歷史を有する事なり

斯程の娘だちを有する親達は如何なる人なるべきかといふに、常にこの店番をなし居り、洗晒したる二子縞の袷に山の入りたる小倉帶禿チヨロの前掛をしめたる一老人が其父の英之助(六十四)氏にて

如何にして二令嬢を教育したる歟を或人の問ひしに、老人は甚だ迷惑げに「なに女の子は學問をさせるが一番行末が安全だらうと思つてさせた迄の事、二人とも今の身分になつて吳れたものですから、人さまが名譽な事だの、親だちが偉いのと仰有つて下さいますが、つまりは兩人が旨く出來上つて吳れたから、私や家內が其御裾分を受ける事も出來たやうなもの、つまり私共夫婦の幸福なのでございます」と、何處までも謙遜なる句調は、此老人が二閨秀を作り出せしの偶然に非るを見得るなり、扨此老人の身の上と二女を敎育せし次第を聽くに、英之助翁はもと京都の人明治の初年上京し大隈伯の家從となり竹橋なる同邸(今の佛國公使館)內に住居せしが、今より二十餘年前思ひ立つ事ありて、商人となり、芝區琴平町に洋燈屋を開業し爾來同じ商賣を續け居たるなるが、二女に向つては學問によつて身を立つるが、婦女子として尤も安全の道なるべきを感じ、姉の光子は小學校卒業の後築地の新榮女學校(今の女子學院)へ入學せしめ、其外習字、漢籍等の教師にも從はせしが光子は同校卒業の後補缺試驗に及第し、女子高等師範學校に入り三十一年に卒業し、三十五年米國留學の命を受け留學前後五年先月歸朝したるなりといふ、妹の文子に至つては更に兩親の世話を受くる事少なく、小學校卒業の後は自から願書を認めて、第一高等女學校に入學し、十六歲に至り卒業なしたるが、年齡不足のため其後の一年を獨習に送り、其翌年女子高等師範學校の入學試驗に苦もなく及第せしが其卒業したるは三十一年にして、補缺試驗に及第して入學したる姉の光子と同級となりしは、面白き話といふべし、二女の母は阿祿(五十二)といひ、亦溫良貞淑の老女なり、二女をば少女の時代より、學校に遣りたれば、家事は一切其身に引受け、二女の暇ある時といへども、決して水仕業にたづさわらしめず、二女既に男子恥かしき地位を占むるに至りし今日に於ても、倚下女をも置かず、自から臺所に引籠りて、逸樂を求むる事なし、父英之助氏は「娘だちも兎に角今日の身の上になりましたから、コンな商賣をして居りますのは忌でせうとは思ひますが、娘だちが月給を取るやうになつたからと云つて、私共がたゞ遊んで居つては、今日さまへ濟みませんし遊んでばかり居るのも苦しいものだらうと思ひますから、矢張手慣れた商賣を棄てないのでございます」云々」さても美しの家庭よ、面白の親子よ、

されば萬朝紙上に賞評せる如くこの姉妹の父の、ランプ屋なるが故に一しほたふとし

ろこびをのみ述へて辭せんとしながら、思はず話は一つ二つと出たのであつた、

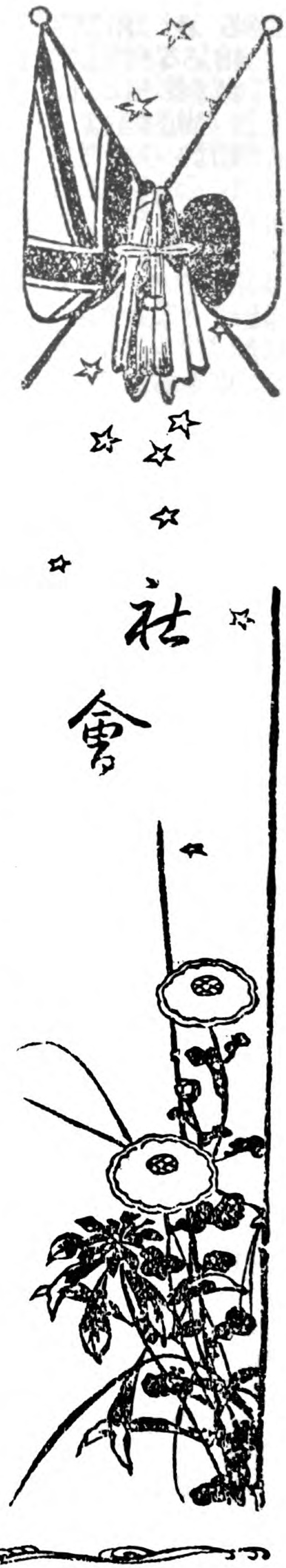
令夫人の曰はるゝには、私どもの事をお書き下さることはどうぞ御免蒙りたいもので、實は一向お目にもかゝらぬ人にお目にかゝつたり、話をせぬことが話になつたり、それに可笑しいのは、私の事を書いたのを私が見て、成る程かうせねばならぬものか、なぞと氣のつくこともあります、

實に趣味のある話ではあるまいか、私の事を私が見習ふとは、この令夫人の面目とも見るべきもので、輕薄な筆に、懸賞當選者の傳を書くやうな調子で書かれるは、頗る迷惑に感ぜられる事であらう、さる信用ある大新聞に數日續載せる同家の家庭の如きも多くは筆に任かせてよい加減な事を並べ、殊に滑稽なるは數年前物故せられた母堂が、現に頗る健全で『今年七十路あまり三つ四つにやなり給ふらん、體軀は小柄におはせど、其健かなることをさ〳〵壯者に劣り給はず、時には若かりしことゞも語り出でられて』なぞと記されたのであつたが、これでは書いたものも當にはならぬと、これは同家に居合せたる人の話である。

世にも時めく大將の家の、その質素なる、その令嬢自ら來客に茶をすゝめらる、令夫人の見るからその平生を思ひやらるゝばかり、家事に行屆ける中を、愛國婦人會の評議員として、その他何くれと公共の事業に奔走盡力し給ひ、この名譽ある大將の令夫人として、齊しく景仰の念を起さしめらるゝ、書生も女中もありながら、水入らずの如く見受けらるゝ家庭世は冬枯に向へど、この邸には春風のどかに通ふやうに思はれるのであつた、

辭し去る時、玄關に受附けた名刺忽ち數十枚を加へたのであつたが、就中外國人などの、邸前を素通りにするに忍びず、一面の識なきも、名刺をその玄關に呈して行過ぎるもの少からぬとの事である。

◎東郷の名　麹町の東郷坂はさる事なれど、亞米利加に東郷停車場が出來たとは、さて〳〵大した評判ではないか、今は婦人の髮に挿す物さへ、その名に呼んで、さては東郷花、東郷リボン



社會と錦畫

石川殘月

繪畫の風教に及ぼす影響の至大なるは、事新しく論ずるまでも無き事にて、其感化力は時として書籍新聞雜誌の文字よりも更に大なる事あり、若し繪畫の感化力を以て斯くの如く至大なる者ありとせば、繪畫は美術問題以外に、又社會の倫理問題として觀察せられ、又討究せられざる可らざるものなり、繪畫に對して國家は多少其制裁を加へざるに非ざるも、國家の制裁の如きは、何れの國に於ても甚だ粗漏なるものにて、其制裁の判別の點は、單に社會の風俗を害せざるや否やの點にあるに過ぎず、

故に若し、如何なる繪畫にても、社會の風俗を害せざる限りは、國家はこれに制裁を加ふ可き餘地を有せざるを以て、如何なる種類の繪畫にても、風俗を害せざる者は、之れを公然衆庶の觀覽に供するを得べく、又印行出版の自由をも有するなり書籍新聞雜誌の文章なれば、假令社會の風俗を害せざるも、其文章の主意は各方面の向き〱より批評せらるべきを以て、之を公にする者も、常に多少注意する所なり、然るに繪畫に至りては社會の風俗を害せざる限りは美術上の作として批評せらるゝの外他の如何な

る方面よりも、批評制裁を被むる事なきを以て、畫家及び其出版刊行者は、其作品が社會に對して如何なる感化を及ぼすべきやの點に至りては少しも顧慮せざるなり、然し諸方の展覽會などに出品せらるゝ西洋畫日本畫等に對しては、多少異なる方面よりの批評も無きに非ざるも、此展覽會などに出品せらるゝ作の如きは、比較的に觀賞者も尠く、又西洋畫や花鳥山水などの日本畫を愛玩する程の者は多少敎育のある者なれば、其愛玩する所の繪畫の感化を被むる如きは假令ありとするも、甚だ稀なる可し、然るに、坊間に販賣する東錦繪即ち憂習世繪の類に至りては、學者多くは之れを輕蔑して、殆んど其輕重を問ざるなり、かく殆んど識者の度外視する所の東錦繪は、是最も多くの需用者を有し社會のあらゆる階級に其愛玩者を有するなり、然らば即ち社會に於ける影響の最も大いなる者は、高尙なる趣味を有する繪畫の類に非ずして、東錦繪其他これに類する賣品の石版畫の如きの種類なる可きは論せずして明なり、西洋畫にても日本畫にても高尙なる性質を有する作品は、別に社會の嗜好に投じ俗間の玩賞を得ん事を期せざるを以て、作品は常に社會の實情に懸隔し居るだけ、其作品の風敎上に於ける影響も直接ならざるなり、然るに普通の俗畫に至りては畫工は常に社會の嗜好を觀るに敏捷にして、其需用に應ずるを以て唯一の目的となし居る故に、其作品は常に社會の實情に密着し社會の現象と密接なる關係を有せり、二十七八年の日淸事件の如き重大なる事件の起れる時は勿論の事、濃尾の震災三陸の海嘯、軍隊の凍死等の如き、苟も社會の人心を動すに足る事件の起るあれば、彼等畫工は其機を逸せず新作の繪畫を印行して社會の人心に投せん事を務むるなり、故に東錦繪及び石版畫の如きは、卑俗なるだけ、又社會全體に其嗜好を有し、從つて其影響の及ぶ所も少々に非ざるなり

是等作品に就きて、近來特に注目すべきは、此種の

繪畫が近來殆んど其趣向を一にして、多くは皆殺伐なる繪畫のみを出せる事是なり、其繪畫の問題は或は歷史美談と言ひ、或は家庭敎訓畫等と題する等甚だ美なりと雖ども、其畫に至りては、暗殺、鬪爭、決鬪、外人殺害、復讐其他忠臣が自ら愛子を殺して君に忠義を立つるの光景の如き、多くは皆此種類の繪畫ならざるは無し、此種の繪畫は無論社會の風俗を害する類の如き者に非ずと雖ども、社會に對する實際の影響よりする時は、表面の風俗を害する如き影響よりも一層甚しきものなり、彼の學齡兒童に、長劔を提げ、鮮血淋漓たる生首を手にせる者を忠臣孝子の龜鑑として示すが如き、天使に均しき兒童に殺伐の氣性を養ふの外何等の効果ある可きか、試に錦繪屋の店頭に立つて、陳列せる繪畫を一覽せんか、利刄と碧血を見ざる繪畫は殆んどあるなく、全紙の墨痕皆是れ殘忍酷薄、不義、無道の慘劇ならざるはなし、

此種の繪畫と均しく、社會の風敎に有害無益なるものは、彼の俳優の似顏畫なりとす、此種の繪畫は、殆んど畫としての價値を疑はざるを得ざる程のものなりと雖ども、世間にはまた此種の繪畫を無上の興味を有する者となして、愛玩する者甚だ多く、名優の演劇ある每に必ず其演劇の似顏畫を出版せざるはなし、若し敎育の在る者が多少演劇を見る程の見識ありて、此種の似顏畫を見れば或は多少の利益なきに非ざるべし、されど演劇を觀てその劇に現はるゝ人物と事實とを批評するの識見なく、俳優其者を愛するが故に、其俳優の似顏畫を愛玩する者には更に何等修德上の利益無く彼等の心操を害するのみ也、此の種の繪畫愛玩者の標本は即ち東京の娘にて、都會幾千百の娘は何の遠慮もなく、此俳優の似顏の繪卷物を作りて青簾紅燈の深閨に之を繙きて愛玩し居るに非ずや、社會の新聞雜誌記者が筆を禿して社會の風敎を云々し、學校敎員や宗敎家が言を極めて道德を云々するも、若し他の方面に於て、私利を營まんが爲に、かゝる害毒を社會に流して顧みざる者あ

らば、彼等の勞は殆んど「シチフ」の勞に類するに非ずや、法律を以て斯の如き類の繪畫を取締る事素より難きを以て、他の方面より常に强き制裁を加へて其害毒を防がざる可らず、其制裁とは他なし世の新聞記者が新版錦繪の刊行せらるゝ毎に敢て審美上の批評を加ふるを要せざれば、社會の德敎を標準として、嚴重なる批評を加へ、有害無益なる繪畫の流布を防ぎ、他の一面に於て良好なる錦繪の進歩を計るの一事是なり、

◎貴婦人の成田旅行　板垣伯夫人絹子を首め、淸浦農相夫人錬子、波多野法相夫人濱子等は、先頃成田鐵道會社の招待を受け、成田町新勝寺の菊花壇見物かた〴〵參詣せらるゝことゝなり、何れも令孃親戚なる婦人方をさそひ合せ、同勢三十五名の貴婦人は、去る十六日上野を出發し、成田に一日の汽車旅行を試みられたる由、これも婦人活動の一つとして見るを得べからむ

訪問の注意

石鼎茶翁

人を訪問するには二つの區別あり、一は用事のための訪問、二は遊ぶための訪問なり、用事の訪問には職務上の用務、家事上の用事、その他自他一身上の用事のための訪問の如き是れなり、遊ぶための訪問は、無沙汰見舞寒暑の見舞其他交誼を温むるための訪問の如き是れなり、

此二種類の訪問は成るべく混せざるやうに注意すべし、然らざれば用談も用を辨せずに終ることあれば交誼を温むる目的がお流れになりて、用務の相談に頭を痛めて辭し去る事もあるべし、この區別を明かにするためには、他人を訪ひて案内を請ふとき、若くは主人主婦が直に出で迎へたる時に、先づ來訪の目的を通ずべし、訪問最初の最も單純なる挨拶は用向なれば『一寸少々用事があつて參りました』若し

用事なき訪問なれば『別に用事で上がったのではありません』の如き頗る單純なる言語なり、是れは當前の事にて、何人も之を實行し居るやうなれども、實際この單純なる言語を以て來意を通ずる人は至りて稀なるが如し、故に人が訪問し來りしも、其人が何の爲に來りたるか眞の心を解するに苦むこと屢々あり、主人の方にて推して大かた遊びに來りしなる可しと思ひ居るに數十分若しくは、數時間後に突然に用談などを持出す人あり又何か用談にて來れるなるべしと察し居るに、其の人は四方山の話に時を移して遊んで歸る人もあり、互に會合の目的がわからずに居りては、心中に何やら先方を解しかぬるやうなる事ありて面白からぬ事甚だ多し若し用向にて人を訪問せば殆んど寒暖の挨拶も無用なれど、其を必要とする人あれば、寒暖の挨拶を一言して直ちに用談を始むべし、決して雜談に無用の時間を費すべからず、用事濟まば直に辭し去るべし、俄かに行き直に歸り去る如き事を決して互に失禮とすべからず、是れが眞實の禮儀なり、若し遊ぶためなれば、先方の

師走十題（其一）



玉琴のしらべやいづこ夜半の雪

時刻の都合等を充分に承知して、決して迷惑をかく可らず、先方の都合が遊び居るに不便ならざる時は清話閑談に時の移るも厭はざるべし、若し來客が遊びに來りても、當方に止難き用務ある時は、遠慮なく其旨を告ぐべし、而して心を打ち開けて次の訪問若くは當方よりの訪問を約すべし、來客に自ら其の事を告げずして長居したりとて、後に小言を云ふ如きは却て無禮なりと心得べし、昔時、千の利休は茶會の規則中『賓主歴然の會、好言令色入る可らず』の一條を設けたる事あり、甚だ殺風景なる規約の如くなれど、茶を飲みに集る會の如きも、何且つ御世事を云ふの必要なきを知るべし、況して用談のために會する者、何ぞ無用の御世事を云ふの必要あらんや、遊ぶために會する者も、賓主共に胸襟を開きて快談に時を移せば、自他の滿足この上やあるべき。

◎女教師の米國招聘　今回米國聖路易市女子大學校よりの招聘に應じ造花、日本畫、刺繡教師として實踐女學校女教員二名赴任することに決定したる由

露西亞の結婚

加島汀月

露西亞の婚禮の儀式と申しましても、日本の島臺、高砂、三々九度の盃と云つたやうな、露西亞固有の風俗のある譯では御座いません、其儀式は希臘教全體の儀式でありますので、強ち露西亞のみに限らず一般希臘教を奉じてゐる人は日本人でも支那人でも英國人でも皆其教の定むる所の式に從つて婚禮をなすのでありますから、露西亞の婚禮の式と申ましても畢竟は希臘教徒の婚禮の式で、啻露西亞が希臘教國でありますので、其儀式が今日では露西亞の風俗に化したのであります。

諸令孃さんの御存じの通り基督教徒は誰でも皆其結婚を會堂で衆人環視の中に行ひますが、此事は結婚を尤も公けなる神聖の物とする爲めで、敢て衆人の觀覽に供する譯でも何でもありません、先頃尾崎

市長とフエオドラ孃の結婚式の樣に歐米諸國は何處でも結婚其物を尤も公々然と親戚知己朋友の前に行ふので此風俗は露西亞も同じことであります、で服裝はと申しますると、此も歐米と何等の變りもありませず、男は、燕尾服に女は裾長の大禮服、下つては「フロックコート」に夜會服、百姓などに至りては、通常の服裝を以て結婚を行ふのもありまするが、儀式は何れも一樣で、決して百姓と貴族の間に差別はないのであります、

露西亞の人が結婚を行ふに先づ要する人員は、保證者が花婿花嫁の方より各一人づゝ、持冠者が二人幼童一人、牧師一人、副牧師一人、誦經者一人、堂役一人、讃美歌誦者數人で、此人員は必ず無ければならぬ人員であります、

で先づ何時何十分より誰と誰と結婚式を行ふとなると會堂では其準備をして、祭壇を堂の中央に設け、其上にバイブルと聖十字架とを置き其前に華美なる絨氈を敷き、牧師以下は皆其服を着し、燈を神前に點じて花婿花嫁の到着を待つのであります、頓て花婿花嫁の車が双方より到着すると會堂に控へて居た美しき幼童女は基督とマリアの像を兩手に捧げ先導となり、花婿、花嫁其後に從ひ保證者以下其後に附隨して、設けの席に至りますると、牧師は玆に其新婚者を迎へて其双方に美しきリボンを結びたる蜜蠟の蠟燭（新婚者赤、再婚者白）に火を點じて双方に與へ、花婿が齎したる金の指輪と花嫁が齎したる純銀の指輪を受取りて金の皿に盛り此を祭壇の上に供へ而して後其結婚の祈禱を初むるのであります、勿論貧者は金の指輪を備へることが出來ませぬので鍍金したのでも差支はないのであります、初めは聘定式でありますが、此は常の祈禱の如く皇帝と國家の幸を祈る祈禱より初まり新婚者の長き幸福と子孫の繁榮を祈る祈禱に移り終に祭壇に供へたる指輪を取つて此を新婚者の指に嵌め、此を相互三度交換して遂に金の指輪を女の指に、銀を男の指に嵌めて其式を終るので此祈禱は僅かに十五分乃至二十分であり

まして、歌誦者は時々牧師と交互に短き讃歌を歌ふのみで別に申す程のこともありません、聘定式が濟むと直に續いて戴冠式を初めるのでありますが、牧師は先づ其前に新婚者に向かつて相互の決心如何を問ひ、其答を得たる後新婚者が互に甘んじて婚するや否やを再び問ひ、他の人に約束などしたること無きや否やをも確めたる後に式に掛るのであります、此式も皇帝と其國家の盛運を祈る祈禱より初まり、新婚者に對する敎訓となり、榮冠を新婚者の頭に冠らせ其後聖書のエヘズ書五ノ二〇より三十三迄及びヨハネ傳の二ノ一より十一までを讀み、遂に金の盃に葡萄酒を盛りたるものを取りて此を新婚の花婿花嫁に三度づゝ交互に飮ましめ、其より牧師は花婿と花嫁の右の手を把りて祭壇の周圍を三度廻るのであります、此は新婚者の緣が環の如く永久に絕えざることを意味するので、此時に新婚者は既に男女と云ふ個體を失ひて夫妻と云ふ一種の合體となつたのでありますから、歌誦者は其時基督と合一したる殉敎者に彼等新婚者を擬へ、恰も古の殉敎會が基督の爲に其身を捧げたる如く、新婚者相互は、此後其配偶者の爲めに一身を捧ぐべきものたるべきことを意味したる殉敎者及び聖母に對する左の如き讃歌を歌ふのであります。

『以賽亞祝へよ、淸き處女は、子エムマヌイル、神と人となる者を生めり、其名は東、我等彼を崇めて童貞女を讃め揚げる』

『聖なる致命者、善く難を受けて榮冠を冠りし者よ、我等の靈の憐を被らんことを主に祈り給へ』

基督神よ、光榮は爾に歸す、爾は使徒の譽、致命者の悅、彼等の敎は一體の三者也』

此讃美歌を歌ふ中祭壇を廻り終ると牧師は其榮冠を新婚者より徹し、新婚者に祝詞を述べて席を退くと共に結婚式は玆に終を告げ親戚、知己、朋友は新婚者に近きて交々握手をなし、祝詞を述べて相携へて宴に赴くのが通例であります、

披露の席の事は私が申す迄もなく最早皆さまの御存

じいことで何處でも同じことですから申述べますまい、只一つ露西亞に於てのみ見るのは新婚披露の席で宴酣になると客が「ゴリコ！ゴリコ！」と稱へ出すのです、すると其聲に一人和し二人和し、遂に客が悉く「ゴリコ！」を稱へると新婚の夫妻は立つて互に相抱いて接吻せねばならないのであります、これは畢竟席興で「ゴリコ」(Goriko)とは「苦」いとの意味で、酒が苦くなつたから、新婚者は其酒を蜜の如く甘くすべく接吻するので、新婚の席では特に面白味のある事で、二度三度位は珍しくないとの事であります。

師走十題(其二)



煤掃や障子へ返す草双紙　か

◎斯主、斯婢　はや一昔のことなれり、故鳥尾得庵將軍が閃電の奇智泉と湧きて、保守中正黨を率ゐし折、黨の幹事として奔走せし渡邊鐵城といふがありけり、不幸病を獲て起たず、後に遺りし未亡人まき子は、其頃まだ二十四五の女盛りを惜しとも思はで、只管子女の成育を待たんと決心し、自ら請うて子爵家の女中頭となりそれより十餘年一日の如くまめやかに仕へ、昨年來子爵の病中は特に寢食を忘れて心肝を碎きしが、子爵歿後間もなく病患に罹り、過ぐる日亡人の數に入りしより、鳥尾家の悲み上下を總て一方ならず、當主光氏卒先し懇に葬儀を營し由

婦人社會の活動

リツデル孃の美擧

英國人リツデル孃は兼てより熊本に回春病院と稱する癩病患者の施療院を設け、熱心施療に從事せるに、收容の患者年を逐ふて增加し、自然その施設を擴張するの必要を生じたるを以て、今度弘く篤志者の義捐を求むることゝ爲り、目下上京中なりと云ふ、抑々癩病の最も厭ふ可き怖る可き病なるは、何人も知る所なるが、我國には不幸にも是種の患者甚だ少からず、印度の十一萬に次で、三萬内外の患者を有し其數は世界各國の第二位に在りと云ふ、他より癩病國と云はるゝも致方なき程なれば、其病毒の蔓延を防ぎ、軈ては之を根絕する爲めに、政府もしくは他の公共團體にて、疾くにも完全なる施設を備ふ可き筈なるに、今日に至るまで未だ其運びに至らず、却て一外國婦人の手に依りて、施療事業の先鞭を着けられたるは、如何にも耻入りたる次第にして、リツデル孃の義俠心は、國民として大に感謝の意を表せざるを得ず、元來我國に癩病患者の多きは、完全なる治療法の未だ發見せられざるも爲めなれども、又一つには隔離の方法嚴ならずして、患者をして普通の社會生活を爲さしむる爲め、自ら病毒の遺傳々染を多からしむるの一事こそ、其原因たるや疑ふべからず、即ち眞實病毒を根絕するの手段としては、是非とも公共の事業として、大規模の療養所を國内便宜の地に設け、患者を收容するの擧に出でざるべからず早晩その實行を期す可き所なれども差當りリツデル孃の如き篤志者の設立に係る施療院に對しては、世間の篤志者に於て充分の同情を寄せ其事業を助成せんことを望まざるを得ず、殊に熊本は宗教上の關係よりして、癩病患者の群集する土地柄なれば、此地に施療院を設けたるは最も事宜に適したる手段にして、少なくとも癩病の蔓延を防ぐに著しき效果ある可し、

◎大日本婦人教育會　同會にては去十八日午後一時より赤坂福吉町黑田侯爵邸内に於て總集會を開き、當日會長毛利公母堂を始め多數の貴婦人等も出席し、總會後引續き茂木氏の「ハーモニカ」北村季晴氏の「勸進帳」「はなれ小島」のピアノの獨奏、一德齋の新粉細工等の餘興ありたり、

◎女子體育獎勵會　東京府教育會にては、去二十五、二十六の兩日和強樂堂に於て女子体育獎勵會を開き、音樂(軍樂隊奏樂)舞踏(井口あくり外三名、日本古有の武術(小松崎こと女外二名)等、終りて談話の餘興ありたり、

◎二葉幼稚園　同園は去る明治三十三年貧民幼兒保育の目的を以て野口幽香子、齋藤峰子兩女史の手によりて設立されしものにて、爾來幾星霜の間種々の困難に堪へつゝ既に六十八名の卒業兒を出し四十五名の現在幼兒を收容し、熱心保育に勤められつゝあるが、今回四谷鮫ケ橋附近に於て四百五十餘坪の御料地拝借を許可され、工事を起して既に竣工の期も間近かとなりて、猶資金の充實せざるより、汎く世間の同情に訴へて、建築費を募集中なりと云ふ

愛國婦人會

▽會員總數　十月末日現在の愛國婦人會員は、四十三萬八千三百十三人にして、前月末に比し、一萬九千九百五十五人の增加なるが、其地方別と女子人口百人に對する會員數の比例を見るに、山口縣は五人三分九厘を以て第一位を占め、函館は四人九分六厘を以て之に次ぎ、東京は一人三分一厘にして第三十一位にあり、最も少きは栃木縣の零人二分八厘なるが、前月末零人四分二厘を以て第四十五位にありたる群馬縣は一人九分三厘を以て、一躍第二十位に進めりと云ふ、

▽規則　愛國婦人會にては今回規約を改正し、男子と雖も七圓以上の醵金を爲せし者は、之を賛助員と爲し、金色製ピン形徽章を交付し總會大會其他の集會に際しては、女子會員と同一の待遇を爲すことに定めたるが、入會申込は却々に多しと、

地方婦人會

▽能登　愛國婦人會は軍人家族救護等の基金作成案に、篤志家井に同會員より、手工品等の寄贈を受け、其受贈品千二百餘點により、同一本杉町元德寺境内に陳列所を假設して、天長節の佳辰に人出あるを幸として、前二日より陳列して、同會幹事以下會員正裝を爲し、縱覽者に接し、希望者に販賣せしが、忽ち賣却し了りたりと、其金高は六十幾圓なるも、地方人士に歡迎せられたるを推知するを得べし

▽備前　邑久郡豐原村に於ける婦人會、第一會總會を先月二日午後一時より豐原尋常小學校内に於て開催せしに、來會者七十餘名にして餘興として生花福引等あり退散せしは午後六時頃なり、

▽肥前　佐賀支部の愛國婦人會は凱旋軍隊歡迎方法を左の如く協定したる由、

凱旋小隊歡迎方法

一、愛國婦人會佐賀支部は凱旋軍隊鳥栖、佐賀兩驛通過の際祝意を表するため、日本赤十字社篤志看護婦人會佐賀支會と共同し該兩驛に餉すること、

二、凱旋軍隊各停車場通過の際、本會員は其地方毎に便宜の方法を以て誠意に歡迎送をすること、

三、各驛に於て郡市町村より湯茶其他を軍隊に供給せらるゝ場合は、本會員は勉めて之が助力をすること、

四、軍人中物品購入等の有望者あるときは、本會員は勉めて之が便宜を與ふること、

五、出征軍人歸郷するときは、其市町村内の本會員は之が歡迎をなすこと、

六、以上歡迎の際、本會員の服裝は、可成質素を旨とし、必ず會員章を佩用すること、

▽筑前　小倉市堺町東禪寺婦人敎會は、時局以來每月醵金しつゝありしが、今回該金を以て白米を購求し、東禪寺住職は敎會婦人惣代と共に、市内出征軍人貧困家族三十餘戶を慰問施米せり

△薩摩　國分婦人會は、開戰以來公共的慈善事業に奮勵する所ありしが、去二十五日英艦隊員國分八幡宮へ參詣の際は、四百餘名の團體を以て、御前馬場に歡迎し一行に愉快を感ぜしめたる由、

鐵道雇員

電話交換手の姉妹分ともいふべき、一寸見得のよい職業

港巷女史

◎おなた　電話交換手のもし〳〵に對しては夫婦の關係でもあるやうに、お役人になつても女の事故殊に乘客に對しては、おなた〳〵でなければならぬ

◎人の數　電話交換手ほど、まだ人を採用することが出來ぬ、新橋では現在員七十三名で、三十二歲といふ婦人が一番古顏で、年少者は十六歲とのこと

◎其手續　この事務員となるには簡易なる讀書、書方、作文、算術の四科目で出札掛は高等小學校卒業同等の學力あるもの、それに體格の試驗がある、

◎其仕事　乘車劵集札の對照、大小の荷物發着の對照、諸般報告の對照、貨物割戾の對照、それに出札掛、いづれも成績は男子よりよいとのことである

◎勤時間　毎日午前八時出勤の、午後四時退出、出札掛は隔日交替の勤務で、午前八時より午前零時迄、休憩して午前四時半より勤めて八時に交替する

◎其給料　十八錢より始つて三十六錢に昇り、女員頭となれば六十五錢迄貰へる、マッチの箱などはるよりは無論上等で、男に比して區書記以上である

◎勤め方　普通事務員より出札係は、一日勤めて一日の骨休みはあれど、夜を常に寐られぬので、翌日は眠くなる、巡査に比較しては大きに樂であらう

◎其採用　試驗もよく、給料もよし、さて直に採用されやうと思うてもそれは駄目也、願書を出して半年以上沙汰を待たねばならぬ、それから試驗なり

◎それを　マッチの箱はり同樣に思うて、願書を出す、沙汰がある、試驗を受ける、モッと勉强してから試驗をなさいなど丶、赤面さ丶る丶のも有とか

◎緻密な　頭を有つた女子にはさまで、骨の折れることでないから、油を賣りたがる男のお引摺よりよく、か丶る仕事の何でも構はず、多くあるを望む

◎今の處　婦人の職業としては、これと電話交換手が兎に角需用の多い兩大關である、勤務は交換手の方つらけれど、時間の利用は交換手の方大に得也



旅行記の終に

伯爵　徳川達孝

余は過般數日の旅行に於て、余の淺學無識者を以て尚且つ感興多く、各種の方面に於て頗る裨益を得、爲に余の智徳を増すの幸福を得たり、思ふに世の具眼者にして、宏才達識、或は碩學高徳ならんには、其得る所多大にして、其世教補益の材料を收めらるゝこと頗る多量ならんと信ずるものなり、次に今更旅行の必要を繰返すにあらねど余は今回の旅行に就いて大に悟る所ありたり、元來旅行は内地といはず海外といはず、各人各種の目的に出づるものなりといへども大要は公務的、學術的、實業的、攝養的、宗教的等に過ぎず、何れも皆必要に迫られての結果なり、されば各人それ等目的の下に旅行を試むる時は、地位身分知識相應に其得る所少からざるべしといへども、唯漫に漠然たる旅行を爲す如きは何の効果もなかるべし、況や多少或る目的の爲に旅行するにしても、到る處花を折り柳を攀ぢ、爲に地方の風紀を亂すのみならず、終には自己の醜聞をも流す如きに於てをや、甚だいはれなき事共なり、それも世の無教育者なれば止む、苟くも堂々たる帝國屈指の人士にして往々さる無意味の旅行を試み、或は旅行

中飄聞を流す如きものありといふを聞くは、吾人の痛惜して惜かざる所なり、社會中流以上の人士は希くは卿等の地位、身分、智德等に考へ合せ、漫に旅行を企つ如き輕擧に出でず且つ旅行中奢侈婬縱を敢てする如き事なく、それ〳〵の程度に於て、國家社會進步の爲に或は自己の智德を增進する爲に、常に有益なる材料を採集するの意を以て、旅行を企てられんことを、これ余等の切望して止まざる所也。

語らひ草

文學博士　横井時冬

三月二十六日

朝六時三十分發、神戸急行列車に乘りて、越中富山へといでたつ、午後四時五十六分、尾張國一宮につきぬ、こよひは淺井某方にやどりて、十一時すぐる頃まで、よもやまの物語にて時をうつす、一宮は鎌倉の時代はやすまたとおりどの間にわたれる驛になんありける、されば阿佛尼の十六夜日記にも、一宮といふやしろを過ぐとて『一宮名さへなつかし二つなくみつなきのりをまもるなるべし』とよみいでられしよし見ゆ、おのれも年十四五の時、しばらく此里にてもの學びしける事あれば、いとなつかし、この邊一帶に結城棧留を織る名產地にて、今は中島の一郡のみにても、一年三百萬圓以上の產出ありと云ふ、聖多點は元印度サントメといふ所の產物にて、室町の末ころより、我邦に輸入せしものなるが、つひに木綿縞の名となりて、糸棧留、結城棧留など云ふ名さへ來れるなり、

二十七日

この日天氣晴れていと快し、俄にさりがたき用事いで來りしかば、心ならずも朝七時二分發の滊車にて一宮を出でて名古屋に赴き、こゝかしこに餐を喫し午後一時五分發の滊車にて、福井までとていでたつ敦賀に至り日全く西に入りぬ、それより杉津今莊を

經るに、今昔の情に堪へず、さるは往年舊道を車にて過ぎし時は、朝いで丶漸く薄暮武生につきしに、今や僅かなる時間にて通過し、ことに山頂より敦賀の海を見るさまなど、何とも形容し難きほどになむ

見渡せば敦賀の海はかすみにて
　　われたる浪の音たにもなし

江州の柳瀨わたりより殘雪ありし、氣候も異りしが鯖波、武生、鯖江などを過ぎては、一入の寒さを覺えしかば、

旅ごろもにはかに寒く覺ゆるは
　　こしのしらねの高ければかも

往年も福井へは夜おそくつきしか、この度も亦八時三十分福井につきぬ、やがて車を傭ふて、名和屋某方に投宿す、名和屋は往年金澤に赴きし時やどりし所にてなにとなくなつかしかりき、この家も昨年の火災にて燒失せしかば、今は假の住居にて所も家も元のものにあらざるなり、一時は車夫が己を欺きおるにはあらざるかと疑ひき、

福井は、柴田勝家の居城にて、北莊といひし所なり慶長五年十二月結城中納言秀康、越前の六十七萬を得て、同じき六年五月、伏見よりはじめてこの國に臨み、北莊の城を今の地に移し、六年を經てなれりといふ、其後宰相忠昌のとき、寛永元年福井城を攻め、つひに市街の名ともなれり、往年官命を帶びてこの地に來り、羽二重を調査せしが、この度は急ぐ旅なればとて、羽二重の事は調査せずしてやみぬこの地に、輸出羽二重を織りいだしたるは、今より十八年前、即明治二十年のことなれども、忽ち兩毛地方を凌駕して、全國第一の羽二重地となれり、今は福井市を初め十郡にわたりて、織りいだすがゆゑに、一年の產額千三百萬圓の上にいづとぞ

二十八日

けふも亦天氣晴れて、いと麗はしければ、朝とくいで、城下を散歩し、八時三十分の滊車にて富山へといでたつ、大聖寺、小松、松任、金澤、津幡、いづれも往年經過せし所にて、名を聞くだになつかし、

石動、福岡などいふ停車場を過ぎては、また往年天田越をすぎしことなど思ひつゝくる、午後一時五分富山につきぬ、頓て旅籠町なる木屋某方に投宿せり

この日、市立商業學校、富山市役所等に赴き、賣藥に關する史料を蒐集す、この地三十二年八月の火災にて、書類大半燒失せし爲に、やむを得ず、明日廣貫堂の店員中老たけたる人に就て、質問することを約してかへれり、市川市長いと懇にこれらのことを周旋す、

富山市は一萬五千四百十四戸、六萬百六十三人を有する北陸屈指の市街にして、其内賣藥營業者二百三十九戸（千四百三十四人）帳簿主千五百七十二戸（七千七十四人）行商人四千百三十七戸（一萬六千五百四十八人）ありて、殆んど二分の一以上の人口は、賣藥を以て生活するが故に、富山の商業は全く賣藥の一物なりと謂ふべし、

富山は古へ藤居山と稱せし所にて、其莊を藤井莊とも呼べり、永祿中水野越前守勝重（後神保越中守長職と稱す）の城を築きし所にて、其後三世この城に居住せしが、天文十四年に至り、富山の名に改めしとぞ、織田信長公天正七年佐々成政を越中の國四郡に封じ、富山に居らしめらる、同じき十五年豐臣秀吉公、成政を肥後に徙し、越中を退かしめらる、慶長二年前田利長守山より富山城に徙らる、同じき十年富山城に退隱して、新川一郡十九萬石を養老領に充てられしが、同じき十四年三月、城中より火を失し、遂に城も延燒す、これによりて魚津城に徙り、關野（今の高岡）に城を築かしめられ、この年八月土木全く竣工せしかば、關野城に徙らる、其後前田利常、寛永十六年四月幕府に乞うて、封内の采地十萬石を二子利次に讓り、富山に居らしむることに定められしかば、明くる十七年十月利次初めて富山城に入る、

富山の賣藥は、今を距ること二百十餘年前、即ち天和年間、備前の國岡山の人淨閑といふもの、偶富山城下に來遊し、反魂丹を製して藩主前田正甫（利家の

嗣子」に献せしに、大に奇効ありしかば、藩主より反魂丹の製法を、松井屋源右衛門に授けて調合せしめたるもの、つひに富山賣薬の濫觴とはなりぬ、其後八重崎屋源兵衛といふもの、松井屋源右衛門の製薬を携へて關東地方に行商せしに幾何ならずして販路開けしかば、これより年々行商するものいでしといふ、藩主も富山地方には、元來これと云ふ物産なきをもて大に賣薬を奬勵して、一大物産となすことの計畫ありしかば、他藩の領分にて入こみかたき國へは、藩主より販賣許可の照會をなして、大に力を添へられしことゝて、つひに全國中富山賣薬の名を知らざるものなきに至れり、初は賣薬商の取締を總曲輪なる町役所にてなしゝに、明和中反魂丹役所を、町役所内に設け、奉行、中役、下役を置きて、其事務を取扱はしめられき、富山の賣薬は其行商の仕方薬品を信用取引になしぬされば每年一年を期して、を賣掛けおき、明くる年に至り、其使用せし分の代金を取集むる方法なりき、其行商先なる華主の家名を記載したる取引帳は、一の不動産の如く見做され

師走十題



水鳥や波を枕に幾夜寢む

金錢貸借上の抵當に充て、又は賣買讓與し得ること、土地家屋と毫も異ならざるなり、其後は富山のみならず、本藩（金澤）の領地なる高岡、滑川、水橋わたりよりも、賣藥を行商するものいでしとぞ、かくて大政維新となりしかど、營業上著しき異動なく、只管行商先を廣むることに盡力し、これまで行商せざる山間僻地に入るもの、續々增加せり、されども、營業者の增加するのみにして、製藥改良の道を講ずるものなかりき、こゝに於て明治八年、新川縣權令山田秀典大に賣藥の前途を憂へ、賣藥者の總代を縣廳に召喚して、賣藥の改良すべきことを諭し併て協同結社をすゝめしかば、舊弊になづみし賣藥者も、漸く迷夢をさまし、同じき九年三月、始めて一の賣藥會社を起し、名づけて廣貫堂といふ、市中の重なる營業者之に加盟し、協同一致賣藥の振起を圖ることゝなれり、然るに其後政府は、同じき十年一月賣藥規則を發布し、次で賣藥結社廢止の旨を達せらる、既に設立せし廣貫堂も、この規則にふるゝをもて、更に同業者中相謀り、當時同業者中に聲望ありし、邨澤盛哉を推して、廣貫堂主となして、依然其業に從事せり、其後廣貫堂の組織にならひて、盛貫堂、振聲堂、精壽堂、弘明堂、師天堂など云ふもの起れり、皆其實は合資會社なり、同じき十五年十月、太政官布告第五十一號を以て、賣藥印紙稅規則を發布せらる、この布告は、富山の如き、賣藥をもて生活する土地にとりては、一大打擊を受しものにて、其恐慌いはん方なかりき、印紙稅發布の當時は、各地へ輸出せし製藥價格六百七十二萬圓、行商人九千七百人なりしも、明くる十六年に至り、俄然製藥價格八十五萬圓、行商人六千人に減じ、又十七年に至り、製藥價格六十五萬圓、行商人五千五百人に減し、賣藥の衰頹其極に達せり、されど賣藥業者中より屢々大藏省に嘆願せしもの少からざりしが、つひに同じき十九年、七月大藏省令第二十三號をもて賣藥印紙交換規則を發布し、ついに十月賣藥需要者に於て、無印紙の賣藥を買受け、讓受け、又は所

持することを得ざることに規定せられたり、これ等の省令によりて、賣藥者の苦痛を幾分か減じたると經濟社會の膨脹とによりて、賣藥の需要を增加し、近年漸く百五十萬圓の金額に達せり

田舍の生活

文學士　伊藤南陽

『翁さびみやまがくれにいほりして、いもにくまするさとのゆふ酒』斯る人の心こそ、いともゆかしけれ、刈穗の稻の貯へは多からねど、一年を支ふるには足りなん、柴の戶はゆがみがちなれど、露をしのぐよすがとはなりぬべし、

鷄の一聲鳴き渡れば、東の空少し明りて春の日もやう〳〵さしいつめり、媼、かひ〴〵しく立ち働けば翁もやがて起きいつらむ、翁の笠傾けて出で行くを、媼は、後方より、今日は早く歸りませ、さかな夥多調へ置くべきにとて、見送る、をちこちの田の面は、目も遙に見渡さるゝに、男女のおのがたゞいそしみいたつく、いとにぎやかなり、遠くそほどの如くに見ゆるは、鍬によれる人なるべし、

近く伏猪と疑はるゝは、屈みて草ひく少女なりけり翁はひねもす立ちくたびれて、くろのほとりに、煙草薰らしつゝ、ほゝゑみゐたり、そのおもては、春風に波立つ千草よりも豐げなり、去年の大雪は、里の子に寶得させたり、あなたふとなとて獨りごてりやがて、思ひいづることやあるらむ、すげ笠引よせつゝ、つふやけり、長き日も早暮れむとすらむ、ばいがいかに待ちわぶらむ、いざとて立ち上りつゝ、小川の水音、野邊のすみれ、翁も目をとゞむる樣なり斯くて橋を渡り、あせをよぢて、やう〳〵門邊にたどりつきたるは、たそがれすぐる頃なりけり、媼はまめ〳〵しく、たらひ持ち出でたり、太く待ちわびつゝ酒溫むべきに、早く、すゝぎ賜へとて、忙はしく釜にほださし添ふるさまなり、廿日あまりの月さ

しいでぬ、ひるまの汗の香ふきとるめり、花は殘りなく散りたれど、みづ〳〵しき靑葉は、白玉こぼるゝばかりなり、翁は足をうちほどきつゝ、しはぶきせり、あはれ、この月よ、あはれ、この流れよ、ちゝが心を慰むること、いく年にか及べる、あはれ、塵の世の糸竹も、柴の戸の細き煙には及ばざりけりとて、媼を見やる樣、心ありげなり、げに、廿年あまりの昔思へば、夢のやうなりけり、うつゝともなき浮世の醉と、この山里の醉とは、痛くかはれるかなとて、媼は杯あぐるさまなり、如何ばかり樂しかるらん

道づれ

石榑千亦

山路おり盡きて、坂路なから、やゝ緩くなりたる川添をなづみ來れば、路二つに分れつ、右すべきか、左すべきかなどたゆたひしが、右の方廣ければとてそなた樣に物す、

左の道は岸の上になりぬ、その道ゆく人あり、道をきけば、

「そつちでもいけるが遠いだ、こつちの方が」

といふに、丈高き草の中を這ひのぼりて、その人におびしく、線路をこえ、崖を下だる、危さ限りなしこの男あやしき奴にて、われらを道なき道に誘はんとにやなど危ぶむ内に、橋の上に出づ

「そらね、あの道を來れば、こゝへ出て來るのだ
私共が此先の光の點いとる邊へ行く時分に丁度
旦那方は此處へ出て來る位だ」

危ぶみの思のとくると共に、近かりしを心の中に喜びつゝ隨ふ、談話もおもしろくなりぬ、

「わしらの村は、これで二十五軒ばかりだかね、新道は出來る、滊車がひらける、方なしでさあ、これが滊車が開ける前には、もう新道の爲に、皆もう覺悟して、百姓になるつもりで、木は植る、機

は織るといふ鹽梅しきになつて居つた處へ、鐵道の工事が出來て三百と五百の金にありつかねえものはなしさ、斯な鹽梅なら心配するにやあ當らねえと、そいつをみんな引かゝへて、夜が夜中でも二里半の道を八王子へ突つ走つて、まるで烟のやうにして歸つて來る、人つ子一人通らなくなつてまうけは一文だつてなし、否應なしに往生して仕まひましたのさ、

彼は流るゝ水のやうに話して、なほ飽かじとやうにつゞけいふなり

「今の若い衆は、皆しまつだ〳〵といふが、なにしまつじやない、金子がないんでさあ、景氣でもよけりや、すぐずぼらになつてしまうんでさあ」

人生を語りつくしたりとやうに、慨、意氣の昂れるものあるなり、

谷川をへだてゝ、美くしく生ひ上れる杉の山の、いづこなるらむ、幽けき聲のきこゆるに、

「ねえ君、鹿が鳴くじやあないか」

二人が語り合へば、愚やといはぬばかりに、

「なに狸でさあ、わしらが血氣盛になつてからは、鹿はもう居なくなつてしまつたゞ、己は是で三十五、親父は七十二でがすがね、親父の若え時分には、猪は愚か、狼でもよく出たといふ事でがさ、何しろあの上りが二十六丁、向の下りが二十八丁ですから、元はゐたでせうよ、が、今時分はもう狸に兎でがすねえ、その狸でも、皮一枚が四圓もするだから、二十圓も二十五圓も出して、犬を買つてさ、農業が隙になるだと、搜し歩いて取れるだけ、捕つてしまうんでがさあ」

面白き咄きく間に、彼がゆくべき小名木といふ里につきぬ、懇に數へられつる道を辿り來れば、道はいよ〳〵大きくなりて、燈火やゝ多くなりぬ、見おぼえある橋、見おぼえある樹、その家、その川、いつのまにか、淺川につきて、昨日の道を歩みゐしなりけり

七時二分出の汽車に乘る、

天地は狹きりの中につゝまれて
　神代おぼゆるやまのうへかな
なみ立てる神代の杉の影くらき
　一すぢみちを暮れてわか行く
夕霧におほはれはてし杉やまの
　いづこなるらむむしな頻鳴く
杉の森すこしわかるくたに水の
　まかれるところ石ほとけ立つ
道づれと成にし人をかつをそれ
　かつたのみつゝ深山路くだる
人にわかれ山にわかれてくらかりの
　小さき路を捜り〳〵來る
友をたのみ友に賴まれて杉くらき
　草ふけみちを暮てぞ我來し
滊車にのりて越し山道をかへり見れば
　かつ恐しきかつ懷しき
共にみし山のみとり畫川の歌
　さだめあひする滊車のうちかな
手折來しもみぢの色のあせぬまを
　摺りて染おかむ日記の間に

扇といふもの

從七位　小川直子

扇といふものを見るに、其形たるや、みやびかになつかしう、優美なる器にして、古より末廣と稱へ、かはほりと呼びなして、女男もろともに明暮手にならしつゝめであへるならひなれば、祝日といへば、冠の着初、あるは、婚禮の儀式などには、かならず贈り物ともしけるなり、また常には、扇合せよ、何くれと智惠くらべの樂しみを盡し、手にとりかざすにも、其手つきのよしあしをあげつらひて、扇をかざし給へる手つき、女にてあらまほし、又は扇さしかくしてなどもありて、いとも〳〵めであへるは、如何なる故にかとつく〳〵考ふるに、實に此扇こそ五

常の道に叶へりともいひつべけれ、如何にと云ふにある人のいへる事あり其詞にいひけらく、

「扇なるかな〳〵、炎暑には涼風を出し、嚴寒には火熱を助け、朝には神拜をとゝのへ、ゆふべには燈の虫をしりぞけ、しかのみならず、出ては頭上の日影をおほひ、入つては袴のひたを正し、物さしに代りて長短をはかり、箒にかはりて塵を拂ふ、晝は蠅夜は蚊、ある時は舞の手ぶり、人を助くる業にのみ骨を折るといへども、みづから其功に誇らず、一毫のわたくしなきは仁と云ふとも可ならむ、然して要を守る事堅く、逆まに開かんとするときは、身をやぶれども順はざるは義なり、裏表に折目正しく、大小の骨其位置を亂さゞるの禮あり、おのづから此の理を知り、是をつとめて怠らず、是れ即ち智なり、信なり、無心なりといへども扇にして扇にあらざる扇なし、人にして人にあらざる人、何を以て世にたゝむ、嗚呼扇なるかな〳〵、ある人の歌に、

裏おもてなければ人にあふかれて
ときにあふぎの風ぞすゞしき

かゝればこそ古へよりめであふかるゝも理なめれ、されば人にして五常の道を守らざる者は、このさゝやかなる器にすら劣るといふとも可なるべし、あはれ今の世を見渡すに、仁義の道を重しとせず、只才智のみを好める人多ければ、中に表裏の違ひ驚くばかりの人なきにしもあらずかし、歎かはしといふとも言の葉たるまじうこそ、あはれ願くは、世の君たちよ、萬の物を見るにつけても、心を深くとゝめつゝ、其物のよき所をとりて、おのれを磨く龜鑑とし給へよと、思ふがまに〳〵いひつゞくるは、例の老人のさかなりければ、くりかへし〳〵いつもなから道ある方へ導かんと、いさゝか筆をとれるなりけり

雪中の吟

折栄園

釜の湯に聲をゆづりて降積る
雪にたえたる軒のまつ風

鶯は知るやしらずや我宿の
雪の下なるうめのはつ花

椎の木

大塚楠緒子

西片町の椎の木といへば、車夫知り子供知り、按摩も猶そをあてにて杖にて能くつゝき迷ふことあらじ蔓る木蔭は十數坪にわたりて、春は幾つとなく、乳母車此下に集へば、ちよろ〳〵あるきの赤きちやん〳〵の孃樣、石つぶて打ついたづら盛りの坊ちやまたち、おもりする子守乳母らの、さながらの會議どころ、そこの旦那樣此處の奥樣の噂いでゝ、さぞな椎の木のしひてもゆきゝの人の耳にや入らむとすらむ、夏はまたかならず氷屋の荷をおろすあれば、風をいれ涼を買ふ薪屋の手代小間物やの小僧、お店に番頭のめつまぬすむかはりに此處にらく〳〵と晝寢の夢をむさぼるものさへあり　秋になりて椎の實やうやうみのり、砂利の上に一つ二つ落ちはじむれば人あらそひて拾ふ、四つになる我子もしひのみ〳〵と乳母を責めては、こぶしに五つばかりも握り來ては火鉢にくぶるを樂しみにはせし、さてもその冬の風情よ、さしも常磐木の、時雨木枯にちとも動せず枝もたわめず葉もゆるがさず、靜かに積る白雪に靜かに姿をつゝむ樣は、あだかもとこしへに眠るが如く、とこしへに思ふが如く、天にや親しむ地にや語る、あゝわれ此處にもひとつの謎をこそ見出だせ。

見合ひ

秋香女史

數ふれば、今年もやがて呉竹の、只ふしの間と成りぬるにつけて、思ひよりし事侍れば、貴き賤しきおしなべて、女の友とちにつげまゐらす、ゑにし定めの事にてなん、此事は、いつといふけぢめもあらねど、わきて年の暮ゆく頃は、此處彼處にしげく見聞くは、何事も年の内にといそがるゝ世の人のこゝろ

なんめり、此事によりて、見合ひてふ事の行はるゝは、いとたのもしげなきことゝ思へるは、わらはのみならず種々の論ひはかねて知らるゝ事にしあれば殊更に申さず、さはとて、外國ぶりに、我からもとめんもうしろめたく、あたらをとめにあらぬ浮名立られんも口惜き業なり兎にも角にも、皇國ぶりに、親に從ひて行末の事はからるゝは、いとよき事と思へど、我心にかなはぬ事も得いはずして、思はぬ方に嫁ぎなばいかに、悲しく怨しきことやあらん、又思ふこと云ひいでゝも、親の強てゆるされぬは、酷きかぎりなり、されば、親は子の心となり、子は親の心となりて、何事もかたらひ合ひてこそ、長くたのしきゐにしの糸を結びとめ給はめ、わらはが見合ひてふ事もよしと思ひとりしは、此頃さる人の愛娘にて、貞操はさらなり、よみかき裁縫を始め、茶よ花よといそしみ學べる中に、糸竹の道さへをさなからねば、親はいと〳〵めでゝ、二十歳あまり二つ三つになれるも、猶ひめ置きしが、人々のとくよめらせよとゞゝむるに、親も今はと思ひ定めしに、頓に好聟がね有りと聞て、母君はいたく喜びて、吉辰撰びて見せまゐらせんといひやりつゝ、一日を千代と待わびしが、やがてその日となりしかば、八聲の鷄のうたふもまたで起出でつゝ、恥らひ居る娘をゝさな子のやうにすかしこしらへて、けふを晴とよそほひたてして待程もなう、聟君はおはしぬ、出むかへたる人の、いとうるはしなど私語きあふを洩聞し母は、嬉しさおもてにあらはれ、嫁君は頰に紅葉を散らしぬ、やがて形の如くゐやなどはてゝ、しばしおしならべるを見しに、聟君はまことに玉をのべたらんごと、光君の昔もかくやとしのばるゝに、今まで花とめで見し嫁君は、色香もうせて見るべくもあらねば、母君はひたと胸ふさがりて、堪えずやありけん、かなたにまかでしかば、聟君もつと立て歸りたまひぬ、媒人せし人も、斯くまで見をとりせんとは思はざりしにや、心もとなげに明日をちぎりてかへりぬ、嫁君は、露をふくみて打萎れたるさまあはれ

なれば、母君はなぐさめつゝ、そらだのめせし甲斐もなう、明日をもまたで火ともし頃に御文まゐれりと云ふに、先驚かれて、取る手おそしと披見れば、

なつかしきいろともなしに何にこの
末摘む花を袖にふれけん

と一首の古歌に、ゑにしの糸は絶えはてぬ、思ひきや、世は斯くも強面きものか、見合ひは斯くもたのみなきものか、嫁君とて見にくしと云ふにはあらずまして心も技藝も勝れたるを知らで、只一目に捨てんとは、と思ひしが、思ひかへせば、見合ひはよき事なり、捨てられしは、此嫁君の幸なり、男子として、一夜の春をもとむるうかれ女はしらず、百とせを契る妻をゑらばんに、只容貌の麗しきをのみ愛づるとならば、心はいかにきたなきも迎へとらん、よしや、心も清くありとも、いつまで花のちらでやはある、かゝる時は、たゞちに捨てられん、人も我も光君よと思ひあがれる男子も、こゝろはきたなし、假初にも、かゝる浮たる人に身をよせなば、いかにくやしき世にやあはん、いまゆ後見合したまはんとならば、先づ互に技藝を試みて後、其人品も見たまへ、みめよりこゝろといふ事もあれど、後の悔なきやうゑらびさだめたまへ、いさゝか心にそまぬふしありとも、技藝によりてゆかしう見ゆる事も侍ればおのづからたのしき中にもなりなん、男女のけじめありとも、心のまさりをとりはあらじ、かしこき事ながら、上津世は、皇女も御位に即せ給ふにあらずや、されば、いたづらに男子になもてあそばれたまひそ、男にのみ見られず、女も男をためし見たまへ、さはいへ、嫁ぎて後は、良人に勝れんとはゆめな思ひたまひそ、萬良人の心にしたがひて、家を治め、妻たる道をつくし給へと、暮ゆく年のいとなみもさしおきて、一筆さゝぐるになむ、かしこ。

筆をさめ

おなじ思ひに来ん年を　甲斐なき身にて頼てし
ことしもけふを筆納め　春を待身となりにけり

秋の歌

多田令子

雛菊

蜻蛉とぶ鄙の伏屋のやれ垣に盛久しき菊のはなさく

擣衣

吹風も身にしむ秋の夜もすがら賤が伏屋に砧うつ也

柿

山鴉来鳴しぐれの朝庭にたまなり柿の實は紅らみぬ

初紅葉

神のます森の紅葉しぐれふり薄紅の色に出にけり

暮秋

生しげる野への八千草枯果てさすがに惜き秋の暮哉

東郷大將凱旋祝歌

東久世通禧

○

軍いくさかちにし君の都入り
出てゝむかへぬ人はあらしな

佐々木高行

○

いさをにも誇らぬ君はもの丶ふの
八十氏人のかゝみなりけり

蜂須賀茂韶

○

海遠く名はかゞやきぬ仇なみを
はらひつくしゝみいくさの君

渡邊千秋

○

三笠山たかきいさをゝ世にたてし
君こそ人のかゞみなりけれ

鍋島直大

○

千よろづの老も若きもいさみたちて
君をむかへぬ人なかりけり

鍋島榮子

○

ほまれある君をむかへてよろづ代と
歌ひかはせりひなもみやこも

千家尊福

○

仇の船うちほろぼしゝいさをしは

うみの外にもたぐひやはある
○　千家俊子
海のそとの人の心もうちませて
世になみならぬ君がいさをや
○　長岡護美
かちどきの聲はどよめどわた浪を
君がくだきしうみぞしづけき
○　下田歌子
たかなみの高くひゞきぬ日の本の
海にあふるゝ君がいさをは
○　毛利安子
仇の船うちくだきつるいさをしは
浪よりたかく世にたゝへけり
○　松平幾子
海の仇はみなしつめつゝ錦きて
歸りし君ぞうれしかりける
○　松平健子
萬代の聲ふりあげてむかへけり
海よりひろき君がいさをゝ
○　宮地厳夫
たぐひなき國のほまれを身一つに
あつめて歸る君にもあるかな
○　阪正臣
鬼神とあたには見えてみどり兒も
したひよるべくなつかしき君
○　原六郎
天の下なりとゞろきぬきみが今日
荷ひてかへるたかきほまれは
○　井上頼圀
眞心をつくすきみをばあめつちの
神もいかでかたすけさらめや
○　丸山正彦
和田の原いくさの跡をたどりきて
つくづくしりぬ君のかみわざ
○　小出粲
千早振かみもいさをやゆづりけん

風よりも疾ききみがしわざに

○　　中邨秋香

天地をうごかすきみがまごゝろは
やかて世をゆる名となりにけり

○　　鎌田正夫

羨やむは常のときなりこのたびの
きみがいさをばたゞ仰ぐのみ

○　　大口鯛二

天つ神きみをみくにゝさづけゝん
亞細亞の海のおもておこしに

○　　千葉胤明

世の爲に千代もいませと祈るのみ
いくさかみともあふかるゝ君

○　　木村正辭

仇の船しづめつくしゝそのときの
君がこゝろをなにゝたとへん

○　　物集高見

和田の原さきたつ浪のたかく／＼に
たてしいさをはよろづよ迄に

○　　鍋島禎子

ためしなき君かいさをゝとつ國の
人までいはふ今日のうれしさ

○　　鍋島信子

ものゝふに生れしものは譽れある
君がいさをのあとやしたはん

○　　中山幸子

日の本のひかりは君がいさをしに
とつくにまでもかゝやきにけり

○　　三輪田眞佐子

英吉利にネルソンありきわが國に
君いましてこそ立ち並ぶなれ

○　　跡見花蹊

潮さゐのおほわだ波をうちかへし
君はかへれりうらやすのくに

行なやむ人の世しらず雪見舟　　折柴園



眼の衛生

眼科醫　増野豊

身體のわるいといふ事に、何處を所望する人もあるまい、齒の痛い時には、齒のわるいほどつらいものはないと云ふであらう、又眼のわるい時は、眼のわるいほどつらいものはないと思ふに違ひない、これは誰しもある人情で、またさうあるべき筈である、人間は身體の思ふやうに働かれてこそ、愉快を感ずるので、その愉快を妨げるのであるから、こゝさへ惡くなくばと思ふは當然の事である、

就中眼のわるいなどは、愉快を妨げる位なことではない、實に不自由この上もないことである、されば注意して眼のわるくならないやうにせねばならぬのであるから兎角わるくなつて、火でも付いたやうに騒ぐ方が多い、

この頃のやうに寒さが骨にでも泌みるかと思ふ日があるかと思へば、すぐ頭痛がするやうに暖かい日がある、かういふ時に眼とか齒とか云ふものはわるくもなるのである、

眼病中最も恐るべきものは、誰も知るトラホームである、トラホームなどゝ云ふと、昨今舶來したやうに聞えるが、日本にも昔からある眼病で、たゞ「や

に眼」とか「のぼせ眼」、又は「血眼」「たゞれ眼」など、云ふたものである、これは衛生の不行屆の國に多いので、各國トラホーム患者の統計は、直に其國々の衛生の完備不完備を示したものと見て差支ないのである、

殊に歴史上に於ても、埃及の或戰爭の時の如きは、此患者の多數なりしが爲に、一時干戈を收めたといふ事さへある、それは衛生不完全の場合に、猛烈なる勢を以て、トラホーム軍に襲はれては、如何とも手の付けやうのなき程蔓延するからである、

右の如き場合、即ち衛生も何も顧る暇のない戰時中でなくとも、衛生の極めて不完全なる寒村僻地にこのトラホームに浸入された時は、醫師の不充分なる所から手を束ねて其蔓延を見て居る外はない、實に悲慘なる出來事を呈するのである、

この患者は衛生の不完全なる所、殊に海岸に多いのである、一刻も早く此患者の數を減ずる策を講ぜねば、國家に取つても不利益なる事は、その個人々々の職業を中止するばかりでなく、遠大なる志を抱いて、海外に遊學せんとする人の中にも、トラホームの爲に、其目的を達し得ぬもの、容易に數へ盡せぬ位である、隨つて國力の發達に少からぬ影響を及ぼして來るは云ふまでもなき事である、

然らば何が故にトラホームを、多くの人が恐るゝかと云へば、一度トラホームに見舞はれたれば、一生根治することが出來ぬ、即ち不治の病であると思ふからである、

トラホームは果して不治の病であるか、決して不治の病といふ事はないが、不治の病になつてから騒ぎ出すからである、この病に罹つた初期に於て、適當の療法を用ひさへすれば決して根治せぬといふことはない、併しその初期、二三年の間は、自分が果してトラホームに罹つて居ぬか、分らぬから、知らず識らず不治の域にまで進むのである、

其初期に於て、物を見るに障害があるからで明確と分らぬとか、無闇に脂が出るとか、少し眼に申分が

出來る、かゝる時大に注意すると、それがトラホームになるか、それほどのものにならぬかゞ分つて、後に不治と聞いて驚くといふこともないのである、先づその位な所では、精綺水位を買うて、一時を間に合はして、恰も障子の切貼でもするやうに思ふて居る、それが油斷の初めとなつて、チラホラと眼に星が出はじめる、視力を害する、それから醫師の處へ馳付ける、まだそれからでも療治さへすれば、强ち不治ともきまらぬ、否決して不治といふてはないのであるが、それを根治する迄には、なか〳〵半月や一月では行かぬ、そこで患者の方に飽が來て、まア少しよいやうであるからと云ふので、一時眼の養生を怠る、すぐに捻が戻つて來る、又養生にかゝる殆んど眼が侮辱されたやうなもので、遂に一生涯眼に不自由せねばならぬことになる、そこで學校などでは、學校醫の設があるので、時々身體檢査をする、トラホームの如きも、初期に於て發見せらるゝから不治の病などゝ云ふ如き大袈裟なものにならずに終ふのである、されば目に申分のある時は、これ位はよからうなど、すましては居られぬ、すぐにそれ相當に治療の道を講ぜねばならぬ、決して精綺水をつけてはよくないの、何を用ひてよくないのといふことはないが、病を侮つてはよくない、遂には取返しのつかぬ事になるから、

それから此のトラホームは、前にも云ふ如く非常に大なる速力を以て傳染するものであるから、トラホーム患者の目脂を貰ひ受けぬやうに注意する如きは素より、多數の人の集る場所には、この患者のないとも限らぬ、まづ有るものと見て、銅盥又は手拭等にも注意して滅多に停車場であるとか、其他の場所で、其傳染の媒介者となるべき多くの人の手の觸るゝものに我手を觸れ、いつの間にかその手が我眼に觸れて、トラホームになるといふ如きことのないやうにせねばならぬ、であるから公衆の場所に於ける手水鉢の如きは、足で蹈んで水の出る仕掛にしたいとさへ思うて居る（文責在記者）

裁縫の沿革

東京裁縫學校教師　芳菫女史

裁とは全を斷ち、縫とは片を合するの意である、されば裁縫とは、ある材料を裁斷りて、縫合せ、衣服をかたちづくる義である、さて其衣服の形式模様は時代により、種々の變遷を經來つたので、今簡單に其沿革を述べ様と思ふ、人の世に生るゝや、衣服あるを以てこゞえず、食物あるを以て飢えず、住家あるを以て風雨に犯されず皆是れによつて存命するものである。されば時の古今と國の東西とを論せず、又風俗の野蠻と文明とを問はず、かりそめにも人類の生息する所では衣食住の三つより大切なるものはない、されど其中にても衣服は第一に位して居るものである、支那にては遠き人皇氏の御代より、木の葉を綴り合せて被服の形をつくりて着ることを始めたと云ふことである、我邦に

師走十題（其四）



月遠く狐鳴く夜の寒さ哉

ては太古の有様は茫邈として攷ふべからざるものであるが、往古一般の人民は土居致して、男子は稼穡をはげみ、女子は衣服を製したることは明らかである、

其衣服は木皮又は草莖の纖維あるを求め、之を糸に績いて造つたものである、又物を染ることも、はやく此時代より發明せられたのであつた、それは又天照皇大神が天の窟にかくれ給へるときに、倭文布を織ることがあるのを見ても分る、蓋し織りたる後草汁に浸して染めたのである、色は白色を最も上等として、赤色これにつぎ、青色、黑色などもあつた、獸皮は貴人より下民にいたるまで、衣服には用ひたることなく、僅かに敷物や足袋等に用ひたようである、

茲に一つの注意すべき事は絹布である、それは上古と後の代との異る點である、それは後代は蠶の繭より糸を得て之を織るが、古代にては未だ繭を煮ることを知らざりしが故に、之を口中に含みて糸を引出しましたのである、從つて其糸には太きもあり、細きもありて不同甚しく、良き糸を得ること頗る困難であつた、故に人民は繭糸を用ゐるを不便として、麻を用ひることになつたのである、即ち日本紀の神代の卷にひきたる五穀及繭の始めて成れるの條に「蠶をふくみ便ち糸を抽くを得、これより始めて養蠶の道を得たり」とある、右の如く口中の暖をとりて、糸をひくものなれば、其遲々として不便の程が考へられる、又其糸も粗末であつたから、人々多く木綿を愛して、絹布を賤しむ程に至つたのは後人の想像と甚だ異つて居る所であらうと考へる、

神功皇后征韓の一擧は、實に我國古代の文明に至大なる影響をあたへられ、これより三韓との交通漸くしげくなり、次のみかど應神天皇の御世に、阿知の使主、及び都加の使主を呉の國に遣して、織縫の工女を需められ、遂に織工女の綾織 呉織と、職工女の兄媛弟媛の四工女を得て筑紫にかへつて來た際應神天皇は崩御し給ひたるを以て、四工女を仁德天

皇に献上いたしたることは、史上に見えてをります此時代より本邦の被服制度と云ふものが始まり、追〳〵と風俗が變つたのである、其頃の歌に斯ういふのがある、

織姫の教へ始めし唐衣
裁つたびことによろこびぞます

そして三韓と交通以前は我國にては、腰部より上は筒袖の衣物を着、腰部より下は男と女とは其品は異つて居つたが、男は股引の樣な太きものをはき、女は袴の如きものをつけて居たが、それは現今の歐米人の服裝に似よつたものであらうと思ふ、其時分に其筒袖のごときをさして小袖といふたのである、近頃着用する絹布の綿入衣服を小袖といふ樣に成つたのは、足利時代から始つたのである、又裃羽織等も足利三代將軍義滿の頃より、始めて用ひたものであつて、裃の元は素長袴でありましたのを、內野某といふ人が上は大紋の袖をとり、下は長袴の裾を切つて、裃と云ふ名をつけ、武家の禮服に用ゐる樣になつたので、其元を尋ねると中々わる、それ等の事を一々書くことにすれば、なか〳〵一朝一夕には盡きぬから、それは他日に讓ることにせう、

食卓に對する西洋作法

竹街山人

◎饗應に招れた時　時刻を違へてはならぬ、若し遲刻でもすれば、それは先方の主人、及び他の客には勿論、饗應そのものに對しても失禮なことである

◎自家の食事の時　にも、時刻は遲くならぬやうにせねばならぬ、何故といへば、若し遲くなれば、家庭の面白味を減ずることになり、延いて家內の調和を缺ぐことになる、

◎男子　は婦人の席が定まつてから、椅子についてもよろしいと云ふ主人の相圖がある迄は、食卓に

就くものではない、又自分の友人を紹介しようと思へば、席上の人々が椅子につかないうちにするものである、

◎椅子についた時　食卓の外へ足を出して、腰をかけたり、足を組合つて食卓を押し上げたりすることは、最も無作法のことである

◎拭布　は之を腮の下に押し込んだり、胸全體に擴げたり、又は裾の方迄さげたりしないでも、膝の上に垂して置けば、それでよいのです、

◎食物の盛つてある皿　は之を席上の婦人全體に配つて後、初めて男へ分つものとしてある、

◎スープを飲む　に匙の端に口を就けて吸はずに其横側から飲む者である、又とく〳〵と音をさせて飲むだり、カチ〳〵と皿の響をさせるは極下卑である、又スープのおかはりなどは謹む方がよろしい、

◎食物を口に運ぶ時　一々頸を伸し、皿の上へのしかゝるは見苦しいことである、成るべく姿勢を正しくせねばならぬ、然しそり身になるには及ばぬ、

◎麵麭　は端から咬ないで、整然と割つて食する方が少々見よい様である、又スープの中へ麵麭を浸して食するもよくないことである、

◎庖丁　を肉刺に代用して、口へ食物を運ぶは至極無作法のことである、之は相當に教育のある西洋人が、動もするとやることであるが、決して眞似してよいことではない、

◎ナイフやフオーク　を使用するには、緩く握つて器用に取扱へばよいのである、此使用法は、實際に當れば直に了解することができる、只懐劍の柄でも握る樣なつもりでなければよいのである、

◎食物　を大急で口に詰込んだり、眼を白黑さして食うは見苦しいことであるから、徐々と靜穩な態度で食べるがよい、又口一杯に詰込んで頰を脹らし咬む時に音をさせるのは謹むべきことである、充分に時間をかけて食する方がよろしい、

◎皿に盛つて出された肉　を切る時、肘を張らず體の横につけて姿勢よく器具を使用するがよい、

◎酒或は水を飲む時、鼻の上で『コップ』の倒立をさせる樣なまねをしないで少ばかり傾けて上品に飲むべきである、

◎匙を以て野菜物を食する事は許さぬ、肉刺で食事する事の出來るものには、匙を用ひてはならぬと云ふ定めである、

◎皿を舐めた樣にスープを飲みつくしたり、麵麭の斷片まで食盡すは、上品のこゝとしてはない、

◎何か卓上の品物を取らんとて、他の人の皿の上まで手を伸す事は大に失禮である、

◎御代りを望む時は庖丁と肉刺を皿の上へ置かない規定である、

◎魚の骨其他口から出して棄なければならぬものは、皿の上へ吐出さずに、肉刺を口迄持て行き、其上に載せて、然る後皿の上に置くべきである、

◎卓上の器具が必要の時、給仕人が側に居るに隣席の御客を煩はしてはならぬ、

◎指を以て拭布を捻つたり、食卓を擦つたり、肉刺、其他の器具を翫んだりする事はよくない、

◎拭布を以て顏或は髯なぞを拭はずに、唯上品に唇の邊を横にさすればそれでよいのである、

◎或る一人と話をせんとて、他のものに脊を向けるは失禮である、次に座を占めて居る人を差置いて、其次の人と話をするも失禮である、

◎男子は隣席の婦人が知己であらうと否とに關らず、其婦人に失禮のない樣に注意するのが最も必要の事としてある、

◎口に食物を多分に含みながら、談話してはならぬ、小量づゝ食すれば健康にもよし、亦味も美かるべき故、常に口を一杯にしない方がよろしい、

◎席上に於ては、如何なる事があるとも、決して心を亂さずに、虚心平氣にして、何事も氣に止めざる樣にしなければならぬ、そは自尊と云ふことは他人より尊敬を受けることであるから、

◎庖丁又は肉刺を卓上から落さない樣に注意せねばならぬ、萬一過つて落した塲合には、狼狽ずに

豫備のものを、給仕人に頼むがよい、又他の客が失錯をした場合に、彼此嘴を入れないで、一向無頓着で居る方がよいのです、

◎昔羅馬人　は食卓に凭れかゝりしものであるが今文明になつて椅子に凭れたり、食卓に肘をついたりする事は許さない、

◎饗應に招かれた時　には洋葱大蒜を食するものではない、又食物に就いて面白からざる話をすることは望ましくない、

◎席上で小楊子　を使ふのはよろしくないことである、萬一己むを得ざる場合には、口に手をあて、使ふがよい、

◎主人として　客に食物を無理進めしない方がよい、此事は昔は客を待遇するに必要と認められたのであるが、無理進めして、客を困らせるはよくないことゝしてある、

此事に就て面白い話がある、或る紳士が米國へ旅行をした時、モリスと云ふ婦人の饗應に招かれ、其席に連る事になつた、先づ第一に茶を出されたからこれを飲むと、モー一杯〱と強ゆるに、否み難く終に十二杯飲み、大に閉口して居た、すると隣席の者が、其紳士の耳へ付けて、君茶はモー澤山なのでしよう、それなら匙を『コップ』の上へ横にして置きたまへ、其をなさらなければ、モリス婦人は何時までも茶を進めますよと注意した其紳士其通りを行ひ、やつと苦難を脱れたとのことであるが實に無理進めはよくない事である、

◎食事を終つた時　には、拭布を卓上に置くべきで、永く膝の上へ載せて置くものでない、

◎食事終つて後　婦人は食卓を離れ、他の室へ集るのである、婦人が室を出て行く間、男子は椅子を離れて立て居て、婦人が室を去つて後、若喫煙せんと欲せば、再び椅子に就てするのである、

◎野卑の行爲　をさけ、規定の禮式に従はんとて氣を揉むには及ばぬ、野卑の動作なき樣注意するのは勿論必要の事であるが、其有様を他人に見られた

ら、必ず笑はれることである、又失錯を揉消さうと氣を苛つのは、實に笑止の至りである、

◎饗應に預る時　主人夫婦に謝辭を陳ぶる事は無用にして、唯歸りがけに、自分の喜悦を陳ぶれば夫で充分である、

◎朝餐と雖　食卓につく時は、衣服を正しくするものである、婦人の朝の服装は質素を旨とし、清潔にして、雅なるをよいとしてある、頭髪を梳るは婦人の嗜であるから、怠けてはならぬ、又男子は朝着を着けて、朝餐の卓につくもので、決して寐卷の儘で居るものではない、又上衣をつけずに、食卓に連る人がある、これはよくないことである、

◎朝餐の席　には必ず拭布を備へて置く物である、拭布無にカフイー又は玉子に攻撃を始むる大膽者があるが、何うしてそんな事が出來やうか、不思議でなりません、必ず之を使用するがよい、

◎カフイーの茶碗　の載せてある皿は、丁度日本の御茶臺と同じであるから、決して他の事に用ゐてはならぬ、若し他の人が其皿に茶カフイー等を注いでも、其無作法をとがめずに知らぬ顔をして居る方がよろしい、

◎茶又カフイー　の茶碗の中へ匙を入れ置いては茶碗を覆す恐があるから、匙には手を觸れずに置くことがよい、

◎一切の麪麭　全體へ牛酪を塗るはよろしくない小さく割つてから、牛酪をつけるがよい、

◎玉子　はコップの中へ割らずに、殻から吸うて食するものです、

◎友人或は家内の者　と食卓を圍んで居る間は、新聞雜誌、手紙等を讀むものではない、

◎玉子或はカフイー　を滴らして、胸の邊を汚したり、襟に脂肪の跡をつけたりしない樣に注意をするがよい、斯樣なことは少々氣をつければ、麁相をせずにすむのである、紳士淑女とも云はるゝ人が、飯の時、衣服に汚染をつけて居るのは、實に見苦しく、見る目も氣の毒なことである、

◎食事中　席を離るゝことはよくない、

師走料理

中島春郊

雁と鴨

師走料理の材料となるもので、雁に鴨などは秀逸なものであり、舊慣上知己親戚間に多く贈答される品物であるから、いさゝかこの二つのものに就て知る所を述べやう、

青籠物で多く贈答されるこの二品は、隨つて多く料理される譯で、他へ招かれても、この二品には兎角出逢すことである、そこで此馳走に預る、相當の賞翫をせねばならぬ、賞翫するには、雁か鴨か位のことは、香でも分る丈の鼻を持つ方が便利である、味を知るは當然のことで、食して後椀中に殘つて膏を見ても、大略この鳥は何であつたか分る、要するに注意をすれば、鼻でも目でも、勿論口でも分ることである、

人によつて雁を差上るとか、鴨をさし上るとか、前口上があれば、それに仕て置けばよい譯であるが、何とも云はず、この鳥は不加減なれど差上げると來ては、その物が何であるか知つて居る方が都合がよい、又通を云ふには及ばぬが、雁を御馳走になつてこの鴨はでは、振舞をして呉れた人も氣のないもので、振舞はれた方でも氣が利かないことになる、そこで一寸鑑定法を記せば、雁の方

▽鼻　雁の種類もいろ〳〵あるが、一種の香を持つて、一度雁の香として覺えて置けば、すぐに雁だと首肯かるゝおほやけな香がある、そして血くさ味がない、

▽口　雁の味は、俗にいふ大あぢである、

▽目　むづかしいのは、目で鑑定することで、それは椀に殘つた膏でわかる、椀を傾けて膏玉の格構を見ると、粟粒位なのが行列して居る、雁の膏には楕圓なのがない、尤も未粒子位の所が上品な味を持つて居るのである、

又鴨の方にて、三官の感ずる所を記すれば

▽鼻　鴨は雁に比して、せゝこましい香がある、いさゝか血の香による所がある、これは鹽の香を含めるもので、全くの血の香とはいへない、併し或人の説には、雁より鴨の方が肉の血黑である所から、血の香であるといふ、兎に角に血くさ味のない雁とはすぐに臭分の出來る譯である、

▽口　いさゝか鹽の氣味がある、

▽目　前例により膏の鑑定から云へば、其粒が雁より細くて揃ひがよい、

小鴨と大鴨と比較すれば、前者がすべて優つて居る

師走の凱旋

これは椀のもので、其の品々は、雁の肉を鴻といふ意味には功の意に通はせ、松露を征露にして征露の功とつゝけ、勝栗の代用として燒栗をあしらい、芹を青味として、凱旋芹といふ意である、

豐年献瑞

これは向付にて、鮭の生ハラ、子の醬油漬にしたるものを、其醬油を拂うて、器の中へ程よく盛り、これを南天に見立て、芹の青味の所をザッと湯に通し五分ばかりに切り、これを松の葉に見立て、又極小なる卵を湯煮にして殼を去り、輪切にして、これにつけそへ、水仙の花に見立て、この三つのものへ三杯酢をかけ、その上へ玉子の白味を朧にして散布し雪のかゝれるさまに見せる、

武利勇士

これは造作もないもので、鰤を歩利として、輝かゝやくと云ふ意より、てり燒にし、柚を柚子といふ所より勇士に通はせ、セン打にしたるものを添ふ

節季候

これは生鮭の肉を拍子木の如くに切り、醬油を味醂にて旨く煮揚げ、これを二つ皿の中へ取り、柚を二つに切り、肉を去りて、笹の如くにしてザッと味よき汁に煮上げ、芹の油に通したるものにて、アミガサに通したる手掛の如くに、通したる兩端を結びて附添へる、

狐鮓

これは大晦日料理としてもよろし、慥に其角の句と思ふ、『此年も狐鮓はして仕舞けり』といふ處を見ても、大晦日の膳に面白からう、この料理は先づ蕪を大根おろしの如くになし、よく搾つて、いさゝか温飩粉と卵とを交せて胡麻の油にてあげ、又大根を骰の如くに斷ちて、酢にさらしたものをあしらひ、だし汁をかけて食するのである、

戰捷後の流行品

▽指環　世の進歩するに伴れて、流行も追々趣向を凝らし、總べて文明的瀟洒たる高尚のもの一般の嗜好に適し、曩日勢ひを得し平打槌目無地等は品位を卑うするの傾きあるより、目下貴婦人令嬢間には、專ら舶來式細輪の淡白なるもの賞翫され、形は霞形、菫形相生形等の透し、艶消彫流行を極む、此代價はルビー、サファヤーオーパアル、眞珠入等は九圓五十錢以上十八圓、ダイヤモンド、上等眞珠入等は二十五圓以上百四十圓、ルビー、サファヤー其他寶石三箇入十五圓以上二十三圓等なり、

▽帶留　目貫金物秋草其他花鳥山水の彫も、五六年以前の如く大なる濃厚なるものは、漸々影を収めて、光琳摸様透し彫、白金金交雁二羽、或は眞珠ダイヤモンド等の寶石入、唐草透し彫立、浪に水玉、紐は繻珍厚板、綴織、銀糸織込等にて十八圓以上卅五圓ダイヤモンド入五十五圓以上二百八十圓位迄

▽兼用　とは讀んで字の如く、指環、襟止、簪、帶留の四種に應用し得るものにて、形は雪輪、桔梗、一輪菊透及ダイヤ形等種々ありて、專ら貴婦人用に適せり、代價はルビー、トッパアス入二十八圓以上五十五圓ルビー、眞珠入四十五圓以上八十五圓、其他の寶石入五十五圓以上八百五十圓位まで、

▽襟止　は時節柄追々二枚重ねを着るに際し「ショール」止の必用は例年に變りなきも、意匠は慥に一歩を進めたるの感あり、寶石入十二圓五十錢以上三十五圓、彫刻十圓以上二十八圓まで

▽櫛笄　黒鼈甲臺金地芝山入蔦の細道蒔繪、金研出し松島の圖等大小及び峯の厚薄に依りて、其れそれ年齢を分つべし、代價は十二圓以上三十五圓まで、本鼈甲無地祝儀用は別段著しき變化なし、

▽簪　平打は金白金交花丸透彫、月に雁及七寶入蝶亂菊等にて、代價十二圓より廿八圓まで束髮用は蝶透し、ハート唐草透し十六圓より三十二圓迄、

欲彈いた反古などもあり張火桶
狆だいて浮世の師走ながめけり

剃刀の使ひ方

篠豊次郎

今日では、世の中が時計の針の如く、日々文明開化する、隨つて時間を惜むやうになり、この中に仕事をしやうといふのであるから、金も大切に思はねばならぬ、交際も廣くせねばならぬ、

人と交際をする、金が大切であるからといふて、顔の手入を怠り、時間が惜いからといふて、顔をぢゝむさくしてはならぬ、

馬士にも衣裳髪容、といふ諺の通り、是非とも世間へ出で交際をするには、イの一番に頭を奇麗にせねばならぬ、顔に薄をはやしても置けない、殊に西洋人は奇麗好で、剃刀を時によると、日に二度も顔にあてることがある、その西洋人と交際でもする塲合には、猶のこと髪容を繕うて、先の感じを惡しくせぬやうにせねばならぬ、

又西洋人は年をとると、猶これらの事に注意する、たゞさへぢゞむさいといはれる位であるから、年を老つてます／＼奇麗にする、我國ではこれまで一般に、年を老つて奇麗にでもすると、老人のくせにお洒落であるとか何とか云はれるので、つまらぬ所に遠慮をしたものであつたが、今日では人の氣風が餘程變つて來た、

男の若い方にして見ると、これまでモミアゲを短かくし髪を長目にし、それを奇麗になでつけてゞも居ると、尤もその人にもよる事であらうが、ハイカラ頭とかハイカラ風だとか云はれて居つた、それが今ではこのハイカラの方に勢力があるやうになつて來たのである、

髪の容は第二として、玆に話さうと思ふ顔のそり方であるが、この顔の方は、ハイカラとバンカラに拘らず、奇麗にするに異議を唱へるものはあるまい、さて毎日顔を奇麗にして、ぢゝむさき鬚を生へさせぬやうにしようと思へば、自分で剃刀がつかへねば

時間の上からも、經濟の上からも不都合である、さうするには、これまでの日本剃刀では都合がわるい西洋剃刀に限る、尤も價の上からいへば少し高いやうであるが、人間一生に精々一本か、二本買へばよいのであるから、大した、問題でもあるまい、

西洋人などは、毎朝自分で必ず剃る、丁度朝湯に行くやうに、剃刀をつかひ、夜會にでも行く時は、夕方にまた一あたりあたるといふ位である、殊に旅行などには自分で剃る事が出來るのであるから餘程便利である、但し毎日の事であるから、眉毛、耳の廻り、襟、耳や鼻の穴などは、剃らない、それは月に一度か二度髮を刈る時にしてもよい位である、

まづ冒頭はこの位にして、剃刀の使用法を記さう、

また冒頭になるが、馬鹿と鋏は使ひやうで切れるといふ譬の通りで、剃刀もそれと同じことである、併し西洋剃刀は素人に研ぐに樂であるからよい、樂なといふてたゞ無闇に研いでは、どんな上等の剃刀でも切味がわるくなるから、そこで剃刀の遣ひ方を記す前に、この革砥の使用法を話さう、

この革砥にもいろ〳〵種類があるが、その中でも二方ばねと云うて、柄の所がねぢになつて居る、これは柄のねぢでしめて、革砥のたるみをはらして使ふのが、一番よく切れるのである、

この革砥を使用するには、その砥面に、埃、砂、髮の毛などのつかぬやうにして置かねばならぬ、

使ひ方は、剃刀を右の親指の腹で、刄の方の手元をおさへ、指人指の先で、剃刀の胸の手もとを持ち、あとの三本の指は、ほんの剃刀の柄へかけて受けるだけのものである、

剃刀は革砥へあてたら、斜に柄の方を少し向ふの方へ出し、胸へ少々力の入る位にて、向ふの方へ押して行く、その押す時分には、刄先と胸と平に革砥へおちつけて、あてるやうにして研ぐ、剃刀が向ふへ行けは、刄先を上へ向けて、平に手元の方へ徐かに引いて來る、その引いてくる時は、親指の腹と指人指の先の腹で押へ、小指で拕をとり、柄の手元の方

へ斜に、前の如くにしてくる、これで大略順序が立つ、この働きで二十回も研げば、必ず切れるものである、

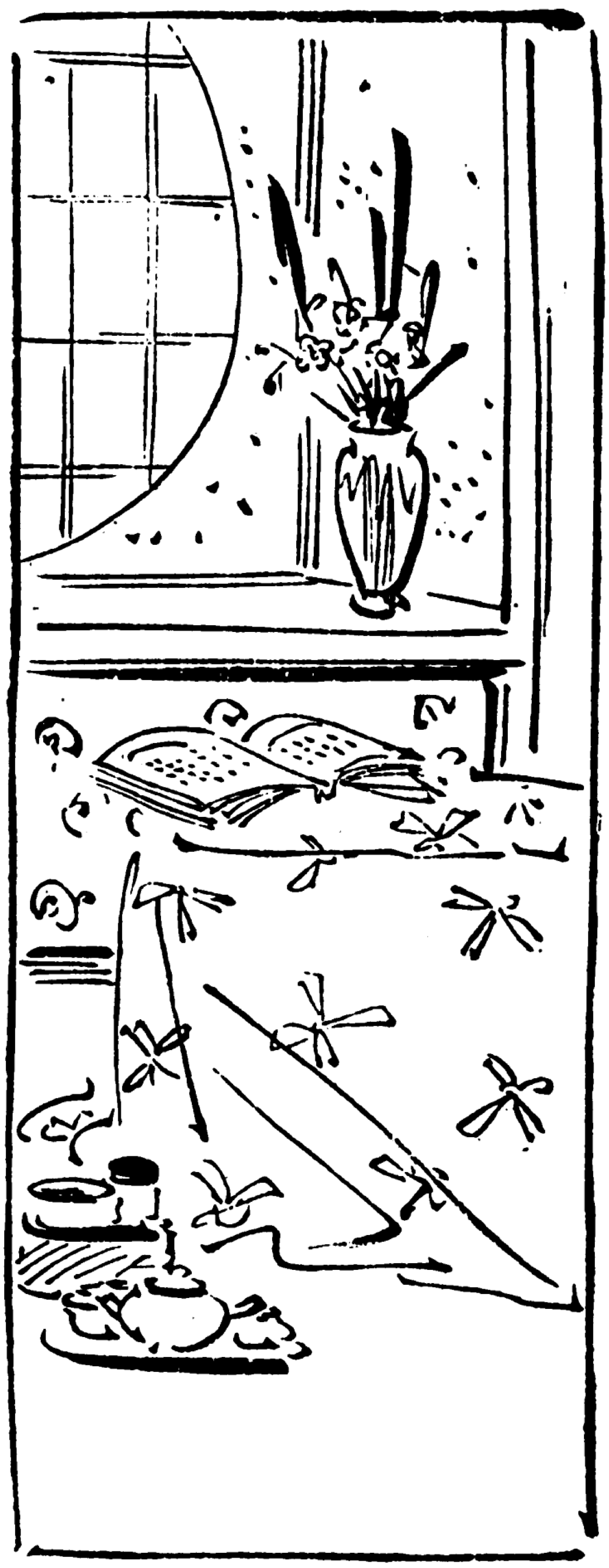
革砥で研ぐ前に、ヅックで拵へた、はた砥といふものがある

これはなかく〜むつかしいもので、この代用をするには、極燥い湯へ三四分間入れて置いて、よく拭いて革砥へかけてもよい、

研ぎ方は大略右の如くで、これから少し剃刀の使ひ方を書かう、

この西洋剃刀は、石鹸の泡の力で、樂に剃れるものである、又剃刀の柄に、挖の取方にもある、剃刀の柄は開いて胸の方をくの字なりにして、一寸左の小指を剃刀のもとへかけ、手元の方へ引いて來る、挖を取る時でも、小兒の月代などは、左の手できつく引ぱつて剃る、この手の引ばり加減が第一である、すべておちついて剃るが肝要である、

師走十題（其五）



分別の果夢となる炬燵哉

まだ書きたい事もあるが大分長くなつて來るからこの次にでもすることにせう。

隣から壁に釘つ寒さかな

懷ににぎり拳の寒さかな

婦人の流行服

日本橋なる三越呉服店にて、近時流行の衣服に就て聞く所によれば、大略左の如きものである、

◎縞物　紋お召（風通お召ともいふ）は、數年以來流行し來りたるものなるが、相變らず婦人向の上等品として需用多きも、縞お召の流行は更に甚しくて、今冬は縞お召の全盛時代なるべし、縞お召は縞柄の代表者として、流行の縞柄は直に縞お召に現はるゝよりしても、流行を好まるゝ向きは、縞お召はなくてはならぬ品なり、年若の向には小豆色又は紫かゝつた色持囃され妻君には、錆鐵、錆利休など好まるゝは目下の現況なるが、概して色合は地味一方に走り、澁味を帶びたるもの流行し縞柄は派手にして、以て色の闇めるを補ふものゝ如きも、縞は依然として、明瞭りせぬもの行はる、つまり定まりきつた縞に飽き果てたる結果なるべし、撚りからみ類の如き縞柄の要領を得ざるもの大に流行せり、撚からみとは、親糸に白糸を撚りからませたるものにて、織上りを見れば、白き糸が見え隱れになりて、得ならぬ面白味あり、立縞にも横縞にも、將た格子縞にも應用し得るが故縞柄は、規則正しく見えずして、多少融和する樣に見ゆるが此特色なり、由來縞物は變化多き樣にて其實割合に少きが故、之に變化を持たせるは、撚りからみなり、撚りからみありて初めて新生面を開きたりといふべし、今冬の新柄に撚からみ甚多し▽縞お召の中にて織方の相違より凉風お召（風お召ともいふ）といひ、漣お召と云ひ壁お召などゝいふものあり、何れも流行せり、是等の縞お召は、或は横に太き糸を入れ或は撚のかゝらぬ生糸を入れ、或は立糸に細きものとを交えなどして、其出來上りの上に變化を現さんと勗めたるものなるが故、何れも縞柄の變れる樣に見ゆるなり蓋し今まで餘り明瞭とせし立縞は格子縞杯の流行せる反動あるべしと思はる、

◎下着　下着は對なるを良とす、されど三枚襲は

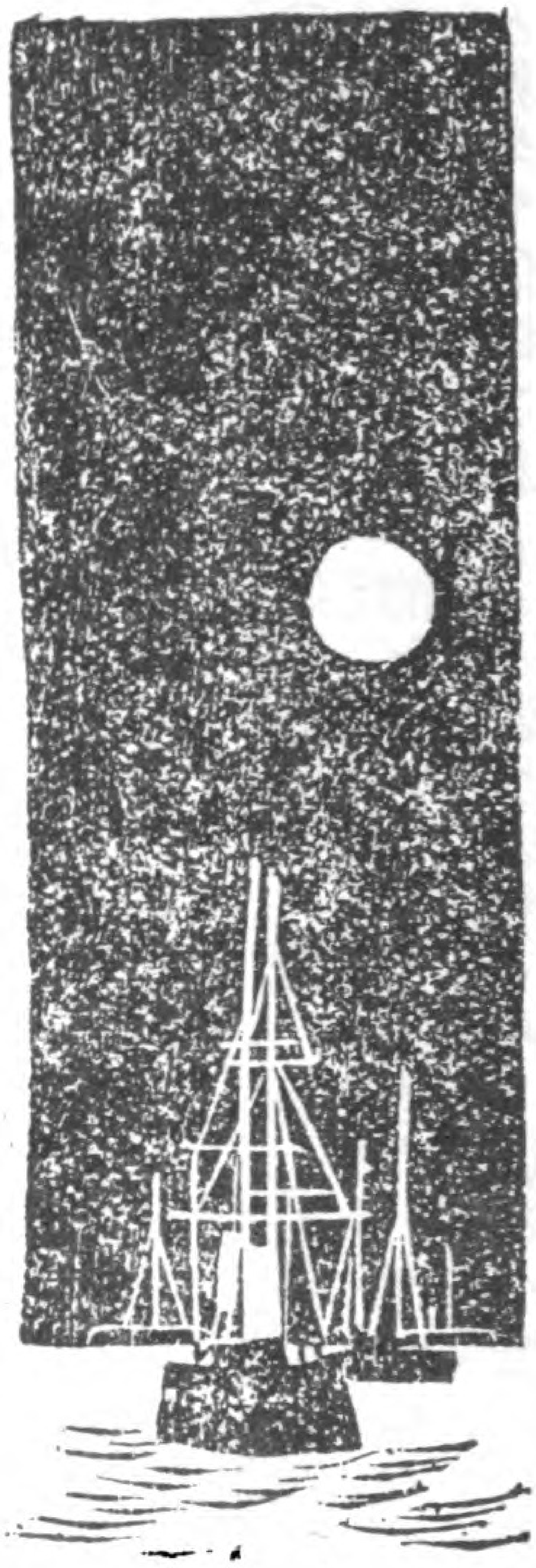
殆んど廢れて二枚襲の世の中なり、若も對ならざる者を好まるゝならば、縞お召の格子縞なるをよしとす、然らざれば、古代更紗の羽二重、又は廣東縞などを用ひ給ふべし、何れも高尚に見ゆる者ぞかし、

◎裾廻　裾廻には、從來花色を用ひたれど、花色は落ち易くして足袋に色つくなどの不便あるより、今は餘り流行せず、花田色と稱する、一層淺氣のもの評判よし、變り裾には、縮緬又は羽二重いづれもよし、縮緬は裾捌きに不便あれども、羽二重は柔かにして其着心よしとありて、羽二重を用ゐ給ふもの、日に増し増加する風あり、特に意氣向きは、羽二重に限るといつてもよろしき樣なり

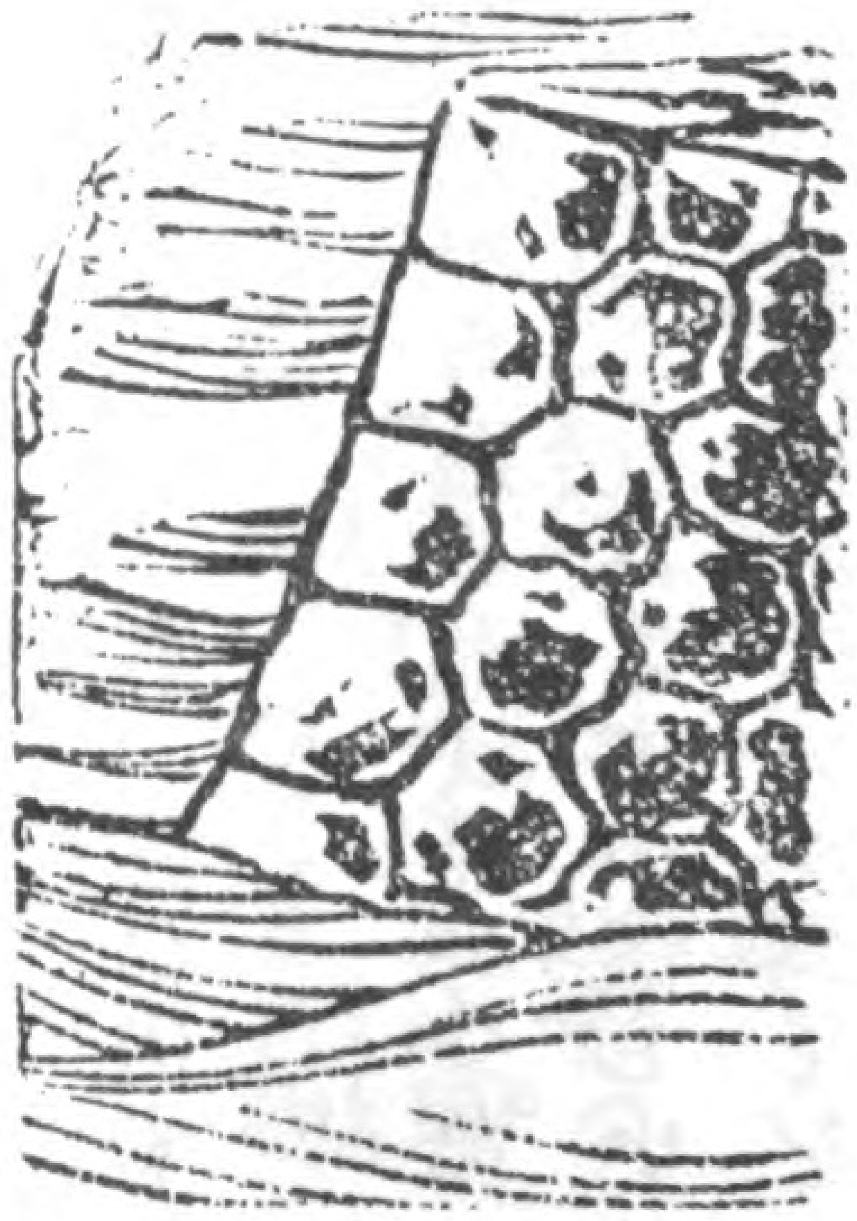
◎羽織　黑縮緬の羽織も衰へたり、先づ流行は色物に限るといふてもよかるべし、色合は、模樣物と同じく、年若の向きには小豆色、淺葱色、妻君向きには消炭色など、地質は縮緬なるはいはずもがな、少し變りたるものを好まるれば、山繭入縮緬絹縮、鶉縮などよし、次いでは紋羽二重なり、紋織お召の無地なる、又は織色お召なども需要少からず、是等無地のものには紋を縫ふも縫はぬも隨意なれど、もし紋を縫はんとならば、目下流行の共糸なるがよし、澁い處に妙味のある者なり、而して其縫方についていはゞ、縫織はシッコき爲め流行せず、昨今は多く壽賀縫を好かるゝやうなり、際の相良縫は一層地味にして宜し▽縞の羽織としては、縞お召に及ぶものなかるべし、次いでは紋お召なり、柄は着尺と大差なければいはず、小紋縮緬の羽織は一時の如く盛ならざれども、相變らず人氣多し、小紋の柄はこれぞといふ流行るものなく、只ハッキリと出づるもの一般に歡迎せらる、角通霜小紋、重松葉など相變らず宜し、色合も亦藍氣の濃きもの評判よし、それから、羽織の紋について一言して置きたいのは黑色の羽織ならば五つ紋に限ること、色物ならば三つ紋とすべし、昨今紋の大なるは流行せず、八分五厘より九分見當にして、段々小さくなる傾きあれば、新に羽織を新調さるゝ向きは八分五厘位にする方經濟

なるべし▽同羽織裏　羽織裏地としては、緞子相變らず流行せり、されど近年裏地専用の繻子地の極柔かなる者出來たれば、其を用ゐらるゝも亦多し、模様は草色に限り、地色は淡小豆、鶸色又は白茶地など、何れも色の淡きを貴ふものゝ如し、次いては紋羽二重、八橋地などなり、友禪羽二重には特に柄の奇拔なるもの多く、元祿模様の流行に伴ひ、大きな市松中に蝶鳥模様を入れたる、匹田入の亂菊又は蘆に槌車など種々新柄ものあり、是等は輕くして着心よろし、新柄の中には腿紅色なる者特に多し、此色は將來大に流行の見込ある色にして、今日のオレーブ以上の流行を見るなるべしと察せらる、

◎丸帶　繻珍の丸帶は、廉きは十圓臺より高きは三百圓位に至る、近來丸帶を締むるの風流行し來り片側帶の代りとして、需要するもの多く、此風いやが上にも流行し來れり、地色としては、白茶は全く廢れて濃茶となる、全體、帶の色合は着物の色合と配合よろしきものを擇ふべき筈なれば、茶色の帶の配合よきを得しめんには、着物の色は黒又は紫紺、葡萄などの黒みたる者よし、茶色に次いでは黒地の帶なり、して、それに模様を織出したるは、品の宜き物なり、婚禮向などには不相變松竹梅、鶴龜などの模様もよろしけれど實物其儘に配合したる者は今時の流行にあらず、有職風か又は模様に崩して、露骨ならざるを好む風あるは世上に意匠圖案の思想の發達せし爲なるべし、變り向きには唐織錦、綴織錦、紬錦などの地變りものを好むもの多く、繻珍風の光澤ある者は喜ばれず、柄も在り來りと違ひ、古代模様又はトルコ模様などにして、餘りピカピカせざるものに限るが如し、厚板地は縞物に適當する様に織り出したるもの多く、いはゞ、片側帶の少しく、儀式張つたる様な模様なるが多きに、搗てゝ加へて丸帶を締むること流行せるが故、價も左程高價ならず、十七八圓より三十圓までなれば、片側帶を締むる積りにて、厚板を用ゐること流行せり、その色は重に錆色茶なるが如し、



小説



心づくし

小山内八千代

君、僕はね、君が此手紙を見たら必然泣いて呉れるだらうと思ふ、

君、僕の妹は死んだ、もう京ちやんは此世には居ないのだ、僕は毎日淋しくて〳〵堪らない、せめて君でも居ればいゝのに君は歸國て居るし、父も母も無い僕だもの、希に婆やが室へ來ると思ふと、直ぐに京ちやんの事を云ひ出しちや泣くんだ、せつかく讀んでるものに身が入つて氣を取られてると、彼奴、淋しいものだから來ては泣く、泣かれて見れば僕だつてやつぱり……まさか君は女々しいとは云ふまい、

今日は君、最早二七日なんだ、其時はもう落膽して終つて、何處へ報知らせる氣色も失せたが、とにかく君の處丈へはと懸命になつて筆を採る矢先へ、『京ちやんに約束の燈籠を今買ひにゆく』つて、君の端書、僕は如何して報知らせられやう、思ひ切つて燈籠の來るのを待つた、待つて、待つて、待ち切れないわま

りにとう／＼しらせたのだ、あの手紙は君が小包の宛名を書く處へ行つたそうだが、よく妹の名で呉れた僕はほんとに嬉しかつたよ、小包は今朝君の吊詩と一時に着いた、
あの燈籠は君の從妹の瀧ちやんが寫してる寫眞のと同じ形だね、僕は君、今日あの紐を持つて、日中だと云ふのに燈を點けて妹の佛壇の前を引いて歩いた、紐は瀧ちやんが縫つて呉れたのだつて？、京ちやんは必然喜んで居るよ、
僕は今夜あの燈籠を持つて青山へ行つて供へやう、未だ新しい墓標にあの紐＝紫と白との手綱染の、しかも瀧ちやんの縫つて呉れた＝を結んだら、淋しくて如何樣に趣が有るだらう、最早君、あの土手に薄の穂が出たからね、是からはいよ／＼淋しくなるんだね、
君も只驚いたと云ふ、僕もさうさ、京ちやんは君、始終弱かつたのだからね、僕は又いつもの熱だと思つて過日君と同道に本郷で買つた、あのお伽ばなしを讀んでやつたり、母が君、亡くなる時に京ちやんが成長なつたら御遣りつて、白縫だの、兒雷也だの草双紙が有るんだ、そんなもの丶畫を見せたりして付いて居たんだがね、常の樣に無く默念て、僕と婆やの顏を見ちやア時々思ひ出した樣に『兄樣、民ちやんは可哀そうだつたねえ』つて云つちや泣くんだ、
君、民ちやんは覺えて居るだらう、可愛い從弟を失なしたと、此月の始めに知らしたらう、君、思ひ出す樣ぢや恨みだせ、
民夫は君も知つてる通り繼母だつた、而して不幸に親父は旅行が多いのだらう、だから遣る瀬は無かつたすると京ちやんが、前を近いくせに余り行かなかつたが母が逝つてからは、恐いながら女はさすが懐しいと見えて伯母さん／＼と遊びに行くやうになつたので自然、民夫とは大の仲好で、僕が調物なんか爲てを

る處へ來て『兄樣、民ちやんに上げるのだから鶴を折て頂戴』つてねだるのだ、少し難しいものを爲つてる時は、可哀そうだけれど、他に人が無いぢやなし、まして、『僕は男、婆やに爲てお貰ひつて、云ふとだつて婆やは眼が惡くつて遲いのよ、母さんは居ないし』つて君、必然溜息をつくの、いつもの、母さんは居ないしと爲られると、僕は堪らなくなつて直ぐ造らへて遣るんだ、僕は君、婆やより眼は善くつても折物は下手さ、夫でも京ちやんは滿足して嬉々持つて行く、

民夫は男だけれど始終ねつ〳〵遣られて、外には出ず、色も白し、從順しくつて女見たいだから、折物なんかきつと嬉んだのだらう、夫で民夫は京ちやんが遊びに來てるとお母さんにあまり叱られないから、朝起ると門へ出て、歸る時には又門で見送ると云ふ具合に懐しがつて、殊さらに母の情無さを覺えたのだと見える、

僕は自分が厭ひなのであまり行かないから＝行つても民夫を見ると情無くて長く居られない＝實は妹も遣りたく無かつたのだが、京ちやんは彼處へ行き出してから、あんまり母の事も云ひ出さず、佛壇の前に親父の寫眞と僕のとを比らべる癖も少くなつて、民ちやんが〳〵と面白さうに話すから、けつく氣散じだ、民夫も氣が晴れやうと、かまはず置いた、處が繼母さ、今迄は外に友達が無いので幾分か自分に近かつたのが、京ちやんが行き出してから、丸で駄目になつたものなので、じり〳〵前に增して辛く當るらしかつた、夫でさすが無頓着の妹もをり〳〵早く歸つて來ては、淋しそうに『兄樣、民ちやんがね、今日は頭が痛いから早くお歸りつて云つてよ、而して伯母さんが怒かつたの』つて泣きそうな時もあつた、そこで僕アこれア民夫が可哀さうだ、よけい辛いおもひをしなければならぬと思つたから、もう遣るまいとかんがへたが、又機嫌よく歸つて來て『兄樣、今日は伯母樣が御留守でね、兼やも御洗濯だつたから好かつてよ

と、にこ〳〵されると、めつたに出ぬ伯母だけれど、もしか留守で、民夫が樂みに待つてはせぬかとおもふと、ついすげなくも止められ無いで、氣儘にさせておいたのだ、すると民夫が逝く一週間ばかり前の事日曜日だつた、

今出たと思ふ京ちやんが飛んで歸つて來て『兄樣、私今ね、垣根の處で兼やに逢つたらばね、坊ちやまはあんまり貴孃と御仲よしだから、今ぶたれてますよつて笑つたの、私嘘だらうともつて玄關に行つたらねほんとに民ちやんが私と遊ぶつて打たれてるの、可哀さうだから早く行つて詫まつて〳〵』つて君息を切らして眞青さ、僕ア腹が立つて、飛び出さうとしたが、いや〳〵夫では民夫が尚困るとおもつて、縋つて泣くのを宥めて、やつと默して、二日過つて行つて見ると如何だい、民夫は君、民夫は、もう先から弱いのが、夫より疲せて哀れな風で床に就いて居つた、

僕ア驚いて、『民ちやんは如何したのです』つて聞くと云ふより、むしろ、詰ると、伯母は澄して『どうも弱くて困ります、主人が留守勝ちですからよけい心配です、夫に此頃は仲よしの京ちやんも御出でゞ無いので、尙淋しがります事、私にはまだ氣兼しまして情ないので御座いますよ』つて他人行儀な、御客樣あしらひなのだらう、居堪らんから一寸茶を入れに立つた間に『君は男だ、負けるな』つて一言云つて歸つて終つて、僕アやつぱり少し辛くても妹を遣らなければ好つた、其内に民夫の樣が追々惡いので伯父は勤め先から歸る、僕も一日一度は必ず見舞ふ樣になつた、京ちやんにも行けと云つたが、これは又、惡いから〳〵でなか〳〵行かない、民夫は親父が歸つて來てから、尙さら氣兼して物もめつたに云はない、僕アあの奇麗な、小さな姿で、白い物の中に包まつてるのを見た時には、只もう情け無かつた、もういよ〳〵と云ふ時、僕は行かないと云ふ京ちやんを引張つて行つた、――伯母は自身に醫者に行つて留守だつた、す

るとね、京ちやんは突然『民ちやん御免なさいなもう遊びに來ないから、ね』つて君、僕はハッと思つて伯父を見たら、伯父も傍を向いて居つたので、僕は思はず涙が零れた、したらね、民夫は口を利いたよ、『京ちやん、御前はちつとも來ないから、折物がみんな無い』つて、それから、めづらしく機嫌よく話してたが、醫者が來ると間もなく、京ちやんが持つて行つた千代紙を持つたまんま、逝つてしまつた、それからの京ちやんは、又佛いぢりが始まつて、時々一人で『民ちやん御免なさいな』つて泣いてるんだ僕も婆やも實に弱つて、毎日〳〵替る〳〵云つて聞かせたので、如何やら浮いて來て、もちまへの御てんばもしたが、それから、幾分も立たぬわる朝だね、默つて床の上に座つてるから、如何したつて聞くと、昨夜、民ちやんが來て、京ちやん御前が來なければ、お母さんに叱られやしなかつたつて云ひました』つて夢だから安心してろと云つても、一日何か考へて居つたが、其晩からだ、床に就いたのは、其後はもういくら聞かせても賺しても、惡かつた惡かつたで、詫まり通しで逝つてしまつた、

君、僕はね學校は休暇だし、君は居ず、淋しい〳〵が、しかし今頃は神樣の御膝元で、民夫と實の母の傍に、京ちやんも父母の傍に、樂しく遊んで居ると思へば絕念も付くさ、京ちやんの人形だの、香箱だの、ちひさい赤い鼻緖の下駄だのがいやに眼につくんだ、おまけに婆やが爲なくてもいゝのに京ちやんが好きだつた着物なんか出して來て、干たり疊んだり、千代紙を揃へたりするから、夫を見る、すると又折惡く京ちやんと半分わけした、リボンの栞が出たりするんだらう庭を見れば民夫の好な金魚が見える、空を眺めてると、不意ッと京ちやんの聲が聞えたり、地を見れば、京ちやんの墓標がすぐ眼に浮ぶ、實際僕は堪らん、だから詰らなかつた學校も此頃ぢやア早く始まればいゝと思ふ位で、毎日〳〵今日は幾日だ〳〵つて聞くものだから、婆やは變な顏して僕を見る、いよ〳〵堪らん、君、もう、九月の五日だ、早く出て

來給へ、而して今度は下宿せずに僕の處へ來て呉れ給へな、願ふ、夫から君が來る時にも一ッ燈籠を賴むよ、形は撰ばない、京ちやんと同じ金魚のでも好し、荷物だらうが是非願ふ、京ちやんばかりぢや、民夫が淋しい、幸ひ墓も近しするから、君が來次第、花々しく二人で飾つて遣らう、むゝ、京ちやんのも其時一處にしやう、夫迄待つ、伯母は君、今度伯父と一處に行つて、僕が墓守さ、

彼の土手に美しい燈籠を點けて此方から見たら、あゝさぞ……しかも隣り合つて二ッ目立つだらう、美しからう、紐はやつぱり瀧ちやんに縫つて貰つて呉れ給へ、一時も早く出京を待つとる、婆やも君の御出を御待ち申すと云つてるよ、では早くな、失敬、

女學生氣質くらべ

九州出身と、東北出身の、女學生の如何に氣質に於て相違せるかを比較したる某氏の觀察によれば

▽九州女學生（一）單身旅行異鄕に入りて職を求めんとする氣に富む、從つて婦人の遠征家多し（二）交際巧にして且知己とならば冷熱なく滯りなく訪問に力む（三）男女の交際比較的潔白なり（四）遠慮少く洒然として意思を發表す（五）辯口穩に精神熱ならず形式的外交に慣る（六）猥りに意中の秘密を告る事なし、

▽東北女學生（一）單身旅行するが如きこと更になし、從つて內氣にて、遠征など思ひもよらざるなり（二）交際拙劣にして冷熱の度は冷といふも寧ろ未練の方なり（三）潔白ならず往々醜聞を流す（四）遠慮勝にて容易く意思を發表せず（五）辯口甚だ拙なるも熱情に富む、形式的外交に慣れず（六）意中に秘密を存し得ず思ふ所は總て之を告白す

要するに、九州の女學生は開化して、東北のは未開化なり、九州の婦人は男子と並行くことを恥かしとせず、密室に私語するも疚しき行爲なしと確信すれば、敢て恐れずお上りなさいと言へば二階にても三階にても無遠慮に上りて、其處見渡す也、之に反して東北の女學生は、男子と並び行く事あらば、已に何等かの關係あるを表す、然なくばお上りと言ふも容易に上らず、座布團を出しても容易には坐らず、遠慮深きに過ぎて、人を苦むること多し、而も東北出身の下婢は、能く忠を竭し、月給の多少によりて、主を替へるなどは大かた九州出の者に多し、東北の女性は宅內工業的なり、九州のは機械工業的なり、又東北の女學生は能く友人の困難を見て、歸國の旅費を立替ることあるも、九州のは返却の期日を固く約束し、一札の證書を取らざれば立替ざるが多しと

電車旅行

酸漿女史

光陰は隙行く駒に似たりと古めかしいが、さて新しき考も浮ばぬ年の暮、市中の景况でも見たらば、また變つた面白いことがないとも限らぬ、併しそれだけの事で、方角も當もなく、ブラ〳〵歩きも、足の方で願下げをする、腕車では猶要領を得ぬ話、同じ要領を得ぬならば、電車で市内を見物して廻ることゝせう、この旅費ならば、さう案じたほどでもあるまい、
電車もかういふお客に乘られては、まことに迷惑千萬であらうが、一々用向を聞いて乘せぬのであるからそれも致し方がないとせねばならぬ。
まづ東電を振出しの品川から乘る、乘車の先登第一で、右の前側に坐を占める、これは電車中の上席で、右に身體をひねれば、正面のガラスの前に誂向の肱突がある、こゝからは車外の景色もよく見らるれば、車内の樣子もよく分る、頓て車は威勢よく動出す、停留塲を三つ四つ越すうちに、乘客は次第に加はり車掌がそろ〳〵前が隙いて居りますから前の皮へおつかまり下さいと怒鳴りはじめた、この乘合は渡し船に比しては、大に時間は長い譯であるが、途中で昇り降りがあるから、客がいろ〳〵に變つて來る、皮へブラ下りは七八人になつたと思ふ頃、前より二重外套を着た、扮裝の立派な若い男が乘つた、まだ車中餘白があるに、車掌は例の一種の詞色で、込合ひますから懷中物御用心と聲をかける、すると今昇つたばかりの若い扮裝の立派な男は、直に車から降りた、五町か六町電車が動いたと思ふと、乘合の一人が騷出した、その話によれば漸く買つたばかりの懷中時計が、鎖ばかりになつたとの事である、人は見掛によらぬといふのは、今の男から始まつたのであらう、

その話に花が咲いて、隣に坐つた人は、新聞記者でもあらう、その連れの人との話振りが何うもさうらしい、さも得意げに、『僕は過日、電車に乘ると、一人の婦人が頭にリボンを挿して居る、そのリボンの縞柄が氣に入つてツイ見とれて居ると、車掌先生何と思ふたか、六七人しか乘つて居らぬに、『懷中物御用心』とやらかす、それを例の婦人に聞えるやうに云ふたらしいが、一向感じた樣子がないので、今度は『頭のもの御用心』と云ふのであるから、ハヽアこれはよい物に間違へられたわい、其儀ならばよし〳〵と、今度は乘合の物へ殘らず變な素振りを仕向ける、車掌は氣が氣でないやうな顏付をする、さて目的の所へ來たものであるから、降り掛に車掌に恨めしさうな強いやうな目付を見せた、今の掏摸を見ると、これは車掌の方に無理がない、隨分下らない惡戯をしたことである』と聲高々と話して居る、

さても目的の定めてないのは氣樂なもの、電車が右へ曲つて、始めて淺草行といふのに氣が付いた、石町の停留場で乘つたのは、觀音樣行らしい老婆さん、乘ると直ぐ『切符をおくれ』と車掌に渡す、車掌は金を受取つて鞄に入れ、回數乘車券のお客があるやら、一時にどや〳〵乘車したものがあるから、その方へ氣を取られて、老婆に切符を渡すのをグズ〳〵して居ると、老婆さんは血眼になつて『東京は生馬の目を拔くといふが、金を取つて切符を呉れぬ』と馴れねば早や心配して居る、車掌が『ハイ切符』と差出すと、この横着者奴が、といふやうな顏付をするのであつた、

兎角するほどに淺草橋となる、こゝは四通八達の道路で、なか〳〵人通りが烈しい、されどかういふ所では存外通るものも氣を付けて、滅多に間違ひの起ることはないのであるが、東京市中を我物顏に走らせる電車を、妙な眼で見るものもあるに、それよりはこの電車の十文字に東西南北へ走せて居る道路を、大八車に長い丸太を積み、それを馬に曳かせて、可なり道路の邪魔になるを、その馬の口を取つて、くはへ煙

筈か何かで、目の前に何のやうな急ぎのもの丶足を止めやうが、それらは一向平氣の太平の民、鼻唄こそ謡はね、謡ひそうな顔付で、悠々緩々と通つて居る、かうなるとづう〳〵しく見えて、更に同情は表せられぬのである、

雷門前となると、客は大方新陳代謝する、新に乘つたので、乘客の視線を一つに集めたのは、わが前に乘れる二十歳前後の美人である、次の停留塲でその美人の隣へ坐を占めたのは、品格のよい、財産家らしい老人である、その手提の鞄を腰かけた左へ置くと、餘念なげに美人がそれを左右を顧みながら眺めて、わが目に甚だ不思議に映ずると、頓てその鞄を右の袖の陰になるやうにし、別に鍵も掛つて居ぬと見えて例の美人はいつしか鞄を開て、中から何やら手早く取出した、扨はこれも見掛によらぬ仲間であつたか、被布といひ、袴といひ、頭飾すべて當世流行に行き、何れの孃樣というても、誰も疑ひを挾むものはあるまいと思はる丶、女學生仕立であるのが、相客の鞄を手早くこぢ開けて、その中へ手を入れた、まさしく掏摸と相塲が定まつた『あの聲で蜴蜥食らうか杜鵑』さて恐ろしい事をするものである、元からの掏摸でもあるまいが、斯う思ふと取られるものと、取るものと、二つながら氣の毒でならぬ、然るに老人は己が鞄へ手を入れられたのを知らぬ顔であるから、教へやうとは思うたれど、あまり入らぬ事を仕出かして、後の祟りも厭なり、じつと見て居ると、首尾よく何やら撮み出したと思ふと、その手を素早くハンカチーフで卷いたまゝ袴の内へ入れ、それは何とも云はれぬ顔付、美顔白點の半分はこれに引かねばならぬと思ふと、しかめた顔のまゝ、さも停留塲を待兼たやうに、これも乘つたと思ふ程もなく、電車より降りたのであつた、

或は不信切な話かも知れぬが、もう件の老人に右の見て居た始末を語つても、差つかへることはあるまい

と『唯今何か取られたものでもありませぬか』と注意する、老人はさも平氣で『この鞄なら、隣に居た女が、頻りにひねくり廻し、多分中の品物は奪られたらうが、何れ逃してやり度いと思うて居た所であるから、何とも思ひませぬ、實は此中には鼈が入れてあつたのでありますが、外のものはないのであるから、取つた方がお生憎樣な位のこと』といひながら、件の鞄を開けて見ると、鼈が血に染つた指をくはへて居るのであつた、これではあのやうに顏をしかめたのも無理のない話で、天罰とは云ひながら嘸痛かつたであらう、

それから段々と進んで、上野へ來ると、四十前後の身體の割合には丸髷の少さいのを結うた女が、取まきと見て差支ない、男だてら立縞お召の紋付を着た二十四五のと、外三四人で乘込んだ、丸髷は一合入の正宗の瓶を信玄袋から取出して連れの男等に酌をして飮ませる、これが四本ばかり空になる間に、折の中の馳走も過半平げる、場所もあらうに、この乘合の中で怪しかることゝ思うたが、まア〳〵事を好まぬ人が多いと見えて、默つていづれもその馬鹿さ加減を見て居ると、これが萬世橋で降りる時に『こゝで飮まれりやア、半圓の祝儀は安いものじや、これには一同の乘客も驚かざるを得ないで、阿彌陀も光らせると云ひながら、車掌が五十錢の御祝儀頂戴は恐入る、乘られぬ客の資格に、酒に醉ひたる人も這入つて居るがこれから醉うのは差支ないのであるか、さて〳〵苦々しいことを見るものである、

『切符の切らない方はございませぬか』と車掌の聲をかけた、所は今川橋で、あまり氣の利かぬ顏をした三十四五の男、口不重寶さうに『上野へ行く切符をおくれ』車掌は『上野へですか』と念を押す『さうの事よ』と又云ふに、それでは次の留る所で電車を留めますから、そこで下りて、こちらへ向いてくる車にお乘りなさい』『さうですか、それは大變、といふたやうな鹽梅で、電車の留るのを待遠しさうにする、乘

合の客は『東京知らぬにも程がある』と、笑ふものもあつた、やがて電車はとまる、上野行の客は降りる向つて來る電車に乘るかと見て居ると、さも物馴れたやうに左へ本町の方へ曲る、さだめて此の男、笑うた連中をあべこべに笑うたことであらうと思ふ、車掌は四錢鼻毛を讀まれた譯である、

それから同じ道を戻つて、銀座から街鐵の電車に、また御苦勞にも乘廻りを始める、所が千客萬來で、どしく／＼つめ込む、定員を二十名ばかりも過して、欄外にも客を積切れぬほどになつて、滿員の札は下る、そこへ又候ふ乘込まうとする、車掌頑として入れず『滿員外に乘せると罰金をとられます、それだけ私の給料から出さねばならぬから、どうぞ降りて下さい』といふに『なに五十歩百歩じやないか、僕が乘つて始めて滿員外になるではあるまい、これは少し理屈のあることであるが『どうしてもいけません、車掌の權利で乘せません』この權利に辟易して、始め理屈を云うた先生、次便を待つべく餘儀なくされた、すると乘客の一人、藪から棒でも出したやうに『オイ車掌、これから築地へどれほどあるか』權利車掌は『これは青山へ行くのです、そんなら築地は何處ぢや』全然喧嘩でも吹かけるやうな質問『これは築地から來たのです、貴方何處からお乘でした』『今そこで此電車を見たら築地青山行と書いてあつたから、これから築地へ行くじやと思うた、通り越したのなら仕方がないから車を留めい』『今直くに日比谷ですから、そこで留めます』これは前の間違と違うて、切符を買うた上の事であるから、その時の口振の威張つたゞけに猶可笑くもあり、また氣の毒にもある、これは無理ならぬ間違ひ、

これから三田行でも、所謂しんじく青山行でも行止りであるから、日比谷で神田兩國行へ乘かへる、こんどの車掌は腰の低い、言葉の叮嚀な、一々乘客に禮を云ふ、これが會社の方針にでも叶うて居るとでも云ふ人物であらう、いや僅かの車内でも、車掌の善惡は、時によつて大に感情を左右することがある、けふは

稀有の日で、電車が和泉橋の所へ來ると、六十を越した老婆さん『これから新宿へどれほどありますかと問ふのであつた、よく〳〵聞いて見ると、これは築地から乘つて、青山行であつたから、新宿行に乘替へるのを、神田兩國へ乘替へたものらしい、このまゝで進むと、元の築地へ戻ることになる、何うしてよいか勝手がわからぬらしい乘合の親切さうな商人風の男、『それでは早う降て、向ふから來る車にお乘りなさい、さうせぬとだん〳〵遠くなりますから』と急かして降りさせる、老婆さんは切符を持つたまゝ降り樣とすると、『その切符はこちらへ貰うて置きます』と取上げ、老婆さんは遠廻りより乘車券が無駄になつたのを愚痴しなが



ら降りた、すると車掌は『こゝまで來たのであるから、兩國で乘替へれば、無賃で乘替へられるものを』と誰に云ふともなく言うた、そのやうに思うたなら、降りぬ前に敎へればよいことを、さては此車掌も、初め信用したほとでもなかつたかとつぶやかれたのであつた、

この電車兩國を過ぎて、濱町の停留塲へ來ると、例の入替りがあつたが、乘客の視線を一つに集めたのはこゝで乘込んだ二十歳ばかりの婦人である、自分で結ぶなる庇髮も、これは大分念入で、髮結女を煩はしたのであらうと思はれる、輕便といふより美術的に結ばれて、櫛といひ、



リボンといひ、よく配合を得た色取である、縞お召の上品な柄の重ねに、小紋縮緬の羽織、帶は繻珍でもあらうが見えぬのは帶の前に兩方の手でハンカチーフを持つて居るからで、そのハンカチーフには何を包んであるか、見ては笑ひ、見ては笑ひ、さも嬉しさうに見える、丸髷でないから、細君とも令嬢とも、ちよつと見分はつかぬが、美しい、顔に奥床しい所のある何れ身分のある人のに相違はない、さるにても、美しき衣裳を着けた美しき婦人の、そのハンカチーフのうちには、何が包まれてゐるか、殆んど顔の相格を崩すまでに、嬉しさうな顔をして、頻りに笑を通は

して居る、だん〳〵乘客が目引袖引する、ハンカチーフ美人は更に頓着せず、自分の品評が滿車の客の目から洩れて居るにも、更に目にもとめぬばかりでなく、氣が付かぬやうである、はじめは他の乘客も目と目とで評判をして居つたが、一隅からそろ〳〵小聲で推測がはしまつた『あアして何か眺めて居るが、戰地に居る人の寫眞で丶もあらう、追々陸軍も凱旋して來るから、それで思出しては眺めて居るのであらう、すると一人は、『思出す所ではない、眺め通しぢやないか、あア厚皮しくても困るぢやないか』と云ふ、實に苦勞性の人の多いと見える、車掌はその美人に向つて、貴女は切符はまだですか』と云ふに『件の美人は、『ハイこれで二つ分取つて下さいませ』とて小さな銀貨を出す、車掌は不思議さうに『別にお連れがないやうぢやありませんか、それに二枚お買ひになつても無駄です、一枚切りますから』とて一枚分だけ金を受取つて切符を一枚渡す、美人はそれではどうも困ります、是非二枚下さい』といふ、車掌はいよ〳〵それに相違なし、寫眞は切符なしでも乘れます、と云ひたげに、『何ぼお客樣が買ふからと仰つても一人のお客樣に、二枚の切符に鋏を入れて賣る譯には參りません、どうしてそんな二枚買はうなざ丶仰るのですか』この所質問に及ぶ、それでは一枚では濟まぬことがありますから、さう云はずと、早く二枚下さい』と強いて所望する、いよ〳〵ハンカチーフの中が怪しい、夫より外に切符を分けてやる者もないのである、想像までもなく、『實はこのハンカチーフの中に一枚買うて渡したい者がありますから』と打て出でたるに、今更ながら注目した乘客も驚いた、これも見掛によらぬといふ方であらう、何如に意中の人であつても、さう電車の中でまでも振廻はすには及ばぬにと、車掌も面白からず思うたか『お寫眞でせう、お寫眞ならば何う云ふ方のでも乘車賃は頂きません』と自分の會計でない所から、猶のこと切符を賣らぬ、美人は紅を薄く引いたやうな顔に笑をたゝへ『そんな者じやムいませぬ』と出して見せたのは、愛らしい小犬であつた

高等女學通信教授

▲二ヶ年卒業▲講義錄月刊一冊參百頁▲講義平易懇切△講師は專門の名家▲會費低廉

大日本淑女學會

目下**入學の好機**

詳細なる**規則**は申込次第進呈す

本會講義錄之批評

▲報知新聞評 高等女學校の全學科をば知名の女子教育家が講述せるもの也、平易と懇切とを主とせるものなれば、何人も難解の虞なかる可く、各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど、講述者の苦心を見るに足る、且つ有益なる科外講話の外に『姫百合』と題する五十頁の附錄あり、博士學士の婦人に關する評義史傳衛生家庭等の文字を掲載して、一面雜誌の觀を備ふ、卷末更に田口掬汀の『學者の妻』といへる面白き小說あり。凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀なりと云ふ可し。

▲中央新聞評 講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲毎日新聞評 米國の通信教授法を參酌せる者、文字平明說明懇篤を盡くせり

▲朝日新聞評 女生獨習の便を圖り平易懇切を旨とせる女學講義錄を發行せり

▲二六新聞評 高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評 講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評 講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲貿易新聞評 從來の講義錄中最も進歩したるものゝ一、三百頁の大冊子なり

東京神田南甲賀町十番地（電話本局三千四百番）

大日本淑女學會

文學博士坪内逍遙君序　三木竹二君　水口薇陽君校訂　上卷卅九年十二月 下卷卅九年三月 出來

近松全集

洋装全三冊菊版　凡三千餘頁　總クロース金文字入頗美本

定價一冊各壹圓六拾錢

小包各金十五錢　小包料十五錢

上卷

菊版一千餘頁總クロース金文字入　十二月二十日迄に前金相添御注文に限り　特價金壹圓廿錢

▲特價期限（十二月廿日）後は嚴に定價に復す　▲製本出來は十二月廿五日

上卷特價壹萬部に對し左記の景品券五千枚挿入す

▲近松全集中下二冊（三圓廿錢）五百枚

▲近松全集中下の内隨意一冊（一圓六十錢）壹千枚

▲新冠（新體詩集）一冊（三十錢）壹千枚

▲かるたゲーム繪葉書一組（十二錢）五百枚

▲教訓歌集一冊（四十五錢）五百枚

▲百人一首改觀抄一冊（二十五錢）五百枚

▲かるたゲーム一冊（二十錢）壹千枚

合計金四千六拾圓

近松著作の上梓せられたるもの尠からずと雖も其數未だ八十種に充たず在りと知られて未見の珍書實に數十種に剩れるを拾芳案美の趣旨に基き力の及ばん限り未刻の珍本を蒐集せし結果今や遙に百種を超えしを以て每卷割裁する事としまた音樂上參考の資たらしめんが爲めて勉めて曲譜の要點を存し一見當代の曲節發達を知しむべく斯道に精通せらる丶三木水口兩先生の嚴密なる校訂を乞ひて成れる本全集は未曾有の珍書にして文學音樂界の寶典たるを疑はず

〔上卷目次〕

發兌　東京牛込矢來町　**園屋書店**

申込取次　東京本石町　大阪備後町　**寶文館**



ピンポン室內テニス

一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
其他各種御注文に應じ
製造可仕候

ピンポン改良室內テニス（旅行用）

一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル上等一臺
拾參圓並等一臺九圓半
號大人用

御用
體操器械







テニス用ラケット一組

一號大人用 一三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七人同（小學用） 四、七〇〇
二用（一號） 六圓
同號 七圓

改良櫻二重枠ラケット一組

一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓九拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢

テニス組一張一、七五〇ヨリ二、九五〇迄各種あり升

東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

寫眞術に就て

男爵　徳川厚



近來文學なり、美術なりに趣味を有つて居る人の道樂として、寫眞が大さう流行して居るやうであるから、寫眞術の美に就て、この道樂の仲間に入つて數年、いさゝか感じた所を述べやう、

私は美術といふことに就ては、繪畫をはじめ、さして學問し、研究したといふほどの事でもないが、美術品を見ることは大の嗜好で、それをまた批評することをも樂しみとして居る、そこで美術といへば、なか〳〵範圍の廣いことであるが、寫眞なども美術の重なるものであらう、

寫眞は衣服の縞柄がよいとか、模樣がよいとか云ふと同じことで、よく撮れねば、これを營業とすれば客も寄付かぬと云ふ譯である、所でそのよく撮れたといふについても、その趣味を感ずるに多種多樣であらうと思ふ、

寫眞は、或時或物を紀念するのもあらう、單に肖像のもあらう、又森羅萬象を美術的に撮るのもあらう、又肖像にしても、寫生的に寫すのと、美術的に寫すのとある、とにかく光線或は位置等の作用によつて、其品格の高き卑きまで寫し出さるゝ手際に進まねばならぬ、何でも畫面が卑くならないやうによく其人に似て居る、よく其得色を發揮して居る、

その態度といひ、その位置といひ、申分のない出來である、といふやうでなければならぬ、さう注文すると、却つて一種の景色に至つては技術のみの營業者よりそれ以上の趣味を有てる素人の作品によい物の出來る塲合が少なくない、

同族の會にも、この寫眞道樂の人があつて、時々出品仕合うては、黒田清輝氏や、小川一眞氏などに品評をして貰ふ、どちらも美術家の品評として、甚だ感すべきものがある、されど洋畫家の黒田氏と、寫眞師の小川氏とは、自ら着眼と見解を異にして居る例しのないこともない、併し誰に見せても、位置もよく、色はなくとも春なれば花、秋なれば紅葉、さういふものがそこに浮出づるやうに、愉快に感せしむるやうに寫さねばならぬ、假令は音樂が微妙なれば、聽者の心を融和さすることも出來、能く趣味を顯はしたる寫眞は、大に人の目を娯ますする如く、總て同一に皆人に快樂を得さするのが目的である、

それから紀念寫眞であるが、これは自分だけ或時或物を紀念する爲に撮るので、それには必すしも美術に重きを置かぬから、人に見せて更に興味を感せぬものがあらう、名所寫眞といふものには、多く紀念に撮影したものが多く、濃淡の工合はよく出來て居るが、雅致に乏しい、繪畫のやうな譯に行かぬものが多い、併し寫眞は繪畫と同じやうな美術で、同じやうな雅致がなければならぬ、

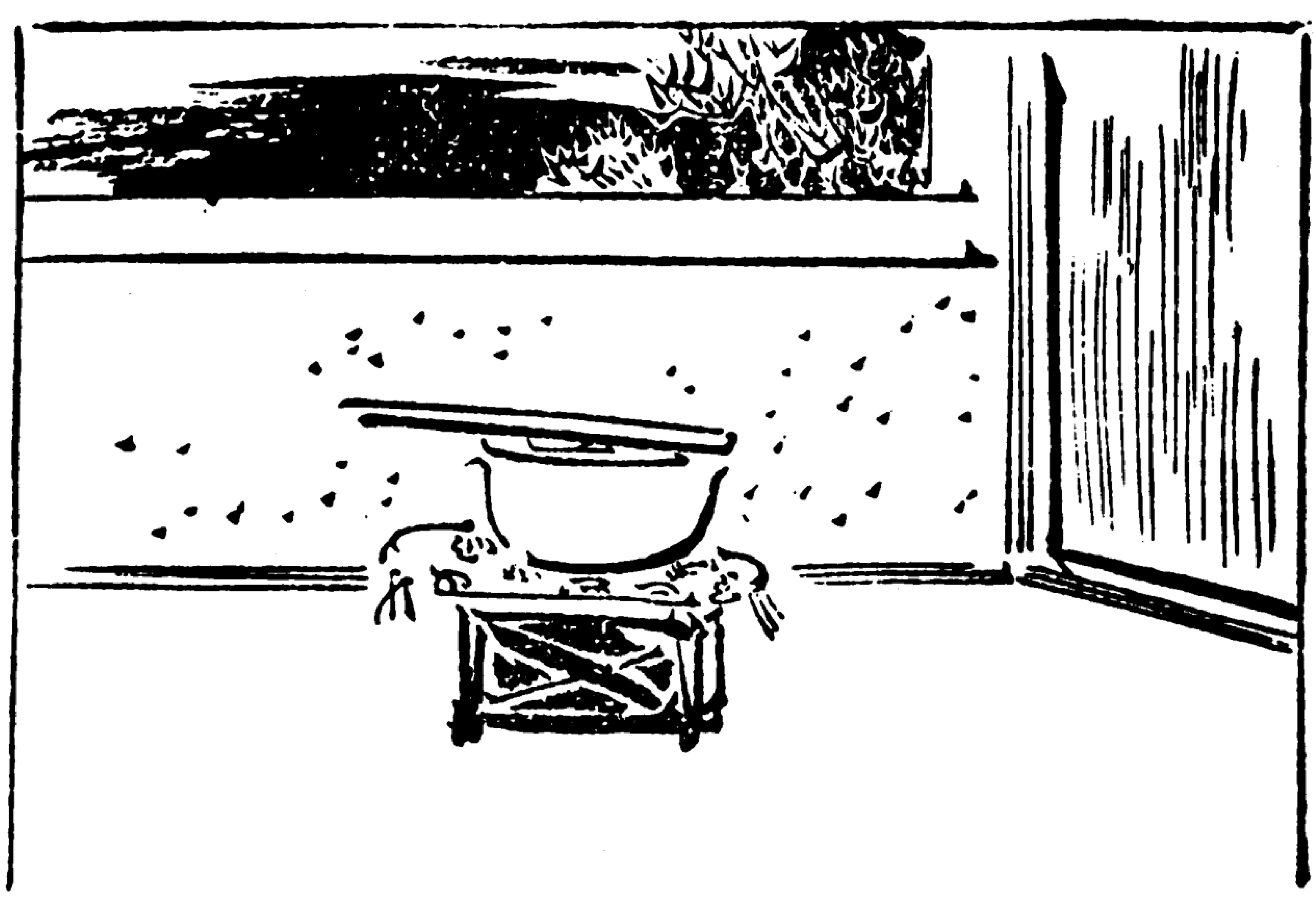
寫眞は段々位置から濃淡等を研究すると、なか〳〵趣味の深いものである、そこで實際は掃溜などの極めてむさくろしい物でも、たゞ美しく寫るといふことがあるが、これは或程度迄は現物の性質趣味を其儘可成實物通りに、目的物の面目を現はすやうにしたいのである。

又或る塲所を寫すに、繪畫と寫眞の二つによるとすれば、その塲所に雅致を殺ぐブリキ屋根の家があると假定する、このブリキ屋根の家がある爲に、その全景の雅致を損ずるといふ塲合に、之を繪畫にするには、この全景の中より、不風流なブリキ屋根の家

を取除ることが出來るが、寫眞ではさうは行かぬ、そこでその屋根があつても差支ないやうに、光線の工合とか、位置の取りやうとかに工夫して、その短を補はねばならぬ、

さういふ風に研究して行くと、寫眞はたゞ或物を機械で單純に寫出さるゝといふに止まる、無能な仕事ではなく、品位として繪畫に劣る所はない、寫眞は一枚の種板によつて多數の印畫を得る、それで安ッぽいといふものもあらう、又繪畫は一枚に數年を費して、それがよいとなつても、再びそれを描けば、前のやうなものは出來ぬ、實に天下一品である、それが貴いといふものもあらう、それは數の多少の話で、美術の品位に置て甲乙はないのである

師走十題（其六）



松風のもてくろ音や寒念佛

また人の顏を寫すに、喜怒といふほどの變化もよい平氣な同じ顏を撮つても、今撮つたのと、一時間後のとは、大分實物に違つて寫ることがある、これは同じ顏を、同じ場所に、同じ機械で寫すのであるから、違ふ筈はないのであるが、それが違うて寫るのは、光線の作用である、寫眞は光線の工合が大切で、むつかしく云へば眞によい寫眞を得やうと思ふと、光線の學や、應用化學をも心得て居らねば、申分のないと云ふ寫眞は出來ぬのであるかもしれぬ、併し慰みにするには、人の目に可なりに見えさへすればよいと思ふ、

女鑑新聞

紀元二千五百六十五年　西暦一千九百四年　淸暦光緒三十一年
明治三十八年十二月一日金曜日　きのえ　いぬ

▼投書　この新聞誌面にも和歌俳句短文を歡迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　女鑑の景物にて女鑑の讀者には自然ロハで見らる、謬也
▽廣告　一行十五字詰金二十錢但し四面に限る

發行人　紫式部　編輯人　清少納言　印刷人　赤染衛門

發行所　東京築地　株式會社國光社

論説

女子教育に就て

男爵　澁澤榮一君談

近來女子教育が大分盛んになつて女學校も續々設立せらるゝやうであるが、さて女子を教育するに、もし模範を求めなば、いづれの國の女子の境遇に至らば滿足せらるべきか、強ち女子に獨立の氣風を養はしむるか、女子教育の主旨にもあらねば、女子の權利を擴張するが、女子教育の目的でもあるまい、女子は女子の德性を涵養すべき智識を得れば、夫にて女子教育の能事は終つたものと云うてもよい、されど封建時代の如く、女子と小人は養ひ難しの筆法を以て、女子といへば頭を押へらるゝものとなり、思ふことを云得ぬやうに壓制主義は執らぬ、併し開放主義と比較すれば、今の所何うであらう今日に於ては、いかに温柔なる女にても、無能にては事足らず、さればとて牛賓損ふ如き賢女を仕立つるは尙好ましくない、歸着する所女子教育の目的は、賢妻良母を作るにあるので、家庭を圓滿にすべき準備である、その家庭にも二樣あつて、夕顏棚の下すゞみ、といふ無造作なのもあれば、金モールの鹿爪らしきもある、それ〴〵身分に應じて趣味は異つて居るが、圓滿にさへ行しは同じことである、されど此二者孰れを選ぶべきであるか。

小猫迄飛廻りけり年の暮　芙蓉

社會

◎電話の呼數　電話交換手は、主に女子の職業なるが、近來此職業が神經衰弱患者を出すの傾向ありとの說あるを以て更に交換手一人に付一日中に幾度取次をなすかを調ぶべしに

	交換手數(呼數)	(交換手人數)
本局	三四、三二八	一四一
濵花	四七、〇一九	一四八
新橋	四七、〇九三	一七一
番町	一四、六四五	六九
下谷	二四、八二七	九三

右の如きを以て本局の交換手は一日に二四三、濵花は三一八、新橋は二七五、番町は二一五、下谷は二六七四の取次をなすなり、



百

文苑

初雪

カタバミ生

ある雪に明けたる晨　歌好みのものゝ二人みたり集ひたれば、このさまを歌にせばやとて、さてよみ出でたるを、今取出てゝ見るに、いづれか一人は歌に僞りのありしを氣付たる面白さに、

甲の歌

北山おろし夜すがらに
門を叩きておとなふは
けさ初雪のふりつもる
枯木の花を見よとなり

乙の歌には、

庭はましろに成ぬれど
梢はかはるさまもなし
けさの初雪見るにつけ
よべの風こそ怨みなれ

雜　報

有栖嬢の聲望

嘗て我國に來遊せし米國大統領令嬢アリス嬢は、近頃分離したる那威に於て、那威女皇有栖第一世として王位たる事懇望され、既に其情願書續々大統領の許に到着し、又佛國ブリタニー州のケルト民族は同嬢に最富家たるアン公爵の襲爵權を讓りたしと、貴婦人間に於て大に運動しつゝある由、

◎善友會の設立　佛法の說話を聽講し、知徳を涵養するを目的として、岩倉、伊東、野村、清岡、の各子爵夫人、黑木、清浦、有地、小澤、奧の各男爵夫人其他百餘名の夫人令嬢發起となり、善友會なるものを設置したり、同會は其目的を遂ぐる爲、時々斯道大家の法話を請ひ、又雜誌をも發刊する由

◎女子英學塾の認可　今回津田梅子女史の女子英學塾師範科卒業生は、文部省中等教員無試驗檢定の特典を得ることゝなりたり、右に就き同塾は、從來の規則に稍訂正を加へたるが、右師範科は三年の課程にて倫理、心理、教育、國語、漢文、英語、歷史、體操の八科目とし、英語時間中第二學年第二學期に於ては言語學、同第三學期に於ては英語史、第三學年第一第二學期に於ては聲音學、同第一第二第三學期を通じて英文學史を課す、

◎女學校の創め　明治四年十二月文部省の布令に曰く『今般西洋の女教師を雇ひ、共立の女學校を相開き、華族より平民に至るまで授業料を出し候はゞ入學さし許候間、志願の者は向ふ申（五年）の正月十五日までに、當省へ願出べき事、

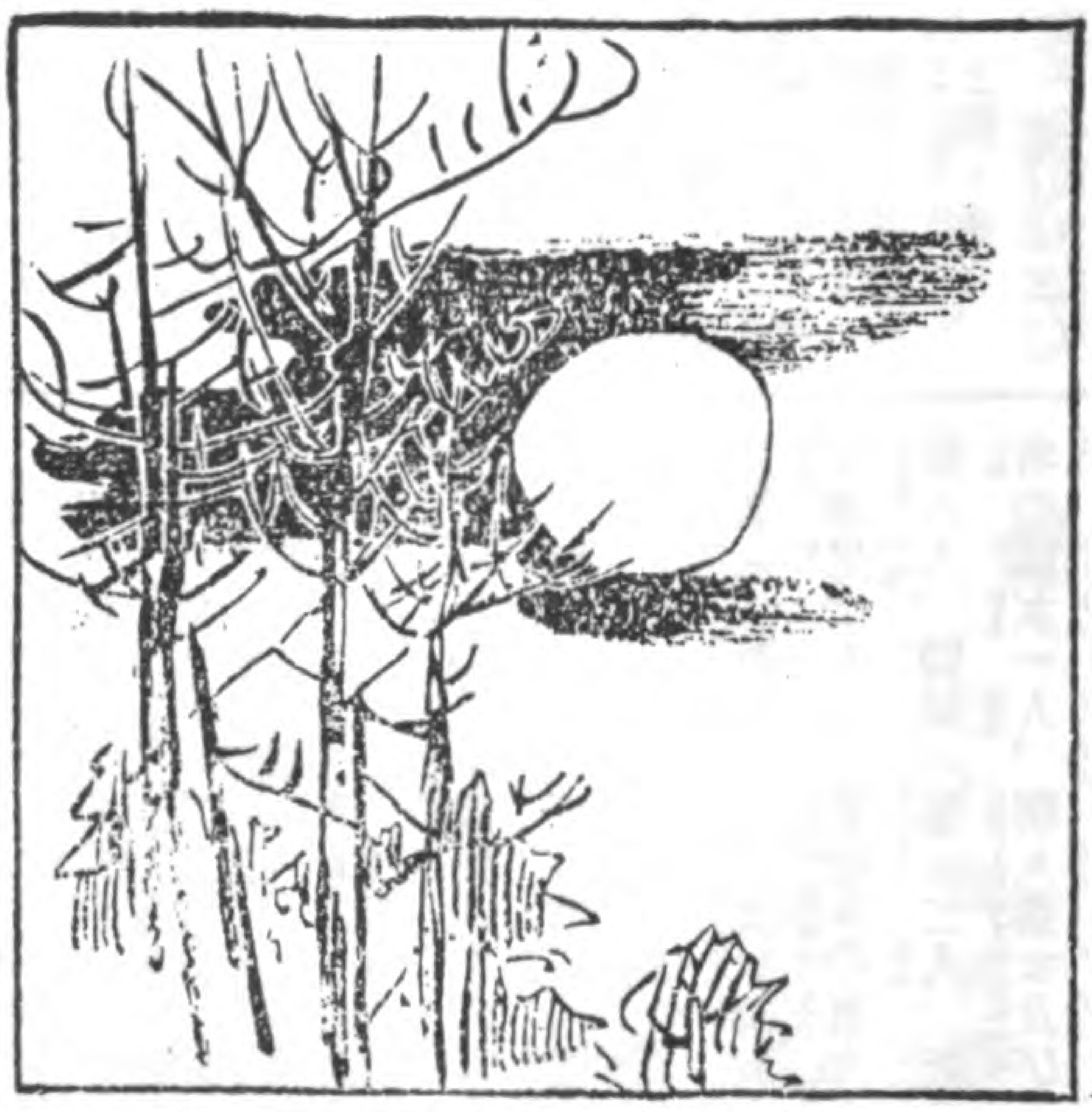
女學校入門の心得（但當分英學の事）

一　授業料毎月二兩相納む可き事

一　書籍等は銘々持參いたす可き事

一　稽古時間は毎日五時間の事

一　生徒は女子八才より十五才迄の事（但凡て通ひ稽古の事）』



冬の月

…と、馬屋原夫人曰ふ、解り切た事なれど、自分は某婦人會の會長で

▼此言をなす、實家は口のみにて、無闇に飛跳る交際婦人に一針

▼運動會の流行甚よきことなりされど學校が生徒を釣る方法として、無闇に華美にする如きは惡し

▼遊戲藝のなき藝者が戰爭踊をする如き遊戲は癈して貰いたき也

▼音樂を學ぶ人は品行の妙ならざるが、我國での缺點也三絃がヴアイオリンに變ればとて、少しも

▼品行に甲乙する所なしとすれば、洋樂の稽古屋も大に詮議物也

▼半襟一掛でもといふ奧村の方針に感じて、面倒を見る氣になつたと、岩倉公夫人は曰はれたるが

▼其心より進んで、今日の如く盛大なる愛國婦人會は始まりし也

▼八十の手習ひが伊豫大洲の武井かつ始め、裁縫大に上達せりと今の若き學生殆んと顔色なからん

叙任

任富山縣師範學校敎諭　奧平親治
任大阪府女子師範學校敎諭
三重縣第三中學校長　秋鹿見橋
任三重縣立高等女學校長
三重縣高等女學校長　藤井長藏
任三重縣第三中學校長
三重縣高等女學校敎諭　檜山友藏
任山形縣酒田高等女學校長

雜報

◎結婚問題と運動　ドクトルアニタ、アウグ、プルゲ孃は、雜誌歐羅巴に『婦人の自信と臨時の法律の許に結ばるゝ結婚とは一致せず』との論文を揭載し、ハムブル婦人會は牛は孃の意見を贊し、法律學者たるウインクール夫人は結婚法律の改正は現下の急務なりと論じ、プダベルド、ナル、シユウイムメル孃は『理想婚…婚理想』と題する一散を著はし、マウアスプルゲ孃の說は、人をして未婚に終らしむるの恐れありと論じ、世界の既婚婦人に向ひ、其意見を集めつゝありと云ふ。

◎八十の手習　愛媛縣喜多郡大洲本町一丁目武井かつと云ふは、本年八十一の高齡なるに、娘時代に裁縫の道を習はず、不便な忍び來りしを、今更に殘念がり、女の身のたしなみ是非に覺え置かねばならぬとて、目のまだよく見えるを幸に、裁縫修業を思ひ立ち、同町勘兵衛屋敷なる村上澤子の裁縫家塾へ、此程來妙齡の少女と共に杖を力に通學し、熱心に運針の法を學びける程に、上達も早く、最早通常の衣裳を縫ふに差支えなき迄に至りしより、かつは非常に喜び、八十年の今日迄恥と不便を忍び來りしを只管後悔し居る由

◎世界各國の郵税　ペンヌなる萬國聯合郵便事務局にて、千九百三年の聯合各國の通信事業に關する財政を調査したる所によれば、米國のみは收入より支出の方二千二百萬フラピクを超過し居れど、其他は收支償ひて餘あるよし、

◎料理法講習生の種別　和洋料理法研究の流行する今日、如何なる階級の人が最も多く之に從ふかと云ふに、神田三崎町なる秋穗割烹敎授所の全卒業生八十八名に對する統計を見れば、官吏の妻女十七人、娘三人、軍人の妻女七人、宗敎家の妻女十人、女敎師五人、女學生十七人、會社員の妻九人、娘八人、醫師の妻女二人、新聞記者の妻女一人、商人妻女及び娘五人、敎員の妻女二人、下女二人、即ち總數の過半は、人の妻女にして、年齡よりすれば二十五歲以下の婦人七分を占め、夫れ以上の婦人三分なりと、以て當世女子の割烹に對する觀念を知るべし、

洋食の心得

スープは匙を前の方へ向けて掬ひパンは皿の上にて手でチギるべくナイフと肉刺を用ゐるではない。それから口に物を運ぶに肉刺の背を外の方にする、酒を飲まずばコツプを初めより俯せて置くべきである、食時に給仕人が持來る品々は自分の左脇より鉢を出したのを手に受けて自分の皿に入れるか、左なくば鉢を其儘に持たせ置いて取るべきである、給仕人を呼ぶには大聲を以てすることなく、成るべく眼と顔とにて中は知らするやうすべきである、食事濟みたらば其家の主婦の席を立つを合圖に座を離るゝのである、尙ほ肉刺やナイフは皿の中に揃へて置くかX形になし置く、それに蔬菜のやうな物の細かくなしたるは肉刺で食したければ匙を用ゐてよろしきに、ナイフを用ゐて肉刺の不足を補ひなどするはよろしくない、

教界

佛前の結婚

淨土宗大學校教授森部選禪師は、曩に島地默雷師夫人、龜谷聖馨氏夫婦の媒介にて、松波千代子と結婚の約整ひ、過般芝三田寺町願海寺の佛前に於て、莊嚴なる結婚の式を擧行せられしと、其時龜谷氏の朗讀されし祝辭は左の如し、

（祝辭）　夫れ婚禮は人の大禮にして人生三禮の中、婚禮は其の最も大なるものとす。

茲に森部選禪君、松波千代子女史と結婚の約整ひ、茲に秋氣清高、黄花紅葉の天地の美を示顯する時に際し、吉日を撰び、無量壽如來の御前に於て、結婚の式を擧げらる寔に祝すべきなり。選禪師は宗教家なり、其法の爲め國の爲めに、身を神聖なる宗教界に委ねらるゝには、内助の必要あるは言を待たず。女史は幼より宗教家の家庭に人と爲り、殊に多年女學校に教鞭を執られし淑女なれば、其克く選禪師を助けて、法のため、國のために盡さるゝは勿論、圓滿なる家庭を作りて、夫婦相和し、樂しく美しき歳月を送らるゝは、余の信じて疑はざる所なり、昔哲曰く、君子の道は、端を夫婦になす、其の至れるに及むでは、天地に察かなりと、冀くば倶に此意を體し、如來の慈光に浴して、長へに幸福を享受せられむことを望む。

明治三十八年某月某日無量壽如來御前に於て
龜谷聖馨白す

その邊の考を以て、これを營業とするに就ては、婦人に最も適當なる仕事であらう、何事をするにも人によるもので、女の作つたものは力がない、奇麗に見えても雅致がない、所謂大膽な成蹟品がない、といふ風に一概に排斥して、寫眞の如きも、女に不適當といふものもあらうと思ふ、されど前に述ぶるやうに高尚なる趣味を顯はす事を後にして可なりに見らるゝやうに撮れさへすればよい、といふので普通營業としては、一通りは單純な技術で、あとは數を重ねさへすれば、熟練し、進歩するものであるから女子と雖ども成効せぬ事はないのである、それに日本には婦人の職業が少くて、近頃は女の散髮師などは其處此處で見掛けるやうになつたが、未だ婦人には極めて職業に乏しいから、寫眞の如きも、始めから高貴な人を寫したり、美術的にあらゆる景物を寫さうなどゝむつかしい考を後廻しにすれば、何うにか普通の客を引く位な事はさまでむづかしい仕事でないから、是非寫眞は營業としては婦人にすゝめたいのである、

それに婦人は頭腦が緻密であるから、修正、現象などに至極適當であらうと思ふ、現象の如き、成る程一寸むつかしいもので、或る一瞬間に於ける出來榮に至つては、理屈は更に用を成さぬ、幾度か失敗に失敗を重ねて、その揚句に自得せらるゝもので、素より天稟の才能にもあることであるが、習へば覺えるに近い藝術である、殊に修正術などは努力を要せずして、婦人には最も適當なる職業であると思ふ、故に婦人の仕事として、尤も安全な營業であらうと思ふから之を婦人に勸めたいのである。

（文責在記者）

ワグネルの樂劇

文學士　上田敏

近代の藝術として過去二世紀間に長大足の進歩を爲したるものは音樂なり、昔希臘の優雅なる空の下に

は、彫塑の術渾成し、中ごろ伊太利亞の華麗なる地には、繪畫の術蔚然として興り、今の多趣複雜なる近代に及びて、音樂は前代に例なき發達を遂げり、十八世紀のころよりバッハ、ヘンデル、グルック、ハイドゥン、モッアルトの大名ありて、器樂に、聲樂に、はたまた歌劇に、典雅なる幾多の傑作を著はし、近世音樂の規範を定め、基礎を固うせしが、現世紀に入りて、奔放熱烈の調、頓に聲を高うし、殊にベエトホオフェンの天才に深遠のかぎりを盡したれど、この名家は重に器樂の發達に資して、ソナタ、ジンフオニャ等の樂式を完成し、歌劇の改善進歩に對て貢献せし所少しとせず、されば現世紀の樂界に於て劇詩と境を接する歌劇に今日の隆盛を與へたは、實にワグネルの功なりと云ふ可し。

ワグネルの樂は、形式の新奇なるが爲に、標置の俊高なるが爲に、和聲の複雜なるが爲に、其他種々の素因あるが爲に、始め冷笑を以て貶され、中ごろ憤怒を以て迎へられ、終に崇拜を以て結びぬ、かれが深邃なる樂說は述べ難きにあらねど、玆に說かむもあまりにこちたく、かれが靈妙なる樂律は耳にし得べくして、筆にすべからず、さればわずかにワグネルの所謂樂劇作曲の順序を敘して、彼が半生の名作がやがて其心相の自然なる發達に基きたるを示さむ

リヒャルド、ワグネルは千八百十三年五月廿二日ライプチッヒに生れぬ、警察の一小吏なりける父は夭したれど再び嫁ぎたる慈母はこの子の敎育に心を用ゐて、藝術の素養を植付るに勉めたり、ワグネルは敢て神童の聞もあらざりしが、幼少の時より、想像力は豐に、詩文の翫賞力もをさ〳〵淺からず長じて漸く樂聲の美を味ふに至り、十八才の時ライプチッヒなるゲヴンドハウス演奏會に臨み始めてベエトホオフェンの樂を聽き、これより樂才急に啓發して、此樂家の作品を研究することに極めて深く、世を終ふるまで其熱心なる崇拜者なりき、

ワグネルがはじめて歌劇に天禀の樂才を試ろみたるは、伊太利亞の劇詩家カルロ、ゴチッの物語に材を

採りたる『仙女』及び沙翁の嬉劇『メジウア、フォアメシュア』を換骨したる『禁制の戀』といふ作なりもとより後年の大作と比ぶべくもあらねど、天才の翼は漸く舒びんとする向上の意氣ありて、實在の界を脱し狹隘の世相を後にして、物とはなき景慕の情にくれたる當年の懊惱を顯はして、一種の興味ありと稱す。時既に千八百三十四年の夏に向ひマグデブルヒの劇部に聘せられて音樂の監督に任ぜらる、梨園の內部に出入して種々の經驗を積みたれど、藝苑の華美に醉ひて、或は輕佻の作に天才を費さむとする誘惑に陷らむとし、深遠の理想未だ完からざるに業は危くも魔道に入らむとす、リットトンの稗史に基きたる歌劇『リエンジ』(一八四二)は此期の作なり、華麗の旅行絢爛の道具を以て耳目を暗さむとする佛蘭西の樂風、特にマイエルベエルの跡を襲ぎて、たゞに之を摸するのみか、前人の曲にも超たる燦爛たる歌劇を作りて、藝苑の聲譽を捉へむとす、かれこの時より劇部の樂長たりしが、此曲の作を終りて、斷然職を辭し、前途未だ確たる望なきに、青春の客氣を負ひ、海に浮びて佛都巴里に向ひぬ、航路四週間、途すがら那威の海岸を歷りてこゝに始めて『漂流和蘭陀人』の想を得たり、岸は高く、浪は激し舟に相呼はり、雨聲檣頭を掠むる北海の舟路は、この美術家をして、物語にあるかの和蘭陀人が高浪のあなたに達し難き家鄉を忍びて、終の日の安慰を覓めあがくに思ひ至らしめたるなり、

されど巴里に達して、此想しばらく沒しぬ、この遊逸の美術に至れば樂は太平の曲を謳ひて優柔の調を浮べ、藝苑の春色轉た深きに、北來の新客は功名の氣を激せられ、且つは衣食の急に迫られて、當年の時好に投ぜんとせり、乃ち艶麗の旅行をつらね、華美の樂飾を用ひて名もなき劇塲に樂曲を送くると暫らく、されど天成の才氣は終に蔽ふ可からざるなり漸くにして倦怠は來り、嫌惡を生じ、其生の目的なく意義なきを思ふと共に、家鄉を忍ぶ情は油然として起りぬ、宛も漂流の和蘭人の如くに、されば新曲

を抱きて、猛然故國に向ひ來因の水を見て涙を零しぬといふ。『デル、フリイゲンデ、ホルレンデル』(一八四三)實に此曲なり、

ワグナル此時既に古き草子を見て、タアンホイゼルの物語を知れり、巴里よりドレスデンを指してゆく旅路のついでに、ワルトブルヒを過ぎり、ヘルゼルの谷に沿ひて詩興頓に起るを覺えぬ、かの佛蘭西の騎士詩人が歌の軍の桂の冠を得むとて、昔この山の妖姫に留められ歡樂の幾年に夢むる如き生を送るの後大に悔ゐて法王の赦免を願ひしもかなはず、終に下界の逸樂に還りてとこしへに心靈を失へりといふ幽麗の物語は中世の最も美しき傳説の一にして、古の獨逸詩人今の英國詩人たちの筆にかゝりしが、奔放なる近世の情熱を加へて、ワグナルの樂劇に最もかく發揮せらる彼またこの旅路に封建の獨逸にありしマイステル、ジンケルが歌いくさの物語を思ひ後の樂曲の材をかまへたり、

この時『漂流和蘭陀人』の曲、既に伯林に演せられたれど、藝苑の眷顧を蒙らざりき、されどドレスデンの宮廷劇部は、さきの『リエンジ』の成功を思ひて、此曲を場に上ぼせしがこれまた失敗に歸せり、此際ワグナル心裡の鬥こそ察するに餘あれ、時好の聲を摸ひて、華麗輕佻の曲を作らむか、令聲は一手の間にあり眞摯の情を述べて衷心の思想を劇化せむか永き反抗の歲月、嶮巇たる前程の難、歷々として掌を指すが如し、宛もこれタアンホイゼルの苦悶にあらずや、而も勇猛の志を鼓して、藝術の良心に背かず、終に百難を排して、近世音樂の大革新を成したるは、藝術史上の一偉觀にしてワグナルの天才を明にす、

『タアンホイゼル』(一八四三)に連りて、ロオヘングリンの傳説はワグネルの興を惹きぬ、觀樂の倦み易く、官欲のおろかしきは、前者に於て明なり、ワグナルの想は一轉して華麗を後にし、高俊に向ひ志薄き纏綿の情は、變じて意高き悟脫の境に至りぬ、而も人生の溫情は忘れ果つ可からず何物か己を棄て

たる高潔の愛に若かめやワグチルの心こゝに再轉してロオヘングリンの曲（一八五〇）を成せり、白鳥の船に浮びて來れるかの俠勇の武士は、淸婉の美姫エルサを拯ひて、相思いと深かりけるもたゞ其系統を明かすを否めり、こゝに離間嫉妬の障入りてエルサ之をうら問ふこと度重り、ロオヘングリンは終に再び白鳥にひかれて歸りぬといふ哀怨の韻深きこの物語は高俊の人が心淸き溫柔の情を慕ふを寫し、併せてまた近世の藝術家が、批評品隲のわづらひの爲に斯道の妙境の公衆を導く能はざるを示せり、

ワグネル以前歌劇の題材は概ね平凡の瑣話にして詩趣に乏しく、徒に樂聲の婉美を旨として、すぐれたる人生觀の發揮なかりき、彼出でゝ音樂は他の藝術と手を連ねたり、シウベルト等が聲樂唱歌に抒情の詩趣を加へベエトホオフエンが器樂ジンフオニヤ等の高遠の思想を絕えたると同じく、ワグチルは歌劇に莊重の詩材を與へ自ら歌詞を編み樂曲を作りて渾然たる大美術を完成したるなり、而していかなればかくの如く傳說神話の類を採て其材と成せしぞ曰く音樂が人心の根本に橫れる性情の聲なると同じく神話も亦人生の無意識なる哲理にして、時間空間の約束を脫するも、なほ解し得べき元始の思想を含みたればなり、さればタアンホイセル、ロオヘングリン等の中世傳說を驅使して、新樣の樂聲を擬めし後、進で獨逸民族の神話に移り『ニベルンゲン環』の大作をものしたり、

この歌詩の世に出でしは、千八百六十三年にして、始めて全曲を演せしは千八百七十六年、ワグチル自ら經營監督せるバイロイト劇部の興行なり、此曲の本旨は高妙なる一種の寓意にあり、命運の萬能、古代の衰頽、新世の發展、黃金の欲に克てる愛の勝利等を趣意とす、又概して曰く、此曲は人生の進步、爭鬪、勝敗、及び聖愛の力に依つて終に罪障を贖ふを歌へる也と、序曲『來因黃金』は前代にためしなき莊麗の景を始とす、綠の黃昏は大河にかゝり影は水を下りて愈々濃く、中央の巖をめぐりて搖曳する

ものは三仙女なり、ブグリンデ、エルグンデ、フスヒルデといふ、發聲の歌に頭韻の疊用あり、ヴイヤヴガ、ツガラ、ワイヤ、ワルラヲ、ヴイヤの幽玄なる吟聲は、青緑の異光を相俟てまことに古代の別天地に逍遙する想あらしめ、壯大、傀麗、崇高、深遠等の感、相接して心頭に上ぼるを覺ゆと稱す、暫くにして侏儒アルベリッヒ來る、情を三仙女に寄せて、悉く斥けられ、唫笑の聲を被むる時、ふと巖頭の光明體に眼を轉ず、これ來因黄金にして仙女等の守る所なり、この黄金を得る者は、全能の力を得べけれざ、それとまた時を同じうして、女性の愛を失はざる可からず、黄金の愛は高潔なる種類の愛と兩立し難ければなり、是に於てか、業惡の權化ともいふべきアルベリッヒは意を決して高巖に攀ぢ上り黄金を採り去り、仙女聲を放て之を追ふを以て此序曲の終りとす、これより、黄金の祟は全曲の骨子となつて、悲壯の葛藤を生じ、主神ヲオタシ、其妻フリッカ智神エルダ英雄ジイグムンド、ジイグフリイド、等の物語を以てワグネルの世界觀は歌はれたり『ユベルゲン環』の傑作に先ちて『トリスタン、イソルデ』(一八六五)『マイステルジンゲル』(一八六八)の作ありき、前者はアルトウル傳說中最も幽麗悲壯なる戀の物語にして、奔放の情溢るゝが如く、後者は半史的に基き半傳說に飾られたる歌戰の顚末にして、フランコニヤの騎士詩人ヴルテル、フオン、ストルチングがニュルンベルヒの試の庭にたちて高歌二曲の場最も廣く行はる、共にワグネル樂劇の珠玉なり『ニベルンゲン環』の北歐神話の後を享けて基督敎の新思想を基とせる『パルシファル』(一八八二)の聖曲あり、終に晩餐の時救世主用ゐ給ひ、ゴルゴタの磔刑に血を受けたる聖盃、サングレアルに譯を發せる此傳說は、クレテイアン、ドウ、トロアイエ、ヲルフラム、フオン、エッシェンハンハの詩篇、エイルスの『マビノギオン』又アルトウル傳說の述ぶる所なり、澆季の後世に此聖盃影を潜めたるを求めんとせし物語にして、パルシファルは聖盃の探求を試

みし一騎士の名なり、ワグネルの宗教觀はさきの『ニベルンゲン環』を經て愈々高俊の趣を加へ、終に神祕の境に入りぬ、かくてこの天才が一生の作品を見る、此等の樂劇はあだなる耳目の觀樂を主とせるにはあらで、作家が衷心の思想を發揮したる一大自白なりと云ふ可く、思へば思ふ程に深く、高く、廣き人生の疑問に對せる一解釋なり、彼は希臘の劇談が一代の木鐸となりて民衆の敎化に力ありしを景慕せり、されば所謂樂劇を剏めて諸藝術の融合を謀りし前記の諸曲は消閑の具として作られたるに非らず、ワグネル自らが論述せる所を讀みても、又はそれよりもよきは、樂劇其物に顯はれたる思想を窺ひても彼が苦心の樂曲は眞摯の作なり、

ワグネル文學は浩澣なり、隨て價なき蕪雜の書多く徒にこちたき論議を交へたる類もあれば、われはワグネルの研究者に對して、最良の書を勸めん、他なし、

ワグネル自著詩文全集これなり、

茶道の四季

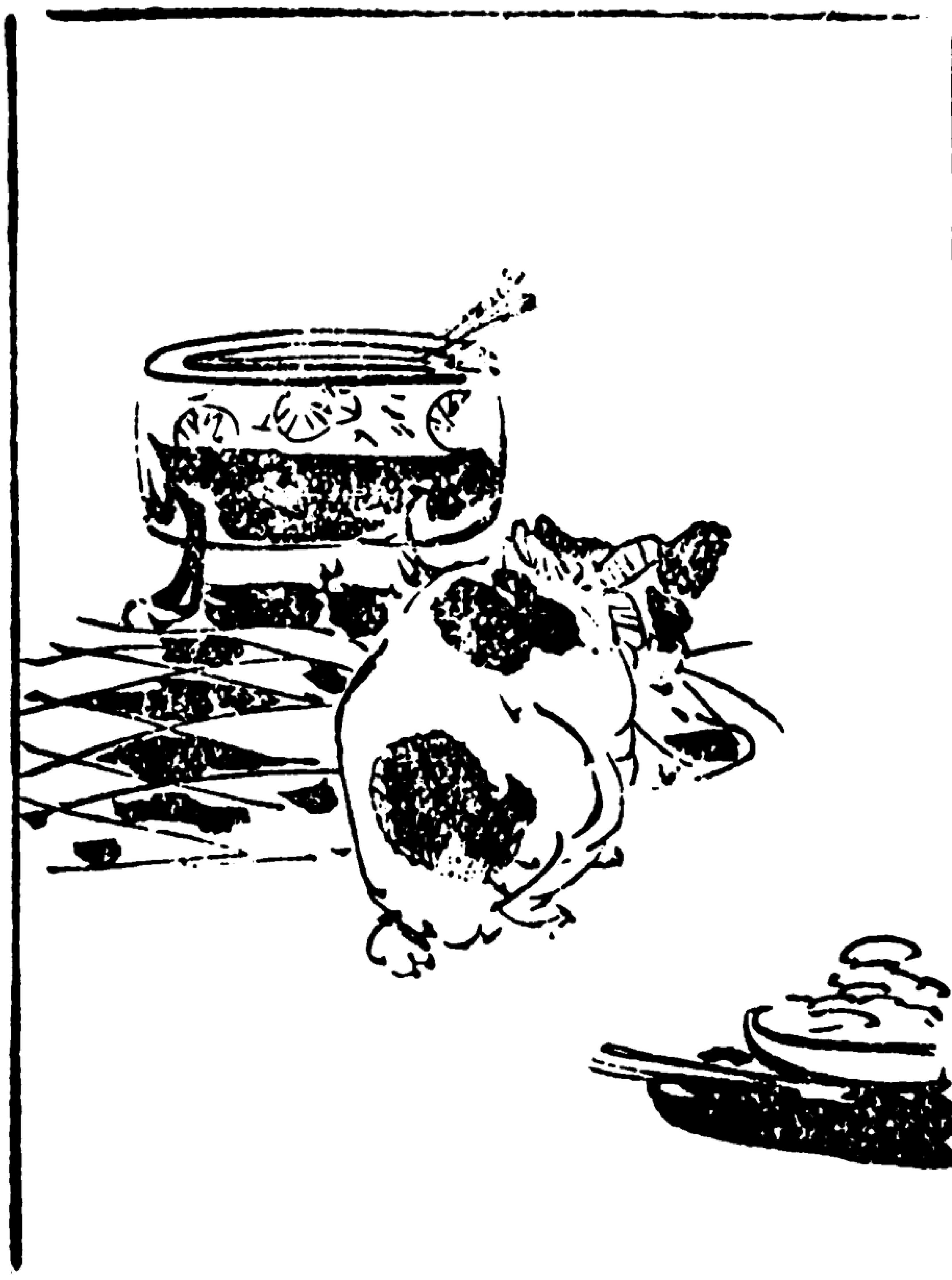
茶道利休流家元　正瓢庵宗月

年中のからくり除夜の鐘を合圖に、初からすの聲とともに、うつりゆく世こそをかしけれ、そが中にも雨雲風霜の天氣に寒暑晝夜の差別あり、この折々の時節に應じ、趣向種々なる茶會の道、感興筆にも及ばざらん、

まづ靑陽の年のはじめ、新に汲める若水に、千代に八千代をいはふなる、鶴の繪かきし芦屋の釜、龜甲形の水指に、松竹梅の花を活け、富士をぞ祝ふ大ふくの茶こそ、我國の風俗なり冬の名殘を惜みては埋火の殘るこゝろに意を用ひ、ほこりをいとひよく拂ひ、こゝは市中の小地なりとも、遠景長閑に眺めやり、露地をも淸くつくりなし日影うらゝに惠方の色垣根の草も萌え出づる、雲間をわけて梅の花、やがて雲と見まかふらん、遠山櫻さては又、桃に李に花

のいろ〳〵、心しづかにながめやる、これぞ茶人の徳なるべし、さて梅櫻椿など、花のいろ〳〵何はあれど、みなひとへにそめやすけれ、それより春もくれ行て、初風爐亦めづらかに、垣根の卯の花咲つもり、殘る雪かとうたがはれ、夜込に行きて明ばなれに、時鳥の聲おもしろく、口廣の花入に杜若の一色、冷水をたゝえたる、いとすゞし、さて五月雨の降つゞきたる、露地のうち薄かへでの露もふかみ道のわたりへなびきしを、おしわけ行くも興ぞあり、時の花にて好ましきは、菖蒲夏菊石竹に、白蓮の色また清し、傳へ聞く我流祖宗易居士は、蓮花に菊を取ませて、活られし事ありしとかそは古歌

師走十題（其七）



寐て居れば猫もふまるゝ師走哉

一もとゝおもひし菊をおぼさはの
池のそこにもたれかうゑけむ

によりしなるべし、扨て初秋になりぬれば、朝顔の茶の湯とて、一輪とりて活けたるも、見所ありていさぎよし、漸く秋も最中にて、萩の下露すゝきの上風、水尾の燈火幽にかゝげ、釜のたぎり虫の聲心しづけくあはれなり、明月の茶の湯とて、窓のすだれをかゝげさせ、洩れ來る月のさやかなるに、燈し火ほのかなる亦このまし、求むべき花數は、朝顔晝顔秋海棠、小車しんぎく、藤袴桔梗秋菊葵夏の初に麥の穗を、活くるを秋にためしひき、稻穗を挿すも亦妙なり、折にふれ興に乘じて、あながち

にそれもゑらぶることなかれ、好むましきはいつとても、古き花古き木、利休居士秋の名殘に中風爐といふ手前をされ、今に用ひし其歌に、

中風爐は秋のなごりにあるものを
やゝさむけれど懐爐ならねば

それよりして冬氣の風もしめぬれば、圍爐裏を開き口切とてれんじさほぶちうち替て、衣服をあらためふくべの炭入まで珍らし、神無月ふりみふらずみ、空さためなき時雨に、色づきし紅葉の、こゝかしこにちりしきて、ものさびたるもめやすけれ、初雪の茶の湯とて、ふり積む雪の笠重げに、袖打拂ふも一興あり、

花ならはいくたび袖をはらはまし
雪のふゝきの滋賀の山ごえ

求むべき花とては、山茶花に早咲の梅、椿寒菊南天に、水仙の風姿またためでたし、それより年もくるゝ頃、世の物事のいそがしく、足をば空にはしらせる人に朝粥時刻を違へず、客亭主茶事の道を正し交を厚く結び、樂を極め、一坐の中に世事を忘れ、わづか人間五十年の榮華といふ、この道ありと論ずる人なきもうたてし、宗月おもふに茶道はすべて信切を旨とする故、左の歌を讀めり、

こゝろだにまことの道に叶ひなば
いもの馳さうも鯛にまされり

瓶中雜話

新水庵宗水

挿方と添物

挿分とは同種異様の花を取り、根を一つになし、上にて二種に分けるやうに挿けるものなり、同類の花にあらざれば挿分けとは云はず、添物とは之と反對にして異種の花を傍らに生添ふるなり、

根締と根分

根締とは異に花なき木を生ける時、草物の花あるも

のを閑靜に木の根本へあしらふものにして、根分とは眞の花と添物の花と、根元を二つの株に分けて挿るものなり、

木挾と草挾

三種の花を挿けるに、眞に草物を挿す時は、行草何れかへ草物を遣ふべし、雙方へ木を遣ふを木挾と云ふ、又眞に木を挿せば、草行のうち何れへか木物を遣ふべし、雙方へ木を遣ふを嫌ふこと木挾に同じ、これを草挾と云ふ、

花枝の撓めやう

花をためんとするには心をおちつけ靜にたむべし、急にためんとせば却て其枝を折りて用ふること能はざるに至るべし、初心の内にまゝあることなり、まづ枝をためんとせば、その枝の端のところを少し折りてこゝろむべし、大體ためやすきと否とを知るものなり、大菊の折れやすきものは、蠟燭の火にてためんと思ふ所を充分ぬくめのち靜にたむべし、梅もどき南天などの折れ易きものは紙に酢をひたしてためんと思ふ所に卷きつけ、火燒き後心靜にゆる〳〵たむべし、すべて枝のためやうは、兩の拇指をすきまなく詰合し、やは〳〵ためるべし、およそ花枝をたむるには、少しねぢる心もちにてたむべしかくすればもろく折れるものにあらず、

四季の花姿

春の花は發生の時なれば賑やかに、夏の時なれば盛んに繁く、秋の花は半枯れ行く時なれば少しこづめて、冬の花は陰氣にのみなれる時なれば淋しく活くべし、これ心を慰むる上に於て、大に道理に反する所ある如くなれど、これ花の天然を失はぬやうにせんが爲なり、

室咲の方法

寒中より正月頃の梅、椿、桃、其外何れの花にても蕾現はれ見ゆるを切てとり、不用の枝等は切除き、日受よき座敷などにて一兩日も水揚げ置き、それより室に入れるべし、若し室なき所ならば土藏穴藏の内に入れ置きて、火鉢(風爐或は深き箱火鉢より)に

て火を深く埋め、沸騰れる湯を土瓶又は釜などに入れ、湯氣を室のうちに籠らすやうに手當すべし、右の如くする時は、三四日のうちに花咲くなり併し程の見はからひあり、能く〳〵工夫すべし、

草木の錦生

錦生は尋常の法とは特別なる生方のものにして、秋の七草或は千草の花をとり交せ、麗はしく咲き亂れたる樣を生けるものなり、其形宛も錦繡の如くなるを以て錦生と名づけたり、此作意のもとゝする所は古歌の意にもよるものにて、類題萬葉集後柏原院の御製に、『木々に見し春の錦の枝よりも、猶や廣野の草のはなかな』又毎日百首の爲家卿のうたに、『秋風にたゝまく惜く見ゆるかな、庭の千草の花のにしきは』、此二首に基く、されば木の花は混ゆべからず、花器は手つきの大籠等がよく、色のとり合せは白黄紅紫とつゞけてよし、尤もいろ切とならざるやうにすべし、秋の七草といふは萩、なでしこ、すゝき、葛の花、女郎花、ふぢばかま、桔梗等なり、

貴人の挿花

貴人に、挿花を所望する時は、掛物無用たるべし併し神佛等の像等は苦しからず、中央花臺の上に花器を直し置く尤も水は程よくあるべし、花は四五種能く養ひ置き、伺ひたる上にて思召に適ひし品を花盆へ載せ、花、留、布巾、鋏等を添へ、是を三方か木具に載せて持出し、先づ花は御覽に入れ、其時花器は然るべきか伺ひ、若し適はずば二三種も御覽に入れ思召しの器と取かゆべし、扨床前へ御座有りし時、花盆を主人運びて能き所へおき、後より水注を運び次の間に控へ、手をつきて拜見致すべきなり、尤も其席跡仕舞等萬事失念なきやう心得肝要也、書院に釣香爐あつてしかるべし、

客人の挿花

客に花を所望せんと思ふ時に、花器を床に飾りおき尤も水は程能くあるべし、餘は貴人の節の箇條の通り心得てよろし、尤も花盆は其儘出す、客花を見たてる内掛物をはづす、三幅對ならば半をはづす、客

より掛物は其儘と挨拶致すべし、其時は見合せて計ふべし、横物にて挿花のかまいにあらざれば其儘おく、客花盆を持ち床前へ出たる時、主人水注を運ぶべし、花挿終りて花盆を持下り水の挨拶あらば、主人出でゝ注ぎ跡を拭ひ水注を持下る、右二箇條其貴人平人其時宜に隨ひて取計ひ方よく〳〵心得べし、

　櫻花と花薊

美しきものと恐ろしげなるものにて、一つは花王といひて之を挿すに傳授あり、一つは毒草といひて之を忌めりされど薊は毒草にあらず刺ある如きも葉先の尖れるのみて忌むべきにあらず、却て櫻は生花に用ふべからずとて左の如き說をなすものあり、

我朝には花とそいへば櫻を指し、人のみな賞する所にて、吉野の奧を尋ね、古人の詠歌も少なからず、然るを生花に用ひざる事は、歌にも櫻は峯の白雪にたとへ或は空にしられぬ雪と詠して爛熳たるを見て賞感す、たま〳〵家土産に一枝を折來るも、切り溜大籠などへ生けて見るはよけれど、常の如く花器に生けては、花もふらつきて生け惡きものにして、眺も多く見るよりは、大に劣るものなれば、生花には用ひざるなり、

我は毒ともならず亦醜ならざらんには、之を瓶中に工夫するに躊躇せず、說をなすものゝぶらつく云々はさることなれどこれぞ花を挿すにいろ〳〵の傳ある所以なり、

フワウラー氏ノ接吻研究

フ氏は接吻を情熱の接吻、戀愛の接吻（親子間）愛情の接吻、婦人間敬愛の接吻、同胞の接吻（兄弟姉妹間）好奇の接吻、詐謀の接吻、害意ある接吻の八種とし、細密に之を說明し居るが故に、人は氏の學位（バチエラーオフ、アーツ）より價ありとせり、氏は之が定義の興味あるものを拔粹せり、曰く（一）接吻は愛の大使なり（オピッワ）（二）接吻は愛の花なり（エーン）（三）接吻は愛の細路なり（四）接吻は歡樂にあらず、歡樂への誘引なり（ラレドルフ）（五）接吻は心の本城を開く月なり（レピス）（六）接吻は大膽、信念、愛情の表示なり（ネヒコス）等數多あり又（一）前額の接吻は智力の尊敬を表はす（二）頰の接吻は美の崇尊を表はす（三）鼻の接吻は不作法なる心意を表はす（四）口の接吻は多少の親狎を表はす（五）手の接吻は謙遜なる臆したる樣を表はす（六）唇の接吻愛情を來す等、諸種の觀察枚擧に遑あらずと、



富貴の母

男爵　大鳥圭介

兒子の教育は親たるもの丶義務の一にて、親は子を養ひ、子は亦其子を育て丶、己が養成されし恩に報ゆる順次の職なれば、若し子たるものが、己が子を深切に成育するの道を懈たれば、親に對し、孝養を盡すべき德義の一を缺ぎしものならむ、故に人たるもの、親に事へて、朝夕孝養を盡しつ丶、尙ほ兒子の教育を監督訓戒し、邪路に迷はしめず、良材に守立つるは、責任の重きものならむ、親に受けたる恩を思ひ、子に授くる慈に及ぼすは、上に對し、下に向ひ、人道の兩全を得たりといふ可し、

親に慈情深く資力足りたるの家に生れたる子は、人生無上の幸福者なり、斯る幸福者たる者は、身の好運を悦び、勵みし上にも勵みて、品行を愼み、學問を勉め、父母に苦勞をかけずして瑕瑾なく成業し、第一には親意を安んじ、第二には獨立して名を揚げ更に其子を教誨して反哺の恩をな忘れそかし、

然れども、世には往々不時の災變あり、時務の變遷あり、又親族中の不幸起りて、養成の資金に乏しく親たるものが、其親に受けたる恩を子に繼ぎ遺くる事能はざる例、隨分世上に多かるが、其子と生れし

もの丶不運不幸亦言ふに忍びず、去れど、徒に世をなげき時を怨むも、畢竟詮なかるべし。極少年にては、修學の道に入る事誠に覺束なけれども、幸に小學校卒業の比に及びし身にてあれば千辛萬苦、百難に耐へて、或は親戚に頼り、或は父母の友人に謀り、可成丈けの援助を乞ひ、赤心もて學路の嶮岨を蹈み踰えて、志望の嶺巓に達するは實に畢生の大事なり、

幸にして順次高等の學校に入るの道あれば、入學の鴻益此上なし、例令其道を得がたきも七顚八起、一心に英氣を勵まし、粗衣惡食に甘んじ、衆俗を凌ぎ、身を勞し、心を練り、日夜油斷なく嚴暑祁寒暫しも初志を棄てざれば終には世に膺揚するの時節到來し、却りて彼富貴の家に生れ、優柔無爲に生ひ立ちたる輩の上に傑出して、鍛錬したる技藝を實際に試むるの氣運に逢する事ゆめ疑なからむ、

抑人の學に就くや、專門の學を修むる事の必要なるは、今更申迄もなし、其專課を擇ぶに、各人の天資によりて斟酌し、所好に隨ふを善しとすれども、尙ほ過去に鑑み、將來を察し、世運の變遷を洞觀し、野にあるも、官に就くも、己が宿志を伸べ一身を安んずるの路を計る事を忘れず、父兄に問ひ、先輩に謀り、出身の便途に向ふは、生涯損益の分る丶所なりと知るべし、

人の行く道は、數々あれど、少時邈然として志を立つる事なく、又艱難に耐ふるの勇なければ、終生富貴の樓閣に登る事を望む勿れと云ふ、

師走十題 （其八） 風呂敷の破れより一つ密柑哉



照りにほふ唐紅のもみぢ葉は
幾夜の霜を經てやそめけむ

銚子紀行の一節

理學博士　坪井正五郎

茲に掲ぐるは、この夏坪井博士が五人連にて、銚子地方に旅行せられ、貝塚掘と海岸巡りをせられた時の分擔記であるとの事である、本誌にとて乞得た時には、文藝欄〆切の後であつたが、その文のあまりに面白ければ、次號にせんも惜く、この欄に掲載することにしたのである（記者）

發端から松岸停車場下車までの記事

明治三十八年七月二十四日、休暇中では有るが、教室關係の雜務を行ふ日と極めて置いて月曜日に、相當するので、午後出校して見ると、松村瞭、柴田當惠、三好男の三君も來合せて居て、余山の貝塚へ行つて見ようかとの相談中、余山とは千葉縣海上郡海上村の大字で、曾て野中完一君も行かれた所では有るが、未だ大發掘は試られずに有る上、新に大きな土器を掘り當てたとて、地主信田傭之助氏から之を大學へ献納されたので、汽車の便は有り、餘り遠くも無い所だから、出掛けようでは無いかと云ふ議が生じたのである、僕も近日何處かの海邊へ子供を連れて行かうと思つて居た所、其遺跡は銚子の附近で有るから、海邊巡り旁々發掘に行くに丁度好い僕も小供連れて同行しよう、諸君に差支無くば明日直ぐにでも行かうぢやないか、夫れ宜からうと云ふので評議一決

明くれば二十五日、雨でも構はぬと云つて居たのに降らず照らずの誂へ向き、兩國停車場に寄り合つて乘り込んだのは午前八時發の汽車、煙草好きの三好君マッチを持たずに來たので、はがゆがる事水族館へ連れて行かれた猫の如し、千葉の停車場で漸く

マッチ賣りを見付け、買は買つたが、箱ごと隱されたり、火を吹き滅されたり、烟草をけなされたり、同行者にさん／＼惱まされた揚句、かくしから取り出したシガレットに火を移して、スッパスッパ遣つた所、如何にも美味さう、漫ろに嗜好品の人類を支配する力の大なるを感じつゝ、こちらも敗けずに用意の菓子パンを味ふ、乘合の一婦人我々に向つて、『成東へ行くのでございますが、何處かで乘り代へなければ成りませぬか』と問ふ、誰で有つたか時間表をズット見て、此汽車は銚子迄乘り代へ無しですから、成東行は此儘で好いのです』と大に汽車通を振り回はしたのは宜いが、佐倉へ着いたら『何とかは後ろへ』と云ふ聲が聞えて、何だか周圍の樣子が變、彼の婦人も驛員の注意に從つて下りて行く、汽車通の言葉に安心して居た者、及び汽車通彼れ自身もチト不安心に成つて來て、驛員に探ねて見ると、銚子線の人々は後の客車へ移る樣にとの事、急いで引越すと、間も無く列車は二分され、今迄乘つて居た客車は其前の者と共に他へ走り去り、取り殘された客車の前には、別の機關車と客車とが着いて、銚子の方角へ進行を始めた、うつかりして居ると見當違ひへ連れて行かれる所、海流に從つて人類の分布したのも、先づ斯う云つた樣な譯だらう、

我々の乘つたのは三等車、これ必しも經濟上の爲では無い、成るべく多くの人を見ようと云ふ學術上の意味も有るのだが、乘り代の時忽ち其功が顯はれた、我々は新に乘つた車の中に、若い啞の男の居るのを發見したので有る、其出で立ちは和服でゴムカラ、携帶品は風呂敷包と木札、此木札の大さは短冊を二つに折つた位で、書いて在るものが余程妙、先づ一番上に國旗と聯隊旗の交叉が寫して有つて、其下に齒莖と齒が畫いて有り、下に筆太に入齒業と書いて有る、口の利けぬ物が口の中の療治をして口を糊するとは奇と云はざるを得ない、傍の人、からかい半分頻りに手眞似をする、啞の方では所謂お手のもの手を動かす事甚し、謀らず仕方言葉の實例を見、更

に精い觀察をしようとする中、或る停車場へ着いたらば肝腎の唖は下りて仕舞つた、惜い事、惜い事、暫くは彼方に意を引き着けられて、唖に等しい無言の有様で有つた我々、再び口舌を動かし出し、又も喫煙攻撃が始まつたので、三好氏は爲に煙にまかれ終に歎聲を發して、樂みの妨げをする鬼の様な人達だ』と叫ぶ、やがて飯岡に着、此所で乘込んだのはデップリした洋服の紳士、所謂鬼の樣な人達の前に鐘馗髯嚴めしくドッかと坐を占めた、

近村に有ると云ふペスト患者の事が元と成つて、話は夫れから夫れへと傳染、其口振りで此地方の人と察し、余山への道を髯紳士に問ふと、『何しにお出でなさる、貝殻塚でも見るのですかナ』と云ふ、さうです貝塚を掘つて見ようと思ふのですが、地主の家へ寄る爲には、猿田で下りるが宜いでせうか松岸で下りるが宜いでせうか』と重ねて聞くと、『猿田から近道も有るが、松岸からの方が分かり易い、今に目印に成る松の大木が見えるから敎へて上げませう』、とて話は古物遺跡の方に移り、果は曾て何某が土器を得て、大學人類學敎室の坪井博士に送つて禮狀を貰つた抔と云ふ言葉が出た、斯う成ては名乘らずに居る譯にも行かず、名札を渡し、且つ同行者を紹介する、『ア、あなたが坪井さんですか、私は銚子の醫者で』と云ひつゝ、取り出したる名刺を見れば露仙堂醫院長柳堀喜一郎、道理こそペスト談が精しかつた、聞くならく鐘馗は疫病の鬼を驅る神なりと、院長の美髯故有る哉、さるにても露と云ひ、柳と云ひ喜と云ふ、其稱への優しさよ、談話益々佳境に入り院長先づ一服とシガレットを燻らさうとしたがマッチを持たず、同病相憐む三好氏『これを』とて彼の千葉仕入の箱を渡す、シュッと擦つてスッパと吸ふさすがの鬼共、鐘馗髯に向つては惡さを爲さず、一點の火も響應の一つ、お蔭で同行者迄も面目を施す邪魔した事は煙に成れ、煙に成れ、『余山近くには相當の宿屋は無いから、銚子へお泊りが宜からう、所子の高安は堅い旅店です、其處で好ければ直に沙汰

を爲て宿させませう、さうすればあなた方は余山へお出でなさつて、ゆつくりお着きでも差支へる樣な事は有りません」と、柳堀氏の親切な注意、厚意の程を謝し、何分宜しくと賴む中、人に好く似たけだもの、猿田の驛もいつか過ぎ、汽車の左の窓越えて、遙かに見ゆる大木は、正しく遺跡の松ぞとよ、之を目掛けていざ行かん、下り立つ驛はいづこぞや、待つ間程無く松岸の停車場にぞ着きにける、

時に正午十二時、我々五人は此所で下車直ちに余山の貝塚に向ひ柳堀氏は銚子へ、

（此次に貝塚發掘、及び海岸回りの記事あり）

結末一節

銚子出立記事は、三好氏受け持ちの筈で有るが、同行者はまち〳〵に此地を去り、子供連れの僕一番後に立つ事に成つたのであるから、緒言發端を書いた因緣も有り、旁結末として此所に數行の追加をする事にした、

扨も其後松村、柴田、三好、の三君は海水浴場曉鷄館で、柳堀幸作君及び僕等親子の三人に別れ、三時四十五分發の汽車に乘つて歸京しやうと云ふので、最早三時が鳴つたにも頓着せず、一里餘の道を走り通さうとの意氣込で、銚子停車場に向つて出掛けられた、此方の三人緩りと休んだ上、歸途に就き、健脚家の噂を仕ながら歩を運び、途中で柳堀氏に分かれ二人で旅宿に近付いて見ると、我々の座敷の窓に手拭だのシャツだのが掛けて有る、ハヽアと思つて階子を上り座敷に入ると、思つた通りのハヽアにて時計の針と競爭した三君は、終に優勝者たるを得なかつたのである、不覺を取つた主なる原因は、行き掛に預け物をした家をば歸り掛けに見失つたのに在るとの事、松村氏は終列車で歸京と聞けば、忙しい中で方角違ひ、一人競爭と云ふ珍無類の運動を行はれたとか、他の二氏は『今夜は利根川夜船、先づ八時まで休息して先刻の草臥を癒やさう』と云つた所は大層うまかつたが、下婢が聞いて大笑ひ『東京行の船の出るのは、朝の八時です、夜船に乘つては土

浦へ行つて仕舞ますよ、マア隨分です事子ー』
是等の出來事は人事の兎角豫期に違ふ事を實驗的に示した、貴重なる雛形と認められる、犬吠遊覽後に於ける三君の行動決して犬骨に非ず、宿に一泊するとなれば、態々船で還のりをするでも無からう、又一時一刻を爭ふと云ふ程の急用も無いから、破格の早起をするにも當らないと云ふので、柴田三好の兩君は二十八日の二番汽車で出發された
僕は地方有志者の望みと云ふ事で午後まで引留められる事と成つた、午前柳堀幸作君の案内で、濱口氏の今印醬油製造所へ行つたが、夏季汗を絞りつゝ醬油を絞る者、仕事に熱中しつゝ麥を熱する者を見ては、世渡りの辛き事を感せずには居られなかつた、宿に歸り晝食を濟ませ、暫く休んで居ると中學から向ひの車が來た、即ち手荷物及び活きた巾着と合ひ乘りで同校に趣き應接所で所藏の石器時代遺物數點を見、講堂で『人類學要領』を講じ、三時四十五分の發車に遲れぬ樣にと早く切り上げて急ぎ停車場に至る、此日の聽講者中には彼の韓國留學生の一行も加つて居た、遊び半分に來た者が講演をすると云ふのもだが、銚子で朝鮮人に人類學を聽聞させる杯とは實に調子の狂つた話し、中學校長、中學生徒總代及び柳堀氏父子の四君は、態々車室前まで送つて來られ、我等の爲め種々意を用ゐられた、最早發車の時『どうぞ又』『いづれ又』『さやうなら』『さよなら』と窓の内外で交換する中に、今迄目の前に在つた停車場は、遙か後の方にそさつて行つて仕舞つた、

微公夫人

文學士　井上如水

歐洲近世政治家夫人の雙美聯壁として景仰され、去る明治二十五年十一月不歸の人となりし、ビスマーク夫人の略歴を記さん、
ビスマーク夫人は、獨逸ポメラニアの住人ハインク

ッヒ、フオン、プットカムメルの女なり、千八百廿四年四月に生れ、千八百四十七年七月二十四才にしてビスマーク公に嫁しぬ、當時ビスマーク公は壯年氣鋭、種々の亂行暴動を以て「狂ビスマーク」の名を博せし學校の生涯を出で　未だ久しからず、財産はなく、唯膽力を有し、名譽はなく唯惡名を有し、前途の見込はなく、唯血鬪好血鬪の達人として有名なるのみなりき、左れば此「狂ビスマーク」がプットカムメル氏の美少女を娶らんと欲して、禮儀作法を餘所にして顧みず、ツカ〱と玄關より押上りて應接間の椅子もひしぐばかりツカと座し、大音に求婚の申込をなすや、禮儀作法を重んじ靜粛以て家を立てたるプットカムメル氏夫妻は其愛女を斯る男に與ふるを欲せざりき、然るに其女フローラインは彼無作法なる無鐵砲なる無財産なる無聲名なる荒れ男に將來大に暢ふ可き萌芽あるを見て、深く之を愛し切に父母に請ふて終にビスマーク夫人となりぬ、而して夫妻相携へて新婚旅行をなしたる其折なりき、ビスマーク公が初めて日耳曼一統の明君となるべき孛王維廉一世にヴェニスに逢ひて、相語る數時間日耳曼の形勢を開陳し、孛國の前途を痛論し、大膽の識見深く王の心を動かし、こゝに君臣二世の契の原を起したるは、斯くの如くにしてビ公は共に平和健全の家庭帝國を築き起す可き良妻を得、斯くの如くにしてビ公は共に三國同盟の盟主たる佛國蹂躙の大鐵脚たりし、日耳曼帝國を築き起す可き明君を得たり、

吾人をして此より四十有七年間の家庭の歷史を數言を以て語らしめよ、若し一々に其變化を叙し、一々に夫妻の間に往復せし手書を掲げ、一々家内の些事屑件を記さむには、日耳曼帝國一統史程の紙頁を費やす可ければなり、何となれば最近の日耳曼史は即ちビスマークの實傳生歷にして、ビスマークの外にあらはるゝ言語擧動事業形蹟はまた實に家庭の消息と相渉るもの多ければなり、

彼新婚の年より年は次第に轉じ行きぬ、當年の「狂

ビスマークは多望なる孛國國會の議員となり、外交官となり、進んで孛國首相となり、外務大臣となり、丁抹征伐の原となり、討澳戰爭の主動者となり佛國蹂躪の大鐵脚となり、日耳曼一統帝國の大宰相となり、伯林會議の盟主となり、歐洲平和の掌握者となり、三國同盟の柱礎となり、維廉二世より追はれてフレドリッシーヘーの閑居に憤慨する老臣となり、再び新帝と和して隱然黑幕宰相となり、今や白髮頹然たる老翁となりぬ、而してビスマーク夫人は終始一の如く變はらざりき、夫人はビ公が日耳曼帝國を築き起したるに劣らざる注意と思慮とを以て其小帝國を築き起せり、ビ公の一生は大波瀾の生涯なりき、此大波瀾の生涯に一處の靜かなる港ありき其は公の家庭なりき、夫人は公の爲に此港を築くが爲に一生を犧牲となせり、

周到なる注意、眞實なる愛、整頓せる秩序、春の海の如く靜かなる靜穩、夏の風の如く凉しき趣味、愛す可き子女孫、愛す可き幾頭の巨獒、命程に嗜める煙草、馬鈴薯の葉に朝露置きて綠の草に牛羊臥し林外に粉挽水車の軋々響きて青天綠地に俯す屋敷田圃香しきビール、燒きたてのパン、新鮮のバタ、自から狩りし鳥獸肉、外交と云ふものなく政略と云ふものなくピストルの音も文書の煩も達せぬ快眠、興來りし時の將棊雙六、興去りての閑行遊歩、此等は實にビ公の身神を一新し其精力を新鮮にし、幾多の大運動大策略戰場の大雄闘議會の大演說を醸さしめたる處の暖室にして而して皆是れ夫人の賜ものなり議院に火出るばかり討論して、歸れば凉風吹き渡る家の待つあり、血腥く彈飛び劍閃く戰場より歸れば軍の神の見舞はぬ平和の帝國あり、幾多の暗殺は之を脅かしぬ、家には安全なりき、出でゝ疲れぬ、歸つて安息ありき、歐洲列國皆敵となり腹心の者も背くことありき、死もまた更ふる能はざる伴侶は門に倚つて其歸るを待てり、日耳曼帝國の基礎を据ゑ一時歐洲の運動機を掌に握りしビスマークの大功を認むれば、ビスマークをして十分にビスマークたるを

得せしめしビスマーク夫人の功も亦決して沒す可からざるなり、

敵多く、事多く、激怒し易く、壓制なし易きビスマークを助けて四十餘年家に波瀾立てしめざりしビスマーク夫人は、亦た平常の婦人にあらざりき、ビ公戸外の公生涯は、機略譎詐を厭はず、盡く黄金文字を以て書くべきことのみにあらざりき、獨り其家庭に到ては、清廉健全、絶好の模範とす可きものありき、蓋し夫人が一身を家庭の整理に委ねたるの致す所にして、亦以て其人となりをトするに足る」

四十七年の久しき、ビ公は實に一日の如く其夫人を愛し來れり彼は日耳曼國を思はざりし日なかりし如く、亦其夫人を思はざるの日なかりき、要務の爲にせよ、遊樂の爲にせよ、數日妻と別るれば、公は即ち手翰を飛ばせり、戰地よりも書き送れり、議院よりも書き送れり、普佛媾和條約に記名したる筆を以て「佛國小說一部御送り可被下候」と書き送りたる者も公なりき、鐵血宰相と云はれながら「小生は小形の聖書を手にして○○氏の不信仰を駁じ候」と書き送りたる者も公なり、曾て夫人を伴はずして短かき休暇旅行をなせし時、公は書き送りて曰く、御身を伴はずして樣々の奇麗なる景物を見れば、余は良心の安からざるを覺ふ」と夫妻の交情見る可きなり、

ビスマーク夫人は單に麵包の世話洒掃の支配にとゞまる婦人にあらざりき、夫人は極めて怜悧にして頓才あり、記憶力非常にして、珍らしき談話の技倆を有したり、唯夫人は率直にして、人の是非を認めて之を公言するを制する能はざりき、夫人をして佛國にあらしめば、蓋しサルーソンの明星として、幾多の政治家を動かし、從つて政機を動かす所謂政治的婦人なりしや知る可きなり、然して夫人自からも斯る名譽心なきにあらざりき曾て英國の某女史に書き送りて曰く、妾は御身等の國に生れざりしを憾む、何となれば此國にては自由に婦人の運動す可き餘地なければなり」と。夫人實に斯名譽心ありき、然れ

ども日耳曼帝が「日耳曼の婦人は皆皇后に倣つて三者を修めむことを要す、即ち教會、小供及家政の料理」と言はれし如き日耳曼にありて、殊にフレデリッキ皇太后の政治に干繋せるを蛇蝎の如く忌みしビスマーク公の司どる家にありては、夫人が斯る名譽心を滿足せしむ可きの機會なきや明らかなり、夫人は之を知り、而して命に安んせり、夫人は家を以て國とし、家政を以て國政となしぬ、其技倆其心力、此等は皆其夫の生涯をして成る可く平和に愉快ならしめん爲に盡されたり、而して成功せり、ビスマーク客と語りて談其夫人に及ぶ毎に常に云ひぬ、余が吾妻に負ふ所の如何に多きか、余は之を口にする能はず」と、是れ眞に過言にあらざる也」

◎婦人雜誌記者倶樂部　去月十五日例會を本郷區竹町東京裁縫女學校内に開會したるに、出席者多數にして、幹事中川愛氷氏の發議にて、次回には、同會をして單に娛樂的倶樂部たらしめずして、活動的團體と爲すべきことを協定散會したり

英照皇太后の御淑德

龜谷聖馨

去る三十年一月十一日を以て、崩御させ玉ひたる、英照皇太后の御淑德は、國民一般の知悉する所なるが、同陛下の御淑德にして、未だ世人の知らざるもの二三を書綴りて世の女子方の修德の資に供せんとす、

◎陛下の御淑德　嘗て孝明天皇の御時、禁裏に奉仕せし某老伯より洩れ承るに、陛下の未だ先帝孝明天皇の皇后となり玉はざる前、即ち九條關白家に居玉ふ頃は、幼き御身にておはしますに、絶て美服をば着し玉はず、他の攝家、淸家の姬君は、多く時樣を追ふて、美しき衣服器具を好むに引替へ、陛下には此風を好ませられず、常に質素なる御衣服を用ゐ玉ひて、ひたすら御心を和漢の史籍に潜ませ玉ふがうへに、佛教の經典にも御目を曝させ玉ふをもて、

當時雲上人の姫君中、御學問の博きこと、御婦德の高きこと誰とて並ぶものなかりきと、今の世の女性中には、ま丶學問や婦德より、美服を好みて徒に外見を衒ふ人多し、此人々に希ふ、少しく陛下の御儉德を仰ぎ奉りて、自ら省み改め玉はむことを。

◎陛下の御見識　是は陛下が御年十二歲にして九條家に居玉ふ頃なりきと、十一月の頃とぞ覺えし、或る日侍女共、庭上に霜枯れたる牡丹の數株を打見やりて云ふやう、牡丹は花の王ともたとへ、國色天香とさへ云ふなるに、アノ樣の醜くき事こそと打笑みければ、陛下には之を制し玉ひてのたまふは、サハ云はぬものぞ、榮枯盛衰は世の常にて、此花今は枯果たるやう見ゆるも、また來む春に彌榮えて美しき花を咲出なむとて、即座に

春くればまたもさかえん深見草
　　しもかれの間も樂しかるらむ

と御歌遊ばして誡め玉ひければ、侍女共は陛下が御幼少にして斯くも天地の秘奧にまでも通じ、能く草木の情をもしろしめすを嘆美し奉りしとぞ。

◎陛下の御信仰　陛下の御信仰の御心は、御深厚にまし〳〵けり、皇祖、皇宗の御靈を御崇敬あらせ玉ふは申すも更なり、佛敎をも御尊信遊ばされ、釋迦、彌陀、觀音の尊像を祀らせ玉ひ、殊に大乘の奧妙なる華嚴・法華の兩聖典と觀無量壽經とは絕えず御看誦遊ばされ微妙の玄理をさへに御會得おはしまして御信心は至て御堅固におはしませしと申す。堅き信仰もなくして心は宛から浮草の如き今の女性は陛下の御美德を仰ぎ奉りて、常に堅き信仰を抱持せられんことこそ望ましけれ。

元祿風俗

久保田米齋

元祿時代の衣裳模樣を畫いたものでは、其頃の浮世繪は別として、女用訓蒙圖彙、小倉山色紙模樣、其他二三の版本はあるが、それは唯上着だけの圖ばか

りである、所が西鶴の小説を讀んで見ると、處々に頭の上から足の底まで詳しく書いてあるので其時代を研究するのに大に參考となるのであるから、目下元祿風流行の折柄、その著作中に見えたる風俗を茲に拔萃するのも、强ち無駄な事では有ますまい。最も西鶴は寛永十九年に產れ、元祿六年に歿したのであるから、嚴格に謂へば彼の著書中のものが悉く元祿風俗であるとは斷言し難い。しかし今自分がこゝに書いてみやうと思ふのは、元祿を中心として其前後に行はれた扮裝を列擧してみたいのでありますから、其意にて大目に見て戴きたい。

まづ其頃の婦女の風流な扮裝はといふと、白綸子の襦袢に、裏表共紫鹿子にした下着に、菖蒲八丈の紅の隱裏を附けた、上着を着て、並べ縞の大幅帶を締めたのだそうだ。尤も其下着の鹿子も紫と限つた譯はなく、紅のものも有つたのだが、とにかく、それが流行つたのである、それから此他の着附といふと左の通りのやうなものであつた。

(十八九の娘)福島絹の空色なるに墨繪の山水模樣朱印の紋附、曙染の裏をつけ、玉蟲色綸子の下着黃鬱金ひつかへしの襦袢。

(十六七の若奥樣)鼠繻子に百羽雀の切附模樣に、紫の地なし鹿子の下襲。黃無垢の肌着、段染の一幅帶。

(十四五の娘)玉蟲色の繻子に孔雀の切附の上に、其模樣の透けて見ゆるやうに、巧に唐糸の網をかけ。肌着には白繻子に墨形を置きたり、十二色の疊帶。頭に金簪を用ひ五分櫛をさし、素足に紙緒の穿物。

(二十歳位)薄玉子色地に承平の染紋、花柴の千種がへし、虹縞の糸屋帶を締め。

(二十七八の華奢なる女)黑羽二重の三枚重に紅の裏金の隱紋をつけ。唐織寄縞の大幅帶。髮の投島田に平髷をかけ。對の挿櫛。

(三十四五の女)樺つめのひつかへしに、模樣は本繪にかゝせ、左の袖に吉田の兼好法師が燈の下に

書見のさま寫したり、下着は淺黄絖のひつかへし
白絖の胴着、敷瓦じま折天鵞絨の帶。薄色の絹足
袋、三筋緒の雪駄。

あまり目立たぬ風俗としては
（三十四五の未亡人）紋無しの鶯茶の上着に紫鹿子
の引返し裏の下着。または着物三枚ながら黑のひ
つかへし、黑糸の紋。茶もうるの帶。

といふのもあつた。

此他年配は分曉らぬが、あら縞に海松茶の裏を附け
菜種色（黄色ならん）の貫物の下着を襲ね、白綸子
の中幅帶をしたのや、黃八丈の裾黄水車模樣をつけ
たなどもあつた。

女﨟達の高貴なる所にては
紫縮緬にて靑海波の模樣に、銀にてほの字を切り
拔かせし五所紋、紫つゞれの帶を締め其縫目の隅
には鉛の鎮を入れたり、足袋は白綸子に紅の裏附
にて釦懸、ばら緒の雪駄。

などであつて、又變つた好の所謂意氣向では、紫色
の惣鹿子のその尖を一つ〳〵紙燭にて焦し拔いて、
紅の中綿が穴から見ゆるといふ贅澤なことも實際し
たのであらう。夏向で若い女の方では、白地の帷子
に蘆に蟹の模樣を染込み、石疊の幅廣帶をしたのが
あり、年増の方では、水色の絹帷子に同糸に幸菱
を微に縫はせ、あつち織の中幅帶を締めたのもあつ
た、夫で此等の衣裳の仕立はといふと、腰に綿を入
れず、裾廣がつて尻付大きに平たく見える好みとあ
つて、袖は二尺五寸が當世仕立だとある、帶は初は
六尺五寸と限られたが、遂に一丈二尺ゝまでなつて
心無しを伊達とした。

男の方では華奢な風俗といふと、
千筋染の黃無垢の下着に黑羽二重の紋附を襲ね、
薄樺色龍門の帶に、羽織は紅鳶色に八丈紬のひつ
かへし裏。

左なくば
卵色の縮緬の紋附、薄鼠の紛織、黑呉絽服綸の羽
織、裏には縞天鵞絨をつけ

とある。そして此時代には男子が三枚袷を着ぬやうでは幅がきかなかつたさうだが、成程この三枚袷といふ好みは面白いやうに思ふ。これ等は現今應用せらるべきものでは無いか。

右に述べたのは洵に其一班に過ぎぬけれど如此並べて書いてみると、當年の流行が大略察せられる。即ち色合では、黄色、紫色が主に歡ばれたやうだ。未だ書く事は茲に盡無いが、それは又他日に讓ることにした。

閑窓情話

愛氷散士

思ひやり

月も凍れる冬のある夜、理學博士田中正平君を訪うて、實に快心の話を聞いた、それは博士が世界の耳目を聳かした得意の音樂談ではない、君がこの日一つの買物の爲にうき身をやつされた話である、君は下婢の寒天に衣を洗ひ、それを絞る冷たさを察して、その苦を助けんと思ひ、西洋にては洗濯物の露を絞取る器械、日本の綿繰器械の如きものがあるがそれが一つ位舶來して居らぬ事はあるまいといふので、上野から車夫に空車を曳かせて、兩側の金物小間物店を、鐵道通り新橋まで聞歩かれたが、どこでもお生憎さまであつた、新橋際のある店では、中々氣の利いたもので、先生それは兎ても日本には來て居ますまい、新調成さつては如何です、と商賈にはなか〳〵抜目なし、然らば價はと聞くと四拾圓といふ見積り、そこで四拾圓より差當つて面倒なのは、君が圖を引いてやらねばならぬことである、君はまだ芝に二三軒心當りがあるので、それにもなければ新調と決心せられ、又テク〳〵歩きを試みられた、然るにそこにも無い、いよ〳〵失望の鼻先に、一つの金物店がある、到底駄目とは思ひたれど、行掛の駄賃に聞いて見ると、無造作にこれもお生憎さまと

云ふ、すると、その家の細君らしきが、奥より聞付けて出で、そのやうな物が藏の隅にあるではありませぬかと云ふ、主人はさうでないと首を振る、君は兎も角も見せて貰ひたいと云ふ、結局見るは放樂、案内せられて見ると、その器械は幾年かの塵を浴びて、一見物の役に立たぬやうであつたが、所持のハンカチーフにて試驗して見ると、それが及第したものであるから、雀躍して價を聞けば、客の内兜を見すかして掛引したのが金參圓、君は直切る猶豫もなく早速空車に用を命じて、先づ新調の世話もなく濟んだとの事である、

君が今日ほど愉快な事はなかつたと冒頭があつての話が右の次第で、之を聞いた愉快も決して君に譲るまいと思うた、なんと奥床しい話ではあるまいか、當世の紳士と稱する人に、このはなしを煎じて飲ましたいものである、

情の衝突

辯護士石橋友吉君の辯護で、裸體畫事件と惟任光秀君に對しては、感を同うするものである、光秀君に秀吉君ほどの横着な根性があつたらば、今少し大きな仕事が出來るのであるが、天下を取らうなど〻は刷毛序で、決して初めからの野心ではない、殘忍酷薄なる織田信長君の息の根を止めて仕舞へば、それでよいので、併し本望を遂げて見ると同輩に其跡釜を稱はれるも忌々しいから、三日でも將軍になつて居つたのであるが、もとより當初其の覺悟でなかつたから、準備が整うて居らず、山崎の一敗、猿冠者に名を成させたのである、其の信長君を失うたことであるが、これは濃情の士と、薄情の士との衝突でこの二人の衝突を、單に君臣の殺伐とのみ見るは酷である、甚しきは光秀君が其母を横死せしめたと誣ゆるものもあるが、これが光秀君の貧乏鬮を引いた所で、後の盲目史家、君が主殺しの罪を賑やかにするために母殺しを加へたのである、主といへば主、寧ろ國の爲に不忠の臣となつて、一時主君としたての不遜なる大不忠臣を滅したのである、この以外の

天聽に達せし孝女節婦（伊勢の人）

節婦井上さい

資性温厚篤實、明治三十四年陸軍後備歩兵一等卒井内林三郎に嫁し、二女を擧ぐ、家素より貧、夫を扶けて他人の田畑を小作し傍ら薪炭を採取して、僅に一家を支持す、夫に仕へて貞實、父母に仕へて孝順にして、一家和熟し、歡聲屋に溢るゝの觀あり、日露戰爭起り、客年六月十九日夫召集の命下るや、家事の爲に後顧の念あらしむべからずとし、毫も爲めに窮乏を念頭に置かざるものゝ如く、種々に夫を慰藉し、以て快よく征途に就かしめたりき、然れども家計上杖柱と信賴せし夫の不在となりしかば、一家は忽ち活路を失したるにぞ、親戚知己の之を憐み救助せんとする者あるも受けず、又村内に於ける軍人家族救護團體よりする、一般救護を仰がんことを慫慂せしものあるも、サイは聽かずして曰く妾に救護を與へらるゝは、誠に謝すべき事柄なるも、出征中の良人之を聞かば、却て心を家事上に累はし、爲めに忠節を缺くことあらば、國家に對する職分を如何せん、又家に在る兒童と雖も、他人の救助を受くるを聞かば、心怯れて萬事人後に墮ちん、母として之を見るに忍びずとて、出でゝは小作を勤め、入りては老親を扶け、幼兒を撫育し、以て只管良人の報効を祈り、節操自ら守り、其公課の如き未だ一回だも滯納せしことなきのみならず、率先して納付する等、篤行洵に軍國婦人の龜鑑なり、（度會郡穗原村大字伊勢地井内林三郎妻三十二歳）

節婦石田ちへ

明治十年三月石田家に嫁す、家素より饒かならず、明治十七年良人貞茂布哇に渡航す、於是ちへ羸弱の身を以て、單身家事を擔當し、晝は山に樵り、夜は藁細工を爲し、以て老母と二子を養ひ、毫も節操を變ぜず、明治二十七年貞茂庶子を携へて歸國し、別に家を構へて住す、然もちへ些の妬情なく、其の子を遇する頗親切也、後老母疾に罹る、ちへ日夜看護衣帶を解かざるもの數旬、老母意を安じて永眠せり、明治廿四年三重縣之を賞旌し、特に金員を下付す、後貞茂再び布哇に赴きしも、ちへ善く家を守り、前後通じて廿有餘年孝貞共に全し、（鈴鹿郡殿下村阪下平民貞茂妻四十二歳）

節婦西村小さよ

資性温良恭儉にして、品行方正夫に事へて貞淑を守り、常に婢僕を使ふに慈に、明治二年十月西村源七に嫁し、幾干もなく故姑よし、中風症に罹り、身体自由ならず、其病蓐に侍して晝夜看護に怠りなく、十四年間の久しき、終始變りなく、只母の心を迎ふるを以て無上の樂となせり、從來家計貧なりしも、今は漸く資産を得たるも、母に對する孝養は、昔日の如く、明治廿四年四月廿六日三重縣知事より、賞狀及金員を下賜され、又同十一月廿一日淨土宗本山知恩院よりも、賞狀を受けり（飯南郡柿野村大字下仁柿平民源七母六十才）

孝女野村まさえ

幼時母を喪ひ、父直吉に事へ、傍ら幼兒マツを撫育す、父直吉大工職を業とするも、家業より赤貧、辛うじて其日の生計を營むのみ、然るに去る明治二十八年、直吉は圖らず僂痲窒斯を病み、右脚の自由を失し、遂に其業を營む能はざるに至る、爾來マサエは女の手一つにて父を哺み、幼兒を養ふの悲境に陷ると雖も、而かも其性質直勤勉を以て里閭に聞ゆ、去る明治卅二年人の勸めに依り夫を迎へ、一女子を擧げしも、故ありて破鏡の止むを得ざるに至る、其後マサエは貧困の家に在りて、克く老父に仕へ、兒女を養育し、身には常に襤褸を纏ひ、日傭稼を爲して、僅に賃金を得、又は山野に出で、薪柴を採取し、風雨積雪未だ嘗て之を廢せず、以て公租及生活の資に充つ、而して父直吉は性來酒を嗜むを以て、日々少量の酒を購ひ返りて父に侑め、其心を慰め其孝養を欠くことなし、如斯すること茲に十有餘年毫も倦怠の狀なく、會々夫を迎ふるを勸むる者あるも、自ら期する處ありとてこれに應ぜず、只管孝養に努め又貞節を守りて一意家事を營み至孝郷黨に隱れなし

（度會郡一ノ瀬村大字柳平民直吉長女）

孝女井上たつ

資性篤實温良人に接する謙讓、明治九年十二月井上文助の後妻となるや、當時姑サトは病痾に罹り、全身不隨となり、自ら起臥する能はず性急にして病苦煩悶の餘り喜怒節なきもタツの之に事ふること頗る柔順なり乃ち浴を取らしむるに、自ら抱持し箸を採りて食を侑め、姑の病褥に在るや、冬は温房に臥せしめ、夏は涼風を得せしむるに努め、時に其意に叶ふの談話を爲して鬱を慰し夙夜姑の身邊を離れず、常に其心を迎ふるを以て勤めとし、尚及ばざるを恐る、斯くして姑の歿するに至る二十有餘年間一日の如く、敢て渝らず而も其姑に事へて孝なるのみならず、克く先妻の子及夫の弟姪等の同居者を撫育し、尚ほ夫に仕へて貞操堅も內顧の憂なからしむ、爲に一家和氣靄然たり、明治卅四年三重縣は德行を表旌し聞郷亦其の德を慕ひて祝祭日等にはタツを學校式場に招請し、兒童敎訓の模範と爲すに至れりと云ふ、以て其貞節を推知するに餘りありと謂ふべし、（多賀郡錦生村大字安部田平民タツ五十才）

孝女宮本つぎ

資性温順身を持する方正なり、父音松は鍛冶職を業とするも、身虛弱にして十分業務を執ること能はず、赤貧洗ふが如し、加ふるに明治廿五年頃音松病に罹りて業を廢し母も亦不治の難病に罹り、病床に呻吟するに至りしかば、家計益々貧窮に陷り、ツギ幼弱の身を以て刻苦勤勉双親を看護し、傍ら他人の使役に應じ、些少の賃銭を得て、生計を支持すること十年の久しき、未だ嘗て一日も倦怠せず、以て今日に至れり、而して今や年長するに際し、人の婚姻を申込むものあるも、父母の病未だ癒えず、別に之を扶養するものなきを以て、辭して受けず、於是郷里皆其の至孝を嘆稱して措かず、（度會郡穗原村大字内瀬平民音松二女廿二才）

以上は過ぎし日　天皇陛下伊勢に行幸あらせられたる砌、天聽に達したる孝女節婦なり、人道地を拂ふ如き感ある今日に於て、か〻る德行美事の埋もれずして、こゝに千歲の龜鑑となれるは、いと〳〵喜ばしきことならずや、聖德草木にも及ぶ、たふとしとも尊し。

光秀君を見玉へ、其一代は濃情羨むべき事のみを以て滿たされて居るではないか、濃情の人、決して利慾の爲に事を擧ぐるものではない、

我が女子觀

山田豐彦

一

婦人は、之を物に譬ふれば、美麗にして且つ繁雜なる一の機械なり、その發條の如何に巧緻にして温良なるかを見よ、蓋し思半に過ぐるものあらん、夫れ男の發條たるや、勇壯濶大を以て特色となせども、婦人に於ては然らず、試に婦人に就いて觀察を下せよ、その風姿態度は幽麗靜淑にして、その判斷智感は鋭利なり、然れども、これ尙賞讃する價なしとせば、乞ふ就てその心情を詳察精觀せよ、吾人は其精巧にして緻密なること、顯微鏡的の眼を以てするも、よく視ることを得ざるに一驚を喫すべし、然り婦人の覺知力は光の如く早く、婦人の事物を透徹してその本質を知ること、殆ど本能力に類す、豈唯斯る些事に止まらんや、その感情や至りて切實濃厚にして、おのが一生涯を愛情の爲に獻じ、如何なる艱苦窮迫も喜びて之を受け、貞操は死を以て守り、勇烈は時に男子を凌ぐ事あり、嗚呼感に強く、情に厚く、苦を忍び、操を守るは、婦人の常態なり、吾人は婦人の斯る性情を觀察して、遙に造化の妙工に驚嘆せずんばあらざる也、

婦人の有する感化力は、社會の人心を繋ぐ大錨なり抑もこの力たるや、強ち婦人が姿色の美に基ゐするには非ずして、その德行の秀逸なるにある也、今夫れ風姿嬌艶にして人目を引き、楚々として人を動かすものありとするも、一度その德行の修らざるを聞かば、誰か之が爲に動かざるものあらんや、個人已に然り、况んや多數の社會をや、故に美色ありて德行なき婦人は大なる事を爲す能はざるなり、之に反

して、美色なしと雖、德行ある婦人は、優に人心を左右するを得べし、若し夫れ德行と美色とを兼有ずる者に至りては、その勢力實に當るべからざるなり知らず造化は斯くの如き婦人を造りて、果して何事を爲さんとする乎、

男子の性や剛毅活潑、婦人の性や溫和靜淑、されば男子は智と力とを以て身を社會に處し、婦人は情と愛とを以て身を家庭に處す、百難を排し、萬苦を忍び、その志す所に勇猛突進し、事に當りて快呼するは、男子に於て之を見、溫容以て夫を慰め、慈眼以て、小兒を養ひ、汲々として家政をとり、役々として事に飽かざるは、吾人婦人に於て之を見る、男子は、事業に失敗し、一時社會の表面を去ることありと雖も、日夜勢力を養ひ、勇氣を回復して、再び花々しき起業することあり、女子は、夫を失ひ、子に別れ、世に果敢なきうき身となるに當りて、失望のあまり斯世を辭し去ることあり、然れども一を贊し他を貶するを止めよ、二者の此の如きに至るものはその特性之を然らしむるのみ、然るに唯、事業の大小、行爲の壯柔をのみ觀察し、小評細論、長舌を弄するは、蓋し智者の事にあらざる也、

二

夫れ婦人は、その性溫柔にして、世の風雨に堪へざるが如しと雖も、時に男子を助け、大にその力を現はすことあり、實にや婦人は猶水邊の蘆の微風にそよぐものなれど、暴風雨には折れざるなり、男子が失望の深淵に墜落し、又如何ともすべからざる時に際して、婦人の助力、婦人の助言が、大に男子の精神を奮勵し、以て事業を大成せしむるの例、古今の歷史に於て乏しからざるは、既に諸子の知らるゝ所ならむ、故に吾人は、婦人を以て男子の最後の補助者となす者なり、

如何なる國、如何なる時と雖も、婦人は德義の基本にあらざるはなし、然れども、婦人の勢力の强弱如何は彼等が社會に有する地位の高卑大小に關す、婦人の卑しまるゝ國に於ては、その勢力も弱く、從ひ

て道義德操の敗壞も亦甚だしく、婦人の貴ばるゝ國に於ては、その勢力の大なると共に、德教の見るべきものあり、是れ蓋し造化が男子の才と婦人の德とを結合し、以て完全なる人生を組成せんとしたる也されば、男子は婦人を卑しみて、而して自ら高うすること能はざるなり、婦人の地位を輕じて、而して己れの地位を重くせんとすること能はざるなり、一を排するは他を拒むのみ、愚これより甚しきはなし試に洋の東西を見よ、一は婦人を輕じ、また自ら劣等の地位に坐し、一は婦人に地位を附し、また自ら好地位を得しにあらずや、自由と光明とを得んと欲する邦國は、宜しく婦人の地位をたかむべし、野蠻の陋習を蟬脫せずして、しかも文明の空氣を吸はんとするは、智菽麥を辨せざるもの丶所爲のみ、嗚呼奇なる哉婦人！彼女は蒲柳の姿にして、よく萬鈞の鼎を扛ぐる者にあらずや、社會の裏面にありて然かも表面を支配する大勢力たるにあらずや、男子の倒れんとするを助くる支柱たるにあらずや、

夫れ結婚は人生の一大變事也、何となれば、斯の如き婦人を男子に配合する夕なれば也、吾人は妻ある者は不幸なる能はざるを信ず、然りと雖、近時の所謂結婚なるものには、容るすべからざる醜態多し、吾人は他日時を得て之を論ずることあるべし、

浴場偶感

豫見道人

心は映らぬまでも常に鏡を見、心は洗へぬまでも常に湯に入るを、女のたしなみとまをすとかや、鏡に向ひては白粉の濃き薄きを問ひ、湯に入りては顏のみを光らす、斯くて人は見かけによらぬてふ言葉も生るゝなり、而して怒る時に鏡を忘れ、衣に垢つきて浴を忘るゝ如きは、あまりに好ましからず、鏡に見とるゝ人は知らず、よく湯に入る人は、其の居間のよく掃き拭きせられ、其の衣のよく洗ひ濯が

れたる如し、手足の重きは少きやうなり、人の身體をいたはるは、よく洗ひ磨くにありて、病の多くもこれによりて防がるゝやうに思はる、されば湯には毎日入るべし、湯を嫌ふ人は、働くことを嫌ふ人なり、

小人數の家に風呂立てんも大業なれば、物つゝましき女も、人ごみの中に裸體になりにゆき、見ず知らずの人と共に、湯屋の流し場に垢を落しに行く、男女混浴の時を思へば、今の女湯に誰羞かしき思ひする人はなけれど、昔を思へば、風を引く心地のせらるゝならむ、

我が知れる人に、其の生家の湯屋を營める者あるが、それの話に、女の品行を試さんと思はゞ、湯屋の盤臺で見るに如かず、流し場の眞中に腰打かけて、はづかしげもなく手拭つかふ人に限りて、世の中の耻をも知らぬが多く、隅の方に小桶かゝへて、何事を語るにもあらず、物しづかに手早く洗ひて、何時の間に上りたらんと思はるゝ如き人は、世の中に出でゝも物靜かに見上げらるゝよと、まことにさることなり、こゝまでにはまだ筆を執らんとする心も起らねど、この湯屋の女の浴みする場所に、慣れては左ほどに思はぬなるべけれど、あやしき姿せるものゝ入り來ることなり、このあやしき姿といへるは、女は肌を見することを、此上もなくはづる美風あるに、肌あらはせる女どもの前に、裸體の男の絶えず入り來れるなり、そのあやしき姿の男を三助とぞ呼ぶなる、

はじめの心いつしかうせて、この三助と呼べるものゝ、我浴みせる前に入來るにも氣にはとまらず、はては女だてらに、其あらくれたる男に脊を流させ、果てはこの三助に脊を流させぬ人は、この浴みの場所に巾を利かすことを得ぬやうになりぬ、かゝる所に巾を利かされぬ、奥ゆかしき人の、次第々々に影をかくしゆくは實に歎かはしきことにあらずや、湯の中のことは、幕のうちなり、我は之を見ずとも濟まされんが、否なこの消息に耳を塞ぐことを得べ

けれど、一つのことは萬に通ふ、

男らしき女たらん人、男と權を同うせんなど、ことさらに騒がるゝ人は知らず、女らしき女、他國にたぐひなき美風を持てる日本の女は、小事なれども、人はかゝる事より猥がはしくなりゆくものなれば、よく〳〵心すべし、

これも湯屋の人に聞くに、近ごろ奥様の下婢の脊を流しやり玉ふ如きは見ずと、お三の脊の三助の手を借るやうになりゆけるも事の當然にして、ます〳〵この淺ましき有様のさかえゆくを思はゞ、いかで眉をひそめずして可なるべき、

いかに働くことを好まぬ女にても、やむごとなき際老いたる人のほかは、我身の垢は我手にて落すべし我手にて我身の垢を落されぬやうにては、衣服も滿足には縫ひ得られまじ、

殊におかしきは顔をのみ光らす人にて、我脊を他手に渡すが多きを見れば、今更ながらかくは筆も染めらるゝなりき、

筆のすさび

林甕臣

身に、首あり手足あり、首はたふとし手はいやし、首はすはれり手足はうごきはしれり、首は上にくらゐせり手足は下にをれり、首には目耳口を具へたり手足には指爪を具ふるのみ、首は月花を見ものゝ音を聞く、手足はためにおひ使はるゝのみ、首はうまき物を食ひ、言ひたきまゝをいふ、手足は重きものを提げ、つまづきて爪はがすことなどもあるべし、「首は何が爲に斯く樂しみつゝ尊き、手足は何ゆゑにか骨をりつゝ然いやしき、世には心得ぬことの多きなりとて、人或は訝からん、そは首はうちに腦髓を藏め、靈魂性命の府として全身を支配する特權をもちたればなり、腦髓は外壁を硬き骨もてかこみ、そのうへに髮はやして頭をおほへり、こはそも〳〵外來の損傷、および寒暑を防ぐに供ふるなるべし、

その位高く、勢ありてきはことに尊くすぐれにたるは、けだしこをもて知るべきなり、手足はこれにひきかへ、毛一つだにおほふに足るものなし、寒さに凍え暑さに汗あゆるをならひとし、たゞうちに硬き骨を藏めたり、こはそも〳〵勞働に力を要するがために、供ふるなるべし、その賤しく常に腦髓の命令をまち支配をうけておひ使はるべきに定まりたるは、けだしこをもて悟るべきなり、けだし人あひ集りて、國のすがたなせる國體の成立ち組織も、身體の成立ち構造におけるも、その理ひとしかるべし、およそ天下の物の理はみな一なればなり、さるは國王は獨り高く〳〵らゐし、城郭を周らして四方をかこみ、雲に聳ゆるばかり高う帝室を構へなせるは、腦髓の骨もてかこみ身の上部に高うくらゐしたらんがごとし、また諸官省をつらね、つかさ〳〵の事を持ち分けたるは首の目耳口を具へ視聽きもの言ひ食ふわざどもの用をつかさどれるがごとし、國民は下に在りて命令を仰ぎ、國事に走り業務執るをもちまへとするは、手足の常に神經もてつたふる腦髓の命令にしたがひ、動き走りてはたらかんがごとし、その尊卑のけぢめきはことに定まりありて、首は高く上に位していみじく

師走十題（其九）



ひびの手をかくしての嫁の愛想かな

尊く、手足は低く下に在りて無下に卑しきがごとし帝王は現つ神と崇がめ上なき位にまし／＼て天の下しろしめし、臣民は下におぢかしこみて、みことのりのまに／＼仕へまつるを道として、君臣の大義名分きはやかに定まり、古へ今に　皇統萬世につらぬきて一系にわたらせる丶は、そも／＼たゞ獨り吾が日本帝國のみ、これぞ、この天地の成しのまに／＼開けもてこしおのづからの道、おのづからの國體には有りけらし、されば下等動物の身體構造においては然らず、見よ蜈蚣の如きは腦の組織粗雜にして、靈魂性命のやどるところ、首尾何れの部位に歸せるを知らず、軀幹構造のうちに混錯せるもの丶ごとしゆゑにその感能知覺、人類および高等動物のごとく靈敏ならず、なほ下等極まりたる動物に至りては、腦も手足もおへて尊卑の別ちなく、同等の權利を有せるもの丶ごとし、かの「外つ國にもはた行はれり」と聞く共和政治あるは君民同治などの丶しられん政體の組織の如きは、何ぞ下等動物の身體構造の不完全なるに異なるべき、甚だしきに至りては、手足が腦の役目にかはり、腦が手足におひ使はる丶がごときさまなせる國からも見ゆめりかし、物識らぬもほどこそあれ、腹か丶へて笑はんもうたてぞある、我日本の國にては是等の國に手ふりは、聞くも忌まはし言ふも汚らはし、鼻つまみても唾し、蹴倒しても賤しむべし、あ丶苟も政務の筋に嘴いるらん輩は、ゆめ國體を忘るなかれ、ゆめ國體を汚すなかれ、

對照詩歌と十體歌

柴田其水

もろこしの詩、この國の歌、その意味のふかきことは、かはる事なし、詩はつくりやすしといふは、詩を知らぬ人の詞、うたは詠みやすしといふは、歌を知らぬ人の詞なるべし、いづれかはたやすき、またその妙所も、自ら異なるものなり、古人もよくいへ

りし事なれど、今二三の詩と歌とを對照せんに
楊則陽が江霧の詩に
無數過船看不レ見、人聲却在二櫓聲中一、
新葉集に行家朝臣
河霧のたちこめつれば高瀬ふね
わけ行くさとの音のみぞする
趙仁甫が天陰の詩に
數日陰晴斷復連　不レ成二輕暑一不レ成レ寒
行家集に
ふく風もあたゝかならず寒からず
霞くらせるはるさめのそら
陸務觀が詩に
遶レ檐點滴如二琴筑一　支レ枕幽齋聽始奇
風雅集に
燈は雨夜のもとにかすかにて
のきのしづくをまくらにぞきく
などおの〳〵妙なりと云ひつべし、又歌に、一首五
體、或は一首十體などいふありて昔は口決などいひ

さとか、今その一首十體といふをわけんに
ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に
しまかくれゆく舟をしぞ思ふ
ほの〴〵としまかくれゆく朝霧に
あかしの浦の舟をしぞ思ふ
ほの〳〵と舟をしぞ思ふ朝霧に
あかしの浦のしまかくれゆく
ほの〳〵とあかしの浦の朝霧に
舟をしぞ思ふ島かくれゆく
ほの〳〵と島かくれゆく朝霧に
舟をしぞ思ふあかしのうらの
朝霧にしまかくれゆくほの〳〵と
明石のうらの舟をしぞ思ふ
朝霧にあかしのうらのほの〳〵と
島かくれゆく舟をしぞ思ふ
あさ霧に舟をしぞ思ふほの〳〵と
明石のうらの島かくれゆく
あさ霧に舟をしぞ思ふほの〳〵と

島かくれゆくわかしの浦の
わさ霧にわかしの浦のほの〴〵と
舟をしぞ思ふ島かくれゆく

誠に一首の歌にて、いかやうに打ちかへせども、口にもさはらず、其意味も聞ゆるは妙といふべし

近藤岬重藏岬

錦巷隱史

明治卅七八年日露戰爭も最早終結に近づきました其最後の打擊として我海陸軍は露領樺太を占領致されまして其南方に北海道宗谷と向ひ合ひになりて居る岬角に近藤岬重藏岬と名けられました事は諸親聞にも見え近藤重藏の事蹟も出ましたが、何れも皆大略のもので其功績を顯はすに足る程のものは一つもありませんでしたから、此に其履歷を講述して我海軍省水路部が露名ノトロを近藤岬とし同シレトロを重藏岬と改め名けられた由來を明かに致しませう、近藤重藏といふ人は幕府の侍旗本の家に生れ、名は守重字を子厚といひ、正齋と號し晩年には昇天眞人と申されました、其父は右膳守智と稱し砲術に達し射道に勝れ又俳諧を善くしました、重藏は其次男で明和八年に駒込鷄聲ヶ窪に生れました、右膳は殊のほか此兒を寵愛して常に抱きかゝへ子守唄は知りませんから孝經大學の文句を暗誦して聞かせました、其が爲め重藏は口をきく樣になりますと最早孝經大學を暗誦したと申す事です、扨三歲の時には筆を執て大學を書き、五六歲で孝經の講義をして聞かせ、十三歲からは山本北山の門に入て漢學を修め間もなく先生の代講をしたといひます、其故に鷄聲ヶ窪の神童と評判され十八歲の頃には白山義學と云ふ私學校を開き、當時文武に名高き先生方を依賴して學資に乏しい旗本御家人の子弟を敎育したといふ、此の白山義學の記は有名な佐藤一齋が嘗て大そうにほめて居ります、寬政六年聖堂の試驗を受け經義歷史文章

とも皆優等を以て及第いたし、同七年には長崎奉行手附出役と云ふ役を申付られて同地に出張され、支那及び阿蘭陀人と交際をしましたから海外の事情に明るくなり、段々世界の大勢を觀察するに歐洲の大國は百般の學術日に月に進歩し船舶の構造年々に改良して大海を往來すること平地より容易くなると同時に、弱の肉は强の食で其國是といふものは何れも他國を侵掠蠶食するのであることが分りましたから、此際我國がうつかりして居たならば遠からず何れの國にか取られるにきまつて居る、殊に蝦夷地方の警備を嚴重にしなければ第一着に之を取られる、蝦夷地が外國の物となれば、南部津輕仙臺秋田迄も危くなると心付ましたから、寛政九年の十二月に其師と賴む林大學頭の手を經て國防の事及び蝦夷地方取締對露國の防備に付き建議しました、是が二十七歲の時で、其から引續き文化五年迄凡十一年間に幾度建議したか數知れません、若し此時重藏が眉毛に火の付きたる如き勢を以て建議上書を差出し幕府老中等の迷夢を驚かさなかつたならば、西は擇捉得撫等の千島總體、東は樺太利尻禮文等の諸島皆露國の爲めに蠶食せられて仕舞ひましたらう、則ち北海道の今日あるのは之を重藏の功績と謂ふも決して過獎ではありません、扨重藏は蝦夷地方を安全に守るには沿海の群島を我領地として置かねばならぬと云ふ見込でありますから、東の方では擇捉得撫、西の方では樺太利尻等を嚴重に取締らねばならぬと主張して其建議書には頗る奇拔的確な議論が澤山にあります、其二三を拔萃して見ませう、幕府が蝦夷地を凡て度外に置き松前藩に打委せ一向にかまいませんから大に之を憂へまして

> 本邦と異國との境界急度不相立候ては後代に至り異國より蠶食仕るまじきものにも無之、公議に於て御世話之れなく候ては相叶はざる筋、大名に御任せ置かるべき儀には之あるまじく、松前を御料になされ相應の御堅め仰付らるべし、

と論じて松前領を上地し公議の直轄とせねば取締が

立ぬと其理由を述べ、又蝦夷地を開始するに付ては莫大の經費がかゝるので幕府でも大に躊躇する氣味であつた、其時の上書には

蝦夷地の儀韃靼魯西亞兩大國を引受候本邦鬼門の藩鎭に之れあり候上は、たとへ日本國中の御軍役三分の一を加へられ候ても、是非々々御持堅め之れなくては相叶はざる段は論已に定り候

と論じて居る、又幕府が擇捉の開島を中止する摸樣のあつた時には

エトロフの儀是非々々開國無之ては七百人の夷本邦歸嚮の心薄く之れあるべく、一旦仰出され候處御見合に相成候ては、大信を失ひ威望を缺き候儀に之あるべし。

と云ふ上書をして居る、又樺太の事に就ても幕府の當局者が至て冷淡であるから重藏はヤッキとなり、

魯西亞韃靼の大國と隣り候カラフト地へ曾て御備御取締之れなき儀愚臣等には一圓御主意辨へ難く奉存候。カラフト奥地只今の分にて差置れ、數百年の後迄も大丈夫魯西亞韃靼に取られ申まじき事請合候者之あるべきや、試に御尋之ある樣仕度候

と痛議して當路者を詰責した、斯の如く蝦夷地方の拓殖防備に熱心であるにより寛政十年に蝦夷地方の巡察を命ぜられて出張し、松前箱館より次第に進みて國尻に渡り同島より蝦夷舟に乘て遂に擇捉を探檢して其年は柄輌で越年し、明年歸府して事狀を報告し、間もなく又出張を命ぜられ、今度は擇捉開島の御用を帶びて居るによつて彼の有名なる高田屋嘉兵衞に命じて擇捉航路の乘試をさせ、自身は樣似に越年して準備を整へ、明くれば寛政十二年四月十二日に嘉兵衞の持船辰悦丸に乘て擇捉へ押渡りました、此時の擇捉の有樣は誠に渾沌たるもので人か獸か區別の付き兼ぬる土人が千人前後住居して唯生て居つたと云ふ迄の事、衣類と云ふては上等の部に熊水豹犬の皮抔を着て居る者があつたが其は乙名と稱する少數の酋長で、其外は鳥の羽を綴り合せたもの又はキナと稱する草を編んだものを着て居りアツシさへ

ないと云ふ始末、食物といへば米麥抔は生來見た事のない者が多い、魚や野菜を煮る鍋が三四戸に一つといふ有樣で、年々飢寒の爲めに斃れる者が澤山にあつた、重藏は之を不憫に思ひ外々の島よりアツシを取寄せて土人に與へ、又土人の婦女にはアツシや木綿を織る事を教へましたから數年ならずして、衣食に不自由を感せぬ迄になつたとあります、其からして段々島々を開き得撫島に七八年前から來て居た露國人を逐拂ひ、千島の占領權を明確に致しました然るに文化三年に露國人が樺太島の久春古丹に來て亂暴を働きましたから、其翌四年に又々出張を命せられて今度は西蝦夷即ち樺太境の方へ向ひました、是れより先き文化元年に重藏は樺太の事に付き重大の建議をした、其大要は樺太は外國と日本の境界で實に大切の地方であるから一日も早く松前藩から取上げて幕府の直轄とし嚴重に防備せねばならぬと云ふのであつた、然るに三年に露艦入寇の事があつたから幕府でも大に驚き、重藏の建議を採用して西蝦夷地一圓を松前藩に上地せしめ、以來漸く樺太の取締が付きました、左もなければ疾に露國のものとなつて千島と交換する迄もなく日本の手を離れたのであります、斯の如く重藏は十餘年間樺太の爲めに辛苦經營しましたによつて紀念の爲め其姓名を地名に付けられたので、決して謂なく命名したのではありません、重藏は又非常に學者で御書物奉行となつた時は紅葉山七萬卷の書物の目錄を整頓致し、自分の著述が憲教類典一千卷、右文故事八十卷、寶貨通考三十卷、邊要分界圖考十五卷、外蕃通考三十卷、外蕃通書前編十卷、其他數十種凡千五百卷あります、晩年は至て不遇で其子富藏が人を殺した罪に坐して近江國大溝の分部家へ御預けになり、文政十二年六月十六日享年五十九で歿しました、講和條約も愈批准により樺太も我領土と極つたから第一の舊勳者たる重藏の傳記を述て一讀に供した次第であります

木枯や辻堂の額吹とばしけり

赤十字第十三回總會の記

クリミヤの悲劇は、ナイチンゲールをして慈愛の女神たらしめ、人道の至粹として起りたる赤十字事業は、西南戰爭の時に當つて我邦に傳はり、感情に暖き櫻花國民は、揮うてこの事業に贊助し赤十字社員にあらざれは、紳士にあらず、否瘦田一枚持てるのみの農民、あるは失明漸く杖に世を渡る如きものさへ、競うて社員たらんことを望み、この慈愛の心は凝つて日清戰爭の時の如き、今回の戰爭の如きの時に當つて、大なる功績を收め、世界各國をして羨望措く能はざらしめたり、

さればことし十一月二十日、平和克復後第一回の赤十字社總會の催しあるや、東天漸く白む頃より、誰にもしろき銀製の徽章を胸に輝して、われも／＼と會場なる上野帝室博物館庭園に詰かけたるが、その數十萬を越えたり、

會場は博物館の正面玄關に數段の階ある破風造の玉座を設け金屏風を立廻し、兩側には皇族席、總裁宮を始め、社長以下各職員席あり、階下一面は左側を婦人社員席とし、右側より正面には本部各支部職員及有功章特別社員章受領者の席あり、

定刻の午前八時には、さしもに廣き庭園も、立錐の餘地なきまでに至り、遂に止むなく入場を謝絶したるが、かくて入場するを得たるものは正門より五萬、西門より有功章者特別社員三千餘、東門より婦人社員約三千なりしと、

當日 皇后陛下には御風氣に渡らせ給ふ由にて、御名代として東伏見宮妃殿下には上野御用係御陪乘、香川皇后太夫、萬里小路、長崎兩式部官供奉、十餘名の儀仗兵に護られ、十時三十分式場に臨御あらせられたり、當日御名代の宮の御服裝は濃きオリーブのスカーツに、同じ色の上着を重ね、白のレースを以て極めて清楚なる飾をなし、御下着は白、御首飾は眞珠にして、胸には勳一等の寶冠章と赤十字の有功章とをかけ給ひぬ、

松方社長いよ／＼開會の旨を報ずるや、御名代宮は香川太夫より奉りたる 皇后の令旨を御受取あり、玉をのべたらん如き麗しき御聲にて之を讀上げらる、

令旨

本日は赤十字社第十三回の總會に臨み、會員を見るを悦ぶ、殊に昨年以來の時局に際し、能く救護の效を奏したるは滿足の至なり、尙將來社業の益 盛大ならんとを望む

總裁閑院宮載仁殿下には、恭しく御前に進み令旨を頂戴遊ばされたる上、御答詞を讀上られたるが、音吐朗々滿場に響き渡りて、集會者に得も云はれぬ快感を與へられき、

次に松方社長、莊重なる態度にて、例の如く會務報告の朗讀演述あり、この報告終るや、總裁殿下には御名代宮に一禮して階を下られ、御手づから有功章を四十人、特別章を二百餘人に授けられ直射の日光を浴びさせられ、此間二十分の長きにわたりたるいとも畏き限りにて、この盛況を見そなはせられたる御名代宮の御滿足げなる、いと／＼尊し、かくて總裁殿下階に上られたれば、御會釋ありて御退場あらせられ、松方社長 閉會を宣告し、これにて式は終りたり（阿井飛洋）



華族女學校

舜水女史

華族女學校の起りは、明治四年十月華族に賜へる、勅諭に基きたるもので、その勅諭には、華族は國民中貴重の地位に居り、衆庶の矚目する所であるから、其操行固より世人の標準となり、一層勤勉の力を致し、卒先して之を皷舞せねばならぬ、其責たるや中々重い、且我國女學の制未だ立たず、婦女多くは事理を解せず、殊に幼童の成立は母氏の敎導に關し、實に緊切な事であるから、外國女敎の素あるを曉り、育兒の法を知り、其本分を盡せよ、とあつて其後明治十年學習院を設立せられ、始めて華族の子女就學の道が開け　天皇皇后兩陛下同院へ親臨あらせられ、每に勅詞令旨を賜つた、其後明治十七年七月十一日の　勅裁によつて、華族女學校設立の事を決し給ひ、翌十八年九月宮內卿より、學習院の女子部を廢し、華族女學校を設置する旨を華族一般に達せられ、校長以下の任命があつて、十月五日假に授業を始め、十一月十三日　皇后陛下同校へ行啓あらせられ　令旨を賜つた、依つて同校は以來十一月十三日を開校紀念日として、去月も其式を行ふたのであつた、斯の如く同校は　皇后陛下の令旨に依つて、華族の爲に建てられた女學校で、敎育の趣旨は彝倫を本として、知識を發達せしめ、高尚の性情を

養ひ、身體を强壯ならしめ、上流の良妻賢母たるべき者を陶冶するに在りとのことで、生徒は滿六歳以上十八歳の華族の女子で、品行正しく體質修學に堪へ得べき者の入學を許し、都合により士族平民の女子も入學を許す事があり、現に士族平民の女子で入學して居るものも少くはない、

教科は小學中學の二科で、小學が初等高等の二つに分つて三年づゝ、中學も初等高等で各三年づゝで卒業をし、別に幼稚園と、專修科がある、校長は男爵細川潤次郎氏、學監は下田歌子女史、幹事は教授を兼ねて淺岡一君

同校生徒の心得は

▽其の一　皇后陛下の令旨を服膺して、心を正くし行ひを勵まし、温良貞淑の女徳を養成するに勉むべきこと、

▽其の二　平素禮讓を厚うし、信義を重んじ、又堅く學校の規則を守るべきこと、

▽其の三　常に飲食を節し、運動を適宜にし、氣力を爽快にして、身體を壯健ならしむるやう勉むべきこと、

▽其の四　衣服は質素にして、身體に適するを旨とし、外觀の美を競ひて浮華に流るべからざること等である、華族の令孃がたに、少しむづかしい注文もあるが、先づ其心得が可なりに行はれて居るは、大に喜ぶべきことである、それに今一つ喜ぶべきことは、同校の教師に、さまで有名の人が少くして、其質を擧ぐることを主とせられたるにあることで、校長の各教員に對しての注意は斯うである、

教員の統一は學校に在つて缺くべからざる要件である、從つて教員の生徒に對する寛嚴の度も成るべく大差なきやうにせねばならぬ、もし甲の教員が生徒に對して寛に過ぎ、乙の教員が嚴に過ぐるといふやうな事があれば、生徒は過寛なる教員に對しては、常に褻狎の念を抱き、遂には其人の示諭を遵守せぬやうになる、又過嚴なる教員に向つては、常に畏避の念を抱いて、其眞意を吐露せぬやうになる、何れ

師走十題（其十）



一つは嬉し一つは悲し除夜の鐘

にしても師弟の間が圓滿に行かぬことになる、そこで教員の中には男女の別があつて、剛柔の性の同じからぬものがある、依つて其の均一を望むことは出來ぬが、兩性の一方ともに寬嚴の大差がないやうにしたいものである凡て教員の生徒に對するには、懇到周摯なるべきは勿論であるが、又漫りに辭色を假し、力めて其意に順適するやうと、それをのみ求むるやうになつては、教師の尊嚴を傷ひ、教場の神聖を保つ事が出來ず、生徒に驕心を起させることになる、殊に華族女學校の生徒は多くは婢僕の下に長じ其言を聞くに慣れたるばかりでなく、幼弱の人の經驗に乏しい所から、自ら省察を加ふることが出來ぬ、そこで驕心の生せぬやうに時々警戒を加へねばならぬ、士族平民の子女に入學を許したるも、かゝる意志よりではあるまいか、華族の子女の品格を備へて應揚であると士族平民の子女の機敏で才智があるのと搗交せて、其長所の勢力が、雙方の利益になるとでも云ふことではあるまいか、都合によつてとはあるが、その都合は生徒の

敷に制限があるので、机に餘席があつて、身分が確り分つたものならば、族籍に構はずに入學することが出來る、身分が分つても家庭に申分の在るのは落との事である、

女子の運動會に就て

男爵 細川潤次郎

運動の人身に必要なることは、啻に筋肉を發達せしめ、手足の働きを善くするのみならず、新鮮の大氣を十分呼吸するに由り、血液を循環せしめ、血質を善良にするを以て、全身の機能を旺盛にし百病を豫防し、長生の基礎となるべし、之に伴ふ結果を論ずるときは、一家の繁榮となり、一國の富强となるべし、此の如き利益あるを以て、運動の必要なることは、人民一般のことなるべし、而るに必要の程度に至りては、人に因りて多少の差なきに非ず、假如へば男子の農工業に從事する者の如きは、平生の職業常に運動に在るを以て、殊更力めて運動する必要なかるべく、其他商業に從事する者と雖も、常に奔走を事とするを以て、亦此類に屬すべし、要するに下等社會の人々は、常に運動すること多きを以て、殊更力めて運動する必要は少かるべし、之に反して上等社會の人の如きは、平生の職業は謂はゆる坐業にして運動すること少し、偶外出するときは、馬車に乘り、人力車に乘りなどして、徒歩することさへ少き故、上に言へるが如き運動の利益を收むること能はず、是に於て課程として運動すること必要となれり、運動は一般人民に必要なれども、常に運動する人の爲には必要ならずして、運動の少き人の爲には必要となれり、女子は男子に比すれば、平生運動の少き者にして、上等社會の女子は下等社會の女子に比すれば、運動更に少し、若力めて運動せざるときは、上に言へるが如き運動の利益を收むること能はざるべし、以上は概論なれども、更に之を詳に

するときは、學生の身分に至りては、男女共運動の必要最多き者なり、學生は渾て學業の爲に精神を勞すること多く、就業の時間は常に椅子に靠る者なれば、身體を勞すること、極て少し、其儘にして置くならば、羸弱の人となり、惡性の病などを釀して、遂には鬼錄にも上るべし、此等の危險を避くる爲、體操にあれ、遊戯にあれ、運動の方法を設けたること、各學校皆然らざることなし、運動の必要最多き所以なり、

運動會の巡観

氷見の里人

秋氣高く澄める、小春の空のうらゝかなる、十月の末よりかけて、十一月のはじめには、そこゝの學校に運動會の催しあり、そのうち參観しておもしろかりし二つ三つを取出でゝ記さん、

華族女學校

十月三十日午前八時より、第三十一回秋季運動會は開始され、朝來の好天氣にて、參観人は定刻前よりひし〳〵と來會し、大きなる長方形の運動場の周圍に設けたる參観席は立錐の餘地なきまでに充滿したり、參観席の正面中心に、菊花の御紋章の幔幕もて圍みし御座の設あり、皇太子妃殿下には午前九時三十分行啓あらせられ、御先着の東伏見宮妃、伏見若宮妃、梨本宮妃各殿下を始め奉り、細川校長、下田學監、淺岡幹事御玄關御車寄に奉迎し、暫時御休憩間もなく御來着の迪宮、淳宮兩殿下と共に會場の御座に着かせられ、同校生徒なる北白河宮武子、同攝子、伏見若宮恭子各女王殿下以下各生徒の運動を御覧あらせられたり、此日東郷大將は、島村司令官加藤參謀、永田副官を從へて參校、便殿に於て拜謁を仰付られたるが、當日は始めての謁見にて、殿下より優渥なる御言葉を賜りたる由、大將一行は零時五十分過會場に趣きたるに、場の中央に達する頃、

同校幼稚生より花束を贈りたり、大將は喜色滿面に溢れ、これを受くると同時に、萬歲の聲四方に起れり、この壯觀を以て潤色されたる運動會は、定刻の八時、高等小學、初等中學、高等中學の七學級生徒の唱歌秋、秋のみのり二曲の合奏より始まる、質素とはいへ皇族華族の姫君なり、洋服、和服とり〲に、立並べる姿いと美しく、思ひ〱のリボンの色、さながら花に戯むる胡蝶の如く、見る目晴れ行く心地せられき、

午前には、ボロチーズ、ヤンターボール、ホツイトソー氏體操、幼稚生の遊戯、徒歩競爭、障礙物競爭別種行進、競爭遊戯、凱旋門、表出體操、行進體操、整列運動、美容術、行進、鞠送り、舞等ありたるがその中にて面白く、且つよき趣向なりしは凱旋門にて、黄と青との二組に分れ、竹、旗、額、紅白の紐など必要なる材料を前以て用意し置き、初めの合圖と共に駈出して其位置に就き、それ〲手分して件の材料を組立て凱旋門を急造するものにて、一組にて二個の門を塲の四邊に立て丶早き方を勝としたるが、黄の方少し早く落成せしやうなりき、かくて見事に造られたる凱旋門を通過して徐々と退場せるさま、實に繪畫中の感ありき、

次に記臆せるは女生幼兒の鞠送りにて、初めと鈴の合圖あるや、ころびつまろびつ爭うて駈出せる中に二人ばかり急がす騷がず道草とりつ丶步を運ぶに、これを見たる六つばかり男生幼兒、件の二人の手を引きて駈出し、鞠を拾ひやりたるなど、そのやさしき行動見るものをして思はず拍手せしめき、

次は舞にて、日本男兒、凱旋の二曲なりしが、品よく扇をかざしての運動、その美しさ、これも亦畫に描まほしかりき、

午後は機械體操、遊戯、毬投、木環體操、整列運動綱飛いろは合せ、綱ひき、方形運動等あり、午後二時頃村雨一しきり降出したれど、尚演技を續け、卒業生の番外運動まであり、最後に生徒全體にて君が代を合唱し、午後四時半頃めでたく散會したり、

當日兩皇孫殿下は　東宮妃殿下の御左右に御行儀正しく、丸き椅子に倚らせ給ひ、迪宮殿下には御冊さ参らする丸尾氏に色々の手眞似を遊ばされ、種々の御下問あらせらるゝを拜せしが、西洋音樂は分けても御意に召されけん、御床を立給ひて、樂隊眞近く進ませらるゝこと數回、伶人等恐懼措く所を知らず還御近き頃に吹奏せしは、御所望の一曲なりとぞ洩れ承る、

青山女學院

十一月六日午前十時より開會、徒手、亞鈴、木環の體操に續いて綴字競爭、戴嚢競爭、薙刀體操、テザボール、豆嚢體操、綳飛體操、扇形運動、行進運動等ありたり、

場内の裝飾は萬國々旗日米國旗を以てつくられ、三百餘名の生徒交る〲前記各種の運動をなせるなかに取わきて目につきしは、綴字競爭の紅白二組にてエベリーワンウエルカム青山女學院の英字を組立る遊戲と、扇形運動にて、これは數十の生徒各々手に日の丸の扇を持ち、舞ふが如くに行進し、終に紅白の細布を以て扇形を形造り、種々之をあやなし、後之を手繰り、扇とゝもに持ちつゝ踊りつゝ退場するものにて、なか〲艶かなる遊戲なり、來賓三千餘名なか〲盛會なりき、

東京府女子師範學校
第三高等女學校

十一月七日、午前九時より、創立五週年の紀念運動會の催ありたり、此日は永井陸軍々樂長の新案に成れる『あさがほ』の遊戲を公表するとのことにて、開會前より婦人女學生の來觀者頗る多かりき、

運動は豫定の時間に豫定の四十二番を順次に行ひ終りたるが就中其妙を呼びしは、

凱旋門の運動にて、これは華族女學校のと同じものなれど、幾度び見ても、花々しくて飽かぬ、興味を與へられたり、

次に夕立、これは師範科生の運動にて　鹿爪らしき顔せねばならぬ生徒が、傘を抱へ下駄を抱へ、雨衣

を抱へて懸命に走り出し、分時を爭うて之を着けたる上、急いて隊に歸らんとすれば、能くも穿けざる下駄の緒の不圖した石に躓きて大地に撞と打倒る〻あり、先生負けるな〻ど、その生徒にやあらん、幼兒の愛らしき聲を絞りて叫ぶなど、笑聲と和して、來年の鬼も顏の相格を崩すべく覺えき、

次に當日呼物の『あさがほ』は、朝起の歌、花の自觀合唱の三節より成り、オペラの古式聯舞に倣うて、先づ夏の朝景色に花の滿開を示し、花は水を注がれて其惠を感受したるが、夜全く明放るれば、萎凋して蟬の飛揚するに至るといふ意味にて、朝顏を理想的に紹介したるものなり、此遊戯は總て百二十名より成り、是を二組に分ち、初め二人各聯隊旗一本を持ちて中央に立ち、次に十二人つゞ二組、胡蝶の羽衣を肩にせしと、蕣に給水する柄杓を手にしたるもの各六名、次に多人數蕣の造花を手にしたるもの出で、はじめ蕣の唱歌終るや、軍樂隊の吹奏によりて蕣に給水する狀、胡蝶の翩々たる如き舞蹈は、聯舞として最上の出來なりき、殊に此演技は始めての事なれば、來觀者何れも歎賞の外なかりき、

女子美術學校卒業式

去十月三十日午前九時より、第八回卒業式を擧行せり、卒業生は專科の高等科普通科を通じて、裁縫科十九人、刺繡科四人、編物科二人、造花科五人にして、豫定の時間より式を開かれ、先づ校長の式辭、君が代の唱歌、勅語捧讀、生徒の奉答の歌、證書授與、校長の告辭、府知事及市長の祝辭朗讀、岡事務官の演說、卒業生惣代の答辭、生徒の校歌等ありて式を終り、來賓へ茶菓の饗應ありたるが、來賓休憩所には、生徒の手に成る和洋の繪畫を揭げ、別室には卒業生の裁縫・刺繡、造花、編物等を陳列し、何れも皆美しきが中に、殊に優等生笹間靜子、土屋みよし兩氏の刺繡は別けて美しかりき、且つ當日演說

の大要は、
△佐藤校長　藝術の奥深き事より卒業といふも、單に校則を終へしまでなれば、尚續いて注意を怠らざらんことを望み、且つ婦人には往々些の藝術を鼻にかくる癖あるは婦德を損するものと懇ろに戒められ、他日有用の時用うべし云々、
△岡學務官　近時世の複雜に赴くにつけ、女子にも職業を要求されつゝあるも、未だ女子の獨立獨行は許されぬ事と思ふが、教育ある女子は、學術のみならず無論一家の整理にも普通婦人の上にあらざるべからざるに、世間往々然らざるものあり、女子修學の要は、家を治め夫を助くるにあれば、此點に深く注意せられたし云々、

成女學校の紀念會

去月三日神田一ツ橋高等商業學校講堂にて、第六回紀念會を催し、講堂内には萬國々旗を蜘蛛手にかけ渡し、各入口には日章旗を交叉し、正面は紅白の幕と菊の挿花を以て美々しく裝飾し周圍の廊下には生徒の製作に係る繪葉書、編物、細工物等を陳列し、裏庭の方には珈琲、秋の餅等の模擬賣店を設けて來賓を接待しつゝありき、式は午後二時より君が代の唱歌により開かれ、校長の式辭、文部大臣と市長の祝辭朗讀、千家府知事の祝辭終りて、唱歌となり暫時休憩、それより『家の手傳』『革命の一珍事』(英語對話)唱歌(湖上の晩景)、小公子(英語對話)、英語唱歌(ホーム及アラデールのばら)、冬夜物語(對話)深林の逍遙(朗吟)等、何れも生徒の演奏なりき、校長の式辭は『平和克復、日英同盟成立の時に際し、斯く紀念會を擧る事の喜ばしく、戰後には女子教育の一層必要なる所以を述べ、校員は一同此會に盡瘁すべき筈なれば、御賛助を願ふ』云々と云ひ、府知事は祝辭に續て『戰後は人心に油斷を生じ易く、又驕慢侈奢に流れ易きは、歷史の證明する處なれば、我

國民は此際一層一致勉勵して、國力の發展を謀るには、女子の手を待ざるべからず、近時女子の服裝は漸く華美に赴くの傾向あるに、本校生徒諸子の質素なるを稱し・戰捷國の女子として、益々國力の發展に最められん事』を云々なりき、降雨も午前中に止み、誠に天長の佳節なりければにや、非常の盛會にて、一の空席もなき有樣なり、バザーも中々の大繁昌なりし、因に該バザーは同校生徒よりなる此花會の催せし物にて、其賣上高を同校建築基金に寄附する爲に設けしものなりといふ、

女子職業學校々友會

神田一ツ橋共立女子職業學校にては去月四五兩日午前九時より、同校内に於て校友會を開き、製作品を陳列し・同時に造花圖畫編物裁縫刺繡料理等の實習を、廣く公衆の觀覽に供し、各製作品を販賣したるに、造花編物等の店頭最も繁昌を極め、造花は四日の賣上のみにても、五百餘圓に上ぼりたりと、製作品中最も出色の出來榮なりしは、造花にして、之に次いでは編物刺繡なりき、同校にては暹羅國皇后陛下の思召を以て、本邦美術手藝修業の爲め、留學せる暹羅國女學生・造花科に二名刺繡科に二名あり、當日も敎場に在りて實習し居りしが、頭髮服裝等も日本女學生と同一なれば、それと聞かざれば一見したる處にて、判じ難きばかりなり、何れも日本語を流暢に操り、對話は勿論・敎授上にも何の差支もなしと云ふ、

◎大日本女學會總會　大日本女學會にては、今度　皇后陛下より御歌を賜はりたる披露の爲め、設立十週年祝賀を兼ね、去る二十七日午後一時より、麴町區永田町鍋島侯爵邸に於て總會を開き、伏見宮妃殿下にも御臨場あらせられたり、

凱旋唱歌

文部省檢定　高等小學校教科用

奉天附近會戰

尾上八郎作歌
岡野貞一作曲

一、三十五萬四十萬
沙河を中なる我れと彼れ
築き立てたる堅壘は
蜿蜒たりや五十餘里

二、百二十日とく過ぎて
戰機は今や熟したり
一擧長蛇を屠るべく
包圍の策は決したり

三、風が寄せ來る大吹雪
咫尺もわかぬ春二月
まづ動きしは最右翼
忽ち奪ふ清河城

四、驚く敵は大軍の
此處に向ふと思ひけん
豫備の部隊を増加して
固く守るや撫順城

五、わが計成ると最左翼
早くも沙河をうち渡り
行軍日々に十數里
奉天近う出でにけり

六、包圍の形整ひぬ
時こそ今と中央軍
左右兩軍おもむろに
渾河わたりて迫り行く

七、敵は逆襲大夜襲
わが一方を破らんと
侮りたれども進み行く
わが大軍は潮のごと

八、死戰や苦戰亂戰の
數を盡して爭へど
わが突擊の烈しさに
亂れ亂るゝ敵の陣

九、三道等しく破られて
退路危き敵將は
三月七日退却の
令をもろとも發したり

十、あとを慕ひてわが軍は
包圍の線をちぢめつゝ
退路をさへに絶ち切りて
四面一度に追ひたつる

十一、三月十日よく記せよ
われ奉天に入りにけり
十有六日よく記せよ
敵鐵嶺を捨てにけり

十二、損害凡そ十五萬
敵の半は盡したり
日東男兒肩揚げて
無比の勝利を世に誇れ

日本海會戰

坂正臣作歌
上眞行作曲

一、對馬の沖の朝霧がくれ
見えそめたりや敵の軍艦
縱列つくる三十八隻
威風は堂々あたりをはらふ

二、日本海と名にさへ負へる
我ふところの潮おし分けて
大手振り〳〵臆せず行くか
かれ提督よあつぱれ勇士

三、かくてはかねて物見の艦の
偵察つゆの遺漏もあらず
無線の電信主力の方へ
響けば忽ち戰鬪準備

四、あがるや信號皇國の興廢
是此一擧努めよ各員
將卒共に肉こそ躍れ
艦内更に一語を聞かず

五、見よ〳〵敵は壓迫せらる
北西よりも眞南よりも
わが計畫の包圍は成りて
敵の狼狽手に取る如し

六、萬歳萬歳敵艦燒けつ
愉快愉快敵艦沈む
萬歳愉快の叫びの中に
東郷大將眉こそ揚れ

七、滿艦さして遁げんとすれば
忽ち我にせきとゞめらる
もと來し方へかへれば我は
彼より早く待伏し居たり

八、まして夜戰の水雷驅逐
探照燈火晝ともなさす
突擊猛進聲もやます
敵艦今は嵐の木の葉

九、あくれば二十有八日の
空も緑の竹島あたり
僅に玉せず手に入りたるは
少將こめて大艦四隻

十、かれ提督も終にはとりこ
昨日の威風は今日の幻
わが海軍のいさをの高さ
誰か忘れん萬代までも

詞藻

御歌所參候従二位伯爵松浦詮先生撰

社頭雪

天 東京本郷區湯島三組町八十五番地 佐野ふき子

はふりこが朝きよめせし神垣に
雪のしらゆふけさはかけたる

地 大坂西區新町三丁目 山中益子

よのちりをはらひきよめし神垣の
内外ましろにゆきそつもれる

人 愛媛縣宇摩郡妻鳥村 廣田薫子

ふる雪をはらひかねつゝ神詣で
つもる思ひを祈るなるらむ

秀逸

肥後 佐々小琴子

あなさやけおけとうたへる神垣の
さかきにつもる雪のしらゆふ

岐阜 青木まさを子

よの塵はけさこそなけれしら雪の
ふりかくしたる神のひろまへ

東京 高橋珍子

ふりはへて雪見の人もつとふなり
御代やす國のかみのみやしろ

東京 青木たま

ふりつもる雪にあらしのおとたえて
いとかう〲し賀茂のみ社

石狩 加藤眞子

ちきたかくけさふりつもる白雪の
きよきは神のこゝろなるらん

東京 大木光子

いなり山かみに手向のぬさならん
松もさかきもゆきにうもれて

愛媛 上原のぶ子

わとつけで朝まうでせむよしもがな
御前ましろに雪のつもれる

東京 林艶子

ふる雪に膝をうつみて小さき子か
なに願ふらむかみのひろまへ

陸前 前田河千年子

たまゝつる御社しろくふる雪は
きよきこゝろのつもるなるらん

東京 伊藤ふく子

神垣のさかきの枝にゆふしてを
かけしと見えてつもるしらゆき

愛媛 廣田せき子

落葉だにはらふものなき古やしろ
きよめてつもるけさのしら雪

東京 高木鏡子

たまがきの朱をうばひてうつしゑも
筆もおよばぬけさのしら雪

東京 大澤小松子

ちぎ高き神のやしろのさかきばに
そらよりかくる雪のゆふしで

薩摩 松原みね

詣てきし人もわらじなけさはまだ
ゆきにあとなき神のひろまへ

肥後 佐々小琴子

おとにのみ菊池の神のみやしろのちもとのさくらゆきの花さく

愛媛 廣田政美子

しら雪のつもる神がきあけがらすぬかづくや何れがふなるらん

東京 岡田春子

ゆたかなる年のみつぎを大みやにさゝげかほなるけさのはつ雪

東京 宇梶壽子

みやしろのやれにつもれるみ雪こそ秋の實りをみつけかほなる

長野 岡田千穗子

いなり山あけの玉垣あきらかにみえこそわたれけさのしらゆき

相模 豊田眞子

みやしろの軒端に花の咲きけるは榊にかゝる雪にぞありける
東京 駒澤さだ子
[illegible]を寒みまたきとほそをおけ見れは神のいがきは雪そつもれる
肥後 佐々有璋子
千はやふる神のいがきのまつの葉にさきこそにほへ雪のはつ花
福井 岩橋花子
降雪もかみさびわたるさかきはの深きさかえはうつまさりけり
肥後 秋吉輝尾子
神さびてこゝろもすめるみ社にいとうつくしくゆきぞつみける
埼玉 澤田房子
豊としをいはふ鎮守のかみまつりにきはふ宮にふれるしらゆき
東京 小林芳子
春の日を名におふ宮のためしにやみ雪も花とちりまがひけれ
奈良 栗山俊子
降積るゆきいさぎよきかみゆにはみたまにうつる影のまはゆき
相模 倉橋よし江子
みやしろの狛犬さむくつむゆきに松葉こぼるゝあさのしづけさ
秋田 古瀬惟子
あらかりし風をしつめてみやしろのいがきにつもるけさの白雪
東京 [illegible]藤ちよ子
御社に雪のつもりていよゝなほかう〳〵しくもおもほゆるかな
陸前 前田河みさを子
御やしろにふりつむ雪を見る毎にいよゝたふとし國のしつめは
奈良 天野照子
かしはらの宮のたむけのみさかきにかゝりて清き雪のしらゆふ
天津 富成梓子
いと清くかけたる雪のしらゆふを神もめつらんすみの江のまつ
神戸 片岡久恵子
うらやすの國まもりますいその宮にゆきの花さく松を見るかな
秋田 古瀬りく子
朝日かけのぼるまに〳〵おがまるゝちぎの片そぎ雪くづれして
秋田 鎌田ちよ子
すみよしのやしろにつもる白雪はゆたけき年のしるしなりけり
神戸 今西操子
高砂の尾上に立てるひとつ松うづむもたかしけさのしらゆき
秋田 齋藤はま子
神がきもうつむばかりになりにけり諏訪のやしろにつもる白雪
淡路 松永繁子
みやしろの赤き鳥ゐにいらがにも玉とみるまでつもるしらゆき
秋田 細矢はる子
みやしろのしめかけられし老松にちよふりそへるけさのしら雪
津 神田正子
さかき葉にゆきのしらゆふかけてふる光もきよし神のひろまへ
津 神田みよし子
とよとしのしるしを見せてしろたへに雪ふりつもるいせの神宮
三重 茨木みす子
神まうでみてくらしろもとりあへず袖にちりくる雪のしらゆふ
岐阜 豊田ふゆ子
いそのかみ古きやしろもあたらしく見え そわたれけさの初雪
奈良 藤岡慶子
神ばとのとやのさやぎもしづまりて雪のひろまへ月ふけにけり
河内 田中たつの子
めつらしとみそなはすらん神垣のいがきまじろにつもるはつ雪
埼玉 横田須磨子
けさみれは朱のとりゐも玉がきも雪ふりつもるがものみたらし
埼玉 横田秋子
里ひとのゆきゝとだえて枯野はらうふすな森にゆきやつもれる
埼玉 横田やな子

ぬさとの〻鈴の音けさはうつもれて雪にしつけきひろまへの庭
京都　奥谷登美子

ふきはらふさかきに風の音さえてしらゆふ〻かき雪のひろまへ
石狩　加藤壽恵子

草もきもかれの〻宮のさかきはにけさめつらしくふれる雪かな
上野　木暮千代子

神垣のもみちのにしきわせはて〻なり〳〵かゝる雪のしらゆふ
肥前　藤松りか子

たむけなば神もめでなん白ゆきのきよくもかゝる庭のまさかき
岩代　菅野和子

みやしろにかちときあけし兵士のよろひの袖にゆきふりかゝる
長野　齋藤ふみ子

消えぬまにをりてたむけむ神路山さかきの枝のゆきのしらゆふ
東京　楠井滋子

よるの間の雪にたうとさいやまして仰ぐもかしこ伊勢のかみ垣
近江　辻まつ子

うふすなにいくさかへりの兵士か玉くしとる手ゆきのそほふる
東京　林環子

いなり山鳥居のかけの見えぬまでふりつもりたるけふの雪かな
伊賀　佐々木まき子

廣前も御垣もなべてしらゆきのきよきはかみのこゝろなるらむ
紀伊　藤範佐美子

しつかなるやしろのほとり雪きえて小鳥のおとは音となりゆく
東京　牛山素子

ゆたかなる君のみよとてふる雪も神のみまへにまひあそふらん
岡山　小山松枝子

あふぎ見ぬ人なかるらんかみ山の松にかけたるゆきのしらゆふ
松山　田村多豆子

きよきをは神もめつてふ雪つもるさかきの枝ををりてさゝけむ
山口　村・上絲子

たてまつる品はあれとも廣まへにすか〳〵しきは雪のおほぬさ
神奈川　中山菊子

むれたかき鎮守の宮にましろにもふりつむ雪のきよくもある哉
伊豫　吉良貞子

朝まうで額づく袖にちるゆきはつみのきえゆくこゝちこそすれ
東京　中島茂子

とよ年を祝ふかみしのかみすきにましろ〳〵かゝる雪のしらゆふ
東京　岩谷達子

鈴のねもうつもれはて〻神やまの木つゑましろにふれる雪かな
東京　内野その子

みめくみの隔てもあらぬかみがきにいよゝ眞白につもる雪かな
群馬　竹のふし子

神さびしやしろにつもる雪みれはいのらぬみにも尊かりけり
相模　森田はる子

たふとさもふかくそ見ゆる玉垣をこゆるしら雪かみのまに〳〵
三河　永井さい子

宮の名の梅にも似たるにほひかないかきのまつのゆきのはつ花
愛媛　高橋茂子

みやしろの森の梢にむらからすねくらにまよふゆきのゆふくれ
神奈川　飯島しづ子

里まもるやしろの森のえだ〳〵につもるしらゆき花と見ゆめり
大阪　佐々木あさ子

鳥なかぬ神のひろまへしづかにていとゞたふときゆきの朝かな
東京　滋谷喜久子

神さびて淋しき森のたゞなかにみやしろしろくゆきぞつもれる
大阪　黒田代音子

かみさひし杉の木立のみやしろにむつのはなさく冬は來にけり
磐城　三森須磨子

いやましていかめしきまでみやしろに咲て積りし花のかず〳〵　静岡　竹内みつ子

さかきばにしらゆふかけて降雪に神さびわたるみつかきのもり　大和　橋かほる子

けがれなき神のみまへのあらゝぎに清くも雪のつもりけるかな　東京　山口まつ子

さかき葉も玉のいがきも埋もれていときよらかにつもるしら雪　東京　伊藤とし子

千きつれの親よふこゑもさむげなり雪ふかきよのうふすなの杜　東京　田中千賀子

神さびしみやゐにつもるしら雪ぞ女神のふゆのころもなるらん　東京　伊藤たけ子

宮びとのひらできこゆる神かきのみきりきよめてつもるしら雪　名古屋　近藤倬子

降雪のつもり〳〵てみやしろのあたりましろとなりにけるかな　伊勢　藤堂しげ子

世の塵もしばしかくれしけさの雪に社のあたりたゞましろなる　東京　入江菊子

いかはかり雪つもるらむきつれなく神のいがきのしたをれの聲　東京　佐野登美子

白雪の降うつみたるかみかきのおくにきこゆるやひらでのおと

氷始結

天

今朝見れば冬またあさき山の井も落葉なからにこほりゐにけり　肥後國球磨郡多良木村　友永章子

地

芦鴨の朝ゐあさらひかたもなくよるかのいけはこほりそめけり　静岡縣濱名郡和田村橋羽六三　竹内みつ子

人

みつふたつもみちのこりて谷川の流たえたるはつこほりかな　東京日本橋區通四丁目　牛山素子

秀逸

色あせし菊のひと枝をさと川にむすびとめたる今朝の薄氷　愛媛　廣田政美子

かせさむみかげをうつせし池水は紅葉ながらにこほりそめけり　岡山　小山松枝子

池の面にちりて浮べるもみちはをそのまゝ結ふけさのうすらひ　長野　岡田千穂子

よもすから風さえぬれはけさはゝや　岐阜　青木まさを子

筧のみづのこほりそめけり
岐阜 豐田冬子

つゝ井づゝくみてつるへに殘し置く
水さへけさはこほり初けり
陸前 前田河みさを子

よひの間に結ひしゆめはとけぬれと
とけぬはけさのはつ氷かな
大和 栗山たか子

なにはえのあしのかれ葉のなかれぬを
見れはこほりの結ひそめたる
秋田 古瀬りく子

もみちはをそのまゝ池にむすはせて
秋をとめたる初こほりかな
肥後 友永章子

たま垣のしめの内外につむ雪の
きよきやかみのこゝろなるらむ
東京 禰津梅子

夕されば池のみぎはにかせさえて
むすび初たるうすこほりかな

池水にちりて浮たるもみぢはを
むすびそめつるけさのうすらひ
東京 杉田繁子

いつしかもふゆに入江のなにはがた
あしのみぎはも氷りそめけり
東京 高木鏡子

吹あれしよはのあらしにこほりけむ
軒はのかけひ音のたえたる
東京 伊藤たけ子

此ころの寒さおほえてけさみれば
はやくもむすふ池のうすらひ
埼玉 横田須磨子

たゞなこの氷張りしとよろこひの聲きこえしは初めなりけり
富山 三上ふし子

淸らかきかけひの水の音なきは今朝めづらしくこほり初めけむ
愛媛 廣田灘子

よのまにやこほりそめけん池水のふけゆくかれの音にしらるゝ
東京 宇梶緑子

夜なさむみ鴨そなくなる里川のきしのあしまもこほりそめけり
愛媛 高橋茂子

かぜ寒み起出てゝ見れは池のおもにかゞみのごとく氷そめけり
石狩 武ひばり

肥後　佐々有隣子

山かけのかけひの水のこの朝けおとたえたえにむすふうすらひ
東京　岡田春子

池の面にちりしもみぢもさなからにこほりそめたる朝ほらけ哉
神奈川　飯島しづ子

はしためのくみとりおきし朝水のかゝみにまかふ初氷かな
東京　小森たま子

冬をあさみ池のおものうす氷むすふともなくきゆるあさかな
大阪　佐々木あさ子

菊かれておく霜しろきはこにはの池のおもてはこほりそめたり
東京　澁谷きく子

あさかせの身にしむ暁が軒の端にはしめて結ふうすこほりかな
東京　岩垣貞子

落葉のみ水に流れしいさゝ川今朝そこほりのむすひそめける
大阪　山中益子

霜さむくうつろふ菊をかきりにてこほりそむらむおほさはの池
東京　禰津櫻子

松のはに置しもさむしをしどりのあそふみきはに初こほりせり
大阪　黒田代音子

よべまでも月をうかへしいけみつのけさめつらしく氷り初けり
名古屋　近藤偉子

うす氷むすびそめたりさと川にやとれる月そかけうつくしき
東京　青木蕭子

水くまむつるべとられし初こほりわれに欧なくしはしためらふ
豐後　月村花子

みつとりの聲のさえしときゝけるが今朝は御池の氷りゐにけり
東京　田中千賀子

深山にもふゆやきにけんあさしはしかけひの水の音とだえたり
東京　山口まつ子

かれはつる芦の葉しろく霜さえていり江のみきはこほり初けり
東京　入江菊子

よのほどにこほりやしけむかもめゐる池の捨舟けさはうこかぬ
東京　伊藤とし子

ひもかゞみむすひそめけりあり明の月の影見しにはのいけみつ
東京　伊藤ふく子

岩角にかゝれるたきの白いとをさなからむすふはつこほりかな
東京　佐野とみ子

芦鴨のよるかの池のしもがぜにあさるかたなくこほりそめたる
東京　佐野ふき子

初こほりむすひやとめし川岸にすてたるふれのけさはうこかぬ
磐城　三森すま子

なかれくるかけひの水のおとたえてことせはじめの氷むすべり
常陸　佐藤八重子

やまの井のかほみし水もけさ見れは氷にとつるたきのしらいと
東京　津野千代子

あさな／＼詣づるかみのみたらしにけふはり初めし氷見るかな
東京　大澤小松子

あし鴨の聲遠さかるこのあさけこほりそむらむしのはすのいけ
肥後　佐々有隣子

朝ほらけ庭の小池のさゝなみをむすひかへたるはつこほりかな
秋田　細矢はる子

庭石をけたふみはつしその音におほへそめたるあさこほりかな
津　神田みよし子

身にしみしよはの寒さの名殘をは起出てゝ見るけさのうすらひ
津　茨木みす子

いけみつにむすひそめたる薄氷そこのもくつも見えすなりにき
津　神田正子

冬かれしあしの下葉をよすかにてむすひ初たるけさのうすらひ

奈良 藤岡 慶子
うすらひのむすひ初ては水とりも池のこゝろをいかに見るらむ
薩摩 松原 みれ子
けさよりそむすひそめたる薄氷にみつにも冬のいろそ見えけり
東京 大木 光子
吹風によせぬを見れはちりうかふこの葉もけさは氷りそめけむ
長野 田島 みよ子
汀なるあしの枯葉をたよりにてけさめつらしくむすふうすらひ
神戸 今西 操子
名にし負ふ声問の水の今宵しもかゝみのことくこほり初めけり
秋田 鎌田 ちよ子
けさみれは牛のあゆみのあし跡にたまりし水もこほりそめけり
肥後 友永 つれ子
咲にほふはなとや神も見ますらむさくらの宮の今朝のしらゆき
天津 富成 梓子
初こほりめつらしみつゝ朝月出にこほつうなひかすさひかなしも
上野 木群 千代子
ぬは玉のよひのしぐれの庭たつみけさめつらしく薄こほりせり
岩代 菅野 和子
うなゐむれ水使ふ音になれきよるみぎはにけさはこほり結へる
東京 林 艶子
散るもみちなかれぬ見れは我か門の小川の水やこほりそめけむ
秋田 古瀬 惟子
なかれくるかけひの水もまつ風におとをゆつりてこほり初けり
東京 瀬藤 ちよ子
今朝見れは散りにし紅葉池の面に流れもえせてこほりとちけり
東京 高橋 珍子
朝月出におちはうこかぬさまみれは庭のいけ水こほりそめけり
陸前 前田河 千年子

庭の面にたまりしみつの今朝みれはうすきなからも氷そめけり
奈良 天野 照子
水鳥のたつおとさむしこからしのさえのゝ沼やこほりそむらん
肥後 佐々 小琴子
箱庭の池のさゝなみうこかぬは今朝うすらひのむすひそめけん
東京 稲澤 定子
池水のこほれるみれはぬはたまのよへのあらしに冬やきにけん
肥後 秋吉 輝尾子
おきいてゝ庭のやり水みわたせは冬のけしきにつゝらいにけり
埼玉 澤田 栄子
いつよりも結ふにはやきはつ氷ゆたけきとしのしるしなるらん
福井 岩橋 花子
よひ／＼にしくれし木の葉跡絶えてけさ池水のこほりそめけり
東京 背木 たま子
よのまにや氷そめけん軒ちかきかけひの水のけさはおとせぬ
東京 小林 芳子
さそへとも落葉なからにとちこめてまかさぬ見れは氷ゐにけり
奈良 栗山 俊子
うなゐ子かさゝめく見れは門のへの流れの水にこほり居にけり
相模 倉橋 よし江子
身にしみしよべのさむさもうべなりき溜のえつほに薄氷そはる
三河 永井 さい子
おくてをはかりもはてぬをけさみれは田川の岸はこほり初けり
東京 楠井 滋子
あはらやの夜かせをさむみけさ見れは窓の手水は初こほりして
信濃 田島 みよ子
なかれゆく小川の水の早けれはみぎはのみこそうすひしにけり
伊賀 佐々木 まさ子
諏訪のうみ渡るはまだきしかはあれ今朝めづらしく薄氷の見ゆ

今日といへは筑波根おろしいや冴て結ひそめたり池のうすらひ　東京 林 瓊子

いくさ艦ゆきゝのしげきゑその海に氷そめしと新ぶみに見えし　近江 辻 まつ子

朝なく〳〵たちしさぎりのあともなく田ごとの水は氷り初めけり　東京 内野〻の子

淋しさはあきにもまして山さとのかけひの水のこほりそめけり　東京 中島 茂子

うす氷むすひそけげり吹かせの身にしむのみとおもひたりしを　山口 村上操子

風のおとを松にのこしてわかやとのかけひの水はこほり初けり　松山 田村 多豆子

もみちはの散てうかひて流れぬはさと川みつやこほりそめけむ　松山 上原 のぶ子

くみおきしたらひの水にこの冬の氷れるはじめ見るそゆかしき　神奈川 中山 菊子

めつらしく立いてゝみるこの朝けはしめてむすふ池のうすら氷　伊豫 吉良 貞子

月かけもゆきけのそらにとちられてあけかたさむく氷そめけり　東京 岩谷 淺子

かせさむみもみちゝりしく池の面にけさ薄氷のむすひそめけり　群馬 竹 の ふ し

みきはなるやなきのかれ枝かけうせてには池水けさは氷りぬ　相模 森田 はる子

よをさむみ門たのをかは音せぬはせゝにこほりの結ひそめしか　石狩 加藤 眞子

さはりなは砕けやはせんさりながら取らぬもしをき神こほり哉　肥前 藤松 しか子

うなゐらか今朝めつらしとさはくかな結ひ初たる池のこほりに　肥後 友永 つれ子

いかはかり夜半のあらしやさえつらん筧の水はこほりそめけり　河内 田中 たつの

夏の月に掬ひしかとのいさら川いさゝかみつもこほりゐにけり　埼玉 横田 秋子

木曾の夜に狐なきてやこほりゐしすはのみつうみ波そめけん　埼玉 横田 やな子

不忍池にうき葉のうこかぬをみれはこほりのむすひ初めたり　京都 奥谷 登美子

けさみれはよへくみ置し桶水にはれるはかりにこほりむすひぬ　石狩 加藤 薫子

をしとりて遊ふところのなきまてにこほりそめけり庭のいけ水　秋田 齋藤 はま子

枯あしの淋しくそよくいけみつの波さへ絶えてこほりそめけり　越路 松永 繁子

明治三十九年和歌兼題

一月｛門松　追羽子｝　二月｛夜梅　綸端書｝　三月｛春の野　夢｝

字體は楷書に平假名を交ゆ、宿所姓名はその側に必ず明記すべし、然らざるものは遠慮なく沒書とすべし。

懸賞和文　従来の如きものを廢し、之に代ふるに百字以内の短文を懸賞募集す

すべて投書は、行間を少しあけ、楷書にて、和歌の外成るべく罫紙に願ひたし、

華族女學校教授 井上頼圀先生選

雪の日に滿洲の寒氣を思ふ

天

大阪惠美須町二丁目六六三 船越小仙子

鷲の毳毛と散り來し雪の、いつしか牡丹となり、飄絮となりて、今朝は鶴氅を着て立て徘徊するの人もなく、いざ轉ぶまでと二の字ふみ出す人もなし。

おもひぞいづるこの雪よ、この地、この時、かばかり深う積みけるものを三千里外、滿洲の空、あはれ百萬貔貅の露營の床をいかに深くは埋め果てけむ、御國のためといひながら、花の如き妻と生別の盃くみかはし玉の如き子に死後の敎訓を殘して、この滿洲の地に戎衣の袖も寒く、銃を枕に吹雪の床の眞丈夫は、いかなる夢を見つゝあるらむと思へば、この身、この時、夜の衾のいかでかは重ねらるべき、あはれむかしは萬乘の天子、雪ふる夜半に御衣を脱して民の凍餒をしのばせたまひしとさへ承り奉るものを。

地

岡山縣御津郡一宮村 小山松枝子

こがらしの身にしむばかりなる寒さをしのびて、今や冬木立に花咲くらむとながめ居れば、小兒もよろこびて雪やこんことはしりまはりぬ、つくろはぬ庭のちりひぢさへ埋もれて、松の枝岩の姿など何となうをかし、みやびをらは已に雪見のまとゐなどものすらむ、ことに豐年のしるしときくうれしさあはれいみじき國たのもしきよに生れきにけるかな、もしこの雪にして降れるが上にもなほふれゝはいかに、かのまつげさへ髯さへ凍るといふ滿洲の地に住へるものよ、何と凌くらん、外に出つればふゞきに面をうたれ、朔

風すさまじく膚をさかんばかりにて、氷點以下何度といふかの地の極寒に比すれば、内地にて降雪をかぞへ、また霜柱たちたりとてこと〳〵しくいふべけんや、去年わがますらをの敵を前に、地層二三尺もこほりて作業することいとも困難せしとつたへずや、鷄卵より魚類に至るまで凍りしにあらずや、手足もために凍傷するとか、げに想像し能はざる所にして、たゞ聞くさへ極度に感ずるを、まして平和の克後に氣もゆるみすでに大かた凱旋したる後殘れる勇士らそもいかに暮すらん、われらのこゝにめづらしと見る雪にもいかばかり苦しめらるらん、そをおもへばこのけしきをたのしみ温和なる國の冬をたへがたしとて、火桶にしたしみてのみあるべきや。

人

肥後國菊池郡隈府町　秋吉輝尾子

よべよりふりそめし雪は小やみ無くふりて、近き野べ遠き高ねも、白妙の衣きたるときはの松がえも、珠なす柚の梢さへ、いと萎れてあはれなり、雪はますますふりしきりて、空とぶ群鳥はねぐらをやとざしけん、聲だにきこえずなりぬ、老たる人は終日たれこめ居るもののみなるを、ましてやふゞきすさぶ滿洲の野べはいと苦しからまし、去年の二月の末つがたよりの戰いとぐちひらけてより、國の爲大君の御爲、いとしき親妻子にわかれ、萬里の海陸はるばると出征たまひし大丈夫の君たちは、いかにしのばせ給ふらん事ある時の大和男子、いかなる吹雪もいとひなく、忠義の心は鬼神ともいはめ、ひるだにかゝる雪なるに夜ともならばいかならん、只一筋に身をすてゝ勇むは大和のものゝふをおきて、外國にあるべきぞ、かくもゆかしきものゝふよ、またふりくらす雪つぶて梢をあらす木枯の風はげし、あゝ滿洲の嵐はいかならんいとゞあはれになんおもはるゝ。

秀逸

相模　豊田良子

例なき、今年の寒さも、滿洲の寒氣を、分たんが、爲ならばいと嬉し、今日は雪さへ降りまさり、夜に入りて漸々烈しく、折戸打ちあけて、見遣れば、あたり明きまでに、積りて吹雪と共に、入り來る風は、頬も切れよとはかりなる、あはれ暖き國にても、かく寒き夜を、滿洲にいます兄君は、如何にして過ごさせ給ふらむ、道も埋もれ、先も見えぬまでに、吹雪やすらむ、嗚呼いかにして、今宵を明かさせ給ふらむ、昨日おこせし手紙に、歩哨と有りしを見ても、今宵は此雪に御身を埋ませつ、歩哨し給ふさま目に浮ぶやうなり、頭より下る氷柱、髭の氷、さては、外套に積れる雪に、如何に御こゝろは猛くおはすも、いかに防寒具は充分におはせばとて、金鐵ならぬ御身、耐へ難くこそ、おぼすらめ、銃持ち給ふ手、氷の上に立ち給ふ足、大きなる耳は、未だ全くておはし給ふか、文書く時は爐の側にてすら、筆先の凍るとかや、耳にのみ觸れて、未だ目に見ぬ境、想像及び難く畏し、翼もがな、今宵の樣をと思ひつゞくれど、いと甲斐なく、八甲田山の其昔までに思ひは走せて、茫然たる折しも、後より母上の呼び給ふに、驚きて折戸閉ぢんとすれど、悴を失ひし手に得とぢず、あゝ隙漏る風だにかゝるをと思へば、一きは偲ばれて、文机に向ひて好める女鑑を讀めど、只兄君の上のみ思はれて、讀む文の心に入るべくもあらず、いかゞはせんと思ひしが、聊なりとみ心慰めまつらばやと、手を肌にてあたゝめつ、靴下をこそ編みいだしゝが、あはれ靴下に我がこゝろの通ひなばかゝる夜に編みけるものぞと事づてましを、

竹のふし

群馬

吹き荒みたる夕べの風は何處へ去にしかいと靜なり、いみじうけはしかりし雲の行きかひは如何になりしやと臥床をぬけいで見れば、思ひきや冬枯の淋しき梢に匂ひ出でたる六の花、いぶせき伏屋も一夜の中に白銀造の御舘とぞ化しける、何處を空ともわかぬ薄墨色の中より、散りくるは鷲鳥の羽のそれなるか、見

つむる身は共に底ひも知らず、降行く心地になん、猶も積れかしと竹馬に勇める弟、埋火の許を離れて雪茶物せんと炭をのみ氣遣ふ妹、皆取々に嬉しげの面色、かく團居して眺むる雪にこそ興もあらめ、嚴寒肌を刺す滿洲の廣野に、何處を果と白雪の、風さへ添ふる朝吹雪、凝りし髯に散りかゝるを拂ひもあへぬに、共に凝る寒けさ、大丈夫が御國を想ふ眞心には鐵をも溶かす熱血はあるべけれど、とくに山なす雪の中を蹴立て進む我將士、勞れし身を入るべき屋根さへなき、天幕の中、氷の蓐、雪屏風、銃を枕に故鄕の夢結びもあへず馬の嘶き、醒し心の如何なりし、あはれ去年斯る艱苦を忍び、故國の夢永へに安かれと祈つゝ、身を犧牲に斃れし將士の屍は、今はた丈なす雪の下に氷りしならん、さはれ屍は滿洲の野に朽つる共御靈は永く浦靖の國の鎭と畏くも、伊垣の內に祭られる譽は、世々に殘るなり、妹のくみて出す雪茶を手向けんと捧ぐれば、雪の中より立登る淺間ゲ嶽のそれならで、雪よりなりし宇治の花、あはれ烟は北に靡きて世は泰平にかへれ共、歸りもあへぬ大丈夫が、はた又守備てふ大任帶びて趣く將士が、仇なき廣野に同胞のゆき後忍ぶ雪の朝の寒けさや如何ならん、

神奈川　中山菊子

吹きくる風は磯山のあたりをヒユー〳〵と身にしむばかりの寒さ、空はあだかも海墨を流したらん如く、野べは千草の枯れはてゝ、ふく風にさまようもひとしほあはれに物さびしう、まどにより雪にてもふらんあられならんなど、心に思ふ折しも、春風に櫻の花のちり初めし如く、にはかにふり出せし雪・見る〳〵内に、彼方の家根此方の黑き板塀も、たゞ眞白き雪にうづもれて、いづこも銀世界の如き有樣・妾は此間に思ひ浮べり、今我忠勇なる軍人の二とせにわたる長月日を、かの滿洲の原に過されし事これなり、そも此土地の寒さは、いかに烈しき事ならん、寒風肌をつんざくばかり、ふりつむ雪には手足も自由ならざるまでこゞえしならん、いかに心猛くとも、なれぬ寒さには堪がたかりしならんを、我帝國の軍人は、かゝ

る寒さを事ともせず、敵國と戰ひて遂に勝てり、あゝいさましきかな、滿洲の寒氣をおもへば、けふの雪なにかわらん、いざ妾も今よりはげまんと、にはかに心づきて、表をながむれば、雪はいつしかやみて、たゞ白布をしきたらん如く、彼方に幼子の雪だるま作る聲も、一しほ心地よく聞えはべりしを、

新潟 松永繁子

幸おほき世を、清く埋め渡したる雪の冬こそげに面白けれ、いとゝしく吹き卷く吹雪を花と見むはゆかしけれど、きびしき寒さをいかにせむ、氣候温和なる大倭すら猶かつ堪難きに、北緯幾拾度なる滿洲の寒氣こそ思ひやるだになか〳〵なれ、

家居して立ち働くにさへ寒く、外出の業はいよゝつらく息もつかれぬ、吹雪身を切る許りの嵐走り來て、折りたく柴にやゝ心地よくまして火桶を傍に据ゑつゝ業とれるに、尙隙もる風のねたましう思はれてなむ、されば滿洲の寒さは許かりぞや、外出の折若し心ゆるしなば、手足の指あるは耳など落ちうするのみならで、凍え死ぬる者さへ稀ならず、家に籠り居らむにも、薪乏しく心のまゝに暖をとる事能はずとは何たる地ぞ、かゝる險惡なる天候に抗し、暴なる仇を打ち破りて、勝利を博したる大和武夫の忍耐の程こそ、げに世の鑑なれ、

青き草木だに稀なる、かの地の雪の野邊、寂寥たる思ひや深かるべし、いでや敷島の櫻木なりとも移し植ゑなば、春は花の香高く冬は嵐をしのぎて。折れたるは薪とならむ、さるにても清淨の廟地たる此の冬の野に、天は如何なる幸を下し給ふにか、思ひは遠き滿洲の寒氣をしのびつくらぶれば幸おほき我國の冬よ、此の瑞穗の國は雪堆く積りて、豐年のきざしを示す故、戰さ勝ちたるに増して、歡喜の聲を大に響けよとあぐる、あゝわが國の雪の日よ、ただに吹きすさぶ吹雪のみかは、

北海道 武ひばり

山おろし木々の梢をならしつゝ、よべより降る雪は寸にあまり

ぬ、今朝は一しほ寒さを深み、板戸もる風は身をさすほどにおぼゆるけふこの頃滿洲の寒氣やいかに、み軍人はいかに、我背いかにしのばせ給ふなど、思ひ出てゝは、身は火桶のほとりにあれど心は滿洲の風雪にある如く肌に粟を生ずる心地こそすれ、

岩代 菅野和子

雪氣の空いと寒むし、今日は過ぎつる日手附けたるまゝ怠り勝にも、縫終はらぬ綿入一つ仕上げんとて、炬燵に火など入れ、一針運び初めぬ、隙漏る風身に泌みて、背に水灑かるゝ心地す、手は凍えて我がものとも思はれぬに、暖めては縫ひ、ぬひては暖むるも恐かなり。

子等が遊び聲の餘り喧しければ、空や曇はれると硝子戸越しに見すかせば、いつしか雪になりて、北風の吹くがまに〳〵萬字巴とふり亂れ、見る間に川となく家となく、野も山も埋れり、かゝる中にも子等の、雪中行軍の歌うたひて、赤き手を暖めんともせず狹き室に戰事してかけまはり、角力競べに黑り遊ぶも勇ましや、かゝる幼遊を見るにつけても偲ばるゝは、遠征の將士の身の上にぞある、聞けば敵を監守る兵士の、み足地に凍付きて、蹈締せれば安からずとか、耳は寒さのため傷め、指はこれがため縮る、あゝ如何に堪難き事ならん、まして家もなく衾もなしとや、かくてすめら皇國のみ楯となりて、心憎き仇撃捕ふ惡の雄々しさを思ひては、子女發育の任にある身の心劣りせられてなむ、嗚呼百萬の將士今やいかに。

和歌山 藤範佐美子

今宵は寒さの身に泌みて、編みかけし針も何時しか火鉢の側に置

かれぬ、夜は寂びて四方靜かなり、折りしも庭に響く怪しき物音驚きて雨戸靜におし開けば、あな美し何時頃よりか降り初めにけん、雪はたゞ眞白に庭に積りて、世は一面に銀世界となり、などろ〳〵曇る太空の色と共に、かき曇る姿が偲、小さき心は雪に乘りて、遠き〳〵滿洲に走せぬ、內地にて火桶抱きてすら、今宵は斯くも冷たきに、雲か隔てし外國に、銃を枕に劔とる猛き益良夫の上や如何ならん、大君の御爲國を思ふの熱情は、肌裂く雪にも堪ふべけれど、家を戀ひ親を慕ふの念は、哀れ西伯利亞の雪よりも深かるならん、かゝる猛夫のあればこそ、國の威稜はあがるものを、同し御國に生れながら、何故斯までに妾は心弱きぞと、やう〳〵造りし靴下を、心ばかりの慰問袋にさし入れて、他鄕の人に送らんと、赤き心の糸とれば、隣りの家の破れ壁もれて、不意に聞ゆる赤子の泣き聲、父なる人は如何に聞くらん、滿洲の深雪の下に劔とりて。

愛媛　高橋茂子

火桶に任せたる我身ながらも、雪ふる今日の寒さ堪へ難きを、二とせの長きに渡る軍人の日にもすつかれし其身を、夜とて安むる事ならず、草の褥に横たへて、石の枕の苦しさは思ひやるだに悲しきを夏のみならず此の冬を、殊には寒氣きびしき滿洲の、荒野の雪をおかして進みつゝ、心ひるまずたゆみなく、君のみ爲、また國の爲と誠心こめて盡す身の、いかにものゝ夫なればとて、人の身に變りはあらぬを、此の寒さ身を切るふゞきいかならむ、はやる心に晝はなほ紛れもすらめ、夜は殊に寒さも一入身にしまん、不自由勝にて雪の中露營の夢はいかにぞや、早夜も甚く更けて野も山も雪にうづもれ、賤が家の茲には音もなけれとも、仇野や如何に物うくも、屍を渡る夜嵐の、絕えずもすごくふきやせむ、寒さは寒し手も足も自由失ひ、皆共に其身の苦しみは、げにせんすべもなかるらむ、あゝ其折よ、其時よ、かゝる時にぞ大和男の子の堅き心も現はるゝならむ、あゝさるにても此雪寒き夜を。

富山　三上ふし子

月澄み、虫鳴き、しめやかなる秋もいつしかすぎて、早や終日結びし氷の、いよゝ堅くのみなれる頃とは成り、けさ雪さへいたくつもりて、身は綿あつき衣、幾重ともなく着てさへ、猶足らぬなり覺え、埋火より遠かることを得せぬなるに、君國のおん爲とはいへ、滿洲の野に、露營の夢も氷るばかりの寒さを、物の數ともせられぬ兵士の働きを、新聞などにて見聞くにつけ、いと〳〵我身しうして、着たる衣を脫ぎて、滿洲へ贈らまほしくぞ思はるゝなればさてもこの頃の身にしむ寒さよ。

短文

地賞

○秋の夕　小田原　芙蓉子

夢より細き秋の雨、さら〳〵と窓外におとづれて、そゞろ古鄕こひしき夕暮を、空かけり行く黑き鳥の影二つ三つ、そなたの森に消えて、あとにはかすけき、かけひに通ふ水の音のみ、この天地を領して幽たり、寂たり、

人賞

○滿洲なる兄君に　越路　松永松葉

垣根の朝顏は色あせましたが、菊は去年に優つて

咲き初めたです、此頃角田山も五分程の紅葉、吹いて來る風も寒いです、滿洲は嘸ぞ身にしむ程なんでせう、病氣に罹らないやう御身を大切にして下さい、平素御壯健の方ですから心配はしません、私共は此の間五丘峠を越して、濱に遊びました、魚もとれ貝もわつて賑かの樣子、海の景色を御目にかけたい程です、元氣のよい魚を家の土產に夕暮に歸りました、晚には笑ひの中に食べたんです、この繪は濱でかいたもの紅葉は峠にもえてゐたんです、封して差しあげましたから、故鄕の秋を思ひ出してね、兄樣角田山に白い白い雪の積る迄には御歸り遊ばすでせう達者で、まつてゐますわ、雁は北に飛んで行きました兄樣の空で鳴くでせう

選者曰く　短文は今回より百字以内に限りたれど、改則匆々の事とて百字以內の短文少けれは、今回のみは前例によることゝし、賞品は入選者に進呈することにしたり

村野逍遙　　東京　槇野久美枝子

一陣のそよ吹く風に誘はれて、山道深うたどれば、露深き葉蔭に咲ける菊の一本、哀れ夕べの霧に、床しき色なつゝみ、あしたの風に薫りをもらす、八千草枯れて霜白きそが中にたゝずみ、はかなき思ひにふける折しも響く鐘の音に「ハッ」とみ空仰げば夜は、更けて月影淡し、

菊　　長崎　森屋その子

籬に咲ける白菊の、夕の露に濡たるを見て、感極まれり、いざ菊よ、汝と我と世上の悲哀をこゝに集めて、我は汝によりて我悲哀を見、汝は我によりて悲哀を見よ、と手をふるれば、ひら〳〵と露を降らして、手に一片の花瓣吸ひ附きて離れず、

白薔薇　　神奈川　中山菊子

白ばら、あゝ我常に愛する此花、こは妾の父君が、未だ病床におはせし頃、いたく好み給へるをもて、都より求めしなり、其頃はいとも小さかりしを、今はゝた四季なり〳〵の分ちなく、清きかほりをはなちつゝ、美くしうさきて、我等が日を樂しましつゝあり、あゝ今父君がいまさば、いかによろこび給ひしならんを、思へば花ありてか風なきにちる花片の一ツ二ツ、

養老　　美濃　三原鈴子

養老の瀧は、美濃の大垣町を距る約三里、養老村大字白石なる、養老公園内にあり、瀧の高さ十丈五尺、幅二間と稱す、飛沫峭壁にかゝり、巖頭に碎けて、玉とおどり、雪とひるがへる狀、その景眞に天下の勝を以てほこるに足る、瀧の落る處、巨岩平かに横はりて、頗る涼浴に適す、近村外客の來りあそぶ者多し、養老公園は、元正天皇の御宇、庶民に源丞內と言へる者、其性至孝、酒を好めるより、彼は日に山によぢ、谷をわたりては薪をとり、之を市にひさぎ、其代を以て酒をあがなひかへりて父に進め、其の喜ぶ樣を見るを、何よりの樂しみとしたるけるが、或日例の如く山に行きけるに、俄に渴を覺へければ、岩間に一條の流れを求め掬して是を飲みたるに、不思議にも其味ひ甘美にして、頗る酒に似たれば、丞內且つあやしみ且つ喜び、此の瀧水を汲みて父に進めけるが、時の帝之を聞し召し給ひて、靈龜二年九月幸して親しく御覽ましまし、孝、德を頌せんが爲め、詔して丞內を美濃守に任

じ、瀧の名を養老と呼ばしめ、年を養老と改號し玉ひけるとぞ、近村公園に通ずるの道路を修めてより、來遊する者跡を絶たず、養老山を改め給ひしより、今年に至る事千百九十三年也、

新體詩

月前雁　大阪　黑田代音子

尾花がそでにまねかれて　くもよりいでし夕月の
さやけき影をかすめつゝ　くもゐを渡るかり一つ

菊　磐城　須磨子

そよ吹く風にもはら〳〵と　木の葉散り行く秋の末
誇なり得顔に笑みそむる　菊の操は千代までも

待つた　奈良　皐月

大海原の夕まぐれ　三つ四つならふ島山も
立渡るきりの深ければ　みるめあやしく曇るなり
白帆はみえず棹の音　さはぐ海人等の聲々の
霧の中より聞ゆのみ　家まつ舟かまつ人か
それかあらぬか荒磯の　波間を分てこぎよする
音こそ遠くなりにけれ

わはれの女　千葉　鎌田清子

鹿野の山の麓にて　軒かたむきし賤が家に
すめる一人の女あり　みどりの髪のうるはしく
可愛きまなざし清けれと　いかなる思ひかひそむらん
かたむく軒の前にたち　み空ながめて打ち沈む
眼に涙溢れけり　そもなが父はいかにせし
なさけ溢るゝ母君は　いづくの里にいますなる
あゝ哀れなる汝が身よ

○八重の潮路の　奈良市　藤岡けい子

八重の潮路のうす煙　銀河清き行く舟人か
向ふ無何有の郷島か　見よや蘭麝の風薫る

○河に下りゆく

河に下り行く舞姫が　朝の聲きく亂れ髪
加茂の高殿音絶えて　こゝにも柳こぼれけり

霜夜　北海道　空知武　ひばり

聲音も枯しこほろぎの　なくや霜夜のさむしろに
衣も片しきうたゝねの　夢はいつこにかよふらむ

折にふれて　岐阜　三原すゞ子

去年の今月此の夕べ　思ひ出すもなみだなれ
幾世をちぎりし我夫は　姿のなけきもよそにして
無常の風にさそふなり　かへらぬ國にいてましぬ
姿のなけきいつとてか　消えやしぬらん手をとりて
かたりし昔もゆめなりき　月も今宵はうらめしき
はすれかたみもなきはれは　なにをながめてたのしまん
實に思へどもまゝならぬ　浮世のさがこそ悲しけれ

日英新同盟をことほぎて　群馬　竹のふし

洋は隔てど西東　手をくみかはし心さへ
同じ盟ひの新らしく　進むもうれし平和の道に

短歌

名所霧　大坂市　黑田代音子

夕つく日かなたのみれにうすらきて霧にたゝよう天のはしたて

雁　越路まつよ子
こゝに来てみとせの秋を吹すさふあらしのゝみに雁ぞなきゆく

秋山　薩摩　松原みれ子
花にみしさくらの秋はもみちして春におとらぬやまのいろかな

紅葉　東京　瀬藤ちよ子
瀧の川みきはにもゆるもみち葉を妹のかさしとしても見むかな

野霜　津　神田みよし子
人はまたわけぬ野みちにあとつけてまつふみしたくけさの初霜

高峰の月　四ッ谷　齋藤ふみ子
いく千歳たつすき山のたかねより神よなからの月は出てけり

旅泊涙　東京　小森たま子
ともすれは浮れの床にふるさとの夢路へたつるなみのおとかな

月前露　大阪　黑田代音子
月かけはひかりをはけてやとるなりおくつゆしけき庭の小草に

庭菊　東京　山中文子
つくろはてこそのまゝなる賤かやのまかきにゝほふ黄菊しら菊

菊　肥後　友永常子
やれ垣にひとりおくれし白菊のこさめおもけに咲き出つるかな

寒樹　肥後　友永章子
木枯しを松にゆつりてやすけにも見ゆるは散しこす梢なりけり

初冬風　東京　山口まつ子
冬くれはまとに木の葉を打つけに北かせさむくなりにけるかな

初冬時雨　東京　平野千茂子
秋もはやいつしか暮てあかつきのねさめ淋しくしくれふるなり

初冬時雨　大坂　山中しつの
秋ゆきて木からし寒う病む母のみとりする夜を時雨降るなり

初冬時雨
山畑の柿のもみちをふきたて一むらしくれいまそふりなり

初冬時雨　愛媛　孤子
紅葉の散りしくころとなりしよりとふ人もなくしくれ降るなり

初冬時雨　下野　木邑節子
こからしにけさしもしろく音そへて冬のしろへとふる時雨かな

天長節佳辰　岩代　曾野和子
かきときのこゑよりあけてひの御旗風に勢あるおほきみの御代
霜におごる菊をかさして歌へ子かきみか代うたふけふのよき日
國をあけて一のこゝろにいはふなり月々より起る萬歳のこゑ

長柄橋　京都　奥谷登美子
其あとゝきゝ渡るこそいにしへのなからのはしの名殘なりけれ

名所雨　奈良　藤岡慶子
ゆきかへる人に近江のあはつまて松におとしてゆふしくれする

炭竈煙　奈良　天野照子
大はらやをしほのやまもゆたかなるよにすみかまの煙たつみゆ

神樂　神戸　今西操子
神まつるもりのしめ繩くりかへしあさくらうたふ祭りのとけさ

歳暮　信濃　田島みよ子
年なみは止めあへぬと知りなからまた思はすもかこたるゝ哉
いたつらにおこたりなから今は早かへり見らるゝ年のくれかな

年の暮によめる　相模　芙蓉子
かにかくに思ひし事のかすくもなに成しはてすくるゝ年かな

寄山祝　津　神田みよし子
今日はしもあすはとちきりて今年またおのか心を恨みけるかな
神路山八重のさかきはゆふかけて君を千とせといはふけふかな

寄川祝
ためしなきけふの御幸にいすゝ川清きなかれのすみまさるらん

折にふれて　千葉　鎌田壽賀子
師のきみとかたらひつゝも花園にきよくかをれる菊を見るかな

折にふれて　群馬　竹のふし

人來ぬとたち出し庭に人はなくておち葉音してあきはくれ行く

折にふれて　奈良　栗山たか子

木々の葉のもみつろみればこゝろ合の友にみせかたき錦山哉

折にふれて　愛媛　高橋茂子

いたつきになやめる母のまくらへにまともろ月のかけの淋しさ

母のみまかりし折によめる　群馬　竹のふし

がはかりに悲しとこそは知らざりし母なき物をいとしと思へと

休職第五高等學校助敎授佐々豐登先生は十月二日身まかりたまひぬおなじ月の九日の日神葬式を拜みて　肥後　阪本義子

老の杖家のはしらとたのみてしひとりのまな子うせましぬとは

同　肥後　早田俊子

まがつひの神のあらひに夜もすがら虫とゝもにそなき明しける

佐々先生の十日祭を拜みて　肥後　德永廣子

世に秋の風は吹くともみそのふのひともと竹をいかでなりけん

おなし席につらなりて　肥後　右田藤子

すらすらとのほり始たろ君なしもいかに山かせふきおとしけん

十月二十三日愛國婦人會員德永而有子が女子なのこしおきて身まかりけろ葬式につらなりて　肥後　佐々有隣子

をさな兒をもみちの蔭に殘しおきてよみぢを辿ろ靈魂しそ思ふ

折にふれて　千葉　鎌田清子

師のきみに紅ばら一枝おくらんと手折ればつゆの玉ちりにけり

明治三十九年和歌勅題

新年河（しんねんのかは）

寄東鄕大將　朴堂　淺岡一

俄國戰艦悉銳臻。殺氣暗澹西海天。漠々煤煙掠波起。堂々鐵艦壓海連。敵帥志大膽亦大。一擧欲奪我海權。邦家安危懸在此。臣子誰也不悄々。幸有聖天子在上。擧將艦隊一任君。沈毅寡言苟不動。泰然態度宛如山。運籌畫策無所遺。材武忠勇兩絕倫。一去無跡泊何處。潛龍在淵幾十旬。哨艦忽報敵艦見。聞警全軍盡欣然。號令一下部署定。艦隊俱出鎭海灣。神州興廢在此擧。諸氏奮勵其勉旃。提督一語甚緊切。全軍士氣爲大振。長門之西筑前北。怒龍蹴海捲狂瀾。百雷殷々海岳動。黑雲漲天天地昏。實是五月廿七日。午下開戰至翌晨。大小礮彈發不已。幾多艦隊爭奮前。血戰兩日敵艦盡。僅逸數隻小兵船。海上廓清不見敵。遂擒巨帥魯氏還。憶起去年二月雷艇以衝旅順。一擧奇捷驚乾坤。自此海陸戰必克。發揮日本男兒眞。今日凱旋果誰績。赫々功名幾萬年。

折柴園小集

初冬　　　山本八重子

木がらしの吹きて散りたる紅葉に
　霜のいろさむき冬は來にけり

虫

わが庭の小萩がもとに夜もすがら
　ふり捨がたきすゞ虫のなく

時雨　　　佐藤多賀子

ひら〳〵と落る木の葉の音につれ
　ゆふべ淋しく時雨ふるなり

水鳥

川かぜのさゆるゆふべは浮寝する
　をしの翅もこほるなるらむ

菊

折る袖もつゆに染井のしらぎくは
　幾世かけての匂ひなるらむ

埋火

うつみ火をかこみて友と語らへば
　さながら春のこゝちこそすれ

菊　　　澁谷　貞子

枝ながら見しな誇らむわきの野に
　手折るは惜きしら菊のはな

雪

山里は訪ひくる人のあとたえて
　さびしさまさる雪の夕ぐれ

初冬

木がらしに梢さびしくちり敷ける
　くち葉のうへに霜の花さく

雪　　　八幡貴與子

久かたのそらより散れる花とのみ
　見ゆるばかりに降れる初雪

夜もすがら吹風冴えてこのあした
　思はずつもる雪を見る哉

山ざとの道をうづめてちりしきし
　朽葉のうへにつもるしら雪

みよし野の吉野のやまは道絶えて
　深きむかしの雪をしぞ思ふ

あしびきの山路にふれるしら雪に
　杉の青葉も見えずなりにき

女郎花　　　富田知可子

仇し野の雨にしをるゝをみなへし
　手折る袖さへ露けかりけり

霰

冬の夜に音さわがしくきこゆるは
　いた月たばしる霰なるらむ

千鳥　　　[illegible]美子

見渡せば汐路はるかにおちかへり
　なく音は須磨の浦千鳥かも

水鳥

夜もすがら涙間に見ゆるみづ鳥の
　羽音もさむくこほる冬かな

擣衣　　　中村げん子

たび衣身にしむ聲のあなたこなた
　音もたえ〳〵うつ擣衣かな

冬月

霜とふる木の葉に冴る影すごく
　なり〳〵見ゆる冬の夜の月

雁　　　砂押美與子

みやこなる友こひしさに眺めやる
　空をかすて雁なきわたる

霜

秋くれてながむるものもなき庭の
　落葉のうへに霜ぞおきける

時雨　　　折柴園主人

やみて吹き吹きて又ややむ夜嵐の
　たえ間〳〵にきく時雨かな

むら雲の筑波のみねにかゝるかと
　見ればしぐるゝ利根の川つら

新刊寄書

時好	三の一二	東京 三越呉服店
女學世界	五の一一	同 博文館
六合雜誌	二九九	同 ゆにてりあん弘道會
なでしこ	六の一	同 大日本女學會
中央公論	二〇〇	同 反省社
新聲	一二の二一	同 隆文館
婦女新聞	毎號	同 婦女新聞社
國學院雜誌	二の一一	同 國學院
婦人と子供	五の一一	同 フレーベル會
日本婦人	七四	同 帝國婦人會
教育實驗界	十六の九、十	同 育成會
慶應義塾學報	九六	同 慶應義塾
體育	一四四	同 體育會
教界時事	七二	同 教界時事社
教育	六九	同 若渓會
廿世紀の婦人	二の二一	同 北海道婦人教育會
愛國婦人	毎號	同 愛國婦人會
尚絅	一五五	同 尚絅社
成功	七の五	同 成功雜誌社
圖書評論	九	同 同社
正教要話	六の十	同 教要社
ふでのはな	二一八	同 わかば會
女子の友	一七三	同 文友社
家庭週報	毎號	同 櫻楓會
東京經濟雜誌	毎號	同 同雜誌社
東京感化院月報	四六	同 羽澤文庫

新刊紹介

◎日本赤十字社救護寫眞帖

正義人道の爲に開かれたる征露の戰爭は、振古未曾有の光輝ある大勝利を以て始終し、今や博愛仁慈の大事業を成功して、この戰役を潤色したる我日本赤十字社の功勞は、世界の賞讃措く能はざる所にして千古に傳ふべき大歷史なり、本書は其功績を永遠に傳へて、其の實況を眼前に髣髴たらしむべく、或は日本赤十字社所藏に係るもの、或は特に大本營の許可を得て陸地測量部の所藏に係るもの、或は遞信省の許可を得て通信局の所藏に係るもの、其他あらゆる方面に於て苦心蒐集し、漸く大成したるものなれば、數百の畫面、其當時を語る如く、各丁各頁自ら聲あり、されば坊間有觸たる寫眞帖とは撰を異にするのみならず、文字以上の大價値あるを認む、實に日露戰爭唯一の紀念品にして、机邊必ず一冊なかるべらざる寶典なり(東京築地二丁目赤十字發行所發行 定價一冊金七拾錢 郵稅金拾錢)

本誌の大發展を豫告す

本誌は年の改まるとゝもに、一大發展を試み、面目を一新すべし、新年號には、柳原伯爵の『家庭に於ける文藝趣味』、建部文學博士の『女子の實用的學問』を始め、博士學士十數氏の婦人問題諸方面に亙れる卓說高話、現今女子教育諸大家の家庭談、上下に通じて趣味ある一月の儀式慣習、其他、雜錄に小說に、實益あり、興味あるもの、讀了の後ならでは、卷を掩ふ能はざるものあらむ、猶次號よりは、英文、理科談の大家の筆に成れるものを揭ぐべく、其細目は讀者の興を深くする爲に云はず、なほ新年號には全國高等女學校長の本誌の問に答へられたる高說を揭くべし、その問四則（此題も次號まで預かる）口繪は寫眞術に堪能なる德川男爵特に本誌の爲に撮影の勞を執らるゝの約なり、加ふるに本社獨特の着色寫眞版を以てすれば錦上更に花を添ふるものあらん讀者諸君今後の女鑑の如何に改善するかに注目せられよ

口繪の解說

◎嵐峽の清流　保津川の絶景、蓮花岩のある所也、この所を有名なる丹波路よりの舟にて下れば、實に得もいはれぬ快感を覺え、この景色を知らぬ人は日本の名所を語るべからずとさへ云ふに至りき

◎貴族の姉妹　その印影の側に記する如き、揃ひも揃ひて好配を得られたる、松平越前家の四姉妹なり

◎徳川男爵の家庭　公爵慶喜公の令息にて、千駄ヶ谷徳川家門の御殿に住はるゝ、徳川男爵の家庭にして、この畫面に於ても、いかに一家に春風の絶えず吹通ふかを見るを得べけん、

◎慈惠病院看護婦慰勞會　今回の事件に働きたる看護婦の勞を慰すべく、去月十一日同院庭園にて催したる園遊會の景況を、徳川男爵の撮影せられたる十二枚のうち也、外に鞘當の餘興などありたるを寫したるが、圖としては面白けれど、この雜誌にはとて、

◎東京裁縫女學校卒業生　去月十日同校内にて行ひし卒業式の寫眞にて、その中に温和なる老先生と見ゆるは、即ち渡邊校長なり

◎鷄と鳩　小學讀本一の卷にも挿むべき、無邪氣なる圖にて、如何にも美しき畫面ならずや

◎裏おもて　世の中は貧と富との、裏おもての如きものあり、人類生活の上に、却つて趣味を感ずる也、愛氷生此寫眞を見て歌あり

假の世の迷ひ間ならむ逢ふしを伏家いぶせき身ぞおはになる

高どのにたゞ春のみの來る宿をむかふる人もありとおもへば

◎冬の水　中島春郊氏の描きたるものにて、その柳のかれ〳〵殘れる、千鳥の翅寒げなる、淋しき冬の水寫し得て妙也

定價

一册	前金貳拾錢
三册三ヶ月分	前金五拾七錢
六册半年分	前金壹圓拾錢
拾貳册一年分	前金貳圓拾錢

全國無郵送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁　三十二行	金八圓
一頁　六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十八年十一月廿八日印刷

明治三十八年十二月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　株式會社國光社

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
右代表者　橋本忠次郎

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社 國光社
（電話新橋二六三九番）
（電話新橋特八八番）

女學及家庭書類

島田佳矣・野口駿尾 共著 ●（女子技藝）編物模樣圖案 全五冊 定價 松ノ卷四十錢 櫻ノ卷五十錢 藤ノ卷五十錢 菊ノ卷五十五錢 梅ノ卷五十五錢 郵稅各二錢

櫻井絢子著 ● 女道叢話 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子著 ● 女子之本分 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

三輪田眞佐子著 ● 女子處世論 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

磯部武者五郎著 ● 家計簿記法 全 定價金十五錢 郵稅金二錢

藤野天城著 ● 女子小觀 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

堀内新泉著 ● 女樂師 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢

松川霓州著 ● 結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵稅金四錢

堀内新泉著 ● 家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵稅金四錢

女鑑編輯局編 ●（編）ひめかゝみ 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

◀國光社出版圖書目錄▶

著者	書名	冊數	定價	郵稅
梅澤清一著	●清少納言と紫式部	全	金卅五錢	金六錢
澁谷愛著	●萬國女子風俗	全	金二十五錢	金四錢
堀内新泉著	●少女讀本	全三冊	各金十八錢	各金四錢
大町桂月著	●常盤御前	全	金十三錢	金二錢
小林兩搭著	●勾當の内侍	全	金十三錢	金二錢
濱田廉著	●袈裟御前	全	金十三錢	金二錢
國府犀東著	●靜御前	全	金十三錢	金二錢
長田偶得著	●顔世御前	全	金十三錢	金二錢
杉谷正隆著	●家庭訓歡 修身百首	全	金二十錢	金四錢
高瀬眞卿著	●學校家庭 修身一夕話	全	特六十錢 並三十八錢	八錢 六錢
指原乙子著	●女子文章軌範	全	金三十錢	金四錢

岡勇次郎著	◉日本米穀ノ將來	全	定價金三十錢 郵稅金六錢
川崎直衛譯	◉國際貿易論	全	定價金六十錢 郵稅金六錢
佐美孫三著	◉臺風雜記	全	定價金三十錢 郵稅金四錢
白耳義リーヂ大學教授ラヴレー氏原著 文學士寺內淳二郎譯	◉奢侈亡國論	全	定價金二十錢 郵稅金二錢
陸軍大臣寺內正毅題辭 隈謙之序 中秀輔編	◉德川の孔明	全	定價郵稅共 金十五錢
山崎忠和著	◉日露の英雄	全	定價郵稅共 金二十二錢
倉庫銀行頭取中村清藏序 中村佐平著	◉銀行簿記學	全	定價金五十錢 郵稅金六錢
故富士谷御杖述	◉土佐日記燈	全三冊	定價金一圓五十錢 郵稅金十五錢
井上頼圀校訂 小澤政胤著	◉慶長以來國學家略傳	全	定價金一圓五十錢 郵稅金十錢
弘田正郎編	◉豪吟集	全	定價金八錢 郵稅金二錢
幸田露伴序 村上濁浪譯述	◉鐵血宰相語錄	全	定價金三十錢 郵稅金四錢
在法科大學 矢田七太郎著	◉江川坦庵	全	定價金三十錢 郵稅金四錢
水主天姥著	◉石田三成	全	定價金三十錢 郵稅金四錢
塚原澁柿著	◉山崎合戰	全	定價金卅九錢 郵稅金六錢

塚原澁柿著 ◉小牧合戰 全 定價金五十五錢 郵税金十錢

工藤武重謹著 ◉孝明天皇御遺德 全 定價金二十五錢 郵税金四錢

山崎忠和著 ◉文久物語（一名寺田屋騷動） 全 定價金二十八錢 郵税金六錢

少年傳記類

文學士大町桂月著 ◉少年武士道史傳第一編 藤田東湖 定價金十九錢 郵税金四錢

法學士工藤景文著 ◉少年武士道史傳第二編 山中鹿之助 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士三好物外著 ◉少年武士道史傳第三編 上杉謙信 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士笹川臨風著 ◉少年武士道史第四編 本多平八 定價金十九錢 郵税金四錢

田岡嶺雲著 ◉少年武士道史傳第五編 小早川隆景 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士白河鯉洋著 ◉少年武士道史傳第六編 立花宗茂 定價金十九錢 郵税金四錢

法學士太田蒼溟著 ◉少年武士道史傳第七編 木村重成 定價金十九錢 郵税金四錢

文學士中内蝶二著 ◉少年武士道史傳第八編 大石良雄 定價金十九錢 郵税金四錢

内國通運株式會社編纂 ◉新式 大日本里程地圖 洋裝 帙入 定價（各参圓五拾錢 價同 送料荷造費廿五錢 廿五錢 臺灣 洋 帙五十錢 四十錢

農商務省御編纂 ◉清國染織に關する 意匠圖按 大和綴 正價金五圓 送料及荷造費廿五錢 臺灣四十五錢

日露戰爭 日本赤十字社救護寫眞帖

第壹篇

◉印刷鮮麗◉紙質精良◉裝釘優雅◉紙幅菊倍判◉紙數五十六葉
◉寫眞百五十餘個◉定價金七拾錢郵稅金拾錢

博愛慈善の人道に基き報國恤兵の大義に據りて彼我の別なく傷病兵を救護し以て我幾拾萬の將士に溫き情味を感ぜしむると共に又幾萬の敵をして我が慈愛に泣かしめ環視列國の驚歎と賞讃とを博したるものは實に今回の戰役に於ける我日本赤十字社の行動にあらずや本寫眞帖は即ちその活動の狀況を不朽に傳へんが爲に特に日本赤十字社に請ふて編成せるもの又別に大本營及諸官衙の許可を得て救護に關聯せる寫眞を掲載せるもの亦尠からず外に勇烈無双の武あると共に內に博愛慈仁の涙ある我國民の眞面目を知らんと欲せば來て本帖の紙面に輝く嵩高偉大の光明を看よ

發賣所

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

日本赤十字發行所

電話新橋特・八八●二六九三

女鑑

明治三十八年十二月一日發行　毎月一回一日發行　第拾五年第十二號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可